
獵闇師 ~刹那の魔~

雷紋寺 音弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

獵闇師 ～刹那の魔～

【Zコード】

N1919X

【作者名】

雷紋寺 音弥

【あらすじ】

本当にあつた呪いの館。

新春特番として行われた怪奇番組の生放送中、番組プロデューサーの眼球が破裂して死亡するという怪事件が起きた。

事件の報を耳にした外法使い犬崎紅は、欲望渦巻く東京へと足を急がせる。

だが、そこで彼を待っていたのは、様々な陰謀の渦巻くテレビ業界の裏の顔や、陰陽師の末裔を名乗る青年、公安警察内部に存在する謎の機關であった。

獵闇師シリーズ第八弾。

心靈映像に隠された恐るべき呪いの裏で、終末へのカウントダウン
が始まる！！

「 逢魔ヶ刻 怪死 」（前書き）

田の前に映し出されたものが、全て眞実とは限らない。
闇はどこに、一瞬の隙間を縫つよつこして、日常の中に紛れ込む。

本当にあつた呪いの館。心霊ブームも下火になりつつある昨今、そんなサブタイトルが冠せられた番組があつたら、果たして人はどこまで興味を持つのだろうか。

オカルトマニアにとつては懐かしいと感じる人もいるかもしだいが、殆どの人は、そこまで興味も示さないはずだ。せいぜい、ちよつと怖い映像や、いかにもな演出溢れる再現映像を見て、その場だけキヤーキヤーと騒ぐだけだろう。

番組の収録が始まつたスタジオで、篠原まゆは、ふとそんなことを考えた。既に本番が始まつてはいるものの、自分は所詮、二流のタレント。怖い映像が流されるシーンで適当に震えて、後は質問を振られた際に、「怖いです」と涙目で訴えていればよい。そんな風に思いながら。

まゆにとって、芸能界という場所は一般人以上に日常の一部だった。

子役として、この業界に入ったのは小学校二年生のとき。まだ、右も左もわからない中、将来はテレビの中で歌つてはいる歌のお姉さんみたいになりたいという夢を叶えるため、両親がオーディションに連れて行ってくれた。

結果、まゆは無事にオーディションを通過し、それ以降は芸能界に身を置くこととなつた。が、所詮まゆはどこにでもいる普通の子ども。子役といっても端役ばかりで、気がつけば中学生になつた。

演技も平凡、歌など現役のアイドルには到底及ばない。これでは何のために自分が芸能界に入ったのかわからない。そして、高校生になった現在も、特に看板番組さえもらえずにつづけでいる。ある。

今回の出演も、まゆにとっては棚ぼたのよつなものだった。なんでも、本来であれば出演を予定していたレギュラーの女の子が、急遽出られなくなつたことで、急に代役の仕事を回されたのだ。

要するに、穴埋め要因として呼ばれただけといつことだ。なんとも情けない話であるが、まあ、仕事が来ないよりはマシであろう。それに、普段は端役しかもらえない自分が、こうしてバラエティ番組のゲストとして呼ばれただけでも奇跡に等しい。

司会者の台詞を横に聞きながら、まゆはふと隣の席に座つて いる男の方へ目をやつた。

そこには、まゆよりも一回りほど年齢を重ねていると思われる、長身で長髪の男だった。歳は、二十代後半か三十歳になつたばかりだろうか。妙に軽薄そうな表情で、服装もホストクラブにいそうな感じの男である。使つて いる男性物の香水の匂いが、先ほどからまゆの鼻先に漂つてきて仕方がない。

初め、スタジオの裏で会つたとき、まゆはこの男もゲストのタレントだろうと思った。なにしろ、ここまで露骨に周りを意識して格好をつけて いるのだ。大方、元男性アイドルグループの一員か、まゆの知らないイケメン俳優の一人ではないかと思っていた。

だが、そんなまゆの考えは、スタッフから説明を受けた瞬間にひ

つくり返された。

まゆの隣にいる男の名は、御鶴木魁。みづねぎかい あんな格好をしているが、なんと今を生きる陰陽師の末裔と「う」とらしい。その軽薄そうな顔とホストのような服装からは想像できないが、この業界では比較的有名だそうだ。最近では様々な心霊番組に顔を出し、かなりの金を稼いでいるといつ噂もあった。

心霊番組にはお約束の、現代を生きる霊能力者。なんとも胡散臭い男であるが、番組としては、いいうつ男がいた方が盛り上がるのだろう。とりあえず、イケメンが出ていれば良いという視聴者がいる限り、寺の坊さんや自称霊能力者の婆さん、単に怖い話が好きなだけの中年男などを置いておくより、視聴率が取れるのかもしけない。

もつとも、そんなことは、頭では思つても決して口には出せない。魁の隣にいる男の存在が、まゆにそいつさせていく。

先ほどから、始終無言のまま微動だにしない無愛想な男。陰陽師である魁の弟子といつらしげが、その格好は師匠よりもむしろいかがわしい。

癖のある短い髪の毛を赤に近い茶色に染め、ド派手な色のアロハシャツに身を包んでいる。スタジオの中でもサングラスは外さず、その目がどこを見ているのかさえわからない。そんなヤクザ者のような外見から、まゆは魁の弟子というよりは、男がボディガードかなにかではないかと勘織つたほどだ。

男の全身から発せられる無言の威圧感。それは、魁を挟んで反対側にいるまゆにもはつきりとわかった。苛立つてゐるのとは少し違

う。しかし、他人を容易に寄せ付けない何かはある。まるで、自分の師匠の側に、穢れた者が近寄らないよう見張っているかのようにして。

（つと、いけない。いくら下らない心霊番組でも、少しほは真面目にやらないとね……）

代役とはいって、まゆにとつては初めてのバラエティ番組出演。しかも、実はこの番組、生放送の真っ最中なのだ。よほどの無茶ぶりをされない限り、「マをやらかす」とはないだろうが、あまりぼうつとしているのも考え方のだつた。

氣を取り直し、まゆはスタジオの大画面に映し出されている再現映像に目をやつた。どうやら視聴者から寄せられたはがきの内容を元に、恐怖体験を再現したものを流しているようだ。

暗い廃病院を、懐中電灯の灯り一つで進む男女のグループ。恐らく、廃墟探検にやつってきた大学生だらうか。怖がる者、辺りを散策しながら冷静に分析する者、わざとふざけて騒ぐ者、色々といふ。

なんというか、まあお約束の展開だとまゆは思つた。どうせ、この先で何かよからぬことをして、靈を怒らせた結果、怪奇現象に遭遇するのだらう。

案の定、先ほど悪ふざけをしていた者の一人が、廃病院に残されていた患者のカルテを持ち出した。帰り際、怯える女の子の前でも余裕の態度を取つていたが、じぱりくして様子がおかしくなつてきた。

病院から持ち出したカルテを、戦利品として家にまで持ち帰つて

しまつたお調子者の男。だが、深夜、男が寝静まつた際に、なにやら幻聴のようなものが聞こえてきた。そして、最後は男の枕元に、顔面蒼白な氣味の悪い病人の靈が現れて再現映像が幕を閉じた。

観客席の女性たちが、わざとらしい悲鳴を上げて怖がつてゐる。まゆも、一応は怖がつてゐる素振りを見せるものの、内心はそこまで怖いとは思つていなかつた。

廃墟から戦利品を持ち出して祟られるなど、今やどこにでもある怪談話の一つだ。まゆも、初めて聞いたときは怖くて眠れなくなつた記憶があるが、今となつては馬鹿らしい子ども騙しの話だとしか思つていない。

だいたい、病院からカルテを盗んで、なんで病人の幽靈が男の枕元にやつてくるのか。カルテは患者の物ではなく病院の物なのだから、普通は医者の靈が現れるのが筋ではないか。もつとも、病院内では医者が死ぬことはなくとも患者が亡くなることはあるため、患者の幽靈が出ると言われば納得せざるを得ないが……それでも、やはりアイテムと幽靈の組み合わせが上手くない気がする。

生放送でやつてゐるとはいへ、こんな低レベルな怪談話で盛り上がれるとは、かなりお出度い連中だ。隣の男、御鶴木魁が本物の陰陽師かどうかは置いておくとしても、わざわざ靈能力者の類まで呼ぶほどの番組なのだろうか。

映像が終わり、ふと、まゆがそんなことを考えた時、司会を務めている女子アナが怯えた表情でマイクを握つた。

「いや、怖かつたですね……。でも、今日はこれだけでは終わりません。なんと……今日、この場に、我らが ミラクルゾーン のス

タツフが決死の思いで撮影した、本物のお化け屋敷探索映像があるんです！ 今からそれを、皆さんにも特別にお見せしましょう！！」

司会者の声に合わせ、再び画面に映像が映し出される。真黒な背景に、血の様な赤い色で、恐怖！ 本当にあつた呪いの館！！といふ文字が書かれている。

いよいよ、本田の番組のメインが始まったのだ。ちなみに、司会者の言つていた ミラクルゾーン とは、このバラエティ番組のタイトルである。正しくは、奇跡空間ミラクルゾーン。今日は心霊物を特集しているが、それ以外にも様々な怪奇、超常現象などを、幅広く扱っている番組もある。

映像は、曇天の空の下に置かれた一件の屋敷の前から始まった。先ほどのよじな再現映像ではなく、どうやら本当に現地に行って、実際に撮影を敢行したものによつた。

ボロボロの、今は使われていない和風の家。木造の日本家屋とうにしては、妙に小ぢんまりしていて格式がない。どちらかと云つて、あれは昭和の初期に建てられた、木と土壁によつて造られた家といった方が正しかつた。

戦争で焼け残つたのか、それとも戦後の物資の無い中で、高度経済成長期以前に建てられたものなのか。そのような難しいところにまで、まゆの頭は回らない。ただ、家の中に広がるじめじめとした陰鬱な空氣と、壁に染みついたカビの香りだけは、画面にしにも感じられた。

調査班に同行してレポートを行つているのは、まゆと同じくらいの年齢の少女だ。どうやら、いつもはこの番組にレギュラーとして

登場しているらしく、今のは彼女の代役だつた。腰まで垂らした黒髪に、なぜかゴシックローラータ風の服装に身を包んでいる。なぜ、そんな格好で幽霊屋敷のレポートを行うのかはわからないが、あれが彼女の芸風ということなのだろうか。

染みの残る天井、崩れた土壁、そして埃だらけの畳。それらを通り抜け、家の最深部と思われる部屋まで来たところで、スタッフが少女に押入れの襖を開けるように指示を出した。怯えながらも、少女はそつと襖に手をかけ、それを横に動かそうとする。

開かない。なぜだか知らないが、襖は少女が全身の力を込めても、まったく微動だにしていない。

画面に映し出された映像を見ながら、さすがのまゆも、これはおかしいと思った。普通、何かがつつかえているのであつたとしても、襖は少しだけ揺れ動くはずだ。ところが、映像から確認する限りでは、襖はまったくといつていいほど動いていない。まるで、空間ごと固定されてしまったかのように、しっかりと枠に貼り付いてしまつている。

結局、少女の力だけではどうにもならないとわかり、奥からスタッフの一人が顔を出した。恐らくはA Dの一人だろう。二人がかりで力を込めるが、やはり襖は開かない。

湿気が多く、建てつけも悪いからだろうか。それとも、何か超常的な力が働いて、襖を向こう側から押さえついているのだろうか。

開かない襖に苛立つたのか、とうとうスタッフの男が乱暴に襖を蹴り飛ばした。瞬間、襖が大きな音を立てて破れ、中から錆びついた色の不気味な液体が溢れ出した。

悲鳴と絶叫。画面の中からだけでなく、それは会場にいた観客からも巻き起しつた。あまりのことこ、たすがのまゆも口元を手で覆つて息を飲み込んだ。

下らないお化け屋敷探索だと思っていたのに、いったいこの展開はなんのだろう。まさか、少し襖を蹴っただけで、あんなものが飛び出して来るなんて。いつたい、なにがどうなつて、押入れの中に液体などを閉じ込めていたのだろうか。

震える指で、画面の中の少女が赤黒い液体の中に散つていた何かを指差した。ADの男が拾い上げると、それはなんと人間の毛髪。細長く、それでいて決して千切れることのなさそうな、いやらしくまとわりついてくるような黒い髪。赤錆びのような液体の中に浸つていたにも関わらず、それは今もなお生前の艶を保ち続けているような気がして仕方がない。

薄気味悪そうな顔をして、ADの男が髪の毛を畳みの上に放り投げた。まさか、こんなことになるとは思つていなかつたのだろう。慌てて洗面所に駆け込むと、他のスタッフからペットボトルに入つた水をもらい、手についた液体を洗い流した。

漆黒の髪と奇妙な液体。それらを洗い流したところで、今度は男が妙なことに気が付いた。

水が流れていない。洗面台に溜まつた水の上で、洗い落とされた髪の毛が静かに揺れている。

家が古く、何かが詰まつているのだろうか。本当は嫌だったが、男は再び水の中に手を入れて、排水溝の奥に詰まつているものを引

つ張り出した。

「うわっ……」

男の声に合わせ、会場からも小さな悲鳴が聞こえてくる。男の指には、先ほどと同じような黒髪が、互いに絡まつた状態で巻き付いていた。これが、排水溝の中に詰まっていたのか。しかし、なぜ、こんな場所に大量の髪の毛があるのだろう。先ほどの液体といい、この家はやはりおかしい。

結局、最終的には満足な調査もできず、調査班は古びた家を後にした。映像を見ていたまゆの中に残されたのは、言い様のない不快感。得体の知れない者に対する、純粹なる恐怖心といった方が正しかった。

先ほどまでわざとらしい悲鳴で溢れていた会場は、いつしか静まり返っていた。再現映像などではない、生のテレビカメラで撮影された実録映像。その生々しさに、まゆも、他のゲストも、そして観客たちさえも、何も言えずに飲み込まれていた。

「あ……寒に恐ろしい映像でしたねえ……」

司会を務めている女子アナが、重苦しい溜息と共に言った。会場は未だ静まり返つており、唯一、まゆの隣にいる魁だけが、余裕の表情を浮かべている。

「さて、皆さん。」これだけでも、かなり恐ろしい映像だったとは思いますが……実は、この話には続きがあるんです。なんと、この映像の撮影後、撮影スタッフもまた奇妙な出来事に巻き込まれてしまつたんです……！」

観客たちが、途端にどよめき始めた。

怪奇番組を作成中に、スタッフが怪現象に見舞われるといつ話は珍しくない。だが、まさかこのタイミングでこんな話が出て来るとは、誰が予想しただろうか。失敗の許されない生放送で、この流れ。普段は出来過ぎた話に首を傾げる者もいたかもしれないが、今日に限って、それはなかつた。

「それでは、我々ミラクルゾーン調査班が遭遇した、世にも恐ろしい怪奇現象とはなにか！？ 続けて、再現映像にてご覧ください！」

しばらく間を置くことで、いつもの調子を取り戻したのだろうか。司会の女性は再び普段の声で喋り出し、画面が再現映像のそれに切り変わつた。

先ほどの映像とは明らかに異なる、いかにも作り物めいた再現ドラマ。だが、今度は誰もが無言のまま、画面に映し出された映像に見入つている。今や、観客たちは完全に場内の空気に飲まれ、その感情の一端は、番組を動かしている者たちの手中にあつた。

番組の撮影会場となつている場所の裏、様々な機材が積まれた、決して視聴者の目には映らない場所で、室井徹^{むろい てつお}雄は自分の関わつた番組の出来に満足げな表情を浮かべていた。

通常、こういった心霊番組では、収録映像を流すのが常である。

ここだけの話になるが、心霊特集などは、俗に「いつ やらせ も多い」。収録映像を流すのは、そのトリックを視聴者に見破られないようにするために、不要な部分をカットできる強みがあるからである。

だが、今回の放送は、正真正銘の生放送。決して失敗が許されない、一発勝負の現場である。

テレビ業界に少しでも通じた者であれば、こういった番組の生放送が、いかに綱渡りなのかわかるだろう。司会やゲストがHEMAをしないかどうかは勿論のこと、音響や照明、ADの動きなど、様々なことに気を配らねばならない。

室井が見る限りでは、それらは今のところ、なんとか上手く機能しているらしかった。唯一の不安要素と言えば、代役でスタジオに入っている篠原まゆだ。彼女が妙なことをしでかして、番組そのものをぶち壊しにしかねないかどうか。それだけが不安だったが、思つたよりも大人しくしている。

どうせ、彼女は今日だけの代役なのだ。室井はまゆについてはあまりよく知らなかつたが、大方、売れない「一流のタレント」だろう。枯れ木も花の賑わいということで、とりあえずは大人しく座つてくれてさえいればよい。そう思つていた。

「おつ、室井。番組の方は、順調みたいじゃないか」

突然、後ろから声をかけられ、室井は思わず声のした方に降り返つた。目の前に現れたのは、恰幅の良い眼鏡の男。この番組のプロデューサーを務めている、西岡悟にしおかさとだった。

「西岡さん……。確かに、昨日は酷い風邪だつて言つてましたよね。ちゃんと寝てなくて、大丈夫なんですか？」

丸めた台本を片手に、室井が言つ。その言葉の通り、西岡の口からは、時折湿つた咳が漏れていた。

「なに言つてやがる、この野郎。プロトコーサーが、本放送の日に家で寝てられるか。それに……そつまつお前だつて、俺と同じ風邪ひきだらうが」

西岡が、負けじと室井に言い返した。かくいう室井もまた、実は数日前から体調が優れていない。西岡ほどではないが、やはり時折、喉の奥から湿つた咳が這い上るよつとして外に出て来る。

「つたぐ……それにしても、嫌な時に風邪をひいたもんだな。例のお化け屋敷の映像、ちゃんと、あの陰陽師の若造に除霊させたつてのに……。まだ、なんか身体の中に残つてる気がするぞ」

眼鏡を取り外し、片目を擦りながら西岡が言つた。室井も頷くと、再びスタジオの方に顔を向け、無言のままカメラマンや照明などのスタッフに指示を出す。大声を出すことはできないので、無論、身振り手振りを活用してのことなのだが。

ディレクターという仕事は、即ち現場の監督だ。ここで失敗すれば、その責任は全て自分が被らなければならなくなる。否応なしに緊張してくるが、それも仕方ない。この生放送を成功させれば、周りからの自分に対する評価も上がるのだらうから。

どんなやり方でも、とりあえずは結果を出せねばいい。そのためには、まずは目の前の仕事をきちんと片付けることだ。ふと、そん

な当たり前のことを考えながら、室井は隣に座っていた西岡を見た。

「ちよつ……西岡さん！ そんなに田を擦つたら、変なバイキンが入りますって……」

思わず、口から声が漏れていた。スタジオのマイクに拾われなかつたか、一瞬だけ心配になつたが、それ以上に室井は西岡の奇行に目がいった。

パイプ椅子に座つたまま、西岡は執拗に自分の右田を搔いていた。眼鏡を外し、まるで動物アレルギーに苦しむ子どものように、必死になつて田を擦つている。その田は酷く充血していたが、西岡は自分の田が腫れることなどお構いなしのようだつた。

「ひょっと、西岡さんつてばー！ 田、擦り過ぎじや……」

忠告を受けてもなお、田を擦り続ける西岡に、室井は少々苛立つた表情になつて言つた。が、次の瞬間、自分の方へ向いた西岡の顔を見て、室井は言葉を失い自分の息を飲み込んだ。

「ひいっ……！」

そこにはあつたのは、巨大な眼球だった。西岡の擦つていた右の目が、大きく膨らんで室井を見ている。その大きさは、既に顔の四分の一ほどまでに膨れ上がり、西岡の口から掠れた呻き声が漏れていった。

「あ……あが……があ……」

西岡の震える手が、そのまま室井に伸ばされる。だが、その手は

室井に届くことはなく、西岡は身体を仰け反らせて、そのまま椅子ごと後ろに大きくひっくり返った。

「田……田……」

辛うじて言葉になるものを発すると、西岡は右手で顔を、目を押さえながら室井に迫った。その手は酷く痙攣し、口からはだらしなく涎が垂れている。右田が大きく膨れ上がったその姿は、既に室井の知る西岡のものではなかつた。

「大丈夫ですか！ なにが起きたんです！？」

さすがに、異常な事態が起きていることに気が付いたのだろうか。手の空いていた他のスタッフ達も集まり、西岡の周りを一斉に取り囲んでその顔を除きこむ。

だが、そうして集まつた者たちは、直ぐに一斉に悲鳴をあげて動かなくなつた。いや、動けなかつたと言つた方が正しかつた。

泡を吹き、頭を抱えて苦しむ西岡の右田は、既に野球ボールよりも大きく肥大化していた。それは彼の頭蓋骨の中に収まりきらず、瞼を押し上げて中から醜くはみ出している。

いつたい、これはなんなのだ。なぜ、プロデューサーの田が、いきなりこつも膨れ上がつてしまつたのか。

誰も答えを出せないまま、無言の時が流れていつた。それは、時間にしてたつた数秒のものだつたが、その場に居合わせた誰しもが、數十分近い出来事のように感じていた。

バンッ！！

突然、風船の弾けるような音がして、周囲にいたスタッフたちの顔に生温かいものが降り注いだ。生臭く、それでいて赤黒い。スタッフの一人が指で顔を擦ると、ぬるぬるとした感触と共に、その指先が赤く染まつた。

「う、うわああああっ！！」

「いやああああっ！！」

自分たちの顔に、身体に降り注いだもの。それが砕け散つた西岡の眼球と頭部の欠片だということに気がついた瞬間、スタジオは恐ろしいまでの悲鳴と叫び声の嵐に包まれた。

こうなると、もうパニックは止まらない。何が起きたのかわからぬまま、観客席の方がにわかにざわつきだす。その間にも、身体に血や肉を浴びたスタッフの一人が錯乱し、他の一人は泣きながらその場にへたり込んでいた。

心霊番組の生放送会場で、突如として起きた恐るべきハプニング。しかし、その原因を答えられる者など、この場には存在しなかつた。ただ一人、ゲスト席に座っている魁だけが、妙に訝しげな表情をしながら砕け散つた西岡のことを睨みつけていた。

収録を終えたスタジオの脇にある洗面所で、まゆは今しがたスタジオで起きたことを思い出していた。

番組の途中、スタジオに入ってきたプロデューサー。名前は確か、西岡とか言ったか。その男が突然目を搔きむしり始めたかと思うと、次の瞬間、スタッフ達がわらわらと西岡の周りに集まってきた。そして、風船の弾けるような音と共に血飛沫が飛び、辺りは一瞬にして悲鳴と絶叫に包まれたのである。

生放送の本番中、突如として起きた謎のハプニング。スタッフからは、撮影機材の転倒によって、下にいたプロデューサーが重傷を負つたと説明された。

撮影中に起きた不慮の事故。そう片付けてしまえば、どんなに楽か。だが、まゆは自分でそうできないことを知っている。あのとき、再現映像から目を離して、たまたま別の方向を向いたまま考え方をしていたのが災いした。

彼女は見てしまったのだ。プロデューサーの西岡の顔が大きく腫れ上がり、その中から野球ボール大にまで膨れ上がった眼球が飛び出すのを。そして、何かの弾けるような音と共に、その眼球を中心に、西岡の顔が粉々に砕け散るのを。

（「うつ、気持ち悪い……。いつたい、あれ、なんだつたの……）

思い出しただけで、胃の奥から酸っぱいものが込み上げて来た。自分が直接血を浴びたわけでもないのに、鼻の奥にまでどす黒い血の臭いが漂つてくるような気がして仕方がない。

瞬間、胃の中から這い上がってきたものを、まゆは本能のままに便器の中にぶちまけた。止めようと思つても、あのときの西岡の姿が何度も頭の中で再生され、胃の中が空っぽになるまで吐き続けた。

「あっ……かっ……はあ……」

気がつくと、自分の頬を熱いものが伝わっている感触がした。知らずの間に、まゆは泣いていたようだった。

あれは、絶対に普通ではない。西岡は、恐らくは助からないだろう。あんな死に方を目の前で見て、普通でいりとこう方がおかしな話だ。

（だ、だめ……。また、戻しちつ……）

もへ、胃の中には吐く物など何もないといつのこと、吐き気だけがまゆの背中から喉の奥にかけて伝わってくる。吐きたくても吐けない。その苦しみだけが、何度も何度も押し寄せる波のようにまゆを襲いつ。

どれくらい、やうしていただらつか。

やがて、吐き疲れてしまつたまゆは、便器にもたれかかるよつてして倒れていた。遠くから、誰かの近づいて来る足音が聞こえてくる。

こんなみつともない格好を、できれば他人には見られたくない。そつ思つても、立ち上がる氣力が残されていなかつた。何かを考えようとするど、それだけで先ほどの西岡の姿が頭に蘇りそうで、考えたくても考えられない。

やがて、聞こえてきた足音は、まゆの後ろでぴたりと止まった。そして、まゆが後ろを振り返りつつとした瞬間、口からを氣遣う様な優しい声がした。

「あの……大丈夫、ですか？」

声は、まゆが思っていたよりも若い。もしかすると、同年代くらいの少女かもしないと思い、まゆは口元を拭きながらゆっくりと後ろを向いた。

「あ……」

果たして、そこにいたのは、まゆの想像した通りの相手だった。

飾り気のない服装に身を包んだ、自分と同じくらいの年齢の少女。スタッフの一人とは思えないが、それにしても地味だ。肩まで伸びた髪の毛はつすらと茶色く染まっていたが、それ以外はどこにでもいる、普通の女の子といった感じである。

「「「」めんなさい、変なところ見せちゃって……。なんか、ちょっと気持ち悪くつて……」

自分の吐瀉物を隠すようにして、まゆはそろそろと立ち上がる。言いながら、咄嗟にトイレのレバーを倒し、自分の吐いたものを流して見えないようにした。

「本当に、大丈夫ですか？ ちょっと、外で休んだ方がいいかもしないですよ？」

「う、うん……」

「だったら、途中まで私も一緒にきます。また、廊下のどこかで具合が悪くなったりしたら、大変ですから」

「あ、ありがとう……」

むかつく顔を押さえながら、まゆは力なく頷いて言った。

初対面だというのに、目の前の少女は、なぜこうも自分に優しくしてくれるのか。いや、そんなことは、今はどうでもいい。このまま洗面所で倒れていても、この気持ちの悪さは収まりそうにない。

見ず知らずの相手に、それも自分と同じくらいの歳の子に甘えるなど、本当はあまり好ましいことではない。それでもまゆは、今の自分がどうにもならないことを知っていたので、あえて少女の好意に甘えさせてもらうことにした。

少女にまゆが案内された場所は、建物の屋上にあるちょっとした庭のような場所だった。夜風に当たられて肌寒いかとも思ったが、春先の風は、そこまで意地の悪いものではなかった。

ビルの屋上と言えば、殺風景な室外機の森を想像する人も多いだろ。だが、昨今のエコブームによつて、最近は屋上に緑を植えているビルも増えた。このビルも、そんな建物の一つであり、屋上は田舎の池を再現したかのような作りになつていた。

「いついた物を、巷では果たしてなんと言つていたか。確か、ビオトープなどという名前で呼ばれていたような気がする。そう、とりとめもないことを考えていると、先ほどの少女がペットボトルに入つた水を持つてやつてきた。

「はい、お水です。外の空氣を吸つて、少しほ落ちつきましたか？」

「うん……。なんか、ちょっとだけ気持ち悪いのも収まつた気がする……」

「よかつた。ここ、空氣も綺麗ですし、眺めもいいですからね」

少女が屈託のない笑顔をまゆに向けてくる。演技のようなものは微塵もない、純粹にこちらの回復を喜んでくれている顔だ。今時、こんな笑顔で笑える人間など、なかなかどうして珍しい。

「なんか、色々と迷惑かけちゃつたみたいね。とにかく……パツと見じやテレビ関係者に見えないけど……あなた、名前は？」

「ああ、『めんさん』。まだ、言つてませんでしたっけ」

自分で自分の頭を軽く叩き、少女が少しだけ恥ずかしそうにして言つた。先ほどの様子からして、少々天然なところもあるようだ。見ず知らずのまゆを、ここまでして助けてくれるなど、面倒見だけはよいみたいだが。

「私、長谷川雪乃です。同じ事務所の子と一緒に、T・D rive つていうコニットでアイドルやつてます」

「えつ、長谷川雪乃！？ ちょっと……マジで！？」

一瞬、まゆは自分の耳を疑つた。

長谷川雪乃といえば、まゆとて知らないわけではない。それは彼女の口から出た、T - Driveという名も同じだ。

T - Driveは、今や国民的な人気を誇るアイドルグループの一つだ。昨今のアイドル達が好む、大勢で歌とダンスを披露する芸風とは異なり、彼女達は常に三人だけのメンバーで活動を続いている。

彼女達の出身は、元は業界内でも弱小として扱われていたプロダクションの一つだった。ところが、少し前から急激に頭角を現し始め、今では歌番組以外の出演も増えていると聞く。昨年の末にプロダクションの吸収合併が行われ、今では業界最大手であるJ - m i ×に移籍していると聞くが、それでも人気は落ちることなく、確実にトップへの階段を昇り続けている。

子役から始まり、一流のタレントとして仕事を続けている自分とは大違いだとまゆは思った。

確かに、まゆとて自分の仕事を頑張つていらないわけではない。ここ最近は、昔に比べれば仕事も少しばかり回してもらえるようになつた。子ども向け特撮番組の脇役や、学園ドラマのその他大勢の人など、決して目立つ役ではなかつたが、そこでの頑張りがなければ、今日のように生放送の代役を任せられることもなかつたはずだ。

もつとも、その代役を引き受けた結果、あんなおぞましいものを見せられたのでは割に合わない。それに、やはり自分は雪乃とは違

い、まだまだ修行が足りないと思つてしまつ。

長谷川雪乃を名乗つた目の前の少女は、実に地味な雰囲気をまとつていた。およそ、国民的アイドルとは思えない、どこにでもいそうな女子高生のそれだ。

だが、まゆは知つてゐる。ステージに立つて歌つてゐるときの雪乃が、時にT・D・R・I・V・Eのリーダーである、鈴森夏樹さえも凌ぐ輝きを持つてゐることを。生で歌つてゐるところを見たことはなかつたが、テレビ画面を通したものでも、それは十分に伝わつてきた。

その雪乃が、まさか素の状態ではここまで地味な少女だったとは。色々なことが重なつて、それらが次々に衝撃となつてまゆに降りかかる。気がつくと、まゆは自分の気分が悪いのも忘れ、しばし呆然とした顔で雪乃のことを見つめていた。

「あの……どうしましたか？」

雪乃に言われ、ハッとした表情になつて我に帰るまゆ。目の前には、不安そうにこちらを見つめる雪乃の顔がある。

「ああ、じめんなさい。ちょっと驚いただけだから、気にしないで。まさか、私みたいな人間が、あの長谷川雪乃に会えたつて思つたら、なんか驚いちゃつて……」

「そんな……。私だつて、まだまだですよ。それよりも、気分はどうですか？　まだ、どこか気持ち悪いとかありません？」

「うん、平氣。でも……さすがに、このまま呼び捨てつてのもマズイわよねえ……。業界では、そつちの方が売れてるんだし……長谷

川さん、とか呼ばなあやだめかな?」

「あつ、別に構わないですよ。オフの時は、皆にも普通に名前で呼んでもらってますし」

およそ、トップアイドルとは思えない、飾らない姿と飾らない態度。不思議と好感が持てたまゆは、いつしか自分から雪乃に話しかけていた。

今日、あの撮影現場で起きた忌まわしい事件。スタッフは事故だと言つて聞かなかつたが、まゆは自分の目が見たものが、決して見間違いの類ではないと思つていた。

こんなことを言つて、果たして本当に笑われないか。一瞬だけ、そんな不安が頭をよぎつたが、その時はその時として割り切ることにした。ここで誰かに話を聞いてもらわなければ、また、あの嫌な記憶が蘇つてきたときに、今度こそ耐えられなくなりそうで不安だつた。

「ねえ、雪乃。これから話すこと……笑わないで、聞いてくれる?」

「えつ……。別に、構いませんけど……」

「実はね……。私、今日は心霊番組の生放送に出てたんだけど……そこで、凄い物を見ちゃつたんだよね……」

「凄い物?」

雪乃の顔が、一瞬だけ曇つた。まゆの表情を見て、これから語られることが、決して明るい話ではないということを悟つたのかもし

れない。

だが、ここまで来て話を止めるなど、今まゆにはできなかつた。一度、口が開いてしまつと、後は自分でも驚く程に多弁になつてゐるのに気がついた。

生放送の本番中、プロトコーサーの田玉が風船のよつと膨れ上がつたこと。スタッフの影になつてよく見えなかつたが、確かにプロデューサーの頭が粉々に弾けたように見えたこと。そして、現場にいた関係者からは撮影機材の転倒と説明され、半ば強引にスタジオを退室させられたこと。最後に、生放送がぶち壊しになつて終わつたことを付け加え、まゆは自分の話を終えた。

「そつか……。それは、大変なことがあつたんですね……」

きつと、こんな話は信じてもらえない。心のどこかでそう思つていたまゆだが、雪乃の反応は至つて真剣で真面目なものだつた。

「あの……」

「氣まづい沈黙の後、雪乃が少しばかり遠慮がちにしてまゆを見た。

「実は、私の知り合いで、そういうのに詳しい人がいるんです。もし、迷惑じゃなかつたらでいいんですけど……よかつたら、その人に相談してみても構いませんか？」

「本当！？ でも……なんか、そこまでしてもひつのも、ちょっと悪いかなあ……」

「あつ、平氣ですよ、それは。おかしな事件に巻き込まれて、誰も

信じてくれないっていう不安とか……私も、経験したことがありま
すから」

最後の方は、雪乃は少しだけ言葉を濁して言つた。できれば、あ
まり思い出したくない。そんな顔をしながら、まゆから少しだけ視
線を逸らして。

どちらにせよ、ここで悩んでいても仕方がない。これ以上は自分
でも結論が出せそうになかったし、折角の好意を無下にするのも悪
い気がする。

「だったら、ここは好意に甘えさせてもらっちゃおつかな？ どう
せ、自分じゃ結論出せないんだし……なんか、話したら少しすつき
りしたしね」

本当は、完全にすつきりしたわけではない。あんた、スプラッタ
ー映画顔負けの死に様を見せつけられて、そつそつ簡単に忘れられ
るはずがない。

それでもまゆは、大きく伸びをして雪乃に言つた。それを見た雪
乃にも、いつしか笑顔が戻つていた。

「よかったです。それじゃあ、私はこの辺で……」

「ええ、助かったわ。私、篠原まゆ。これでも、一応はタレントや
つてるわ。雪乃ほど、売れてるわけじゃないけど……よかつたら、
また連絡頂戴」

「わかりました。私で力になれるかわかりませんけど……まゆさん
が見たものが本当だつていうのは、私も信じることにします」

そう言って、雪乃は一足先に立ち上がると、まゆを残してその場に去った。その前に、互いに携帯電話を取り出して、軽く連絡先を交換して。なんというか、最後まで本当に絵に描いたような素直な子だとまゆは思った。

まゆの知っている情報では、雪乃は現在、高校一年生である。ちなみに、まゆは一つ上の高校三年。年下に励まされるというのも妙な気がしたが、今日のことに納得のゆかない自分のことを信じてくれただけで、今のまゆは満足だった。

薄暗い、木造りの社の中で、九条照瑠くじょうあさるは鉢植えの中にあるブナの木の苗を撫でていた。

時折、根から昇つて来る水の流れに耳を澄ますようにして、照瑠は指を止め、撫でる角度をえてゆく。愛でるといつよりは、自らが木に近づき、木のことをわからうとするように、照瑠は呼吸まで相手に合わせて意識を集中した。

実家が神社の照瑠にとって、これは修業の一環だ。今は「き照瑠の母は、生前は地元でも名の知れた癒し手だった。俗にヒーリングと呼ばれる力の持ち主で、腰や肩の痛みを訴えるお年寄りを中心に、今を生きる神の使いとして知られていた。

触れただけで人を癒す。父から話には聞いていたが、照瑠も最初は半信半疑だつた。そんな魔法のような力があれば、それこそ医者など要らない。オカルト漫画ではよくある話だが、現実にそんな力が存在するなどとは、照瑠も信じてはいなかつた。

だが、そんな照瑠の日常は、昨年の六月に一変した。

盗掘者によつて掘り起こされた遺物と、それに憑いていた太古の魔物。その魔物によつて憑依された人間が、次々に凄惨な猶奇殺人事件を引き起こしたハツ頭事件。それこそが、照瑠が靈的な存在の世界、向こう側の世界に関わつた初めての出来事だつた。

最終的には照瑠も巻き込まれ、怪物によつて命を狙われる羽目に陥つた。そんな彼女を助けてくれたのは、白金色の髪と赤い瞳、そ

れに雪のように白い肌を持つた、不思議な少年だった。

犬崎紅。照瑠の目の前に現れた少年が名乗った名前だ。彼は自分のことを、闇を用いて闇を祓う、赫の一族の末裔と説明した。そして、事件の解決後は、なぜか照瑠の住んでいる火乃澤町に住みついて、そのまま同じ学校に通つている。

紅が、いつたい何を考えて照瑠の町に住んでいるのか。それは、照瑠自身もわからない。彼の説明では、この地は ハツ頭事件 の影響で、陰湿な氣が集まりやすい場所になってしまったとのこと。それ故に、同様の心霊事件が起こりやすい土地柄にあり、紅はそれらの脅威から人々を守るために町に残つていていた。

本当のところ、その話がどこまで真実なのか、今の照瑠には証明する術がない。ただ、紅の言つていることも嘘ではないようで、彼が町に現れてから、既に何件もの心霊事件が起きていた。その内的一いくつかには、照瑠も自分の意思とは関係なく巻き込まれてしまつたこともある。

中でも照瑠の心に未だ影を落としているのが、昨年の晚秋に起きた 魂繋ぎ事件 だつた。医学的には既に死亡している人間を、狂氣の術で現世に生きながらえさせる儀式。その儀式によつて仮初の生を与えていた友人を、照瑠は救うことができなかつた。

自分の中に、本当に不思議な力があるのなら。そして、自分が少しでもその力に目覚めていたのなら。まだ、彼女を救う術があつたのかもしれない。否、彼女だけでなく、今まで関わってきた事件の犠牲者たちも、もしかすると救う手立てがあつたのかもしれない。

おこがましい、思い上がりのような考え方であることは承知してい

る。それでも照瑠は、自分にも何かするための力が欲しいと願い、父に頼み込んで巫女としての修業をさせてもらうこととした。母と同じ、癒し手としての力。その力を手に入れるための、九条家に代々伝わる秘密の行を。

今、照瑠が行っているのも、そんな修業の一つである。鉢植えに植えられた木を、己の氣力だけで癒し、育てる。自らの癒しの氣で生命力を活性化させ、枯死させないように注意しながら。

その際に重要なのは、相手の氣の流れを知ることだった。人間とは違い、植物は呼吸のリズムから身体の作りまで、全てが異なっている。氣の流れもまた同様で、少しでも集中力を途切れさせれば、直ぐにつかめなくなってしまう。

最初の内は、照瑠もどうしていいかわからないことの方が多いかった。だが、この数ヶ月で、随分とコツをつかめるようになつたと思う。

現に、全盛期の母ほどではないにしろ、照瑠も確実に癒し手としては成長しつつあった。友人のちょっととした腹痛や頭痛程度であれば以前から治療することもできたし、今年の一月には、下らない騒動に巻き込まれ、その際に暴走する野球部員たちを鎮めて回つたこともある。紅ほどではないが、照瑠もまた靈能力者としての階段を、着実に昇つているところだった。

「ふう……。今日は、この辺で終わりにしようかな。葉っぱも随分、元気になつたしね」

最後に、新緑の芽を軽く撫で、照瑠は鉢植えを抱えて部屋を出た。薄暗い本殿を抜けて拝殿に戻ると、そこには父である九条穂高くじょうほだかが待

つていた。

「やあ、照瑠。今日の修業は、終わつたかい？」

「ええ、勿論よ。それよりも、これ見て、お父さん。ひとつ、全部の枝に芽が出るようになつたのよ」

「おお、これは凄いね。この分なら、後少し修業を積めば、照瑠も癒し手としての仕事が本格的にできるようになるかな？」

「うーん…… そうだといいんだけど……。なんか、今一つ実感が湧かないのよねえ……。凄い力を使えるようになつてるのはわかるんだけど、別に私自身に変化があるわけじゃないし……」

自分の掌をまじまじと見つめながら、少しばかりの不安を漏らす照瑠。確かに、癒し手としての力は、修業前とは比べ物にならないほどにまで上がっている。だが、それで自分の中に何かの変化があるかといつて、別にそういうわけでもない。

修業を終えた後は、普段通りに朝食を摂り、学校へ行く。そして、これまた普段通りに学校生活をこなし、帰つてきたら、また修行。その繰り返しだ。靈能力者として覚醒しつつはあるのだろうが、その過程で靈的なパワーのような物が降りて来て…… それこそ、いきなり頭がよくなつたり、人格が変わつてしまつたりするような、妙なことは起きてはいない。

まあ、起きたら起きたで困るのだが、それでも照瑠は未だ自分の力に半信半疑だった。犬崎紅のような戦う靈能力者と比べると、どうしても今の自分に納得ができなくなつてしまつ。

「どうしたんだい、照瑠。いつになく、難しい顔をして？」

照瑠の微妙な気持ちの変化に気づいてか、穂高が気遣うような声をかけた。その声に引き戻され、照瑠もまた現実に戻つて首を振つた。

「あつ、なんでもないの。それよりも、早く朝ご飯食べないと、学校に遅刻しちゃうわ。お父さん、悪いけど、この子をお願いね」

やう言つて、手にした鉢植えを父に押しつけ、照瑠は巫女の衣装のまま社務所に続く廊下を走つて行つた。こうして見ると、格好こそ巫女の姿だが、照瑠はどこにでもいる普通の女子高生だ。父である穂高から見ても、そう思える。

本当は、このまま静かに普通の女の子として育つて欲しい。時折、穂高は照瑠の姿を見てそう思う。もっとも、この九条家に生まれた以上、いつかは癒し手として覚醒して後を継がねばならない。願わくば、凶暴な向こう側の世界の住人たちを、己の力で払いのけるだけの力を身につけて。

自分の手に残された植木鉢に目を移しながら、穂高はそんなことを考えた。よくよく見ると、鉢植えに根付いた小さな木からは、若々しい黄緑色の葉があちこちから顔をのぞかせていた。

学校に到着し、いつものように教室のドアをくぐつた照瑠は、その先に見慣れた少女の姿を見た。

「照瑠～！　おつまよ～ーーー！」

照瑠の姿を見つけるや否や、その少女が手を振つて叫ぶ。照瑠と同じ制服を着ていながら、その身長は小学生ほどしかない。照瑠の友人であり、都市伝説オタクで有名な少女、嶋本亜衣だ。

「相変わらず、朝から元気ねえ……。なにか、特別にいことでもあつたの？」

訝しげな表情を浮かべつつ、照瑠は見降ろすようにして亜衣に訊いた。

亜衣が上機嫌になるとき。それは、新しい都市伝説のネタを仕入れたときか、おいしい物が食べられる店を見つけたときが殆どである。後者であれば喜ばしいが、前者であれば、願わくば^ば遠慮願いたい。

「ねえ、照瑠。昨日の夜にやつてた、　奇跡空間ミラクルゾーン見た？」

机の上に手を置いて、亜衣が身体を前のめりにして尋ねてきた。いきなりわけのわからない話を振られ、しばし困惑する照瑠。時折、亜衣はこうやって、周りの空気を読まずにいきなり話を始めることがある。

「ちよつと、いきなり何よ。その、あなたが言つ奇跡なんたりっての……私は全然知らないんだけど……」

「えつ、やうなの？　私はいつも、録画までして見てくるお勧め番

組なんだけどね。今度、照瑠も見てみるといいよ」

「なるほど、テレビ番組か。それだったら、悪いけど遠慮しておくわ。歌番組ならまだいいけど……あなたの勧める番組じや、大方、下らないオカルト番組の類に決まつてるからね」

「むう、失礼な！ いつ見えても、私だつて、日夜照瑠の力にならうと、都市伝説研究に力を入れてるんだからね！ 照瑠こそ、今までになんともお化けや幽霊なんかに会つてながら、なんで自分が情報収集しようとしてないのを…！」

わざとらしく、顔をふぐのように膨らませながら亜衣が言った。確かに、照瑠は神社の巫女で、今まで靈的な存在に関わる事件に巻き込まれて来た経験がある。が、それと亜衣の言う都市伝説の研究が、いつたいどうやつたら結びつくのか。どうも、個人的な趣味を強引にこじつけただけのような気がするが、照瑠はあえて黙つておいた。

「ここで正論を言つても、亜衣はますます気を悪くしてしまうだろう。こういう場合、一通り話を聞いて、相手を満足させてしまつた方がよい。昨年からの付き合いで、照瑠は自然と亜衣の手懐け方を身に着けていた。

「まあ、私が番組を見るかどうかは置いておいて……その番組で、何か面白いことでもあつたの？」

とりあえず、相手の話を聞く姿勢に入る照瑠。すると、今しがた不貞腐っていた亜衣の目に、再び先ほどの輝きが蘇つた。なんとうか、実に調子のいい人間である。

「うん、まあね。昨日は心霊特番つてことで、生放送やつてたんだけど……その放送が、途中でとんでもないことになっちゃって」

「とんでもないこと? まさか、放送中に本物のお化けでも出たの?」

「うーん……そこは、私にもわからないんだけど……なんか、途中でアクシデントがあつたみたいで、放送が一時的に中断されちゃつたんだよね。で、普通だつたら直ぐに復旧するはずなのに、その後も全然黙りでさ。結局、特番は中止になっちゃって、なんか最後は謝罪会見みたいなので終わっちゃつた」

「なによ、それ。でも、生放送中に放送を急遽中止するなんて……そんなこと、本当にあつえるの?」

「本当だつたから、いひして言ひてるんじやん。嘘なんかついたって、何の意味もないよ」

片手を腰に当て、まるで当然のことにして口にする亜衣。確かに、彼女がここで照瑠に嘘をつく理由はないが、それにしても、いつたい何の意味があつてこんな話をするのだろう。

生放送中のテレビ番組に、予定を急遽変更せざるを得ない事態が発生した。番組を楽しみにしていた亜衣にとって、これは愚痴の一つでも言いたくなる事態なのはわかる。が、それが亜衣の話たかったことかと訊かれると、素直に首を縦に触れない。

亜衣は、照瑠の学校でも有名な都市伝説オタクなのだ。それだけでなく、人脈の亜衣ちゃんを自称しては、妙な人間との関係を自慢する変人でも有名である。

そんな亜衣が、わざわざ朝から照瑠に話を振つてきた。今までの経験からして、これは確實に何かある。

そう、照瑠が思つた矢先に、亜衣が再び口を開いて話し出した。やはり、話の本題はこれからだつたのだ。覚悟を決め、照瑠は自分の拳に力が入つているのを感じた。どうも、気がつかない内に、自然と身構えてしまつていたらしい。

果たして今日は、どんな突拍子もない話が飛び出すのか。決して期待はしていないが、少しばかり気になつてしまつのも事実だつた。

「えつと……それで、さつきの話の続きをなんだけどね。実は、生放送が大失敗してから、私のところにメールが来たんだよね。それ、誰からだと思う？」

「さあ？ 私には、畠田見当もつかないけど……」

「ふつふつふつ……。相変わらず、想像力が今一つですぞ、照瑠ど の。私の異名が、人脈の亜衣ちゃん つてことをお忘れか？」

「なによ、気持ち悪い笑い浮かべて。で、その異名と今回の話、なんの関係があるわけ？」

「なんの関係つて……あるもなにも、大ありだよ。テレビと言えば、芸能界。そして、芸能界と言えば、それは私とゆつきーの関係以外にないでしょーが」

にやりと笑い、携帯電話を照瑠の手の前に突き出す亜衣。その画面に映し出されていいる相手の名前を見たとき、照瑠も亜衣が何を言

わんとしているのかを理解した。

「これ……雪乃からのメールじゃない！ そう言えば、あの子、今頃はお仕事頑張っているのかな？」

「まあ、あのゆつきーのことだから、間違いはないと思つけどね。それよりも、問題はメールの内容だよ。久しぶりにメールを貰つたと思ったら、なんだかまた、変な事件に巻き込まれているみたいなんだよね、これが」

「変な事件……。まさか、去年のクリスマスみたいなことが、また……」

亜衣の言葉に、照瑠の頭を嫌な記憶が掠めた。

国民的アイドルの一人、長谷川雪乃。そんな彼女と嶋本亜衣は、実は旧知の仲である。なんでも一人は幼馴染の関係らしく、雪乃の出身も、何を隠そう照瑠の住んでいる火乃澤町。

ちなみに、雪乃はあくまで芸名で、本名は蓮^{はすな}雜^{ぎゆ}有^ゆ希^きという。こんなことを知っているのも、亜衣が雪乃の幼馴染だからこそだ。昨年末に起きた事件では、この本名も事件解決の鍵の一つとなり、彼女を陥れようとしていた真の黒幕を暴ぐのに役立った。

そんな雪乃が、何の前触れもなしに亜衣にメールを送つてきた。それも、昨晩に放送されていた生放送番組で、なにやらトラブルがあつた翌日^にである。

一時は、向こう側の世界に関わつて、生死の境まで彷徨つた雪乃。そんな彼女からのメールだからこそ、照瑠は絶対に何かあると予想

していた。そして、亜衣の携帯電話を受け取つて中身を見た際、その予想は瞬く間に確信へと変わつた。

相談したいことがあります。

犬崎君とお話がしたいので、連絡取れませんか？

雪乃

たつた三行のメールだったが、照瑠にはこれだけで十分だった。

怪奇な事件の当事者としての経験を持つ雪乃が、あの犬崎紅を呼ぶ。それだけでも、雪乃か、もしくはその周りの人間に、何かがあつたということだけは確実だ。

「どう、照瑠？ 昨日の心霊特番で生放送中にトラブルがあつた、その次の日にこんなメールが来たんだよ。見るからに、なんかヤバそうじゃない？」

「そうね……。雪乃だつて、自分が怖い体験したことくらい、そう簡単に忘れないと思うし……。それなのに、わざわざ犬崎君に相談するつてことは、相当のことなのかも」

「だろうね。で……その犬崎君なんだけど、照瑠は知らない？」

「えつ……！？ そう言えれば……確かに、ここ最近は学校を休みがちだつたわね」

亜衣に言われて、照瑠はふと先週のことを思い出した。

四月になり、照瑠たちも無事に高校一年への階段を昇ることができた。が、そんなことなどお構いなしに、ここ最近の紅は学校を休みがちだった。

別に、身体の具合が悪いわけでもないだろうに、一年の時と比べても学校に来る日数が減った。まあ、仮に来たところで居眠りばかりしているため、あまり変わりはない。ただ、携帯電話に連絡を入れても、ほぼまったくと言つていいほどに返信がないのだけは気になつたが。

「ねえ、照瑠。なんだつたら、今日は帰りに犬崎君の家に寄つて行かない？ 先生から、プリント預かっただとかなんとか言つて、口実作つてさ。そこで、ついでにゆつきーからのメール見せて、相談に乗つてもらおうよ」

「犬崎君の家に！？ まあ、私は構わないけど……。でも、亜衣。あなた、犬崎君の家、どこにあるか知つてるの？」

「えつ……。そ、それは……」

照瑠の言葉に、亜衣はしばし視線を上方に逸らし、わざとらしく頬を指でかいた。ここまで話が進んでいて、結局はこういうオチか。相変わらず、最後の最後で亜衣は詰めが甘い。

「はあ……。どうせ、そんなことだらつと思つたわよ。まあ、私も犬崎君の家がどこなのか、実は良く知らないんだけど……亜衣の言う通り、プリント届けるのを口実にして、一緒に行つてみましょう。

先生に頼めば、住所くらいは教えてくれると思つしね

全身の力が抜けて行くのを感じながら、照瑠は自分が早くも厄介事に巻き込まれたのを感じていた。

アイドルグループの一員であることを抜きにした場合、雪乃是照瑠にとつても大切な友人の一人だ。その友人を助けるためであれば、苦労を惜しむつもりはない。問題なのは、亜衣が後先考えず、役にも立たない提案をしてくるくらいである。

だが、それ以上に、照瑠は紅の住んでいる家に興味があつた。

昨年の六月に火乃澤町にやつて来てから、照瑠は紅と一緒に様々な心霊事件を解決してきた。が、照瑠が紅と話をするのは、決まって駅前の甘味屋か照瑠の家というのがお約束だつた。連絡は常に携帯電話を使って呼び出す形で、照瑠や亜衣が紅の家を訪れたためではない。

ぶつきらぼうで口が悪く、周りの人間とは必要最低限の関係しか望まない。それでいて、普段は金に意地汚い側面を見せながら、向こう側の世界の住人が絡んだ事件が起きると、なんだかんだで無償の奉仕をすることも多い紅。

はつきり言つて、紅は亜衣とは別方面での変わり者だと照瑠は思つていた。そんな紅の住んでいる家とは、果たしてどんな場所なのだろう。

(犬崎君の家か……。犬神なんてものを操るくらいだし……まさか、犬小屋つてことはないわよね)

少しばかり失礼だと思いながらも、照瑠は犬小屋から頭を出した。紅の姿を想像し、思わず軽く噴き出した。あの、無口で冷静な紅の頭が、犬小屋の穴から飛び出している様。自分で考えたことなのに、それを頭に思い浮かべると、どうにも笑いが込み上げてきて止まらなかつた。

街外れの雑木林の近くに、その屋敷はあつた。建てられたのは、恐らく数十年前だらうか。一見して、そこまで古びた印象は受けないが、近づいて見るとかなり年季が入つているということがよくわかる。

屋敷を覆う鉄柵は、雨と風にやられてボロボロだつた。塗装は剥げ落ち、赤錆びも酷く、その下にあるブロック塀もひびが入つている。それは小さな門も同様で、既に壊れてその用途を果たさなくなつた門の欠片が、風にゆれてきいきいと音を立てている。

誰もいない、忘れられた家。埃の積もつた窓ガラスと、痛みの激しい屋敷の壁。誰がどう見ても、まともな人間の住んでいる場所とは思えない。が、そんな屋敷の一室には、古びたソファーに一人の少年が腰かけていた。

白金色の髪の毛と赤い瞳。犬崎紅だ。

先天的な白子障を持ちながらも、日中の陽射しの強さに弱いことを除いては、特に日常生活に支障は見られない。いや、むしろ、こんな廃屋同然の家に住めることからして、精神的にも肉体的にも、

かなりタフな方だと言えるだろ？。少なくとも、同年代の少年たちに比べても、紅の体力や精神力、それに運動神経などは、明らかに標準のそれを越えていた。

天井の脇に張られたクモの巣に目をやりながら、紅は手にした鏡を弄ぶようにしていじっていた。赤と青。二枚の鏡はそれぞれが、実に美しい錦模様で染められている。かなり年季の入った物であるらしく、骨董品屋に持ち込めば、それなりの値段で引き取ってくれるかもしない。

もつとも、紅にとつて関心があるのは、この鏡の値打ちなどでは決してなかつた。彼にとつての関心の対象。それは、鏡の持つている呪力とも呼べる、不思議な力についてのことだった。

今年に入つてからすぐ、まだ雪も溶けていない季節のこと。一月の初頭に起きた怪事件、 鏡さま事件 のことが、どうしても頭から離れない。

鬼門の方角に備え付けられた大鏡の前で、古来より大切にされてきた鏡を用いて、夜中の一時に合わせ鏡を行つ。すると、異界への扉が開かれて、術者の魂は常世の一つである鬼の世界、 鬼界 へと導かれてしまうという儀式。

向こう側の世界の事件に数多く携わってきた紅でさえ、こんな術を目にしたのは初めてだつた。実際、最後には自らも鬼界へと乗り込んで戦う羽目になつたため、術の信憑性に関しては疑いようがない。が、問題なのは、いったいどこに誰が、こんな術を生み出したのかということだ。

自らは直接に手を下さず、呪いの道具を配ることで世界に闇を広

める者。闇の死揮者コシダクタと呼ばれる者の存在が、否応なしに紅の頭に浮かんでくる。

靈能力者達の間でも、死揮者の話は單なる噂に過ぎない。実際に死揮者と出会つた者などいなかつたし、その存在を証明するための証拠も見つかっていない。

現に、今、紅が持つてゐる一枚の鏡も、單なる古びた鏡以外の何物でもなかつた。術が行われた際には不思議な力を持つていたのかもしれないが、どうやら使い捨ての一回切符だつたらしい。知り合いの退魔具師モジムシキ 魔を祓う道具を作る職人のことであるに調査を頼んだが、やはりただの古い鏡でしかないとの返事しかもらえなかつた。

自分の存在した証拠さえ残さず、常に影で暗躍する闇の死揮者。こうままでして尻尾をつかませないと、本当に死揮者などいるのかと、疑わしくもなつてしまふ。

だが、それでなれば、昨年から立て続けに火乃澤町で起きている、不可解な事件の原因を説明できなかつた。

この火乃澤町は、陰の気が流れ込みやすい地形にある。紅が来るまでは賽さいの結界によつて阻まれていたが、その結界も、今は完全に破壊されてしまつてゐる。応急処置的な対処はしておいたものの、それでも完全に気の流れを阻むことはできない。せいぜい、流れを弱めて街が完全に毒されないようにする程度が限界だ。

流れ込む陰の気によつて、魑魅魍魎の類が街に集まつて來ること。それは仕方のないことだと紅も思つ。問題なのは、自分がこの土地にやつて來てから起きた事件の、半数以上が呪いや禁術に關係する

ものだということだ。

靈的な存在に近づき過ぎたが故に惨事を招く祟りとは違ひ、呪いはあくまで人が人にかけるもの。禁術も同様であり、基本的には呪いの道具がなければ成立しない。

しかし、そういう道具を素人が簡単に手に入れていることなどが、そもそも不可解なことなのだ。例えば、呪いの藁人形一つにしても、素人が作った物では効果がない。靈的な存在に通じる者が、それ相応の手順を踏んで作った道具を用い、更に正しい手順で儀式を行わねば、そう簡単に他人など呪えない。

では、それにも関わらず、この火乃澤町で呪い関係の事件が多発しているのはなぜか。原因は、陰の気などではない。もっと、直接的な何かがあるはずだ。

火乃澤に降りかかる災厄の原因。それは、本当に闇の死揮者なのだろうか。だとすれば、その死揮者は、なぜこうも回りくどい方法を用いて、悪戯に闇を広めようとするのだろうか。

色々と、わからないことが多過ぎる。事件が起きてからしか動けないという分、こちらに不利があるのは百も承知だ。それでも、ようやく手掛かりを見つけたと思った矢先に、その可能性が雲をつかんだようにして消えてしまうやるせなさ。これでは、紅でなくとも苛立ちを隠しきれなくなつてくる。

一枚の鏡を薄汚れた机の上に置き、紅はそつと立ち上がった。家の外で、何やら扉の軋むような音がする。いつもの風が家を叩き、揺らすような音ではない。紅にとつても珍しいその音は、この廃屋のような古い屋敷に、久方ぶりの客人が訪れたことを示していた。

「客か……。こんな時に、珍しいな」

自分の影に語りかけるようにして、紅は独り呟いた。その声に、影が一瞬だけ肯定の意思を示すようにして揺れる。

「誰だか知らんが、物好きなやつもいるものだ。とりあえず、害のない連中だったら、ここまで案内してやれ」

再び、影が揺れた。紅の言葉に、影は彼の足下からすっと離れるとい、まるでそれが一つの意思を持った生き物のようにして、そのまま扉の隙間から外へと抜け出て行った。

夕暮れ時、メモ用紙に書かれた住所へ向かつた照瑠と亜衣は、自分たちの日の前に現れた屋敷に言葉を失つた。

柵も壁もぼろぼろで、およそ人の住んでいる気配がしない。ほとんど立ち腐れの空き家であり、今にも中から幽霊が飛び出してきそうな感じである。もう春になつて久しいといつに、妙に冷たく陰気な風が、鏽びついた門を叩いている。

本当に、ここがあの犬崎紅の家なのだろうか。もしかすると、自分たちは学校の教師からもらつたメモ書きを読み間違えて、まつたく見当違いの場所に来てしまつたのではあるまいか。

思わず互いに顔を見合させた照瑠と亜衣。だが、メモ用紙に書か

れた住所と目の前の電柱にある住所を見比べると、確かにこの屋敷が紅の家と考えて間違いない。辺りには、他にめぼしい家もなく、草むらと雑木林が広がっているだけだ。

仕方ない。とりあえずは、家の扉だけ叩いて、人がいるかだけ確かめよう。そう思い、照瑠が門の前に来たとき、その瞳の中に奇妙な物が飛び込んで来た。

「ねえ、亜衣。これって……」

「うん。木の板でできた表札だね。ちゃんと 犬崎 つて彫つてあるよ」

「そうね。でも……これ、よく見ると、カマボコの台になつていた木で作られているようにも見えるんだけど……」

ぱろぼろだが、かつては格式の高そうな装飾が施されていた門とは、明らかに不釣り合いな安っぽい表札。それを見て、照瑠はしばし言葉に詰まつたまま立ち尽くした。

普段の紅が、とかく金銭的な面で煩いこと。それは照瑠も知つていたが、まさかここまで酷いとは。こうなると、節約云々を越えて、もはや单なるネタだ。貧乏性、ここに極まれり。もしかすると、こんな酷いボロ屋に住んでいるのも、単に賃料が破格であるという理由だけかもしれない。

まったくもつて、紅はいつたい何を考えているのか。およそ、普通の人間には理解できない、彼なりの基準というものがあるのだろう。

半ば呆れた表情のまま、照瑠と亜衣は屋敷の門をそつとくぐった。すると、誰が触れたわけでもないのに、屋敷の扉が音もなく開いた。

「ここから先へ、入つて来いといつことなのだらうか。仕方なく、照瑠と亜衣は遠慮がちに、そつと家の中に入つてゆく。ビーヴィラインター・ホンさえないようで、玄関を抜けると黄色いカステラのような色をした壁が彼女達を歓迎した。

「うへえ……。外から見たときもそうだつたけど、中も相当にボロイですなあ。こうなると、ますますお化け屋敷つて感じだね」

亜衣の言葉に、照瑠も無言で頷く。床は比較的綺麗に掃除がされているが、それでも家が古く傷んでいるのには変わりがない。見たところ、電気もまともに通つていないうつであり、紅がどのような生活を送つてているのかますます気になつてくる。

（お化け屋敷か……。まあ、確かに、この家の中にいる犬崎君のことを夜に見かけたら、誰もがお化けと思うかもしれないわね）

暗闇の中に光る赤い瞳と、深雪のようになじみの白い肌。そんな容姿の人間が、廃屋一歩手前の屋敷の中に住んでいる。それを外から知らない者が見れば、間違いなく幽霊と誤認するだろつ。

屋敷の奥にある扉が、音もなくすつと開いた。風はなかつたが、照瑠はなぜか、何者かが自分を案内しているような気がして、そのまま導かれるよつに扉の奥へと歩を進める。

「じめんぐださい。誰かいますか？」

扉の影から顔を覗かせ、照瑠は恐る恐る訊いてみた。返事はない。

だが、その代わりに、彼女は部屋の中央に置かれたソファーの上に、見慣れた少年の姿を発見した。

「なんだ、お前達か。俺はてっきり、また物好きなアホが廃墟探検に来たのかと思ったぞ」

白金色の髪の毛をかきながら、少年が照瑠に言った。犬崎紅だ。初め、この家にやつてきたときは自分が道を間違えたのではないかと思ったが、どうやら紅は本当に、このボロボロの屋敷に住んでいるらしい。

「犬崎君……。いるならいるで、返事くらいしてよね」

「悪いな、九条。だが、見ての通り、ここはこんな家だ。一応、表札は出しているが、それでも何を勘違いしたのか、たまに廃墟マニアなんかが不法侵入して来るんでな。念のため、警戒しておいた」

「廃墟マニアって……。まあ、確かに、こんな家じゃねえ……」

天井の隅に張られたクモの巣に目をやりながら、照瑠は改めて部屋の中を見回した。

紅が生活している空間は、最低限の掃除くらいはされている。が、それでも部屋がボロボロなのは相変わらずで、天井は色々な部分がしみだらけ。それは床も同様で、破れた窓ガラスはガムテープで補修してある。部屋にはソファーやテーブル以外の家財道具がなく、随分と殺風景な場所に感じられた。

「で、今日はいったい何の用だ？ わざわざ、俺の家を突き止めてまで押し掛けるなんてくらいだからな。よっぽどのことがあったと

考えるのが普通だが？」

口元を隠すよつこにしたまま、紅が照瑠たちに赤い瞳を向ける。さすが、同年代の他の男子と比べても、紅は鋭い。無愛想な態度とふつきりほつた喋り方は好かないが、じつじつときは話が早くて助かる。

「やつぱり、犬崎君に隠し事はできないわね。実は、ちょっと亜衣に頼まれて、相談事があつて来たの。後、ついでに学校休んでたときのプリントの束、一緒に持つて来たから」

「そつか。だつたら、その紙屑の山は適当に置いておいてくれ。どうせ、俺は読まないからな」

「紙屑つて……。犬崎君、あなたねえ……」

学校のことなど、まるで興味はない。そう言わんばかりの口調で言い放つ紅に、照瑠は自分の頭が痛くなつてゆくを感じていた。

やはり、紅の感覚は一般人のそれとは違う。不良とつわけではないのだが、興味や関心の対象が、一般市民の日常生活におけるものとは大いにかけ離れている。

長い間、向こう側の世界の住人と隣り合わせの生活をしていると、こうなるのだろうか。と、いうことは、神社の巫女として靈的な修業を続ける自分も、いつかは紅のような感覚になつてしまつのだろうか。さすがに、それはないと思いたい。

呆れた顔をしたまま鞄からプリントの束を取り出すと、照瑠はそれを強引に紅に押し付けた。続けて、今度は巫衣に目配せすると、

彼女に携帯電話を取り出させて紅に見せる。あの、長谷川雪乃から送られてきた、メールの本文を画面に表示させて。

「ねえ、犬崎君。去年の暮れに会った、ゆつきーのことが覚えてる？」「ほら、あの蟲がどーしたつて事件のやつ」

「ゆつきー？ ああ、長谷川雪乃のことか。一応、覚えてはいるがな。今、どうしてこのかは興味ないがな」

「むう、なによそれ。そんなこと言つたら、ゆつきーが可哀想じやん！」

「事実を言つたまでだ。それよりも、相談の内容は何だ？ 僕としては、そつちの方にしか興味がない」

ほとんどのひつたくるようにして、紅は亜衣の差し出した携帯電話をもぎ取つた。画面に映し出されている本文を見ると、しばし顔をしかめて難しそうな顔をする。

メールの本文には、依頼の内容まで書いてはいない。ただ、紅に相談したいことがあると、端的に綴られているだけだ。

だが、それでも紅は、そのメールが悪戯の類ではないことを知つていた。

紅の知る限り、長谷川雪乃は悪戯でこんなメールを送るような少女ではない。ましてや、アイドル歌手としての活動も忙しい中、單なる悪ふざけで紅のことを呼ぶとは考えにくい。

怪異の当事者として、一度はその命さえも落としかけた長谷川雪

乃。そんな彼女が、改めて紅を頼る理由はなにか。こればかりは本人に訊いてみないとわからない。

「とりあえず、このメールだけでは何とも言えないな。ただ、何か良くないことが起きていることは確かだろ?」

「えつ……それじゃあ…?」

「勘違いするなよ、嶋本。俺はまだ、こいつからの依頼を引き受けたの決めたわけじゃない。ただ、長谷川雪乃が悪戯でこんなメールを送つて来るとも思えない。まずは、お前が本人に確認をとつて…全ではそれからだ」

はしゃぐ巫衣に釘を刺し、紅は淡々とした口調で言つた。

長谷川雪乃は、いつたい何を考えて、再びこちらに接触を測つてきたのか。もしや、また彼女の周りで、よくないことが起きているのではないか。どうつか。

本当は、こんなことに時間を割いている場合ではない。今は一刻も早く、闇の死揮者の存在を突き止め、その足取りや目的を判明させなければならない。

そう、頭ではわかつていたが、やはり紅には雪乃のことも気になつた。

ここで自分が依頼を承諾しなければ、今度は照瑠が雪乃を助けるために勝手なことをし始めるかもしれない。巫女としての力を確實につけてきている今、照瑠が先走つて暴走しないとも限らない。

面倒見がよいのも、時には考え方だと紅は思った。嶋本亜衣のよつなトラブル メーカーとつき合つことが、果たして照瑠にとつてプラスに働くのか。ふと、そんなことを考えてしまつ。

もつとも、こんな話の展開は、今に始まつたことではない。それに、自分がこの土地に住まつことを決めたのは、なによりも九条照瑠を守るためといつ理由が強い。

生まれながらにして高い素質を持ちながら、その力を制御できな者は、いつしか闇に堕ちてゆく。陰の気が流れ込み、怪異が発生しやすい状況にある火乃澤町において、照瑠のような人間は闇の格好の餌食だ。巫女としての修業が終わつてゐるならいざ知らず、半人前の状態では、逆に闇に取り込まれないとも限らない。

かつて、自分が救えなかつた少女、くじょうあかね狗蓼朱音のことを思い出し、紅はそつと目を瞑つた。あれから既に一年以上の月日が流れていたが、未だに彼女の存在は、心の奥深くで紅を縛り続けている。

彼女のような人間を、一度と再び生み出さないようにすること。それを自ら 賠罪 と称し、紅は今まで戦つてきた。九条照瑠を守るというのも、その使命感に起因する部分が大きい。

このまま亜衣の話を無視して、照瑠を事件に関わらせるのは気が引けた。長谷川雪乃が、果たして本当に再び怪奇な事件に巻き込まれているのかどうか。その真偽は定かではないが、手を引くにはあまりにも早過ぎる。

どちらにせよ、死揮者に対する情報がない以上は、一人で悩んでも無駄なだけだ。それならば、今はまず目先の問題を解決し、その上で死揮者情報を探つた方が賢明だ。

無償で働くのは、紅の本意ではない。だが、照瑠の性格を考えると、紅に選択肢というものは残されていなかつた。

春先の東京は、東北よりもさらに温かい風が吹いていた。桜の季節は終わってしまい、そろそろ初夏になるつかとという頃合。都心では、既に夏物の服を着て歩いている者の姿もちらほらと見受けられる。

新幹線から降りたところで、犬崎紅は思わず天を仰ぐよつにして目元を覆つた。

陽射しが強い。東北の涼しい風が吹く火乃澤町に比べ、ここは既に夏と言つても過言でない。

もつとも、本格的に夏を迎えたら、いよいよそんなことは言つていられなくなる。東北の夏は冬の寒さが嘘のような猛暑日になることも多く、紅の生まれ育つた四国に至つては、毎年の如く水不足に悩まされる。東京も蒸し暑い場所ではあるが、熱中症で倒れる危険性は、地方の都市にいる方が高い。

先天的な色素欠乏に悩まされる紅にとつて、これらの陽射しはまさに天敵と言つても過言ではなかつた。強過ぎる陽射しは紅の雪のように白い肌を焼き、あまりに酷いときは火ぶくれのようになつてしまつ。向こう側の世界の者と戦うために身体は鍛えていたが、この体质だけはどうにもならない。

現に、この陽気の中であつても、紅は漆黒の「一ト」で全身を覆い、強過ぎる太陽の光から身を守つていた。本当ならば、仕事着でもある修行僧のような服装が一番落ちつくのだが、この都会の中心で、さすがにそれは目立ち過ぎる。

「ねえ、犬崎君。そんなに着こんで、暑くないの？」

紅の顔を、下から覗き込むようにして亜衣が訊いてくる。心配しているというよりは、あまりに季節外れなその格好を、不思議に思つていうような感じだった。

「問題ない。それに、俺はどうも真夏の陽射しが苦手でな」

「ふうん……。前から思つてたけど、なんか吸血鬼みたいだよね」

「吸血鬼、か……。なるほど、確かに言い得て妙だな、それは」

亜衣の言葉に、自嘲気味な笑みをこぼしながら答える紅。外法使として、時に忌み嫌われて来た赫の一族の末裔としては、確かに吸血鬼のような存在と通じる部分もある。

そもそも小説に登場するドラキュラのイメージは、かつて串刺し侯爵と呼ばれて恐れられた、ルーマニアの貴族が元になつていると聞いたことがある。彼は一見して殺戮と拷問が好きなサディストに思われがちだが、彼をそこまでの凶行に走らせた原因は、その居城が絶えず隣国からの侵略に晒され続けてきた国境付近にあつたからとも言われている。

他国の侵略から国土を守るため、あえて残虐な処刑を公開し、敵の戦意を削ぐことで母国を守つた闇の英雄。殺された方からすればたまつたものではないが、闇を用いて何かを守ろうとしたという点では、確かに自分と共通する部分もあると紅は考えていた。

「ふう……。それにしても、東京駅は広いですね。あつ、あんな

とにかく、 東京バナナ 売つてますぞ、 照瑠ビのー...

口数の少ない紅を他所に、 亜衣が一人で勝手にはしゃいでいる。 目的はあくまで雪乃に会つためだというのに、 早くも忘れてしまつたのだろうか。

「」の辺り、 照瑠からすると、 まだまだ亜衣は子どもだ。 もう、 高校一年にもなるのだから、 いいかげん少しさは大人になつて欲しい。 まあ、 その姿勢からして小学生に見紛うような身長なので、 傍から見れば精神と肉体のバランスが見事に合致しているということになるのだろうが。

「ちょっと、 亜衣！ あんまり、 勝手にふらふらしないでよね！ ただでさえ、 身長も精神年齢も小学生並みなんだから……迷子になつても知らないわよ！！」

「むう、 失礼な！ 私だつて、 そのくらいは考へてるよ……」

「もう？ だつたら、 まあ別にいいんだけど……」

口ではそう言いながらも、 どこか不安を隠しきれない様子で亜衣を見る照瑠。 その手前では、 紅がいつもの無愛想な空気を振り撒きながら、 少しばかり先を歩いていく。

（それにしても……まさか、 犬崎君が、 いきなり東京に出てるなんて言いだすとはね……）

昨日の夕方、 亜衣と一緒に紅の家まで相談に行つたときのことが思い出される。

雪乃からのメールを見せた後、紅は照瑠と一緒に亜衣の家まで行くこととなつた。亜衣がその場で雪乃に連絡し、運よく繋がつたのが事の始まりだ。

雪乃が紅に相談したいと言つていた内容。それはやはり、昨日のテレビ番組のことだつた。なんでも、生放送中に何かアクシデントがあつたらしく、放送は突然の中止。その番組に出演していたタレントの一人と出会つた雪乃は、彼女から奇妙な話を聞かされたといふ。

本番中に、番組プロデューサーの頭が砕け散つた。

要約すると、そんな話だつたらしい。実際に本人と話をしたわけではないので、照瑠にはどこまで本当の話なのかは知らない。ただ、亜衣と代わつて電話をしていた紅も、いつになく真剣な表情になつていたのは記憶に新しい。

生放送の本番中に、人間の頭がはじけ飛ぶ。にわかには信じ難い話だつたが、なぜか紅はさして疑うこともなく聞いていた。まだ、怪奇現象の類と決まつたわけでもないのに、その日の紅はやけに物分かりが良さそうだつた。

極めつけは、電話の後に、亜衣の家に録画してある 奇跡空間ミラクルゾーン のビデオを見せて欲しいと願い出たことだ。もつとも、彼女が今まで撮り溜めしておいた物ではなく、あくまで昨日の生放送の物だけだつたが。

結局、紅の住居でもあるボロ屋を後にした照瑠たちは、そのまま

亜衣の家でビデオを見せてもらうことになってしまった。彼女の言つていた通り、ビデオに録画されていたのは心霊特番の生放送。途中、いくつかの再現映像を挟み、最後は問題の廃屋探索記録映像にさしかかった。

テレビ番組スタッフと思しき数名の男と、番組のレギュラーでもある「スローリ姿のアイドルが、誰もいない古びた家中に入つて行く。そして、ADの男が襖を蹴破つたところで、その向こう側から赤黒い血の様な液体が一度に溢れ出て来る。

はつきり言つて、趣味の良い物とは決して言えない映像だつた。それに、実録と称してはいるものの、やはりどこか胡散臭い。なんというか、怪奇現象が起きるタイミングが出来過ぎていて、作り物のよつた感じが否めないのだ。

やがて、映像が終わつたところで、司会の女子アナが更なる再現映像があると叫んでいた。正直、これ以上は食傷氣味だつたが、まだこんなものに付き合わされるのか。そう、照瑠が思つた矢先に、画面の向こう側がにわかに騒がしくなつた。

悲鳴、絶叫、それに観客のどよめきなどが入り混じり、何と言つてゐるのかよく聞こえない。続けて、画面が妙な音と共に切り替わり、しばらくお待ちください」という文字が表示されてしまった。

どうやら、何かトラブルがあつたようだが、なにしろあんな映像を見せられた後である。オカルトや都市伝説に夢中の亜衣ならばいざ知らず、照瑠はこれも、テレビの演出の一環ではないかと疑つた。

こんな物を見せられては、紅もさすがに今回の件から手を引くのではないか。自分でさえ疑わしく思つてゐるのだから、心霊現象に

詳しい紅ならば、尚更だろう。そう思つた照瑠だが、紅の口から出たのは意外な言葉だった。

土日の連休を利用して、東京へ行く。

それが、ビデオを見て紅が出した答えだった。

あのビデオから、紅がいつたい何を感じ取ったのか。それは、照瑠にもわからない。人を癒すことはできても、それ以外の能力に関しては、照瑠はまだまだ素人だ。

靈能力者の中にも個性があり、照瑠のようなヒーリングが得意な者、何かを探すことに特化している者、未来を予知できる者など、実に様々な者がいるのはわかる。が、紅のように様々な能力に通じている者は、この日本を探してもそういうのではないか。

彼の力は悪霊と戦うことに特化しているとはいえ、向こう側の世界の住人達に関する知識、外法や邪術を含めた禁断の儀式に関する知識は、照瑠よりも数段上だ。靈視などに関しても、恐らくは紅の方が上だろう。なんというか、実に万能な人間である。まるで、向こう側の世界の住人と戦い、常世と現世の橋渡しをするために存在している。そんな感じさえ抱いてしまう。

「おい、着いたぞ、九条。どうやら、あれが迎えの車だ」

突然、手前から声をかけられて、照瑠はハッとした顔をして我に返った。

「あ、『めん……。それより、迎えの車つてどうこういと、もし
かして、既に誰かと約束していたの?』」

雪乃から電話で話を聞いて、その翌日に強引に東京行きのチケットを買って町を出た。そんな強行軍を行つておきながら、この手際の良さはいったいなんだろう。

昨日の夜、亜衣の家を出た後にどんな魔法を使つたのか。照瑠はそれを紅に尋ねてみようと思つたが、彼女がそうするよりも早く、紅が目線だけで照瑠に伝えた。

紅の赤い瞳が示す先。そこにあつたのは、白く塗られた一台の車。その運転席から出て来た男の姿を見て、照瑠も紅が何を言わんとしているのかがわかつた。

「あつ、あの人……。確か、雪乃のプロデューサーをやつていた……」

…

長谷川雪乃が、まだ移籍をする前に所属していた事務所で、彼女を含めたT - D r i v e のプロデューサー兼マネージャーをやつていた男。名前は確か、高槻たかつきとか言つたか。背ばかり高い優男のような印象が強烈で、照瑠も彼のことはしっかりと覚えていた。

「昨日、嶋本が長谷川に連絡を取つたとき、電話の向こうにあの男がいたんだ。だから、少し代わつて話を聞いて……それから、迎えに来てくれるよう頼んでおいた」

頼まてもいないのに、紅が照瑠に説明した。後から妙なタイミングで訊かれても迷惑だ。ともすれば、そう言わんばかりの口調だった。

「なるほどね。まあ、確かに雪乃だけじゃなくて、高槻さんとも話ができたんなら、犬崎君が東京まで来た理由もわかるわね。あの人が犬崎君に何かを頼むつてことは、それなりに信憑性もありそうだし」

昨年の暮れに起きた事件のことを思い出しながら、照瑠は改めて納得した。

高槻は、今時の芸能界に関わる人間にしては珍しく、自分の担当するアイドルを個人としても大切にする人間の一人だ。こと、雪乃たちT-Driverに対する思い入れは強く、彼女達が芸能界の毒や、その他様々なトラブルに巻き込まれないよう、時に身体を張つて守るだけの覚悟を持つている。

そんな高槻が、わざわざ犬崎紅と接触を試みた。これはいよいよ、きな臭い物が漂ってきたと言える。雪乃だけならばいざ知らず、あの高槻までが動くとなれば、これは東京のスタジオで何か良からぬことが起きていると考えるのが普通だ。

「やあ、待たせたね。でも……まさか、本当に東京まで出て来てくれるなんてね。今さら、僕が言つのもなんだけど……ちょっと、色々と不安にさせ過ぎたかな?」

「問題ない。こつちも、今しがた到着したところだ。少し目を離すと、そこにいる小さいのが行方不明になりそうで心配だったがな」

「まあ、そう言わないであげてくれよ。彼女だって、雪乃のことが心配で、ここまで来てくれたんだろう?」

淡々とした口調で語る紅の毒舌を物ともせず、高槻はあくまで自分のペースで話を進めていく。この辺り、照瑠から見ても高槻は大人の男だ。少々責任感が強く、雪乃たちのこととなると頭に血が昇り易いのが欠点だが、そこが帰つて彼の人間臭さを強調していくよい。こんな男性に守られている雪乃たちが、少しだけ羨ましく思えてしまう。

案内されるままに車に乗り、照瑠たちは東京駅を後にした。車はどうやら高槻個人の所有しているものらしい。車内に飾り毛はないが、それなりに清潔にはしているようだ。彼がマネージメントを務めるT-Driveの面々も、送迎などはこの車で行っているのだらうつか。

休日の東京は混雑しており、車はあまりスピードを出せなかつた。この辺り、自分の住んでいる東北の田舎町とは違うと照瑠は思う。地元では信号にひつかかる以外、そこまで車が足を止められることはない。だが、この大都会のど真ん中では、好き勝手に車を走らせるというわけにもいかないようだ。

「うげ……。なんか、ちょっと酔つたかも……」

後部座席にいる亜衣が、早くも腹を抱えて情けない声を出していく。高槻の運転は決して荒くないが、慣れない東京の空気にやられてしまつたのだろうか。

「おい、九条。そここの車酔い女、さつさとなんとかしぃ。こんな狭い中で吐かれたら、臭くてやつてられないからな」

助手席に座つている紅が、後ろも振り向かずに言つ。相変わらず、口の悪い男だ。少しほは心配の一つでもしてみろと言いたくなつた照

瑠だが、隣にいた亜衣が口元を押えて苦しかったので止めておいた。

確かに、こんな狭い車内で吐かれたらと思うと、隣にいる照瑠とて気が気ではない。それに、車を汚してしまったら、わざわざ迎えに来てくれた高槻にも失礼だ。

「もう、しようがないわね。調子に乗って、新幹線の中で色々と買つて食べ過ぎるからよ」

「むう……面白い……」

「いいから、ちょっと動かないで。背中をすつてあげるから……」これまで、目的地に到着するまでは我慢してよね

そう言いながら、照瑠は自分の右手を亜衣の背中にかざし、深く息を吸い込んで意識を集中させる。そのまま背中をゆっくりと、上から下に撫でるようにしてさする。傍から見れば、単に友人の背中をさすつてしているだけにしか見えないが、これは列記としたヒーリングの一種だった。

相手の靈脈れいみゃく、魂の呼吸そのものとも言える流れを探り出し、それに同調させるようにして氣を送り込む。そうすることで、相手の魂の中心部分に活力を送り、病氣や怪我の痛み、果ては靈的な存在によつて傷つけられた魂そのものまで癒し、回復させる。それこそが、照瑠が修業の末に身に付けた、九条家に伝わる癒しの力だった。

癒し手として、自分はまだまだ未熟な部分が多い。それは照瑠も自覚しているが、亜衣の車酔いを治す程度なら既に朝飯前だ。

「どうやら、静かになつたようだな。まつたく……色々と、世話の
焼ける女だ」

助手席では、相変わらず紅が亜衣に向かつて悪態を吐いてくる。もつとも、普段なら「」で言い返す亜衣も、さすがに今は元気がない。照瑠の力が全身に行き渡るまでは、普段の調子も出せそうになかった。

「ところで……」

赤信号に差し掛かつたところで、車を止めた高槻に紅が尋ねた。

「あれから、そっちの様子はどうだ？ 何か、特に変わったことはなかつたか？」

「もうだねえ……。別に、これと黙つて進展はないよ。昨日、君に電話で話した」と、ほとんどの状況は変わつてない

「やうか……。いひなると、後は長谷川に会つてみるまでは何も言えないと……」

昨日、亜衣の携帯電話を通じて雪乃と、そして高槻と話したときの記憶が紅の頭に蘇る。

心霊番組の生放送中に、番組プロデューサーの頭が砕け散つた。これは、東京に来る前に照瑠や亜衣にも噛み砕いて話した話だ。

問題なのは、その事件の詳細を、局が隠蔽しようとしているのではないかといつことだった。

雪乃から話を聞いた際、高槻は高槻で事件の詳細を調べようと動いたらしい。同じテレビ局で行われた生放送の収録が、よりもよつて本番でぶち壊しになる。高槻は番組と直接関係はなかつたが、噂ぐらいは耳にしたのだろう。雪乃から相談されたことも相俟つて、個人的な伝手を当たり、それとなく調べてみたらしいのだ。

ところが、そんな高槻の努力も虚しく、彼はいきなり高い壁にぶち当たつた。

関係者の心情を考慮して、余計な情報は公開しない。

これが、局から高槻に出された返事だつた。事故死したプロデューサーの周りにいたスタッフは、軒並み精神的な苦痛を訴えているとかで、会つて話をすることがさえも許されなかつた。知り合いの関係者に話をしても、よくわからない、もしくは知らないの一点張り。それ以上は、何も聞き出すことができなかつた。

放送中に撮影機材が転倒し、それに巻き込まれてプロデューサーが亡くなつた。結局のところ、わかつたのはそれだけである。

これが、一年前の高槻であれば、「そんなこともあるか」と言って気にも止めなかつただろう。だが、彼は知つてゐる。昨年の暮れ、雪乃と共に事件に巻き込まれたことで、この世には人間の理解の範疇を超えた、向こう側の世界というものが存在することを。中途半端な気持ちで靈的な存在に近づいたり、その力を物にしようとしたりすれば、手痛いしつ返しを食らうといふことを。

心靈番組の生放送中に、プロデューサーが示し合わせたように変

死。しかも、その事実を微妙に捻じ曲げて、可能な限り表沙汰にならないようにしようと、何らかの力が働いている。なんだか随分ときな臭いものが漂っている気がして、高槻は雪乃の携帯を通じ、自分も紅に思っていることを打ち明けたのだった。

呪いの館を映した心霊ビデオと、奇妙な死に方をしたプロデューサー。そして、それらの事実を隠そうとする、未だ見えない謎の力。

紅も高槻から聞いた話なので、どこまでが本当かは知らない。ただ、これらのことを考えた場合、放つておいてよい事態ではないとということだけは理解できた。他にも理由はあるのだが、高槻の言葉が紅を東京に向かわせる理由の一つになっていたのは間違いない。

信号が再び青になり、周りの車に合わせて高槻の車も動き出す。紅と照瑠、それにもだ車酔いから立ち直れない亜衣を乗せて、車はカフェやレストランが立ち並ぶ繁華街の方へと入つて行つた。

身体がだるい。

夕暮れ時を告げる鐘の音を聞いて、葵璃凍呼は静かに目を覚ました。

「ううう……。頭、痛……」

まだ、全身の疲れが抜けていないのだろうか。どうにも全身に力が入らず、断続的に響くような頭痛が頭を襲う。

時計を見ると、時刻は既に午後の五時を示していた。正午になる前に寝てしまつたことを考へると、随分と長い時間に渡つて眠つていたらしい。

ふらつく足取りで立ち上がり、凍呼はベッドから抜け出した。先日、体調不良を訴えて生放送の特番に出るのを止めたが、身体の具合は一向によくならなかつた。

いや、本当は、体調そのものは快方に向かつてゐるのだ。ただ、あまりに身体と心に受けたダメージが大き過ぎて、その回復に時間がかかっているだけだ。

パジャマの袖をそつとつかみ、凍呼はそれをゆっくりと下にずらしてゆく。袖の中から現れた腕は、驚くほどに細く、白い。テレビ映りを気にして体系には常々気を配つていたが、友人などからは痩せすぎだと言われる。もつとも、ゴスロリアイドルで売つてゐる自分としては、不健康そうな雰囲気の方が調度よいとは思うのだが。

まあ、それでも、さすがに本当の病気になつて倒れてしまつては話にならない。それは凍呼も理解していたし、なによりも今は、袖の中から現れた腕に残る生々しい痣の痕が気になつた。

どこかにぶつけたわけではない。ましてや、誰かに殴られたわけでもない。白い肌にうつすらと残る痣は、何かで絞められたような痕にも見える。

今月に入つてから撮影に及んだ、幽霊屋敷の探索レポート。その後に自分を襲つた怪現象のことを思い出し、凍呼は消えかけた痣が再び傷むのを感じていた。

秋葉原を中心に活動する、売れないゴスロリアイドルとして活動して、早数年。そんな自分に表舞台に立つチャンスが訪れたのが、昨年のことだ。超常現象や未解決事件の謎を探る心霊ミステリー番組、奇跡空間ミラクルゾーン。その出演者の一人に、突如として選ばれたのがきつかけだった。

一部の人間の間以外では、さしたる知名度もない自分が、なぜ最初はそう思つた凍呼だったが、みすみすチャンスを逃すつもりはなかつた。番組の方からも、ミステリアスな雰囲気と可愛らしさの両方を持つた女の子が欲しいと言わされており、凍呼に白羽の矢が立つたのである。

はつきり言って、凍呼は心霊番組など好きではなかつた。ゴスロリアイドルなど称しているが、凍呼は怖い話がてんで苦手だ。ゴスロリ道を邁進する人間の中には「私は魔女」などと公言している者もいるが、さすがにそこまではできない。それに、魔女は魔法を使うだけの人間として割り切つたお付き合いができるかもしれないが、幽霊や妖怪、モンスターの類となると、もはやその限りではない。

だが、それでも凍呼はめげることなく、番組のレポートを頑張つた。ある時は、廃病院の潜入取材。ある時は、富士の樹海で自称霊能力者の先生と一緒に野営を敢行。また、ある時は、ゲストのタレントと一緒にこつくりさんをやらされて、スタッフの仕掛けたどつきりに泣かされかけたこともある。

正直なところ、辛いことの方が多い。それでも、自分がこの業界で生きて行くには仕方がないと、半ば割り切つた感情を持つて頑張つた。

そんな折、凍呼が今までの人生の中で、最も恐ろしい体験をしてしまうことになった取材。それが、先日の番組で放送された、呪われた館の潜入取材だった。

廃屋の潜入取材など、今さら珍しくもない。そう、初めの頃は思つていた。実際、ここだけの話、廃墟探索の取材はほとんどがやらせだ。

廃墟や廃屋とはいって、他人の持ち物である以上は持ち主が存在する。そんな場所に勝手に入つては、いくらテレビの取材でも、不法侵入で訴えられかねない。

それらの問題を解決するため、番組スタッフは事前に土地や家の持ち主ときちんと交渉を行つていて。また、実際に潜入したスタッフやゲストに危険がないよう、先にA/Dなどに下見をさせてもらっている。当たり前と言えば当たり前の措置なのだが、まあ普通は気がつかないだろう。その結果、番組の取材の真似をして、日本全国で廃墟への不法侵入が後を絶たないのは問題だが。

今回の取材も、所詮は子ども騙しのお化け屋敷探索。何か、少しばかり驚けるように、スタッフが事前に仕込みをしている可能性はある。が、実際に身の危険を感じるようなことなど、絶対に起きるはずもない。

全てが仕組まれ、仕込まれた、予定通りの段取りで進む潜入取材。何も起こるはずがないし、起きてはならない。そう、信じていたのに。

腕についた痣を撫でながら、凍呼は『ディレクターの室井からあつた電話の内容を思い出した。

プロジェクトコーラーの西岡が、収録中に亡くなつた。

端的に言つならば、それだけを伝えられた。本当は、もっと詳しく聞きたかったが、電話の向こうの室井も体調が優れていなによつて、湿つた咳をしていたので止めておいた。

恐怖は終わらない。そんな安っぽいホラー映画のキャッチコピーのような言葉を思い出し、凍呼は自分の肩を抱いて身体を震わせた。

あの日の取材は、確かに普通の取材ではなかつた。レポートの撮影そのものは上手くいったが、その後に奇妙な現象に悩まされたのは、記憶に新しい。

最終的に番組では、それらスタッフや凍呼が体験したことまでをも再現フィルムで再現し、予定を変更して生放送のプログラムに組み込んだ。なんというか、転んでもただでは起きない。プロジェクトコーラーである西岡に、そんなイメージを抱いた矢先に彼の訃報を聞かされたのだ。

このままでは、自分も危ないのではないか。事件はまだ、何も解決していないのではないか。そんな不安が、凍呼の頭をふつと掠める。

「どうしたの……。今だったら、室井さんに連絡して繋がるかな……」

…

どうしても、不安が拭えない。思い出したくもない記憶が、先ほ

どから凍呼の頭の中で延々と回っている。

ベッドの脇に置いてあつた携帯電話を握り締め、凍呼は室井の番号へと電話をかけてみた。

一度、二度、電話越しに無機質な呼び出し音だけが聞こえてくる。だが、肝心の室井は仕事で忙しいのか、一向に凍呼の電話に出ないらしい。

やはり、室井は忙しくて駄目だ。ならば、自分の事務所のマネージャーにでも連絡するか。

いや、それも駄目だらう。彼は今回の事件には関与していないため、凍呼の話も半信半疑にしか聞いてくれそうにない。それに、もしも聞いてくれたとして、何の力も持たない彼が、本当に役に立つとは思えない。

いふなつたら、残された頼みの綱はたつた一つだ。可能性は低く、本当に頼りになるのかも疑わしかつたが、今の凍呼には頼れる人間が他にいない。

再び携帯電話を開き、凍呼は素早くアドレスを呼び出して電話をかける。数秒の後、やけに軽い雰囲気の、男の声が聞こえてきた。

はい、もしもし

「あつ、御鶴木さんですか……。私です。先日、お世話をなつた、葵璃凍呼です」

葵璃……？ あつ、もしかしてトーマスちゃん？

「はい、そうです。あの時は、本当に電話になりました」「

いや、別に構わないよ。」しかも、仕事だったしね。それよりも、靈傷の方はどう? まだ、どこか傷むとかある?

「いいえ。でも、まだ少しだけ癌が消えなくて、身体もなんだか重たい感じがしますけど……」

おじおじ、無理しちゃ駄目だよ。身体の傷は治つても、魂の傷つてやつは治りが遅いからね。まあ、くれぐれも瘦せ我慢だけはしないことだね

相変わらず、軽いノリの言葉が電話の向こうから聞こえてくる。知らない者が聞けば、その軽薄そうな喋り方に嫌悪感を抱く者もいるだろう。実のところ、凍呼も最初はそうだった。もっとも、今となつては彼だけが、凍呼に残された唯一の頼みの綱なのが。

それよりも、今日はどうしたの? 僕、さつき収録が終わつたばっかりでさあ……。ちよつと、色々と忙しいんだよね

「じめんなさい。でも、今日はどうしても訊きたいことがあって……。それで、電話したんですね」「

訊きたいこと? もしかして、この間の生放送が、途中でぶち壊しなつたってやつ?

「はい……」

田の前に相手がいないにも関わらず、凍呼は携帯電話を片手に独

りで頷いていた。

御鶴木魁は、凍呼が代役を頼んで欠席した生放送の本番にも顔を見せていたはずだ。ならば、魁であれば、西岡の死の真相を知っているのではないか。自分たちに降りかかった災いが、本当に終わりを告げていたのか。それを、確かめたかったのもある。

それから凍呼は、魁に自分の疑問に思つていたことを一気にまくし立てるようにして話していった。番組の収録が終わつたばかりで、本当は向こうも迷惑に思つているかもしない。それでも凍呼は構わずに、西岡の死について何か知らないかと食い下がつた。

程なくして、全てのことを話終えると、凍呼は思いの他に自分が昂奮していたことに気がついた。

息が荒い。微熱のせいで体温が上がつていることも考えられるが、それだけが原因ではないだろ？

電話の向こう側にいる魁は、未だに何も言つてくれない。やはり、怒らせてしまつたか。そう思い、ようやく申し訳ないという気持ちが凍呼の頭をよぎつたが、次の瞬間、再び魁の軽い雰囲気の言葉が聞こえてきた。

うーん、西岡さんの死の原因か……。実は、あれは俺も気になつてたんだよね

「気になつてた!? それじゃあ、やっぱり御鶴木さんは、西岡プロデューサーが亡くなる瞬間を見たんですね!？」

まあね。ただ、どんな死に方だったのかは、ここではあえて言わ

ないでおくよ。女の子の君に、あれはちょっとばかり刺激が強過ぎるだろ？からね

肝心なところで、魁は言葉を濁してしまった。やはり、あの生放送で何あつたのだ。それが何なのかまでは、凍呼も知らない。ただ、何か恐ろしいことが起こっているというだけは、魁の言葉を聞いた凍呼にもしつかりと伝わった。

それじゃあ、トークちゃん。悪いけど……もし、外に出来られるようだつた、これから局の方に来てくれないかな

「えつ、これからですか……？」

そうだよ。俺の方でも話を整理しておきたいし、ちょっとばかり気になることもあるからね。まあ、具合が悪いんだつたら、無理はしなくていいけどさ

「いえ、大丈夫です。これから行くと、そつちに着くのが六時半くらいになりそうですけど……構いませんか？」

ああ、問題ないよ。それじゃあ、俺は局のビルで待つてあるから。こつちに着いたら、また電話ちょうだい

電話は切れた。なんというか、最後まで軽い雰囲気を崩さない男だった。

しかし、これは同時に好機もある。身体の具合は優れなかつたが、ここで魁に会つておかねば、悪い想像ばかりが頭の中で膨らみそうで嫌だつた。

パジャマを脱ぎ、凍呼はいつも自分が街に着て行くお気に入りの服を引っ張り出して着替えた。髪型まで普段と同じにするわけにはいかなかつたが、今はとにかく急いでいるのだ。魁に会う際、失礼のない服装にさえなつていれば、それで以外はどうでもよかつた。

照瑠たちが高槻に案内された場所に着いた頃には、もう既に夕方になつていた。まあ、東京に着いたのが既に昼過ぎだつたのだから、これは別に不思議なことではない。その人と車の多さを考えれば、比較的スムーズに動けたと思う。

車を駐車場に止め、高槻は田と鼻の先に見える店へと照瑠たちを案内した。どうやら大きなカフェのようで、夕食前なのに客で賑わつていた。

「さあ、着いたよ。この先で、雪乃たちが待つてる」

「雪乃たち？ つてことは、ゆつきー以外の T Driveの人も、来てるわけ？」

車酔いから完全に復活したのだろうか。亜衣が、高槻の顔を見上げるよじにして尋ねていた。

「いや、そうじゃない。実は、僕や雪乃が例のテレビ番組で放送事故があつたのを聞いたのは、その番組に出ていた女の子から相談を持ちかけられたからなんだ。篠原まゆつて言つんだけど……君たち、知つてるかな？」

「篠原まゆ？ うーん……なんか、聞いたことあるような、ないような……」

高槻の言葉に、亜衣が珍しく難しい顔をして首を傾げている。怪談や都市伝説のことには詳しいが、芸能人の名前に関しては、亜衣はそこまで詳しくない。幼馴染である雪乃は別として、そこまで有名でない人物になると、顔と名前が一致しないことが多い。

「まあ、君が悩むのも無理はないけどね。あまり、こんなこと言つと可哀想だけど……彼女、雪乃たちと比べても売れてないから。ただ、この間の『ミラクルゾーン』には、代役みたいな感じで出演していたらしいけど……」

「代役？ ってことは、ゆつきーはその子から、プロデューサーの顔面グチャグチャ破裂事件 を聞いたんだね」

「顔面グチャグチャって……。まあ、確かに、それはそんなんだけどさ……」

周りの田舎を気にしながら、高槻が亜衣の言葉を遠慮がちに反芻した。なんというか、ネーミングセンスが皆無だ。いや、それ以前に、こんな公衆の面前で大声を出して話すようなことではない。

確かに、相談を持ちかけたのはこちら側だし、この店に亜衣や照瑠、それに紅を案内したのも高槻自身。だが、それでも、ここには他の客もいるのだ。食事中の人間だつているだろうに、そんな中で、いきなり顔面がグチャグチャだの破裂しただのという言葉を聞けば、気を悪くする人もいるかもしれない。

「ちょっと、亜衣。頼むから、それ以上は大声で喋らないでね。皆が皆、あなたみたいな怪談好きってわけじゃないんだから。あまり騒いで、変な目で見られても知らないわよ」

「むう、失礼な！ 私は別に、事実を言つただけじゃん！！」

「やつこつといひる、犬崎君に似てきたわね……。なんか、もう怒のも馬鹿らしにから止めておくわ……」

車に乗つていたときは吐く寸前まで苦しんでいたのに、酔いが収まつたらこれだ。紅も不用意な発言から周りの反感を買つことがあるが、亜衣と違つて無口なので、まだマシか。

なんだか、本題にさえ入つていらないのに、照瑠は早くも頭が痛くなつてきた。こんなことで、本当に自分たちは、長谷川雪乃の力になつてやれるのだろうか。

高槻に案内される形で、照瑠は店の奥にある席に向かつて歩いた。席はかなり奥まつた場所にあり、外から見てもわからない。国民的なアイドルとお忍びで会つには、調度良い場所であると言えた。

「やつほー、ゆつきー！ 久しぶりー！」

奥の席に雪乃の姿を発見し、亜衣が手を振りながら近づいて行つた。一瞬、そんなことをしたら雪乃の正体が周りにバレるのではないかと思つたが、照瑠は直ぐに、それが無用な心配であると気がついた。

テレビの画面に映つているときと比べ、普段着でいる際の雪乃はとかく地味だ。それこそ、どこにでもいる普通の高校生といった感

じで、特に人目を引くようなことはない。顔は間違いなく美少女の類に入るのだろうが、それでも雪乃は大人しい。服装が落ちついていることも相俟つて、彼女のことをT - Driveの長谷川雪乃だと気づいている人間は、店の中にはいないようだつた。

「あ、亜衣ちゃん。それに、犬崎君も……。本当に、東京まで来てくれたんですね」

サングラスを外し、雪乃がこちらに軽く会釈する。顔の半分ほどを覆い隠すような、大きなものだ。恐らく、変装のつもりなのだろうが、あれはあれで、変に目立つ。普段の雪乃の大人しさを考えた場合、あんな物は、返つて無い方がいいのかもしれない。

「久しぶりだな、長谷川。それよりも、お前の隣にいる女。そいつが、今回の依頼人か？」

久方ぶりの再開を喜ぶ亜衣を押しのけ、紅が間に割つて入つた。相手がトップアイドルであろうと、紅はまったく容赦がない。普段の尊大な態度を崩さずに、ややもすると不機嫌そうな態度のまま椅子に腰かけた。

「篠原まゆです。あなたが、雪乃の言つていた、霊能力者の人ですか？」

雪乃の隣にいる少女が、遠慮がちに紅に尋ねた。歳は、雪乃と同じ一つ上くらいだろうか。こちらは雪乃に比べ、格好も少々派手だ。芸能人として見ると華に欠けるのかもしれないが、学校にいれば、まず間違いなくモテる部類に入る。

もつとも、そんな今風の容姿に反して、まゆと名乗つた少女は雪

乃と同じくらい静かだった。遠慮を知らない紅の態度に、萎縮してしまったのではないかと思われた。

「靈能力者、か……。どつちかと「う」と、俺はもう少しスレた人間なんだが……まあ、今はどうでもいい」

相手の気持ちなど関係ない。そんな様子で、紅はまゆに一切の気づかいを見せずに話を進めようとする。この当たり、照瑠などは、もう少し処世術を身に付けた方がよいと紅に進言したくなる。悪気はないのだろうが、なんというか、本当に愛想がない。接客のよつな仕事には、まず向いていないタイプの人間だ。

「とりあえず、お前が見た物とやらを、もう一度俺に話せ。実際に本人から聞いた方が、新しくわかることもあるからな」

「は、はい。わかりました……」

同年代の相手だというのに、まゆは紅の放つ威圧感のよつなものに、完全に飲まれてしまっている。こんなことで、本当に話ができるのか。怪訝そうな顔をしてまゆを見る照瑠だったが、やがて彼女の口から、ぽつり、ぽつりと当日のことが語られ始めた。

あの日、まゆは番組レギュラーを務めるタレントの代役として、奇跡空間ミラクルゾーンの生放送に出演していた。自分が代役を引き受けることになつたのは、確か葵璃凍呼とかいう少女の代わりだつたか。あの、廃屋探索レポートに映つていた、ゴスロリ服を着ていたアイドルだ。

自分がなぜ、あの番組で葵璃凍呼の代役に抜擢されたのかはわからない。ただ、葵璃凍呼とは所属していた事務所が同じだつたため、

適当に上方で話がつけられていたのかもしれない。もつとも、まゆは凍呼とは直接話をしたことがなかつたため、彼女がどんな人間なのかまでは知らなかつた。

幽霊やオカルトなどに興味がないのに、心霊番組のゲストなど務まるのか。そんなことをぼんやりと考えていた矢先、あの忌ましい事件が起きたのだ。

プロデューサーの西岡の眼球が膨れ上がり、その頭部もろとも、粉々に弾け飛んで死亡する事件。目の錯覚と言われば、それまでなのかもしれない。西岡の周りにいたスタッフたちが盾となり、まゆも、その全てを自分の目で見たわけではない。

だが、それでも、あの日に見た恐ろしい出来事が、单なる機材の転倒事故とは到底思えなかつた。番組スタッフや事務所の方からは事故としか説明されなかつたが、いくらなんでも不自然すぎる。

極めつけは、やはり雪乃のマネージャーである高槻が、こつそり調査した結果を聞いたことだつた。なんでも、番組関係者は目のように口を閉ざし、局もあくまで事故としてしか公表していない。下手に調べようにも手掛かりもなく、傍から見ても隠蔽工作の臭いが見え隠れするのがきな臭い。

「結局、私が見た物、なんだつたんでしょう……。やつぱり、ただの見間違えだつたんでしょうか……」

最後の方は、少しばかり不安そうな口調でまゆが締めくくつた。話を聞いている間、紅は始終無言のままだつたが、やがてゆっくりと口を開き、その赤い瞳をまゆに向けた。

「なるほど、話はわかった。断言はできないが、何か厄介な事が起きているのは確かだな」

「厄介なことって……。それじゃあ、やつぱり……！」

「勘違いするな。まだ、俺は何の結論も出していない。ただ……そこの高槻マネージャーと電話で話した後、俺も俺なりに事件を探つてみた。例の、ミラクルなんたらとかいう番組を録画したビデオを、この小さいやつの家で見させてもらつた」

紅が、亜衣の方を少しだけ見て言つた。いつもなら、じいじで亜衣が「そんな紹介の仕方つてないじゃん!!」などと言つて噛みついで来るのだが、今日は紅の方が少しだけ早かつた。

亜衣が何かを言おうとした瞬間、紅の手が彼女の口元をつかんで抑えた。いつたい何事かと目を丸くするまゆだつたが、紅は「うるさい口を塞いだだけだ」と言つて、それ以上は亜衣に興味も示さなかつた。

「はあ……。相変わらず、あなた達は一人して話が噛み合わないわね。それで、犬崎君。あなたの見立て、どうだつたの？」

このまま亜衣に構つていては、一向に話が進まない。少々可哀想な気もしたが、照瑠は自分から紅に尋ねる形で話を戻した。

「すまないな、九条。一応、俺の見立てなんだが……恐らく、事件の原因是、あの廃墟探索の映像にはないな。靈視もしたから、それは間違いない」

「靈視？　でも、私には、何も感じられなかつたけど……」

「それは仕方ないだろ？ 靈視と言つても、本当に高度なやつは、それなりに修業を積まねばできないからな。それに、あの映像は、何者かが靈害封じに近い行いを施した可能性があった。一応、気を張つて集中すれば、あの映像の中にも靈が見えたんだが……本体は完全に成仏していたのか、特に害のあるものでもなさそうだったな」

「ふうん……。でも、それじゃあ、番組のプロデューサーさんが亡くなつた原因は？ 映像と関係ないんだつたら、やっぱり事故かもしれないってこと？」

「さあな。そこまでは、俺もわからない。ただ、話を聞く限りでは、そのプロデューサーの死に方が普通ではないのは確かだ。テレビ局や番組関係者が事実を隠そうとしている辺り、幽靈なんかとは別に、何らかの力が働いている可能性もある」

「うーん……。私には、それでもいまいち、真相つてのが見えてこないけど……」

珍しく、照瑠は胸の前で腕を組み、両目を瞑つて考え込んだ。

紅の言いたいことは、照瑠もわかる。心靈特番が放送事故で中止になり、しかも原因是プロデューサーの変死。更に、その事実を関係者が隠そつとしている節があるとなれば、妙な陰謀を疑いたくなる。

「あの……。ちょっと、いいですか？」

先ほどからずっと黙っていた雪乃が、ここに来て初めて口を開いた。相変わらず、テレビに映つていないと今は控え目な印象が目立

つ。もつとも、以前に火乃澤町で初めて会つたときのような、妙におどおどした雰囲気は払拭されていたが。

「犬崎君。そのプロデューサーさんが亡くなつたのつて、本当に幽霊が関係しているんですか？ もしかして……私の事件のときみたいに、誰かが呪いをかけていたって可能性とか……ないですよね？」

ほんの思いつきで口にした、些細な一言。たつたそれだけのことだつたが、紅の眉が微かに動いた。

「あっ、『めんなさい。やつぱり、私みたいな素人が、変に口を出したらまずいですね……』

不要な一言で、紅の気分を害してしまつたか。そう思い、雪乃是咄嗟に謝つた。

「気にするな。それに、お前の言いたいことも、もつともだ。今回の事件……俺も幽霊の仕業ではなく、もつと人為的なものではないかと疑つていたからな」

別に、怒つたわけではなかつたのか。ほつとして胸を撫で下ろす雪乃と、それを見て申し訳なさそうにする照瑠。紅はあの通りの性格なので、誤解を生んでしまうことなど口常茶飯事だ。

「ねえ、犬崎君。雪乃はああ言つてるけど、本当なの？ 今回の事件も、やつぱり呪いの類かなにかが関係しているとか……」

「断言はできない。だが、そう考へねば、何かと辻褄の合わないことも多いんだな。少なくとも、単に心霊番組を作つて、その結果、靈の祟りに遭つて死んだというわけではなさそうだ」

「だったら、仮にプロデューサーの人気が呪われていたとして、誰が呪いなんて仕掛けたのよ。それも、人間の頭を吹っ飛ばしちゃうくらい、強力なやつを……」

「それはまだ、俺にもわからない。ただ、これが何らかの呪いの力である線は濃厚だ。その可能性を除外した場合……後は、念力で人間の頭を粉々にできるような、超能力者にお出まししてもらうしかなくなるだろうからな」

最後まで真顔で、しかし知らない者が聞いたら一笑に伏しそうな話を、紅はさらりと言つてのけた。霊能力者が超能力者の存在を否定するのは矛盾しているとも思ったが、それでも、巫女としての修業を積んだ今であれば、照瑠も紅の言いたいことがなんとなくわかる。

なんでもありの超能力に比べ、霊能力とは、あくまで別の世界に住まう住人たちと関わりを持つための力だ。紅の言葉を借りるならば、向こう側の世界に触れるための力と言つた方が正しいか。

靈の姿を見る。靈の声を聞く。靈を操り、時に靈と戦う。果ては、己の中に存在する靈的な力を用いて、病気などを治療する。様々な力の種類はあるものの、人間を玩具のように、簡単に壊してしまう力というものは照瑠も聞いたことがない。靈的な力の有無に関わらず、人を殺すということは、そつ簡単にできるものではないのだ。

「とりあえず、後はこちらで情報を収集する他はないな。一応、現場に探りも入れておきたいが……今から、例の生放送が撮影されたいたスタジオに向かうことは可能か?」

一通りの話を終え、紅が高槻に尋ねた。時刻は既に六時を周り、そろそろ日も暮れてきた。

「スタジオか……。まあ、僕や雪乃は構わないけど、君たちはどうするつもりなんだい？ 明日も日曜日で休日だと想ひけど、どこか泊まる当てでもあるのかい？」

「問題ない。ござとなれば、俺はその辺の漫画喫茶でも渡り歩いて夜を明かすさ」

「漫画喫茶つて……。そりや、君はいいかもしないけど、残りの女の子たちはどうするんだよ……」

昨日の今日で、いきなり東京まで足を伸ばすという強行軍。かなりの無茶だとは思っていたが、高槻は改めて呆れたような声を出して紅に言った。

紅が独りで寝るのは可能でも、まさかこの大都会の真ん中で、高校生の少女を一人も連れて歩きまわるのは得策ではない。もし、何か事件にでも巻き込まれた場合、いろいろと面倒な事態も発生する。やはり、ここは雪乃に頼んで、彼女の暮らしているマンションに泊めてやるのが理想だろう。年頃の少女が三人も寝るには少しだけ狭いかもしれないが、都会の真ん中に放り出すよりはマシだ。

「ふう、仕方ない。それじゃあ、悪いけど雪乃。今日は君の家に、お友達を泊めてあげることでいいかい？」

「はい。私は別に、構いませんよ。なんだつたら、まゆさんも一緒はどうですか？」

言いたいことは、わかっている。そんな口ぶりで、雪乃は高槻に答えてみせた。長年、芸能界という特殊な環境で過ごして来ているからだろうか。じつは、空気を読む力に、最近は雪乃も長けてきたと思つ。

結局、その日は雪乃のマンションに女性陣を泊めるということで、一応の話はまとまつた。後は、現場となつた局のスタジオに、紅を連れて行つて検証させるだけだ。

テレビ局の見学そのものは、一般人でもコネ次第でどうにでもなる。問題なのは、局が事件を隠すような動きに出でている以上、果たして事件の起きたスタジオに入れるかどうかということだ。

こればかりは、高槻も紅に保障する術がない。しかし、今、この場にいる全員が、今回の事件に不穏なものを感じているのは事実である。それを放つて日常へと戻ることは、高槻自身もまたできそうになかった。

葵璃凍呼が御鶴木魁の言つていたスタジオについたとき、既に辺りは暗くなつていた。

もうすぐ初夏とはいゝ、さすがに六時を過ぎれば日も落ちる。六月近くになれば七時前でも明るいが、今はまだ、春分を過ぎて一ヶ月経つか経たないか。いくら冬に比べて明るくなつたとはいゝ、そこまで日が長いわけではない。

もつとも、昼夜を問わず人が動き回つてゐるこの大都会では、そんなことは、あまり意味のないことかもしれない。現に、凍呼がスタジオに着いたときも、街はまだまだ眠ろうとはしていない。街灯やネオンに照らされた夜の街は、都会で暮らしている凍呼でさえ、その輝きに時に神秘的な何かを感じてしまう。

東京は、決して眠らない街だ。何かの小説で読んだ一節を思い出し、凍呼はなぜか、今になつてその言葉に納得した。古来より闇を恐れ、闇に怯えていた人間の姿は、そこにはない。

だが、それでも凍呼は知つてゐる。この現代においてなお、人間の常識では測ることのできないものが存在するということを。自分が体験したからこそ、それらの出来事を始めて眞実だと信じられるということを。

スタジオのあるビルの階段を昇り、凍呼は待ち合わせの場所へと足を急がせた。この時間、まだスタジオの殆どは撮影で使われている。魁が待ち合わせ場所として指定してきたのは、そんなビルの一角にある、休憩室の一つだった。

「あつ、弓削さん」

田の前に知り合いの男の姿を発見し、凍呼は思わず声に出して彼の名前を呼んだ。その声に、男は一瞬だけ肩を震わせると、ゆっくりと凍呼の方に顔を向けて振り返った。

ド派手なアロハシャツに、色の薄い癖のある髪の毛。田元は大きなサングラスで隠され、どこを見ているのかさえわからない。腕も脚も程良く鍛えられ、服の上からでも頑丈そうな胸板の持ち主だとわかる。

傍から見ればヤクザ者にしか見えないような格好をしているが、彼が決してそういう類の人間でないことは、凍呼が一番良く知っている。彼こそが、あの御鶴木魁の一番弟子。弓削総司郎その人なのだから。

「どうも……。お待ちしてましたっす……」

外見に反して気弱そうな声で、総司郎が凍呼に頭を下げた。他人と面と向かって会話することに慣れていないのか、彼は常に必要最低限の言葉しか発しない。それは何も目上の人間に対してもだけなく、凍呼のような少女に対してもまた同じことだった。

「もう、そんなに畏まらないでよ。私は別に、そこまで気を使ってもらわなくとも平氣だから」

本当は、その言葉の半分は嘘だ。未だに響く頭痛を薬で抑えて家を出たため、完全に本調子というわけではない。そんな凍呼の気持ちを知つてか知らずか、総司郎はやはり無言のままだった。

踵を返し、総司郎が田の前にあつた扉をゆっくりと開く。きっと、この向こう側に魁が待っているのだろう。仕事は終わったと言つていたが、それでは、あの電話の後からずっと凍呼を待つてくれたのだろうか。だとすると、少しばかり申し訳ない気分にもなつてくれる。

「失礼します……」

別に、遠慮する必要などない。そう、わかっていても、凍呼はそつと足音を忍ばせるようにして部屋に入つた。部屋の中は空っぽで、中央に大きなテーブルが置かれている以外には、取り立てて見るような物もない。そして、そんな部屋の中央に、パイプ椅子に腰かける魁がいた。

「やあ、トーイちゃん。待つてたよ」

実際に自然に、さらりと流すようにして魁が言つた。女の扱いに慣れている男の態度だと凍呼は思つた。

「すいません、お待たせして」

「いや、別に構わないよ。俺も、ちょうど仕事が終わつて暇だつたしね。それに、君の受けた靈傷が、どこまで回復しているかも気になつたし」

茶色く染まつた髪をかき上げるようにして、魁が探るような視線を凍呼に送つてくる。凍呼は返事をする代わりに頷くと、何も言わずに袖をまくつて自分の腕にある痣を見せた。

「へえ、随分と薄くなつたじゃなし。まあ、この分なら、もう一週間くらいすれば完全に治るよ。それまでは、ちょっとだけ身体が重たいかもしねないけどね」

「そうですか……。でも、こんな」と、あまり言いたくないんですけど……」

「なんだい？ 遠慮しないで、何でも言つてくれよ」

「はい。実は……例の、西岡プロデューサーの件なんですが……収録中に亡くなつたって、本当なんですか？」

「ああ……。残念だけど、本当だよ。彼は収録中に、俺たちの田の前で亡くなつたんだ。それも、とてもこの世のものとは思えない、壮絶でもござつたらしい死に方でね」

魁が、一瞬だけ凍呼から視線を逸らせる。陰陽師の末裔を名乗り、時に大惡靈と戦つたこともあると豪語する彼でさえ、あの日の西岡の姿を直視したいとは思わなかつた。あんなグロテスクで凄惨極まる最後など、できればあまり頭に残しておきたくない。

「あのう……。ござつたらしい死に方つて、具体的にはどんな……」

恐る恐る、凍呼は魁に訊いてみた。魁の様子からして、西岡の死に様は相当に酷い物だつたということは凍呼にもわかる。そして、魁が凍呼にそれを伝えるのを、できれば避けたいと思つていても。

しかし、凍呼にしてみれば、それらの真相を確かめるために魁の下へやつてきたのだ。例え、ここでどれほど恐ろしい話を聞かされ

よつと、それを受け止めるだけの覚悟はできっこる。自分の頭の中にある靄を放つておいて、このまま恐怖に怯える生活をするよりはマシなはずだ。

永遠の恐怖よりも、一時の恐怖を選んだ方がいい。そんな凍呼の決意が伝わったのだろうか。重たく口を噤んでいた魁だったが、やがて再び凍呼の方へ顔を向け、当口のことを少しづつ話し出した。

「あの日、俺は番組のゲストの一人として、総ちゃんと一緒にスタジオに入っていたんだ。いつもの席に座って、番組の最後に解説をする。普段通りの流れでやれば、よかつたはずだったんだけどね」

「やつですね。幽霊関係の番組になるときは、いつも御鶴木さんが来て、最後に解説をするつていうのがパターンでしたし」

「だろ？だから俺も、あの日はとっととおきのトークを用意しておいたんだ。もっとも、それは番組が途中で中止になつちまつたせいで、全部お流れになつちやつたけどね」

わざとらしく肩を竦め、魁は大きな溜息を吐いた。西岡が亡くなつたこと以上に、自分の話したかつたネタが話せなかつたことが残念だ。そんな風にも受け取れる態度だった。

「まあ、プロデューサーが変死したのは事実だし、あんなんじゃ番組も続けられない。それは仕方ないことだと思つよ。問題なのは、むしろその後だ」

「その後つて……。もしかして、まだ何があるんですかあ……」

「おこおこ、そんな泣きそうな顔するなよ。西岡プロデューサーが

亡くなつたのは事実だけど、それから先は、怪談話つてわけでもないからさ」

凍呼に向けられた魁の口調が、幾分か優しいものに変わつた。怪奇番組にレギュラー出演していながら、凍呼が怖い話を苦手としていること。それは、魁も知つていて。

「例の事件があつた後、俺は総ちゃんに頼んで色々と調べてもらつたんだよ。でも、結果は駄目駄目。なんか、テレビ局の方でも、強引に事故死つてことにしちゃつてや」

「事故死つて……本当に、事故だつたんじゃないんですか？」

「確かに、事故死と言えば事故死だよ。もつとも、局側としては、スキヤンダルみたいなのを恐れてたつてのもあるだろうね。ただ……殆ど緘口令みたいなやり方で関係者の口を封じたのは、俺も解せない部分があつたけど」

「緘口令……。それじゃあ、御鶴木さんも、西岡プロデューサーの死の原因はわからないつてことですかあ！？」

「残念だけど、そういうこと。普通じゃない死に方したのは確かだけど、それ以上は俺にもわからない」

「そ、そなあ……。まさか、私や他のスタッフの人まで、プロデューサーみたいに死ぬつてことはないですよねえ……」

もう、声が完全に震えている。魁は言葉を選んで話をしていたつもりだが、凍呼は泣き出す寸前だ。

これが心霊番組の収録であれば、凍呼の反応は番組を盛り上げるものとして歓迎されただろう。しかし、今はそんな場ではなく、魁としては凍呼にこんなところで泣かれるのは御免だった。

仕方ない。これ以上は、下手に凍呼を怖がらせても意味がない。そう思い、魁は少しばかり宥めるような口調になつて、そつと凍呼に語りかけた。

「まあ、落ちついでよ、トーロちゃん。トーロちゃんは現場にいなかつたかもしないけど、俺がちゃんと、あの屋敷にいた靈を除靈したのは本当だから。現に、あの後はトーロちゃんの靈傷も収まつて、変な夢も見なくなつたんだろ?」

「は、はい……。でもお……」

「だから、そう怖がらないでくれって。なんだつたら、俺がどうやって屋敷の幽靈たちを除靈したか、ちゃんと教えてあげるからさ」

そう言いながら、魁は今まで隅の方で黙っていた総司郎の方へと目をやつた。言葉にはしなかつたが、そんな魁の瞳を見て、総司郎は静かに領き服の袖をまくり上げた。

その日は、春先にしては妙に暗く、灰色の雲が空を覆つていた。

撮影を終えた古い屋敷から、葵璃凍呼はなんとも怯えた顔のまま外に出た。作り物とはわかつていても、やはりお化け屋敷の類は苦

手だった。

本当にあつた呪いの館。それが、今回撮影された映像のタイトルだつた。一見して何の変哲もない廃屋を、お化けの出る呪われた館と称し、スタッフと一緒に潜入取材を試みる。今まで何度かやつたことのある、廃墟探検の撮影だ。

もつとも、单なる廃墟探検とは違い、今回は随分と手の込んだ仕掛けが施されていた。特に、屋敷の奥の部屋に仕掛けられていた襖のからくり。あれは、凍呼からしても見事なものだつたと思う。

こちら側からは決して開かないように襖を固定され、さらには中に赤い水の入つた水槽のような物が仕掛けられている。襖も特注品で、外から見ただけではわからないが、一部が異様に薄い作りになつていて。そこを蹴り飛ばすと襖に穴が開き、中から水が飛び出すという仕掛けだ。

初め、スタッフから話を聞かれたとき、凍呼は比較的余裕の表情を浮かべていた。確かに、襖が破れて血のような水が溢れ出すというのは恐ろしいものがあるが、仕掛けがわかつていれば、別にそこまで怖くはない。どうせ、今回も下らない やらせ のだから、適当に怖がつておけば番組的にも盛り上がるだろう。

もつとも、凍呼のそんな甘い気持ちは、問題の家に入つた途端に消え失せた。

薄暗い、電気さえ通つていらない古びた廃屋。もう、何年も人の手が入つていないので、至るところに埃が積もつていて。木製の床は凍呼が歩く度にぎしぎしと嫌な音を立て、染みや割れ目の目立つ土壁からは、カビと埃の入り混じつたような臭いが漂つてくる。

いつの間にか、凍呼はこれが やらせ であることも忘れ、家の空気に入り込んでいた。もしかすると、打ち合わせにはなかつた場所にも仕掛けがあり、いきなり驚かされるのではないか。そんな考えも頭に浮かび、余計に身体が強張つてしまつ。

古びた床板を踏みしめながら、凍呼はスタッフと一緒に屋敷の奥へと入つて行つた。事前に見取り図は見せてもらつていたが、いざ入つてみると、その奇妙な作りを改めて実感した。

今回の撮影で使われることとなつた廃屋は、単に古いだけの屋敷ではない。一階は普通の作りなのだが、問題は一階だ。

通常、一階に上がる階段といつものは一つだけで、それを上がれば一階の廊下から各部屋へと行くことができるようになつてゐるといひが、この廃屋に関しては、そういう常識が通用しない。

一階へ続く階段は、玄関前のものと屋敷の奥にあるものの二つ。それぞれが独立した作りになつており、奥の階段からは二階の北側、手前の階段からは一階の南側に上がることができる。そして、二階は北側と南側で完全に分断されており、上がってからもそれを行き来する手立てはない。

要するに、家の一階が完全に二つに分かれており、それを行き来するためには、どうしても一階に降りねばならない作りになつているのだ。こんな不自然かつ不便極まりない作りをした家など、凍呼は今までに見たことも聞いたこともなかつた。

今回、凍呼たちが撮影で使つたのは、そんな奇妙な家の最深部だつた。屋敷の奥にある階段を昇つた北側の部屋。その襖にあらかじ

め仕掛けがしてあり、ADの一人が仕掛けを発動させるといつ手順になっていた。

（それにしても……）

撮影の終わった廃屋に降り返り、凍呼は改めて考えた。

屋敷の北側。今日の撮影で使われた、廃屋の最深部。あそこには近づけば近づくほど、周りの空気が湿つてカビ臭いものになつたのは何故だろう。

家が古いと言わればそれまでだが、それにしても酷い湿気だつた。玄関先とは異なり、床はあちこちが腐つて黒ずんでいた。それは壁も同様で、北側に入った瞬間、朽ち果てた土壁一面に黒カビが生えていたのを見たのは記憶に新しい。その、あまりに酷いカビと埃の臭いに、スタッフが一時的にマスクを貸してくれたほどだ。

本当は、この屋敷には何かあるのではないか。ディレクターも、他のスタッフも心配ないとは言つていたが、それでもここは、地元では有名なお化け屋敷なのだ。スタッフの仕込んだ やらせ 以外には何もなかつたが、もしかすると気がついていないだけで、撮影した映像には何かが映り込んでいるかもしれない。

自分の頭に恐ろしい考えが浮かんだことで、凍呼はすぐさま頭を横に振つてそれを打ち消した。

廃墟探検などをやつているのは、これが自分の仕事だからだ。本当は怖い話など好きではないし、もつと明るく華のある舞台にも立つてみたい。ただ、今の自分には、それを成すための実力が伴つてないというだけで。

これはあくまで、自分にとつて過程に過ぎない。そう、割り切らねばやつてこられないと思い、凍呼はそれ以上、今日の撮影について悪く考えるのを止めた。

撮影を終え、凍呼はスタッフに軽い挨拶を終えた後、早々と自分の住んでいるマンションへと帰宅した。疲れていたということもあつたが、何よりも、あんな薄気味悪い家の建っている場所になど、あまり長くいたくはないというのが本音だった。

いつもより念入りにシャワーを浴び、凍呼は全身を擦るようにして何度も洗った。髪の毛に廃屋の埃やカビがついていると思うと、なんだかそれだけで気持ちが悪くなつてくる。あの手の口ケはせらせとわかつていても、どうしても身体が拒絶反応を示してしまう。

いったい、自分はなぜ、いつまでして仕事を続けていくのだろう。時折、ふつとそんな考えが頭をよぎる。

秋葉原で、売れない「スローライドル」として、水面下で活動をすること数年。よつやく田の畠を浴びたと想つたら、よつともよつとオカルト番組のレギュラーだった。

怖い話は、生まれつき苦手だ。本当は、あんな仕事などしたくはない。廃墟の探検や心霊スポットの探検など、できれば少しでも減らしてもらいたい。

そう、頭では思つていても、しかし凍呼は自分に言われた仕事を断ることなどできなかつた。事務所に迷惑がかかるというのもそつたが、なにより凍呼自身、下手に我慢を言って仕事を干されてしまうのが怖かつた。

「」の業界で成功するには、多少のことは我慢しなければやつていられない。今は売れていても、流行というものは変わり易い。それに、今の事務所にだつて、自分の代わりなどいくらでもいる。どんな仕事でもこなせねば、役立たずの烙印を押されて直ぐに捨てられてしまうだらう。

一度、芸能界に身を置いた者は、なかなか普通の生活を送れない。中には過去の栄光を忘れられず、どうしても業界から離れられない者も存在する。果ては、そのまま業界の闇の部分へと墮ちてゆき、アダルトビデオの類に出演して食いつなぐような人間もいると聞いたことがある。

自分の裸を売り物にするくらいなら、怪奇番組で心霊スポットに送り込まれている方がマシだ。自分はまだ、なんとか我慢できる範囲での仕事しかしていない。そんなことを自分自身に言い聞かせながら、凍呼はシャワーの栓を閉めてバスルームを出た。

「うひ、寒ひ！ ちゃんと、湯船につかつた方がよかつたかな…」
…

バスルームから出ると、思つたより冷たい空気が肌に触れて驚いた。もう季節は春だといつのに、今日は妙に冷え込む日だ。雨が降つていいわけでもないのに、いつたいこの気候の変化はなんだろう。昼間、撮影のときでさえ、あの家の中に入るまではそれなりに温か

かつたといつひ。

なんだか言ひようもない不安にかられ、凍呼は足早に布団の中に入潜りこんだ。こんな日は、さつさと寝て嫌なことを忘れるに限る。明日になれば、またいつもと変わらぬ日常が始まり、お化け屋敷の話などは記憶の彼方に押し込めてゆくことができる。そう、信じて。

一度、布団に入ってしまうと、思つたより眠りに着くのは早かつた。久しぶりの口ケで、疲れていたのもあつたのだろうか。凍呼は直ぐに軽い寝息を立てて眠り始め、後には傍らに置かれた目覚まし時計の針だけが、無常に時を刻み続けている。

一時間、一時間、そして三時間。どれほどの時間が過ぎた頃、どうか。

凍呼が目を覚ましたとき、辺りはまだ薄暗かつた。夜明けとも夜中ともつかない微妙な時間。東の空が白み始めるには、まだ少しだけ余裕がある。

なんとも変な時間に目が覚めてしまったものだ。そう思つて両腕を動かそうとしたとき、凍呼は自分の身体に妙な違和感を覚えて顔をしかめた。

手が、動かない。いや、手だけでなく、足も身体も、その全身が何かに押さえつけられたようにしてまったく動かない。

(これ……金縛り！？)

噂には聞いたことがあったが、自分が金縛りに遭うのは初めてだつた。まさか、あの幽霊屋敷を探索したことで、何か変なものでも

連れ帰つてしまつたのだろうか。嫌な想像が頭に浮かび、凍呼はなんとかして指先を動かそうと力を込める。

金縛りは、医学的にも解明されている、「じくありふれた現象の一つに過ぎない。頭は起きていても、身体が疲れて眠つてはいる。そのアンバランスな状態が、一見して心靈現象のようなものを引き起こす。」

何かの本で読んだ一節を思い出しながら、凍呼はなんとか手を動かし、声を出そうと頑張つた。もつとも、頭では理解していくても、身体は言つことを効かない。まだ、心靈現象と決まつたわけでもないのに、自然と焦りから額に汗が滲んでくる。

「」のまま自分は、身体の動かせない恐怖に耐えながら、朝が来るまで固まつていなければならぬのか。そんなことを考えた矢先、今度は凍呼の全身を、何かが絞めつけるような痛みが襲つた。

「……つ！？」

声に出して叫ぼうにも、それは声にならなかつた。いきなり胸元が苦しくなり、全身を押さえつける力が強まつた。

「あつ……ぐあつ……かつ……」

全身を震わせながら、凍呼は両目を大きく開いたまま自分の胸元を見る。そこには何もなく、何か重たい物がのしかかつていてるといふわけではない。だが、その間にも、凍呼の身体はさうに強く絞めつけられ、呼吸をすることさえままならなくなつてくる。

（な……なに……「れ……」）

薄れゆく意識の中で、凍呼は自分の身体の上を何かが這い回るような感覚を覚え、この金縛りの正体をつっすらと理解した。

パジャマと肌の間、自分の服と身体の隙間を、何がが這うようにして動き回っている。それは不快なぬめりを持ちつつも、妙にざらざらとしたやすり鱗のような感触を併せ持つていて。両手、両脚、それに腹から胸にかけてまで、その奇妙な力は容赦なく凍呼を絞めつける。

痛い。苦しい。気持ち悪い。得体の知れないものに全身を絞めつけられる恐怖から、凍呼はいつしか声も出さずに泣いていた。大きく見開かれた瞳はそのままに、大粒の涙が休むことなく溢れ出した。身体の自由を奪われたまま、凍呼の口がぽっかりと開く。本人の意思とは無関係に、顎の力が抜けてゆく。

「うぐうつー！」

一瞬、身体の絞めつけが収まつたかと思うと、今度は口の中に異様な感触を覚えて呻いた。生臭く、なにやら細長いものが、凍呼の口から身体の中に入つてくる。目には見えないが、何か力のようなものが、ずるずると凍呼の中に入り込んで体内を侵食してゆく。

涙と鼻水と、それから涎を垂らしたまま、凍呼は見えない力に成す術もなく翻弄されていた。身体の中に妙な力が入り込んでくる度に、全身が小刻みに痙攣して悲鳴を上げた。

やがて、どれほどそうしていただろうか。

気がつくと、辺りは既に明るくなっていた。東の方から白い光が

射し込んで、凍呼は自分がよつやく金縛りから解放されたことを知つた。

「はあ……。助かった……の……？」

自分でも不思議なくらい、はつきりと声が出た。試しに両手に力を入れてみると、なんなく拳を握り締めることができた。

いつたい、昨晩のあれは何だったのか。納得のいかない表情のまま、凍呼はゆっくりと起き上がる。

全身に残る、あの絞めつけるような不快な感覚。あれが気のせいだつたとは、残念ながら思えない。夢にしては妙にリアルで、しかし現実にしてはあまりにも不可解。その、どちらとも言えぬ不気味さが、凍呼の恐怖心を否応なしにかき立てる。

「うう……」

突然、妙な吐き気を覚え、凍呼は思わず自分の口に手を当てた。腹の奥から何かが這い上がりてくるような感覚に加え、喉にも何かが詰まっている。金縛りのときは別に、あまりの気持ち悪さに声を出すことができない。

洗面所まで走る余裕など、凍呼にはなかつた。情けなくも、布団の上に胃の内容物を全て吐き出し、凍呼は肩で息をしながら自分の口から吐き出された物へと手をやつた。

前触れもなく、いきなり吐き戻してしまつとは、何か変な病氣にでもなつてしまつたのか。そう思つて布団の上に撒き散らされた吐瀉物を見たとき、凍呼の瞳が再び恐怖に凍りついた。

「ひいっ！…」

軽い悲鳴を上げ、布団を跳ねのけて後ろに下がる凍呼。自分が吐き戻した物の中にあつたのは、乳白色をした薄い皮のようなものだつた。

これはいったい何だ。なぜ、自分の身体の中から、こんな物が出てくるのだ。

吐瀉物の中に埋もれるようにして顔を覗かせている、一繋ぎになつた奇妙な皮。気持ちが悪いとは思つたが、凍呼はそれを恐る恐る摘まみ上げた。

皮が、まるで今もなお生きているかのよう、ふるふると震えて揺れた。そして、その皮をよくよく眺めたとき、凍呼は再び悲鳴を上げて、今度こそ部屋を飛び出した。

鱗のような表面をした、乳白色の薄い皮。それを見たとき、凍呼は理解してしまつたのだ。自分の身体の中から出て来たものが、他でもない蛇の抜け殻であることを。

昨晩、田に見えない力が体内に入り込んできた際のことを思い出し、凍呼は慌てて洗面所へと直行した。汚れたパジャマを着替えたかつたというのもあるが、それ以上に、口の中をゆすがないと気持ちが悪くて仕方がなかつた。

酸っぱい臭いの残るパジャマを脱ぎ棄てて、凍呼は洗面台の鏡に映る自分の姿と鉢合せた。なんのことはない、見慣れたいつもの自分の裸身。そつとばかり思つていた凍呼は、次の瞬間、マンショソ

中に聞こえたまでの悲鳴をあげて、その場にしゃがみ込んでしまつた。

「い、いやああああっ！－！」

絶叫が、早朝の浴室に響き渡る。鏡に映つた凍呼の身体には、蛇に絞められたような鱗の痕が、あちこちに青黒い痣となつて残つていた。

凍呼がスタジオに姿を見せたとき、時刻は昼も少し過ぎた頃になつていた。

今朝、布団の上で成す術もなく吐き戻し、その中にあつた物を見て悲鳴を上げたこと。その上、自分の身体に残つた痣を見て、さらには絶叫してしまつたこと。

およそ、馬鹿馬鹿しいことだとは思つたが、ここまで酷いと凍呼も信じざるを得なかつた。この世には自分の頭では理解不能なことがあり、お化けや幽霊といった類の者は、確かに存在するのだということを。そして、それらの存在に不用意に関われば、自分の寿命を縮めかねないといふことを。

こんな酷い目にまで遭つてしまつては、さすがに心靈番組のレギュラーなど務められそうにない。事務所には叱られるかもしけないが、しばらく休暇をもらつというのも手だらうか。仕事がなくなるのは怖かつたが、こんな状態では満足に今まで通りの仕事さえこな

せやうにない。

なんとも言えぬ不安を抱えながら、凍呼は会議室の扉を開けた。今日は、ここでスタッフと一緒に番組の打ち合わせをすることになっている。新春特番として生放送で流される、奇跡空間ミラクルゾーンの演出をどうするか。細かい部分の調整含め、再確認することになっていた。

本当は、そんなことをしている余裕はない。暗い面持ちのまま、凍呼は力なく会議室の中へと足を踏み入れた。

「お、おはよひびきだいします……」

返事はない。ディレクターもカメラマンも、誰もが床を下に落として俯いている。中には明らかに睡眠不足に陥っている者もあり、床の下に大きな隙を作っていた。

いつたい、これはどうしたことか。昨日の夜から今朝にかけて、妙な現象に巻き込まれた者。それは凍呼だけではなく、他の人間も同じということだろうか。

疑問が次から次へと湧いて来る。このまま自分は、妙な世界に取り込まれ、最悪の場合はとんでもない死に方をするのではないだろうか。それこそ、ホラー映画の一幕のように、誰もが顔を背けるような結末で。

「あの……。監さん、どうされたんですか？」

用意されたパイプ椅子に腰かけながら、凍呼は恐る恐る訊いてみた。だが、それに答える者はなく、ディレクターの室井が代わりに

田で合図するだけだった。

室井の向けた視線の先。部屋の中央に用意された椅子に、何やらホストのような格好をした男が座っている。両腕を胸の前で組み、傍らにアロハシャツを着たヤクザのような男を侍らせて、実に自信に満ち溢れた表情で笑っている。

「さて、と……。どうやら、これで役者は全部揃つたってところかな？」

凍呼の田の前に座つていた男が、唐突に口を開いた。彼の名前は、凍呼もよく知っている。この番組で心霊関係の話をする毎に呼ばれている、現代を生きる陰陽師。御鶴木魁、その人だ。

「今日、ここに集まつてもらつたのは、他でもない。俺がそここのティレクター、室井さんから依頼を受けてね。ちょっと、この間の撮影で関わった、幽霊屋敷について調べてみたんだよ」

誰も尋ねていいないのに、魁は自分から喋り出した。この場の主役は自分だ。そんな主張に溢れた、やけに上から田線の口調だった。

「結論から言つと……とりあえず、ここにいる全員が、西岡さんを除いて取り憑かれているね。あんた達、あの家で撮影するとき、何か細工を仕込んだでしょ。そのせいで、家に溜まつてた色々な霊が怒つて……それで、現場にいた全員に取り憑いたんだ」

「取り憑かれたって……。まさか、本当に幽霊なんてもんがいるって言いたいのか？」

真っ先に異論を唱えたのは、他でもない室井だ。オカルト番組の

ディレクターでありながら、彼はそういう類の話を基本的に信じていらない。

今回、魁を呼んだのも、他のスタッフからの強い要望あってのことだった。なんでも、あの幽霊屋敷の撮影の後、音響を担当していたスタッフが奇妙な体験をしたとか。まあ、靈の存在を単なる金儲けの材料としてしか見ていない室井からすれば、そんな話は単に荒唐無稽な与太話に過ぎなかつたが。

「おいおい。幽霊番組なんか作ってるのに、お宅は幽霊の存在を信じてないってわけ？ だったら、俺の力も信じてないってことになるけど……そういう認識で、構わない？」

「いや、それとこれとは話が別だ。我々だって、そっちの力というやつは、信用しているつもりだ」

「随分と都合のいい解釈だよね、それ。まあ、俺としては、別にあんた達に信じてもらおうとも思ってないといと、大したことじやないんだけどさ」

あくまで軽く流すようにして、魁は片手をひらひらとさせながら言った。こういった反応を示されることは慣れている。そう言わんばかりの態度である。なんというか、若い割には随分とふてぶつい。

「とりあえず、そここの音響スタッフの人。確か、古澤さんだっけ？ あんたには、女の靈が取り憑いているね。昨日の夜、何か妙なことがなかつたかい？ それこそ、変な女が枕元に立つたとか、女のすすり泣きが聞こえたとか……」

「ちよつ……な、なんでわかるんですか！？」

「どうやら、図星だつたみたいだね。女の正体は不明だけど、君の後ろに、なんとななくそういうた者の影が見えたんだよ。これ以上は、もつと詳しく調べてみないとわからないけど」

「ま、マジかよ……。昨日のあれ、本当に夢じゃなかつたんだ……」

馬鹿みたいに口を大きく開けたまま、古澤正昭ふるさわまさあきはそれ以上何も言えなかつた。

昨日、あれから仕事を終えた後、どうにも寝苦しくて夜中に目が覚めた。すると、何やら自分の足下に、白い足がぶら下がっているのがわかつた。恐る恐る顔を上げて天井を見ると、そこから前髪で顔の正面を隠した不気味な女が吊り下がつていたのである。

当然、古澤は魁に、このことを直接話していない。それにも関わらず女の存在を言い当てるとは、やはり魁の力は本物だということか。

「次は、カメラマンの加瀬さんだね。あんた、問題の屋敷の映像を撮つた張本人だろ？ 直接誰かが撮り憑いているつてわけじゃないけど、ファインダー越しに、随分とたくさんの幽霊を見たね。中には凶悪なやつもいたみたいだから、そいつの放つていた負の波動を直に受けちゃってる。昨日は身体がだるい程度で済んだかもしれないけど、このまま編集まで関わつていたら、いつかは命が無くなつていたかもね」

古澤の隣に座っているカメラマン、加瀬順平かせじゅんぺいへと目を向けて、魁が物騒なことを平氣で言つてのけた。加瀬もまた魁の靈視に驚いて

「おひおい、なにやら肩を回しながら、上に乗つてゐる埃を払つようにして口を開いた。

「おひおい、俺もかよ……。まあ、でも……確かに、あの屋敷に入つてから変だとは思つてたよ。なんだか昨日は身体が重たかつたし、それは今日も変わらないし……」

「でしょ？ やつぱ、俺に靈視させといて正解だよ。それに、何も映像から影響を受けているのは加瀬さんだけじゃない。プロデューサーの西岡さんだけ？ あんた、加瀬さんが撮つた映像を、確認か何かのために回して見たでしょ。靈害封じもしてない心靈映像なんて見たら……それこそ、あんたの方が先にくたばりかねないよ」

「何を馬鹿な。だいたい、あんな映像一つで、どうして俺がくたばるなんて断言できる！？」

突然、自分の名前を出されたことで、西岡が驚きのあまりに目を丸くして言つた。自分は屋敷に向かつていない。だから、何かが起きることもない。そう、高をくくつていたからだ。

「それは簡単だね。人間にも、靈の攻撃に強いやつと弱いやつがいてさ。バイキンに対する抵抗力みたいなもんか？ 俺みたいに修業を積んだ人間なら別だけど……。西岡さん、あんた、靈に対する耐性が特にないみたいだからさ。一応、死なれる前に警告しておいたつてわけ」

「なんだか、随分と物騒な話だな。だが、そもそも、あれのどこが心靈映像なんだ？ こつちでも見てはみたが、これといって、幽靈の映つている場面なんて……」

「まあ、素人さんが見ても、ちょっとやそつとじや幽霊なんて見つからないよ。俺みたいに、ちゃんとした力を持った人間が靈視すれば、あの家に色々な靈がつよつよと漂っているのが見れたけどさ」

飄々とした口調で、魁は肩をすくめて言い放つ。なんだか小馬鹿にされているようで腹が立つたが、西岡はそれをあえて口に出さずには堪えた。

オカルト番組のプロデューサーではあるが、西岡もまた、幽霊だの超能力だのといった話は信じていない。魁を起用しているのも、あくまで視聴率が取れるためだ。そんなお飾りの若造に好き勝手言われるのは好かないが、ここで怒れば自分の尊厳が揺らぐことになる。それだけは、いくら西岡とて避けたかった。

「さて……残るはADの畠本くんと、ディレクターの室井さん。それに、トーロちゃんの方だね。畠本くんは、まあいいとして……室井さんとトーロちゃんの方は、ちょっと問題かな」

「も、問題つて……。私、そんなに悪いんですかあー？」

「正直に伝えると、かなりマズイね。他の連中には気まぐれで靈が憑いているような部分もあるけど、君に憑いているのは別格だ。憑依っていうよりは……むしろ、祟りに近い物が起きてる可能性があるな」

「祟り……」

昨日の夜から今朝にかけての出来事が、走馬灯のように凍呼の頭の中を駆け抜けた。呪いや憑依ではなく、祟り。その違いなど凍呼にはわからないが、確かに思い当たる節はある。今朝、ベッドの上

で吐き戻した物の中身と、全身につけられた青い痣。あれらを祟りと言わすして、なんと言えぱいいのだろう。

先ほどから、魁の探るような視線が凍呼に向けられている。今まで見せていた、どこか人を食つたような感じは既にない。テレビに映つているときでさえ滅多に見せない、本気の意思が伝わつてくるような眼差しだ。

「この中で、一番酷い靈傷を負つてているのは間違いなくトーハウayanだ。なんだか知らないけど、一夜にして魂まで酷く損傷しているね。靈的な強い力で魂を絞め上げられて、更には内部からもボロボロにされたつてところかな。こんな酷いやられ方をして、よくもまあ無事だつたと思うよ、俺も」

最後の方は、感心しているとも呆れているとも取れる言い方だつた。魁の話が本当ならば、昨日、自分は金縛りに遭つたまま、あの世へ連れ去られていたとしてもおかしくはないのだ。そう思つと、凍呼の背筋を冷たいものが一気に走り、彼女は思わず両腕で胸元を隠すよつにして抱き締めた。

「その様子じや、昨日の晩は随分と怖い思いをしたんじやない？まあ、言いたくないなら別にいいけど……このまま放つておいていいわけじやないのは確かだね」

「そんな……。私……私、まだ死にたくありません……」

魁の口から告げられた、絶望的な一言。昨日の件が現実だつたといつだけではなく、このままでは遠からず自分は死ぬ可能性もある。あの、奇妙な力に屈服し、身も心もボロボロにされて朽ち果ててしまうのか。そんな終わり方など、絶対に嫌だ。

自分は今まで、なんのために仕事をしてきたのだろう。辛いことも多かったが、それでもこの業界で、陽の日を見ることを夢見て我慢してきたのではないだろうか。大嫌いな心霊番組のレギュラーを務めていたのも、全てはその日のための下準備。そつ、割り切つていたと言つのに、これではあまりに救いがない。

こんなところで死にたくない。一度、そう思い始めると、涙が溢れて止まらなかつた。何かを言葉にしたかつたが、それさえも適わない。湧き上がつてくる色々な感情を一度に処理できず、凍呼は本能のままにひたすら泣いた。

「あのう……」

凍呼の横で、先程から小さくなつていたやせ気味の男が手を上げた。

「なんだい？ えつと……君は確か、ADの宮森君だつたっけ？」

「は、はい。それで……他の人の話はわかりましたけど、俺にはいつた何が憑いてるんですか？ まさか、凍呼ちゃんと同じくら、危険なものとか……」

「あつ、それは心配要らないかな。君に憑いているの、あの家に巢食つてた古狸の靈だから。悪戯好きなだけで、特に害はないけど……ついででいいなら、まとめてお祓いしてやるよ」

「ついでついで……勘弁してくれよ、御鶴木先生……」

沈痛な面持ちのスタッフや泣いている凍呼を横目に、ADの宮森みやもり

りょうた

良太が情けない声を上げた。しかし、そんな彼の叫びに耳を傾けてくれるような者は、当然のことながら、この部屋の中にはいなかつた。

御鶴木魁が問題の屋敷を訪れたとき、既に時刻は入相の鐘が鳴りだそうとしている頃合だった。

逢魔ヶ刻。昼とも夜ともつかない中途半端な時間は、古来より魔と出会い易い時間だと言われている。普段であれば、こんな時刻に幽靈屋敷へ出向くなどは自殺行為なのだが、今回ばかりは話が違う。

連中の動きが活発になる時間は、一日の間でも、そつたくさんあるわけではない。この機を逃せば、後は夜中の丑二三つ時まで機会を窺つて待たねばならない。凍呼の身体に残つた靈傷のことまで考えると、いつまでも悠長なことを言つている場合ではなかつた。

「あれ、室井さん。そつちの方が、早かつたみたいだね」

車から降りた魁が、問題の家の前に佇む室井を見て言つた。対する室井は、こちちはまた随分と不機嫌そうな顔をして、車から降りたばかりの魁のことを睨み返した。

「おい、陰陽師。約束の時間より十分ほど遅いぞ。こんな薄気味悪い家の前で、いつまでも人を待たせるな」

「あれ、室井さん。俺と違つて、そつちは幽靈なんて信じていない

んじゃなかつたの？

「やかましい。それよりも、お前……あの会議室で、俺だけ靈視をしなかつたよな。あれはいつたい、どうこう理由からなんだ？」

「おやおや。心靈現象否定派のくせに、自分に関係することは、随分と気になるみたいだねえ。まあ、俺としては、そういう人間臭い部分も嫌いじゃないけどさ」

「御託はいい。会議室で俺の靈視をしなかつた理由。とりあえずは、それを教えてもらおうか？」

落ちつきなく、妙にそわそわした様子で、室井は魁に用件だけを告げた。もつとも、魁はそんな室井のことを半ば無視し、傍らにいた総司郎を連れて家中へと入つてゆく。

「おい、何処へ行く！　話はまだ、終わっちゃいないんだぞ！…？」

室井の言葉など、魁には聞こえていないようだった。俺は、俺のやり方でやらせてもらう。その言葉を背中で語りながら、魁は躊躇うことなく廃屋の扉を開け放つ。

外の空気が入ると同時に、入れ違いで中にこもった空気が溢れて来た。暗く湿気でカビ臭い、嗅いだ瞬間、誰もが陰鬱な気分になりそうな不快な匂いだ。

魁の斜め後ろに立っていた総司郎が、一瞬だけ肩を震わせて歩みを止めた。この屋敷の中から溢れ出て来る、恐ろしいまでの陰鬱な氣。それに躊躇いを覚えたのだろうか。

「どうしたの、総ちゃん？ もしかして、柄にもなくびびつちやつてる？」

「いえ、そんなことは……。ただ、あまりに酷い臭いだったので、ちょっと……」

「なるほど。まあ、感覚で言つたら、総ちゃんのそれは俺よりも敏感だからね。あまり緊張し過ぎると、返つて毒氣にやられちゃうかもしぬないよ。その辺、ちゃんとコントロールしてよね」

「はい、先生」

その身に違わぬ無骨な声で、アロハシャツ姿の総司郎が答えていた。その様子を後ろから窺つていた室井は、今一つ話がつかめない様子で一人の姿を見比べている。

そもそも、この番組にティレクターとして携わり、あの陰陽師を呼んだときから妙に思つていた。

『』副总司郎。魁の話では単なる弟子だということだつたが、それにしては奇妙な男だ。どう見てもボディガードにしか見えない身体つきに、ヤクザを思わせる型破りな格好。その瞳を隠すようにして身に付けているサングラスは、片時も外されることがない。まるで、田元を見られては困るかのように、常に総司郎の身体の一部としてそこにある。

ホストのような外見の陰陽師に、これまたヤクザのような格好の弟子。なんとも珍奇な取り合せだが、視聴率が取れるなら構わないと思っていた。少なくとも、今日になつてスタッフの誰もが奇妙な体験をしたと転がり込んで来るまでは。

果たして、この男の力は本当に当てになるのだろうか。会議室では随分と饒舌に靈視をしていたが、あれだって、当てずっぽうに言っていただけの可能性もある。自分も含め、関係者の誰もが靈に憑かれているなどとは、未だ信じられない部分がある。

魁と、それから総司郎に続く形で、室井も家の中へと足を踏み入れた。瞬間、その中の空氣があまりに外とは違うので、室井は思わずそのまま家から飛び出しそうになつた。

（なんだ、こりやあ……。前に来たときは、こんなに薄氣味悪い家じゃなかつたぞ……）

お化け屋敷として地元では有名な家だつたが、番組の仕込みをしに来たときでさえ、ここまで酷いカビと埃の臭いはしなかつた。しかし、今はまるで、家全体が侵入者の存在を拒むようにして不気味な胎動を続けているような錯覚さえ抱きそうになる。それこそ、魁や総司郎の存在を、この家が全力で排除しようとしている。そう言つても差し支えないくらい、妙に張り詰めた空氣まで漂つていた。

古びた廊下を抜け、まずは魁が一階の玄関先にある部屋へと入る。ボロボロに痛んだ畳のある、昭和の初め頃の家にありそうな食卓だつた。もっとも、無人となつた今となつては、卓袱台の類は見当たらないが。

「さて……。まずは、ここで一仕事つてとこうかな？ 室井さんは、俺の肩につかまつてくれ。何が起きてるのか見えないと、信じてもらえそつてないからね」

「お前の肩に？ それで、俺にも幽靈が見えるのか？」

「ほんの少し、俺が見ている映像を、頭の中にわけてあげられるつてだけだけどね。ま、難しいこと考えず、今は言われたとおりにしてくれないかな？」

こんな気味の悪い家の中でも、魁は普段の調子を崩すようなことがない。テレビ局のスタジオも、幽霊の出る廃屋も、この男にひとつはさしたる違いはないということか。

男にしてはやけに細い左腕を前に差し出して、魁が静かに目を瞑り、意識を集中し始めた。瞬間、部屋の中の空気が今まで以上に張り詰めて、その緊張感が魁の肩を通じて室井にも伝わってくる。

畳の臭い、カビの臭い、それに辺りを漂う空気そのものの臭い。様々なものが入り混じった臭気が一段と強くなり、なにやら風の音まで聞こえてきた。

ぎい、ぎい、という、木の軋むような音が室井の耳に響いてくる。どこか、立てつけの悪い扉でもあつたのだろうか。それに隙間風が触れて、軋む様な音を立てているのか。

いや、違う。音は廊下からではなく、この部屋の中央から聞こえてくる。しかし、ガラス張りの窓しかないこの部屋に、そんな音を立てるようなものがあつただろうか。

いつの間にか、室井は視線を自分の足下に落としていた。なぜ、そうしたのかは、自分でもわからない。ただ、本能的な何かが告げるまに、室井は部屋の中央にあるものを見ないように、自分の首を下に傾けていた。

魁の呼吸が激しくなり、音がさらに強くなる。間違いない。この音は部屋の真ん中、自分たちにとって田と鼻の先から聞こえてくるものだ。

もう、我慢することができなかつた。室井は何かを決意したようにして首を上げ、部屋の中央にいるであらう何者かに顔を向けた。音の発生源である、何やら正体のわからぬもの。それが何なのかを、この田で確かめるために。

「う、うわっ……」

軽い悲鳴と共に、室井が魁の肩を握る力を思わず強めた。彼の目の前にあつたもの。それは、かつて人間の女であつたであらう、一つの物体。天井から下がつた繩に首をかけ、そのまま吊り下げられている遺体だつた。

青白い顔と剥き出しの田。口からはだらしなく涎を垂らし、ふらふらと左右に揺れている。風などないのに、いや、それ以前に、今までこんな遺体などなかつたのに、これはいつたいどういうことだ。

「どうやら、あんたにも見えたみたいだね。そう。あれば、音響の古澤さんに憑いていた幽霊の正体だ」

「しょ、正体？ それじゃあ……この、首吊り女は……」

「もう、気づいているんでしょ？ こいつ、この家に昔住んでた女の自縛靈。何が原因で自殺したのか知らないけど、古澤さんのが気に入ったみたいだね。だから、家まで一緒に着いて来ちゃつたつてところかな？」

「じ、血縛靈？ でも、血縛靈つてやつは、その土地に縛られて動けない靈つてやつじやなかつたのか？」

「なんだ、詳しいんじやない。結局あんた、靈の存在を信じてるの？ それとも、信じてないの？」

青白い顔をした女の靈が、田の前で縄に吊るされて揺れている。そんな光景を目にして、魁は身じろぎ一つしないで室井に問う。まるで、眼前の靈のことはどうでもよく、むしろ室井の考え方の方が、気になると言わんばかりの口ぶりで。

「わ、わかった！ 僕が悪かった！だから……頼むから、この変な女を早くどこかへやつてくれ！ こんな奴に取り憑かれてスタッフが死んだりしたら、僕は責任問題だ！！」

「はいはい、最後まで自分のことが可愛いくてやつね。まあ、言われなくても、こいつは僕が祓つてやるつもりだつたけどせ」

ほとんど呆れたよつとして、魁は室井の言葉を軽く流した。別にお前のためにやつてやるわけじゃない。ただ、仕事だからやるだけだ。そんな想いが、魁の表情からも見て取れる。

首吊り女の靈を前に、魁は改めて対峙するような姿勢を取つた。もつ、これ以上は靈を遊ばせておいても仕方がない。仕事は仕事として、せつせと片付けてしまわないと割に合わない。

「わい……。それじゃあ、まずは軽く、前哨戦と行きますか？」

口元に不敵な笑みを浮かべ、魁は自分の胸元から一羽の折り鶴を

取り出した。その辺の店で売られている安物の折り紙で折ったようなものではなく、いかにも高級そうな和紙を使った、かなり本格的なものだ。サイズは手のひらに乗るほどだが、随分としつかり折り込まれている。

折り鶴の羽を広げ、魁はそれを自分の掌の上に乗せると、そのままふっと息を吹きかけた。放たれた吐息は鶴を宙へと舞い上がらせ、一直線に亡靈へと向かつてばたかせる。単に吹き飛ばしたのとは違う、やけに生々しい動きだ。

鶴の羽が、鋭利な刃物のようにして、亡靈を弾るしていた繩を切った。実態などないはずなのに、ドサッといつ何かが落ちたような音がした。

「おいおい……。どうなってるんだ、こいつは……？」

唐突に始まった、魁の幽靈退治パフォーマンス。その、あまりに予想外な展開に、室井は頭の中が混乱していた。

普通、幽靈退治といえば、お札や数珠などを使うのではないだろうか。しかし、田の前にいる陰陽師の末裔を名乗ったこの男は、折り鶴だけで幽靈の首を吊つっていた繩を切つてしまつた。あの折り鶴に何か仕掛けがあるのかもしれないが、それにしても、これは前代未聞の話だ。室井も今までに様々なオカルト話を番組で取り上げて来たが、折り紙で幽靈を退治するなどという話は聞いたこともない。

天井から落下した亡靈が、忌々しそうな顔をして魁を睨んだ。首から繩を外してやつたといふのに、その表情は憤怒の色に支配されている。

余計なことをするな。そう言わんばかりだったが、それでも魁は何う躊躇う様子を見せなかつた。

畳の上を這い回る亡靈に、続けて魁はポケットから取り出した小瓶の中身を振りかけた。それは一見してただの水のようだが、直ぐにそれが水などではないといつことが、後ろから見ている室井にもわかつた。

ひいいいいっー！

隙間風が吹き抜けのような悲鳴を上げて、亡靈の姿が瞬く間に消えて行く。全身から白い煙を吐き出しているその姿は、まるで劇薬をかけられて溶かされていくよつとも見える。

「な、なにをしたんだ、お前……」

状況がわからず、魁に尋ねる室井。対する魁も、小瓶をしまいながら室井に答える。

「ああ、これね。こいつは俺が作った、神水って呼ばれる特別な水なんだよ。キリスト教で言つ、聖水に近いやつって言つた方が、あんたにはわかりやすいかな？ 靈的な力を持つたものに対しても効果を發揮する、硫酸みたいなもんだね」

「聖水だと？ それじゃあ、この幽靈は……」

「当然、このまま放つておけば溶けて消えてしまうよ。成仏させてやつてもよかつたんだけど、それは俺の仕事じゃなくて、寺の坊さ

んの仕事だから。俺が頼まれたのは、あくまであんた達の除霊のみ。そのやり方までは口出しされたくないし、この家に住んでいる亡靈どもを、残らず成仏させいやる義理もない」

足下で溶けてゆく女の靈を見ながら、魁は実に満足そうな笑みを浮かべた顔を室井の方へと向けた。その笑顔に何やら危険なものを感じ、室井は慌てて魁の瞳から目を逸らした。

なんということだ。田の前の男は、敵を倒すことに対しても容赦がない。そればかりか、話を聞いて成仏させようとか、墓や祠を作つて供養してやろうという気持ちさえない。敵はただ、排除するのみ。淡淡と仕事をこなし、それらの厄介事を捌いている自分に、半ば酔いしれているような節さえある。

まつたくもつて、恐ろしいものを使つていたと室井は思った。こんな人間を、少々イケメンだからという理由で番組に起用していた、自分の判断が何よりも恐ろしい。自分も視聴率のためなら何でもやる人間だが、魁は恐らくそれ以上だ。

やがて、足下の幽靈が完全に溶けてしまつと、魁は何事もなかつたかのようにして部屋を立ち去つた。もう、この部屋には興味がない。そう、彼の背中が語つていた。

「おい、陰陽師。次はどこへ行くんだよ！？」

何の躊躇いもなくスタスタと歩いてゆく魁を、室井が慌てて追いかける。魁が次に向かつたのは、二階にある比較的大きな部屋だつた。あの、撮影の際にやらせの仕込みがされていた、破れた襖のある部屋だ。襖の向こうに仕込まれていた赤い水が汚した床は、今も薄汚い染みの痕が残つている。

「それじゃ、次はあなたの番だ。あのとおり、会議室では靈視をしなかつたけど……とりあえず、あなたに憑いているもんが何なのか、それは俺も既に見当をつけてある」

部屋の真ん中で、魁が室井の方を振り返って言った。ここに来て、今度は唐突に自分の除霊を始めると言われ、室井はしばし緊張した面持ちで魁を見た。

魁が、室井の頭に手を乗せてくる。身長は魁の方が高いが、その手の先は女のように細い。それでいて、骨ばった感じもなく、どこか上品な雰囲気さえ感じさせるのだから不思議なものだ。

魁の掌から、なにやら室井の知らない力のような物が流れてくる。掌で、直に頭をつかまれているからだろうか。靈感などまったくないはずの室井にさえ、魁が妙な力を使って何かをしようとしているのは見当がついた。

「ふんっ……」

氣合一番、魁が室井の頭から手を離し、何かを引き剥がすようにして放り投げる。その途端、室井は身体の中から何かが抜け出し、なにやら肩が軽くなつたような気がした。

「なんだ、こりや？　お前、いったい俺に何しやがつた！？」

「何しやがつたってのは酷いなあ。俺はあなたに憑いていた、幽霊モドキを引っ張りながら、その部屋の隅に転がってる」

「幽靈モドキだあ？ なんなんだよ、その妙な名前の妖怪は……」

いきなりわけのわからない話を振られ、室井は訝しげな表情のまま部屋の隅へと田をやつた。すると、そこには何やら赤黒い色をした、奇妙な塊が転がっていた。

「げえつーー！」

それ以上は、室井は何も言えなかつた。

部屋の隅に転がっていたもの。それは紛れもない、人間の生首と呼ぶに相応しいものだつた。いや、正確には、あれは生首ではない。

片目を失つた落ち武者の首。完全に白骨化した誰のものともわからぬ首。犬のような猫のような、見たこともない獸の首。ありとあらゆる奇怪な首が、一つのボールのようになつて固まつてゐる。その首の隙間からは赤と黒の水を交互に混ぜたような霧が立ち上つており、腐臭のようなものを撒き散らしていた。

「あれは、ちよつと普通の幽靈とは違つてね。説明が面倒臭いんで、会議室では適当に流したんだ」

「普通の幽靈とは違つて……何が、どう違つんだ？」

「そもそも幽靈つてやつは、何かこの世に未練があつて現れるものさ。やつきの首吊り女だつて、何か死んでも死にきれない理由があつて、未練を残したまま自殺したんだろうね。だから、いつもして自縛靈になつて、この屋敷にずっと残つてたんだよ」

首の塊の動きに油断なく目を凝らしながら、魁は淡々と説明を続

ける。その程度の話であれば、室井も何かの話で聞いたことはあった。

「だけど……幽霊の中にほ、たまうに妙なやつもいてね。亞種つていつのか、それとも突然変異つて言つた方が正しいのか……とにかく、普通の連中とはちよつと違つ、線引の難しい連中がいるんだよ」

「それが、あの生首の塊だつてのか？」

「ああ、そうだよ。あいつらは、この家の中に充満していた陰の氣が作りだした、幽霊みたいな姿をした物体さ。元々が陰の氣そのものだから、別に思考や思念なんてありやしない。ただ、本能の赴くままに、人間にひつついて生氣を奪つてゆくんだ」

「なんだか、よくわからない話だな。とりあえず、あの妙な塊は、幽霊じやないつてことなのか？」

「そういう認識で構わないよ。あれば、この家に溜まつっていた陰の氣が、あなたの思念を受けて実体化したようなものさ。あんた、この番組を成功させるために、本当に心靈現象の一つでも起きないかつて思つてなかつた？ そういう心……それこそ、悪戯に怖い話を作りうなんて心と、周りにいある陰の氣が共鳴しちやうとね、あんな意識もへつたくれもない化け物を生みだしちやうんだよ」

「マジかよ、それ……。だつたら、あの化け物は、俺が生み出したつて言いたいのか？」

「そうこいつこと。まあ、滅多にあることじやないんだけど、今回は運が悪かつたね。とにかく、こいついた企画をやるとかね、今度からちゃんと俺も口ケに呼んでくれなきゃ困るぜ」

わざとさしきれ両手を広げ、魁は肩をすくめて室井に言った。部屋の隅では未だ例の生首達が、それぞれ好き勝手に口を開けてはわめき散らしている。その度に、口の中からじす黒い陰の気がじりじりと漏れだし、魁や総司郎の鼻先を刺激する。

「とにかく、今はあの化け物を退治しないといけないね。ここは一つ、総ちゃんの出番かな？」

これ以上は、あの生首に近寄りたくない。そう思った魁は、今まで横について動かなかつた総司郎に全てを任せた。その言葉を聞いた総司郎は何も言わずにアロハシャツの袖をまくり上げる。

中から現れたのは、魁のものとは異なる。力強い腕。田頃から、相當に鍛えられているというのが室井にもわかる。が、それ以上に室井の目をひいたのが、彼の腕に刻まれた無数の刻印だった。

「おいおい、なんだよあの腕は。梵字の刺青なんかいやがつて……。あれが、あの男の力つてやつなのか？」

「御名答。実は、総ちゃんは昔、ある事故で両目を失つていてね。その代わりと言つたらあれなんだけど、靈感を含めた六感が、普通の人よりも物凄く発達しているんだ。それに、彼が持つている靈能力も、先天的に高かつた。だから俺は、総ちゃんに目の代わりになる力をあげる代わりに、その身体にもちょっと細工をさせてもらつたのさ」

魁がにやりと笑う。常に相手より優位に立つてゐる際に見せる、あの自信に溢れた笑みだ。

「総ちゃんの腕の刺青。あれ、本当だつたら退魔具なんかに刻むためのものなんだよね。俺はそれを、あえて総ちゃんの腕に施した。だから、総ちゃんにとつては、両腕そのものが武器みたいなもんだよ。この日本でも数少ない、幽靈を殴ることのできる 人間 れ」

最後の部分を殊更強調し、魁はまるで自分のことのように室井に聞かせる。その間にも、総司郎はゆつくりと、しかし確かな足取りで生首の塊に近づくと、無言のままそれを驚撃みにして持ち上げた。

通常、靈的な存在に、人間が素手で触れるなどは不可能だ。例外もあるにはあるが、基本的には幽靈に触れる人間などいない。それこそ、向こうから触ろうと思つて接触して来ない限りには、人が靈に触れる術はない。

それにも関わらず、総司郎は何の苦もなしに生首の塊を持ち上げていた。時折、その口から放たれる黒い息に不愉快そうな表情を浮かべてはいたが、それ以外は、特に問題ないようだった。

「先生……。こいつ、どうします？」

生首を持ったまま、総司郎が魁の方へ振り向いた。なんというか、実に無骨で不器用という言葉が似合う男だ。外見に反して声色はどこか柔らかく、威圧するような雰囲気も今はない。

「とりあえず、適当に潰しちゃつてよ。そいつ、この家の一部から生まれたみたいなもんだからさ。その辺の天井か柱にでも埋めとけば？」

「わかりました。それじゃ……」

途中まで言いかけた言葉を飲み込んで、総司郎が深々と息を吸い込んだ。その動きに呼応するかのようにして、両腕に刻まれた梵字が赤く発光する。生首達が今までになく騒いで暴れたが、総司郎は彼らをつかんだ手を決して離さうとはしなかった。

「はっ……！」

軽い気合を入れ、総司郎が手にした生首に右の拳を叩き込む。その途端、何かが弾けるような音がして、生首の塊は部屋の角にあつた柱の方まで吹き飛んだ。

ベシャッ、という何かが潰れるような音がして、生首の塊が柱にめり込む。幽霊の類とはい、所詮は特定の意思を持たない、恐怖心そのものが具現化された存在。人間に憑いているときは厄介な相手だが、その身体から引きずり出されてしまった今、さしたる力も発揮できないのだろう。

ずるずると、まるで柱に吸い込まれるようにして、生首たちはその姿を徐々に消していった。いや、より正しく表現するならば、柱に同化されてしまったと言つた方が正確か。

生首が消えた柱の中央。こげ茶色の年季の入つた木に、見慣れない木目が現れていた。それは、よくよく見ると、あの生首たちに見えなくもない。総司郎の一撃を受けて、そのまま柱と一体化してしまったのだろうか。

「終わつたつす……」

仕事を終え、総司郎が両手を払つようにしながら魁の下へ戻つて

きた。時間にして、実に数秒。なんというか、見ている方があつと
いう間の、実に無駄のない除霊だった。

「さあ、遊んでないで、次へ行こうか。俺の見立てだと、次は少々
厄介な相手が待つていいそつだからね」

一いちらに戻つてきた総司郎の肩を叩き、魁の顔が珍しく真剣な表
情に変わつた。

前哨戦は、これで終わりだ。ここから先は、いよいよこの屋敷に
巣食う大ボスと戦うことになる。そのためには、今まで以上に慎重
に、かつ確実に事を進めねばならない。

久しぶりに、手強い相手と戦うことになりそつだ。だが、不思議
と恐怖は感じない。下らない心霊番組でコメンテーターしかやつて
いなかつた身としては、今回の除霊に一種の高揚感さえ抱いている。

幽霊屋敷に巣食う闇。その根源を断つために、魁は再び総司郎を
引き連れて、古びた階段を下つて行った。

階段を降りると、相変わらず一階には湿っぽい空気が充満していた。

最初、地元の住民に案内されて、初めてこの家を訪れた際のこと。室井は思い出す。あの日、現場の下見とやらせの仕込みを兼ねて家の中に入ったときも、こんな陰鬱な湿気に満ちた空気に歓迎を受けた。あのときは、単に家の造りが古いだけと思っていたが、もしかすると、この空気もまた、何か靈的な存在が撒き散らしているのだろうつか。

一階へ続く階段を降り、魁はそのまま屋敷の奥へと入ってゆく。老朽化の激しい一階の中でも、特に痛みの酷い際奥の部屋。黒カビに覆われ、ところどころに穴の開いた畳が敷き詰められた、なんとも嫌な場所へとやつてきた。

「うう……なんか、他の部屋にも増して、この部屋の湿気は凄いな。これもまた、お前の言つ悪靈みたいなやつの仕業なのか？」

部屋中に溢れたカビの臭いと強烈な湿気。その一つをまともに嗅いでしまい、室井は自分の口元をハンカチで覆つて言つた。その一方で、魁も総司郎も、何ら動搖することなく部屋を見て回っている。時折、不快な表情を浮かべるとはあっても、それは室井ほどではない。

まつたくもつて、恐ろしいまでにタフな連中だと室井は思った。ホストのような格好をした優男だが、その内に秘めているものは、常人の感覚とは明らかに違う。現に今も、服が汚れることを気にしない。

つとも、この部屋の中に潜む何かを見つけ出すのを楽しんでこるような雰囲気さえある。

「えっと……。たぶん、俺の勘だとこの辺かな」

突然、そんなことを言いながら、魁が畳の一つに手をかけた。それは部屋の中にある中でも、特に痛みの激しい畳の一つだった。黒いカビが、まるで日食のときの太陽のように円を描いて生えており、虫に食われて穴の開いた表面からは、中身がところどころ露出していた。

「悪いけど、総ちゃんは反対側を持つてくれない？ これ、俺だけでひつくり返すの、ちょっと大変だからや」

「了解つす……」

魁に言われ、総司郎もまた古びた畳に手をかけた。その動きがあまりに滑らかなので、見ていた室井は思わず自分の畳を疑つた。

魁の話では、総司郎は既に自分の光を失つていてのことだった。要するに、完全に失明してしまい、今は眞田といふことだ。

そんな総司郎が、いつも器用に魁の作業を手伝つことができる。そのことが、室井には不思議でならなかつた。

本当は、あの男は目が見えているのではないか。サングラスで目を隠しているのは、果たして本当に目を失つたことを隠すためのものなのか。

新たに疑念のようなものが浮かんで來たが、それを室井が魁に尋

ねることはなかつた。彼が一人に声をかけるよりも先に、目の前の朽ち果てた畳が取り外されたからだ。

畳を持ち上げて、魁と総司郎はそれを壁に立てかける。なにやら土埃のようなものがパラパラと落ち、畳を剥がされて剥き出しになつた床の上では、小さな虫のような生き物が、慌てて隙間に隠れていた。

「あちやあ……。やつぱ、畳の下にも床があるな。こいつはちよつと、大仕事になるかもしねいぜ」

珍しく困ったような顔をして、魁が茶色く染まつた髪の毛に指を絡ませながら頭をかいていた。もつとも、本気で困つてゐるようではないらしく、仕事の手間が増えたことを、純粹に面倒臭がつてゐるようだつた。

畳の下から現れた床板を指差して、魁は総司郎に一言、二言で何かを伝えた。それを聞いた総司郎は無言のまま頷くと、音もなく立ち上がり足早に部屋を去つて行つた。

いつたい、魁は総司郎に何を告げたのか。いや、それ以前に、そもそも二人は何の目的で畳など剥がしたのだろう。

傍から見ている室井には、何から何までがわからぬことだらけだつた。それでも、魁だけは自分の行いを納得しているらしく、独りで勝手に床板についた染みを眺めているだけだ。

それから程なくして、総司郎が何やら物々しい道具を持つて戻ってきた。よくよく見ると、それは巨大なバールのような工具の一種。鍵爪のように曲がつた先端部分は、叩きつければ老朽化した廃屋の

床程度なら簡単にぶち破るだろ？

「おいおい、何考えてんだよ、お前ら。まさか……そここの床板を、その物騒な道具でぶつ壊そうってのかー…？」

「ああ、そうだよ。俺の見立てでは、この下に隠されているものが、この屋敷に巢食っている亡靈たちの根源だからね。悪い物は根っこから絶たないと、雑魚をいくら祓つたところで生きりがない。ここにで潰しておかないと、また変な幽靈どもがあちこちから引き寄せられてやってくるよ」

「しかし……本当に、床板を壊す気か？ いくら廃屋でも、持ち主はいるんだぞ。こいつことば、ちゃんと許可を取つてだな……」

「何を今さら言つちやつてんの？ 今度の番組で流す やらせ 映像作るのに、あんた達、この家の人に許可取つて細工したんじよ？ だったら、今さら床の一つや二つ、ガタガタ言つても始まらないう」

飄々とした顔で言いながら、魁は総司郎からバールを受け取つた。そこまで言われては、室井もこれ以上は何も言えない。

今度の番組で流す映像が やらせ であること。そのことは、魁にも殆ど伝えていない。それにも関わらず、魁は映像に やらせ が仕込まれていることを見抜いている。誰から情報をもらつたのか、それとも本人の持つ不思議な力で察知したのかはわからないが、トリックを仕掛けたことを引き合ひに出されでは言葉もない。

魁の振りかぶつたバールが空を切り、鈍い音を立てて床板に突き刺さつた。初めは軽く弾かれてしまつたが、そもそもが酷く痛んだ

床板だ。腐っていたことも相俟つて、床板は思つたより簡単に崩れ落ちた。

バラバラという音と共に、木製の板が木屑を撒き散らしながら下に落ちる。その下から現れたのは、巨大な暗い空洞だつた。床板を剥いだら地面が現れるに違ひない。そう思つていた室井にとつて、これはあまりにも意外な出来事だつた。

床板の下から現れたもの。それは、家の土台などではない。暗く、大きな穴がぽつかりと空き、まるで地獄へ繋がる入口のように、こぢらを無意識に誘つているような感じさえ受ける。石を積み上げて作つた簡素な造りだが、それでいて今もなお崩れ落ちていない。遠い昔に忘れ去られた、戦前より存在していたであろう古井戸だつた。

「なんだよ、これ……。なんで、家の下に井戸なんか……」

あまりの不気味さに、室井はそう呟くのが精一杯だつた。

お化け屋敷と謳われた廃屋の一室で、床を剥いだら下から古井戸が現れた。こんなホラー映画のような展開が、果たして本当にあつてよいのだろうか。自分たちは視聴者を怖がらせるためにやらせまで仕込んだというのに、それを越えるほどに薄気味の悪い物が家の下から現れた。正に、事実は小説より奇なりというやつだらう。

「どうやら、当たりだつたみたいだね。この井戸が、屋敷に巢食う亡靈じもを集めていた原因だ」

バルを放り出し、魁は井戸の底を覗きこむよにして室井に説明した。先ほどまでは魁の荒唐無稽な話に半信半疑だつた室井も、今度ばかりは素直に彼の力を信じる他になさうだつた。

「しつかしなあ……。まさか、こんな場所に井戸があるなんて、俺は思つてもみなかつたぞ。これもお前の、霊能力とやらで探したのか？」

「うーん……。半分正解だけど、半分はハズレだね。確かに俺は、最後に井戸の場所の見当をつけるため、この部屋の中で靈気の流れを探つたりはしたさ。でも、それより前に、とつぐに気づいていたんだよ。この家が、増築に増築を重ねて作られた、とんでもない欠陥住宅だつてことがね」

「欠陥住宅だあ！？ そんなこと、今回の幽霊騒動に、いつたい何の関係があるってんだよ！…」

「何の関係つて……大いに大ありなんだけどなあ」

室井の言葉を鼻で笑いながら、魁は部屋の壁を拳で軽く叩いてゆらす。他の部屋は脆い板張りの壁もあったといふのに、妙にその部分だけ音が違う。なんといふか、まるで家の外から壁を叩いているような、固くしつかりとした音がするのだ。

「「！」の壁、他の部分とはちよつと音が違うとは思わない？ 他の部屋がうすっぺらい板張りの仕切りみたいな感じなのに、ここだけは、随分と固い壁なんだよね。まるで、家の外と中を隔てる、頑丈な土壁みたいでさ」

「そう言われれば、確かにそうだな。家の中で、部屋と部屋を仕切つているだけなのに、妙に壁が分厚い気がする……」

「でしょ？ まず最初に、俺はこの家の間取りを見て、何か変だと

思つたんだよね。一階は普通に廊下を行き来するだけで部屋と部屋を渡り歩けるのに、一階に上がるには一つの階段が必要だ。その上、一階に上がつたら上で、家の北側と南側を繋ぐ扉なんかがない。まるで、一つの家の上に、一つの家が別々に乗つかっている。そんな不自然な造りになつてゐるんだ」

事もなく流すよつて言つてゐたが、魁の言葉は的を射ていた。今度ばかりは屋井も納得したようだ、ただ、魁の話に耳を傾けているだけだ。

通常、一階から一階へ昇る階段など、一つあれば十分だ。一階は一階、二階は一階で、それぞれ廊下や部屋を造り行き来ができるようこすればいい。わざわざ階段を別々に造り、二階を北と南で分断する。忍者のからくり屋敷ならいざ知らず、極一般の民家でしかない家を、そんなややこしい構造にする必要はない。

「「」の家は、もともとは南側部分しかなかつたんだろうね。北側は、それこそ物干し場とか裏庭みたいな感じでさ。」の井戸も、最初は家の外にあつたんじゃないかな？」

「だとすると、家を改築……いや、増築した際に、井戸の真上に部屋を作つてしまつたつてことか？」

「そうこうになると、家主にお金がなかつたのか、それとも依頼を受けた業者が悪質だったのか……。とにかく、この家の湿気の原因は、全部床下に放置された井戸のせいなんだよ。幽霊云々は関係なく、井戸の底から溢れ出した湿気が、家全体を蝕んでいたんだ

「なるほど。じゃあ、」のカビや、辛氣臭い空氣やらは、全部井戸が原因なんだな？」

「その通り。普通、こういった井戸には神が住んでいるって言われているから、ちゃんとした手順を踏んで埋めないと祟りが起きるんだ。それをしないで無理な増築なんかして、更には家そのものを放棄したもんだから……井戸の神が怒って、完全に祟り神になっちゃつたんだね」

「祟り神って……なんか、随分と話が大きくなってきたな……」

相変わらず、魁の口調は軽快なままだつたが、室井はその中に出て来た 崇り神 という言葉に妙な恐怖感を覚えて仕方がなかつた。祟り神。本来は祭神として祀られていた神が、何の因果か妖怪のような存在と成り、人間に仇成すようになつたもの。神の存在など信じてはいらない室井だつたが、以前に番組でさびれた神社を心靈スポートとして扱つた際に、そんな話を聞いたことがある。

幸い、その神社の撮影を済ませたときは、何の心靈現象も起きることはなかつた。が、後日、その神社のある地元の神主から忠告を受け、一度と同じ場所に近づかないようにと釘を刺された。なんでも、祟り神の祟りは相当に強力なものらしく、場合によつては一族が滅びるまで憑いてまわるとか。そんな話を思い出してしまつては、いくら室井とて心が安らかではない。

あの時は神主の話など馬鹿にしていたが、今となつては普通に恐ろしい。魁による除霊を目の当たりにした室井にとつて、心靈現象は既に空想の産物などではないのだ。

魁の話では、この井戸が全ての心靈現象の大元だということだ。と、いうことは、彼の言つ祟り神もまた、今もなお井戸の奥に影を

潜めているということだろうか。

「さあて……。解説も終わったところで、そろそろ締めと行きますか。今日は久しぶりに大仕事になりそだからね。俺も、ちょっと派手にパフォーマンスさせてもらおうかな？」

そう言つが早いが、魁は自分の懷に手を突つ込むと、そこから小さな水晶玉を取り出した。街頭などでたまに見かける、占い師の老婆が用いているようなものではない。もつと小柄で、それこそ掌に乗つてしまつほどの小さなものだ。

水晶玉に念を込め、魁は井戸の底に潜む邪悪な気配に意識を集中させる。本当は、こんな道具に頼らずとも、もつと伝統的な手法がないわけではない。しかし、魁はそんな形式よりも、己を格好良く見せることに重きを置く人間だ。

素人目に見てもわかりやすい道具を用い、自分の凄さを強調する。魔を祓う行いというものは、魁にとって、あくまで自分の名声を上げるための手段に過ぎない。そうやって、表の世界を生きる靈能力者としてやつていくのが、御鶴木魁という男の生き方なのだ。

閉じられていた魁の両目がカツと開かれ、水晶玉が妖しい紫色の光を放ちだした。そして、その光りに導かれるようにして、井戸の奥底から白い湯気のような物が立ち上つてくる。

霧とも煙ともつかない、実に奇妙な色をした乳白色の物体。俗に言われる、エクトプラズムと呼ばれる物の類だらうか。室井も以前、靈媒師の女の口から白い煙のような物が伸びている写真を、番組で扱つたことがある。

だが、それにしては、目の前の物体は妙に生々しく感じられた。あれは、ただの霧ではない。増してや、何かのトリックなどでもない。確証はないが、室井はいつしか完全に心靈現象を信じ込んでしまっている自分がいることに気がついた。

やがて、現れた霧が徐々に塊、一つの帶のような姿を成してゆく。人間の胴体ほどもある、實に太く長いものだ。固まつた霧の表面には鱗のような斑紋が現れ始め、不快な臭氣を放つ一体の巨大な魔物と化す。

「あれは……」

井戸の底から現れし異形の者。それを見た室井は、大きく口を開けたまま動けなかつた。

そこにいたのは、一匹の巨大な蛇だつた。ニシキヘビを裕に超える巨体を誇る、赤く禍々しい瞳の大蛇。全身を覆う白い鱗は、その所々が黒く朽ち果ててしまい見る影もない。かつては神々しいまでの美しさを誇つていたのだろうが、今となつては、陰の氣によつて腐り果てた肉体を持つ醜い怪物であつた。

「先生……。さすがにこいつ、ちょっとヤバいっすよ……」

梵字の刺青が刻まれた腕を構え、総司郎が魁を庇うようにして言った。反射的に師を守るつとしたのだろうが、その声は明らかに震えていた。

「まあ、さつきまでの雑魚みたいに、軽くいなすつてわけにはいかないだろ?」

水晶玉を掲げたまま、魁が不敵な笑みをこぼしながら大蛇を睨む。この期に及んで、まだ笑つていられるほどの余裕があるというのだろうか。

もし、これが単なるはつたりでないのだとすれば、本気になつた魁はどこまでの強さを見せるのだろう。室井の知つてゐる魁の力でさえ、あくまで彼の能力の一端に過ぎない。魁はまだ、室井の知らない切り札を、このときのために隠し持つていたともいうのだろうか。

井戸から首を伸ばした大蛇が、その口を大きく開けて威嚇した。間違いない。相手は完全に起こつてゐる。それは、自分の土地に無断で入り込まれたことに対する怒りだろうか。それとも、身勝手な人間によつて床板の底に封じられてしまつた、積年の恨みが成せる業なのだろうか。

その、どちらでも、魁にはさして関係はなかつた。次の瞬間、大蛇の首が素早く動き、その口の中にある牙を突き立てんと魁に迫る。慌てて総司郎が身構えるが、速さでは相手の方が上だ。

果たして、そんな総司郎の努力も虚しく、大蛇の首は魁の顔目掛けで一直線に伸びてゐた。このままでは、魁が大蛇に飲み込まれる。その場にいた誰もがそう思つたが、魁はあくまで落ちついた様子で、大蛇の動きから目を離さなかつた。

ジユツ、という何かが焦げるような音がして、室井と総司郎は瞑つてしまつた目をそろそろと開けた。もしかすると、魁はあのまま大蛇の毒牙にかかつてしまつたのではないか。そんな最悪の事態が頭をよぎつたが、二人の前にあつたのは、彼らの予想に反した魁と大蛇の姿だつた。

大蛇の頭が、魁の手前で止まっていた。いや、実際には、止められていたと言つた方が正しいか。

いつの間にか、魁の手には銀製の扇が握られており、それが大蛇の頭に突き刺さるような形で動きを止めていたのだ。扇を作つている銀の板は、その表面に不可思議な呪文のようなものが刻まれている。単なる飾りなどではない、列記とした魔物と戦うための武器だった。

「せ、先生……」

「大丈夫だよ、総ちゃん。こいつ、確かに強力な靈体だけど、神としては三流だね。長い間、床下の底に閉じ込められて腐っちゃつたから、単に他の生き物の命を吸うことだけに特化した妖怪に成り下がつちやつてる。ちゃんとした社に祀られているような神ならいざ知らず、こんな奴に負ける俺じゃないよ」

扇を握つた手を軽く振り、魁は大蛇の頭を跳ね飛ばした。どう見ても圧倒的な体格差があつたが、魁はさして力も込めず、払いのけるようにしてあしらつた。これが、持つている靈能力の差だ。そう言わんばかりの表情で、魁は大きく腕を左右に広げてゆく。

「さて、遊びはお終いだ。さすがに長期戦になるとヤバそうだし……。それに、俺はどうも、生身で戦うのって疲れるから好きじゃないだよね」

魔を滅することを生業とする靈能者の中には、自ら武器を手にして悪靈や妖怪と戦う者がいる。しかし、そういう肉體派の靈能者に比べると、魁は随分とスマートな戦いを好む男だった。

力押しは望まない。戦いは、あくまで美しく勝利しなければ意味がない。血みどろの肉弾戦でぶつかり合つなど、自分の性には合っていない。

再び大蛇が体勢を整えるよりも先に、魁の着ている服の袖口から無数の紙が飛び出した。それはどれも、高級そうな和紙で作られた折り紙だった。あの、首吊り女の靈を退治したときに使つた鶴だけではない。鶴よりも攻撃的な、猛禽類の姿や犬のよつた姿をしたものまである。

「やれ……」

そう、魁が口にするが早いが、折り紙の獣たちが一斉に大蛇に襲いかかつた。鶴が、鷲が、犬が、次々と惡靈と化した大蛇の靈に飛び掛かってゆく。折り紙に爪や牙などないにも関わらず、紙人形に貼り付かれた大蛇は奇声を上げてのたうち回つた。

紙の獣が、見るもおぞましい蛇の怪物に挑んでゆく。事情を知らない者からすれば滑稽な見世物なのかもしれないが、室井は何も言うことができず、目の前の光景に目を奪われていた。

「仕上げだ、お前達。トーロちゃんの味わった金縛りの恐怖……その化け物にも、きつちり味わせてやるんだな！！」

魁の口元が、意地悪そうに歪んで見えた。その言葉が終わりきらない内に、折り紙で作られた魁の下僕しもべが、一瞬だけ光輝いたような気がした。

部屋の中に、何かが弾けたような音が響き渡る。強烈な静電気を

受けたような気がして、室井は慌てて丼元を腕で覆った。

「……っ！ 今度は何をした、陰陽師！？」

「心配は要らないよ。俺はただ、俺の式神を使って、こいつの動きを封じ込めただけだから」

「式神だあ？ おい……まさか、お前の服の中から出て来たあの折り紙。あれが、お前の言つ式神つてやつなのか？」

「ああ、そうだよ。陰陽師は、己の配下として式神を使つ。少しオカルトに詳しい人なら、誰でも知つていいことだと思つけど？」

事もなきに、魁は室井に向かつてさらりと流すように言つてのけた。もつとも、そうは言わても、室井は未だに自分の頭の中が混乱していた。

式神。陰陽師が使役する、下級の神のような存在。通常、その姿は人には見えず、実際には鬼のような姿をしていると言われている。怪奇漫画や怪奇映画などでは、それらの存在が劇中で事件を解決することも少なくない。

だが、そういうた類の物に比べると、魁の言つ式神は室井の知っているものとは随分と異なっていた。確かに、不思議な力を持つていることには変わりないが、それでも傍目にはただの紙人形なのである。そんな物を見せられて「あれが式神です」と言われても、なかなか信じることは難しい。

「どうしたんだい、室井さん？ 倘の説明、なんか納得言つてないみたいだけど……」

「室井の訝しげな表情に気がついたのだ。魁もまた、何やら少しばかり不満そうな顔で、室井に向かって尋ねてきた。

「いや、まあ、ちょっとな。ほら……式神なんて言つたら、普通はでつかい鬼みたいなやつを想像するじゃないか。だから、ちょっとばかり面食らつてな」

「なんだ、そんなこと。言つておくけど、式神つてのはあんたが思つていいような化け物じゃないよ。式神つてのは、陰陽師が使役する自分の分身みたいなものさ。要は、自分の力を込めて作った、操り人形みたいな存在だね。一つ一つの力は弱いけど、集まれば、ああやつて強力な靈体でも金縛りを食らわせることができる」

「なるほど、操り人形とはな……。それなら、あの折り紙どもが、お前の作った操り人形なのか？」

「そういうこと。あいつらは、ただの紙人形じゃない。作るときに、俺の髪の毛と一緒に折り込んで作った特注品なんだよ。紙に髪を入れて神とする……。我ながら、洒落が効いていると思わないかい？」

半分は冗談のつもりで言つた魁だが、室井は笑わなかつた。一見して子どもの玩具にしか見えないもので、いつも悪靈を圧倒する。そんな魁の姿に、室井もまたいつしか一種の畏敬の念のようなもの抱き始めていた。

「それじゃ、最後の仕上げだな。あいつ、もう自分では動けないみたいだし……後は任せたよ、総ちゃん」

自慢の冗談が受けなかったことに、機嫌を損ねてしまったのだろう

うか。魁は急にぶつきらぼうな口調になつて、後始末を総司郎に任せてしまつた。もう、これ以上は興味もない。普段の魁があまり見せることのない、やけに冷めた瞳が物語ついていた。

全身を式神に押さえつけられ、もはや動くことも敵わなくなつた大蛇の靈。かつては井戸の神として、慎ましくも人々に畏怖された存在。そんな神靈の一つではあつたが、長い年月を経て魂まで腐り果ててしまつた今は、これも一体の惡靈に過ぎない。

無言のまま腕まくりをし、総司郎が大蛇の靈へと近づいてゆく。そこには先ほどの、取り乱したような様子はない。まともに戦えば苦戦したかもしれないが、今は相手も完全に動きを封じられている。

魁に言われずとも、総司郎もまた、この大蛇の靈を放つてはおけないことはわかつていた。祟り神と化してしまつた井戸の神。その全身から放たれる腐臭のような陰の気が、この家全体に溢れて嫌な者を引き寄せている。ここで大元を断つておかなければ、いくら雑魚を倒したところで、直ぐに以前の幽靈屋敷に逆戻りだ。

それに、魁の話では、どうやら凍呼に取り憑いているのはこの祟り神のようだつた。確かに、神としては格下の存在なのかもしれないが、何の力も持たない一般人にとつては十分に脅威だ。

両腕の梵字が赤く発光し、魁は動かなくなつた蛇の口に指をかけて大きく広げた。そして、そのままぐつと力を込める、上下の顎を引き剥がすかのようにして、蛇の身体を真つ一つに引き裂いた。

実体のない、靈的な存在だというのに、肉が裂かれて何かが飛び散るような音がした。引き裂かれた蛇の身体は直ぐに溶けてじろじろとした液状の塊となり、やがてそれも、床や畳に吸い込まれるよ

うにして消えてしまった。

「お疲れさまだね、総ちゃん。やっぱ、最後の締めは、総ちゃんにやつてもうつた方が俺も楽だわ」

先ほど使っていた銀の扇で、魁が胸元を仰いでいた。対する総司郎は、これは照れ隠しなのだろうか。癖毛の酷い頭をポリポリと搔きながら、一言、「どうも……」と言つただけだった。

「さて……。これで大元は断つたけど、まだ家には変なのがうつよ。よこるねえ。これ、全部やつづけるとなると、かなり骨が折れるよなあ……」

「どうします、先生？ なんだつたら、俺が一匹ずつ潰しても構わないっすけど……」

「いや、大丈夫だよ。総ちゃんには大仕事を片付けてもらつたばっかりだし、後は俺がやつておくさ。幸い、式神の連中もまだ使えるからね。あいつらを使って、最後の大掃除と行きますか」

そう言つ魁の足下には、いつの間にか、先ほどまで大蛇の動きを封じていた式神たちが集まっていた。一糸乱れぬ隊列を作つて並んでいるその様は、やはりどこか滑稽なものがある。

魁が扇を振りかざし、式神たちに無言の命令を下した。その扇の動きに操られるかのようにして、紙で作られた動物たちは、それぞれが屋敷のあちこちに姿を消して行つた。

夜のテレビ局にある会議室で、魁が淡々とした口調で話していた。その間、凍呼はただ流されるままに、魁の話を聞いているだけだった。

「……と、いうわけで、俺と総ちやんで、あのお化け屋敷の幽霊たちは一掃したつてわけ。君に取り憑いていた蛇の霊も、本体を総ちやんが潰したから。現に、俺が除霊をした後は、トートー「ちやんの靈傷も快方に向かっているんでしょ？」

「はい……。で、でもお……」

魁に事の次第を説明され、さらには総司郎の腕にある刺青まで見せられても、凍呼は不安な表情を変えられないままに言った。

確かに、魁の言つ通りであれば、あの家にいた幽霊は一掃されたのだろう。現に、あれから凍呼自信も、妙な夢にうなされることはなくなつていて、身体についた蛇の絞め跡のような痣も、だんだんと薄くなつてきてはいる。

しかし、では、先日の生放送で起きたといつプロデューサーの変死事件。あれは、いったい何なのだろう。全ての靈を祓い終え、祟りの大元を断つた今、なぜプロデューサーの西岡が亡くならなければならなかつたのか。

西岡の死は、公には撮影機材の転倒及び落下によるものであると説明されている。実際の現場に居合わせたわけではないため、そう言つてしまえば、凍呼にも言い返す術はない。だが、その一方で、西岡の死が本当に單なる事故だったのか、それを証明するための証

拠もないのが現状だ。

自分のことではないにしろ、それでも凍呼は恐ろしくて仕方がなかつた。本当は、まだ悪霊による祟りが続いているのではないか。魁の力を信じていなわけではないが、もしかすると、彼の手を逃れた何かが未だ祟りを引き起こしているのではないか。そんな不安が次から次へと湧いてくる。

「あのう……。こんなこと言つたら失礼かもしけませんけど……」

「なんだい？ もしかして、まだ何か気になることがあるとか？」

「はい。御鶴木さんの力、私も信じていないわけじゃありません。でも……本当に、祟りは全部終わつたんですか？」

「それは間違いないよ。君に取り憑いていた蛇の霊もそうだけど……そもそも、あの屋敷にいたのは、その殆どが自縛霊みたいな連中だ。自分は土地に縛られていて、そこから自由に動けない。だから、その代わりに端末……要は、自分の分身みたいなやつを君たちのところに送り込んで、間接的に祟っていたんだ。その大元を叩いたんだから、もう何も心配は要らないよ」

「そうですか……。だつたら、やっぱり西岡プロデューサーが亡くなつたのは、単なる事故だつたってことなんですか？」

「やうだねえ……。実は、そこが俺も引っかかっているところなの

や」

隣にいる総司郎に軽く目配せし、魁は自分の口元に指を添えて言った。総司郎が、無言で頷いて魁に答える。

あの、生放送の本番中、魁と総司郎もスタジオの中にいた。そして、彼らの目の前で、西岡は見るも無残な変死を遂げた。

眼球がボールのように膨れ上がり、その頭ごとバラバラに吹き飛んで死亡する。局側は機材の転倒、落下による事故と主張しているが、これが事実を隠蔽するための詭弁であることは、魁からしても明らかだった。

プロデューサーが変死したこと、自分の除霊が不完全だったと思われる。それは確かに魁にとって不名誉なことだったが、問題なのは、そんなことではない。

魁にとって最も許せなかつたのが、自分の目の前で一人の人間が不審な死に方をしたということだ。もし、彼の死の原因が呪いや祟りによるものであれば、白昼堂々、大衆の眼前で靈的な存在が関わった事件が発生したことになる。しかも、よりもよつて、陰陽師の末裔と称され世間的にも知名度が上がつてきた、この御鶴木魁の目の前でだ。

表の世界を生きる靈能力者として、これは決して許してはならない事態だった。このまま妙な噂が立てば、彼の看板番組である 奇跡空間ミラクルゾーン は打ち切りに追い込まれてしまう。それに、事件の犯人が人間であれ悪霊であれ、こちらが一方的に舐められているような気がして腹が立つた。

いづなれば、事件の謎は自分が解明してやろう。局側は事態をこのまま隠蔽するつもりらしいが、そんなことは関係ない。このまま出し抜かれて終わつては、陰陽師の末裔としてのプライドにも関わる。

（ま、久々に面白いことになつてきたつてのは事実だね。それに、ここで事件を解決しておけば、俺の名前を売るのにも役には立つか……）

自分の感情を凍呼に気取られないように注意しながら、魁は口元を隠すようにして腕を組んだ。一瞬、部屋から音が消え、無音の静寂だけが辺りを包む。

突然、部屋の隅で音がした。紙が擦れるような、何やら妙に軽い音。部屋が静かだったことも相俟つて、それは随分と大きな音のように聞こえた。

凍呼の意識が、音のした方へと向けられる。大方、会議室に忘れられたレジメでも落ちたのだろうか。そんなことを考えながら、何気なく部屋の隅へと目を移す。すると、今まで不安そうに俯いていただけだった凍呼の顔が、見る間に驚きの表情へと変わつてゆく。

「えつ……。何、あれ……」

そこにいたのは、一匹の小さな犬だった。いや、正確に言えば、犬の姿をした小さな紙人形だった。

人形が、まるで生きているかのようにして、するすると床を這いながら魁の下へやつてくる。歩くといつよりは、むしろ滑ると言った方が正しい動きだ。

田の前で起きている不思議な光景に、凍呼はしばし言葉を失つたまま我を忘れていた。もつとも、魁と総司郎は慣れたものなのか、その程度では微動だにしない。

床を滑り、紙人形が自分の足下までやつてきたところで、魁はそれをひょいと摘み上げた。そのまま人形の頭の部分を自分の顔に向け、何も言わずに見つめている。

「おやおや……。どうやら、妙なお密さんが来たみたいだな。こいつらに局の中を探らせていたんだが、思わぬ相手に引っ掛けたみたいだ」

勝手に独り納得したような表情を浮かべ、魁は紙人形を自分の懷にしまつて言った。そして、すぐさま席を立ち上ると、スーツの上着を取つて羽織り、部屋の出口へと向かつて歩き出した。

「先生。どこへ行くんすか？」

「ちょっと、野暮用が入つてね。この局に、俺以外にも妙な力を持つやつが入つて来たみたいだ。こいつは少し、相手の顔を見ておいた方がよさそうだと思ってね」

悪戯っぽく笑いながら、魁は凍呼と総司郎へ、一緒に来るよう促した。まったくもつて話の流れがつかめない二人だが、ここはとにかく魁に従つて着いてゆく他になさそうだった。

夜のテレビ局というものは、思ったよりも静かだった。収録中のスタジオ内は別なのだろうが、廊下は打つて変わつて落ちついた空気が流れている。

思っていた場所よりも、随分と静かなところだと照瑠は思った。高槻に案内され、紅に同伴する形でテレビ局などに来てはみたが、予想外に静かだったので拍子抜けしてしまった。

これが、収録中のスタジオであれば、製作スタッフや出演しているタレント達によって、実に盛り上がった場が提供されていることだろう。場合によつては、観客席に招待された一般人達の黄色い声も聞けたかもしれない。

「ほええ～……。初めて来てみたけど、テレビ局って広いんだね。それに、思ったより静かだし……」

照瑠の隣では、やはり同じく紅に同伴して来た亜衣が、妙に感心した表情で辺りの様子を窺つていた。いつも彼女らしくない反応だったが、これはこれで構わない。少なくとも、どこかで知つてゐる芸能人の一人でも見つけ、勝手に追いかけて行方不明になられるよりはマシだ。

完全に呆けている亜衣を横に、照瑠は高槻や雪乃が案内する方向へと足を進めた。途中、数人の人間と擦れ違つたが、どれも照瑠の知つているような相手ではなかつた。

恐らく、この局に務める番組作成スタッフなのだろう。いくら東京のテレビ局だからといって、そう簡単に芸能人と会えるわけでもない。出演者よりも番組の制作そのものに携わる人間の方が多いことも相俟つて、芸能人と鉢合せるようなハプニングには、幸いにして巻き込まれなかつた。

いや、それ以前に、雪乃やまゆと言つたテレビに顔を出す人間と

一緒に歩いていることで、照瑠もまた、この局の中では既に部外者として見られていなかもしれない。高槻からもらった入館許可証のようなタグを首から下げてはいたが、通りすがりの誰しもが、照瑠たちに好奇の視線を向けて来るようなことはない。

（それにしても……）

高槻に案内されて先頭を進む紅を見て、照瑠はふと軽い疑問を抱いた。

先ほどから、紅は何も言わないまま、ただひたすらに高槻の後に着いて歩いている。一見していつもの紅と変わりがないが、それでも照瑠は妙に感心せざるを得なかつた。

東京のテレビ局の空気は、照瑠や紅が住んでいる火乃澤町とはまったく違う。それは、彼が育った四国の田舎の村と比べても明らかだ。大都会の中心にある、一種異様とも言える空気の中に、照瑠自身、自分がどこにいるのかわからなくなりそつだというのに。

なんといふか、紅はあらゆる意味でタフなのだと照瑠は思つた。彼とて、テレビ局の中に入ることなど初めてのはず。それにも関わらず、ここまで落ち着き払つて行動できるとは、その神経の図太さに敬服してしまう。

「さあ、着いたよ。ここが、例の番組を撮影するのに使つていたスタジオや」

程なくして高槻が立ち止まり、紅や照瑠の方に向き直つて言つた。そんな彼の正面には、なにやら重たそうな扉がある。きっと、この扉の先に、例のプロデューサー変死事件が起きたスタジオがあるの

だ。

「なんだ。折角来たのに、鍵かかってるじゃん……。」

扉が封印されているのを田畠敏く見つけ、畠衣が拍子抜けしたような顔をした。

「それは仕方ないよ。僕も、実際に見たわけではないけど……。」
の篠原さんが言つには、相当に酷い事故だったらしいじゃないか。
そんな事故が発生したスタジオなんて、そういう、三日で使えるよう
にするつてのも、妙な話だと思つけど……。」

「でも、それだったら、どうやって調べるのさ。部屋に入れないん
だつたら、ここまで来た意味が全然ないよ。」

腰に手を当て、珍しく正論を口にする畠衣。胸を大きく張つて
るのは、自分の小さな背丈を少しでも大きく見せようとしているた
めか。小学生と同じくらいの身長しかない畠衣にとって、こうこう
とき、必要以上に子ども扱いされたくないのかもしれない。

もつとも、現状では畠衣の言つことも確かに正しく、高槻もそれ
以上は何も言えなかつた。とりあえずは紅を局に案内したもの、
いざ現場に入るうとして、その術がない。なんといつも、自分の無
計画さに、少々情けなくもなつてくる。

「どいでいる、嶋本。扉の封印など、俺にはさしたる問題じゃない
……」

田の前で困惑している高槻を見かねてか、今まで黙つていた紅が
すつと前に出た。畠衣と高槻。その二人を押しのけるようにして扉

の前に立つと、紅は静かに目を瞑り、自分の影に意識を集中させてゆく。

「ねえ。あの人、何を始めるつもりなの？」

雪乃の後ろから、まゆが怪訝そうな顔をして尋ねた。照瑠や畠衣、それに雪乃や高津にとつては、紅が不思議な力を使うということも当たり前である。しかし、今日初めて紅に会ったばかりのまゆは、他の者とは違い、紅のことをよく知らない。

無言のまま口に指を当てて制する雪乃を他所に、まゆはその後ろから、じっと紅の背中を見つめていた。

いつたい、あの少年は、これから何をするつもりなのか。雪乃の話では優れた霊能力者ということだったが、その特異な容姿を除いては、年齢も自分たちとさほど変わらない。そんな少年に、いつたい何ができるところなのだろう。

「行け、黒影……」

その目をしつかりと閉じたまま、紅がそっと咳いた。すると、今まで彼の足下で大人しくしていた影が、ゆらゆらと揺れて一気に黒味を増してきた。

紅の赤い瞳が、カツと開かれて正面を見据える。同時に、影は彼の足から音もなく離れ、そのまま流動的な水たまりのようになると扉の隙間に吸い込まれてゆく。

「えつ……。影が……消えた？」

人間の足から影が離れ、さらにはそれが、まるで生き物のように動いて姿を消す。照瑠たちにはお馴染の光景だつたが、まゆだけは大いに驚いて、その目をしばし丸くさせていた。

己の影に宿りし、犬の姿をした下級の神。時に巨大な犬の姿を象り、術者の思つままに行動する紅のパートナー。代々、犬崎家を始めとする赫の一族に伝わりし、究極の外法である存在、犬神。

今、紅がスタジオの中に向かわせたのは、紛れもなくその犬神であつた。扉を封印され、人間が入ることができなくとも、黒影のような靈的な存在であれば侵入することができる。単に情報を集めるだけであれば、犬神だけを向かわせても問題はない。

十分、二十分、それに三十分。本当はもつと短い時間だったのかもしれないが、まゆにはそれが、まるで數十分もの時間を要した出来事のように感じられた。

程なくして、影が部屋の中から戻つて來た。影はそのまま紅の側にやつてくると、再び彼の一部として、その足下に収まつた。

これで、調査は終わつたということなのだろうか。思わず気になり声を掛けそうになつた照瑠と亜衣。が、そう思つて紅の後ろに近づいた途端、あまりに強い殺氣のようなものを感じ、ついその場に踏みとどまつてしまつた。

いつたい、紅はどうしたというのだろう。こんなに張り詰めた空氣の紅は、照瑠も早々お目にかかつたことはない。普段の眠たそうな様子からは勿論のこと、靈的な存在に関係する話をしているときでさえ、ここまで酷い殺氣は感じたことがない。

紅が、ここまで強い緊張と警戒を露わにするとき。それは、彼が向こう側の世界の住人と戦うときだけだ。普段のぼんやりした様子からは想像もできないほどに、戦うときの彼は、まるで獲物を狙う肉食獣の如き凄まじさを發揮する。

「ちよ……。どうしたのよ、犬崎君……」

それが、照瑠の口からようやく出て来た言葉だつた。もつとも、紅はその言葉にも、まったく返事を返そうとしない。ただ、ちらりと廊下の奥に目をやつて、その先にいる者を、鋭く光る赤い瞳で睨みつけた。

「そこにはいる」とはわかっている。いい加減、隠れていないで出てきたらどうだ……？

いつの間にか、紅の影が再び形を変えていた。今度はやけに細長く、しかも不自然な方向に曲がつて伸びている。影は何かを捕まえているようで、よくよく見ると、それは紙で作られた小さな人形のようだつた。

「いやあ……。見つかっちゃつたか」

廊下の奥、ちょうど曲がり角のようになった場所から、ホストのような格好をした男が姿を現した。その隣にいるのは、何やら派手なアロハシャツを着た筋肉質な男。さらに後ろには、長い黒髪をした痩せ気味の少女が立つていた。

「あつ、あの人……」

白いスーツに身を包んだ男を見て、亞衣が叫んだ。

「亜衣、知ってるの？」

「うん。確かに、名前は御鶴木魁。ここ最近で、急に名前が売れだした靈能力者だよ。例の、奇跡空間ミラクルゾーンにも、たまーに出演することがあつたから知ってるんだ」

「靈能力者か……。なんか、それにしちゃ、随分と派手な格好をしてるわね」

亜衣の口から出た職業と、男の格好のあからさまなギャップ。自分の思い描いていた靈能力者との違いに、照瑠は少々面食らつた。

「貴様……。さつきから、俺のことを探つていたようだが……何者だ？」

追及の手を緩めず、紅が魁に向かつて言つた。相手が年上だろうと関係ない。いつも以上に無愛想な表情で、紅は魁に凄むような視線を送つていた。

「おいおい、随分と好戦的だな。俺は別に、君の邪魔をしようつてわけじゃない。ただ、ちょっと同業者の気配がしたんで、接触しうと思つただけさ」

「ふん、どうだかな。それにしては、後ろからコソコソと式神なんかで探りを入れていたようだが？」

影が紅の身体に吸い込まれるようにして縮み、紅は足下に引き寄せられた紙人形を拾い上げた。影に捕らわれていたのは、これまた小さな犬の姿をした紙人形。それはしばらく紅の手の中でもがいて

いたが、やがて紅が拳を握つたことで、人形もまた紙の潰れる音を立てて動きを止めた。

「残念だが、こんな物では俺は出し抜けないぞ。それよりも、貴様の目的は何だ？ 何故、俺の後を付け回した？」

「これは、とんだ御挨拶だね。でも、俺から言わせてもらえば、君の方が部外者だ。そういう君こそ、このテレビ局には何をしに来たのかな？」

「答える義理はない。ただ、一つだけ言つておく……」

丸めた紙人形を魁に放り投げ、紅は魁の鼻先に指先を突きつけるようにして言った。

「俺の仕事の邪魔はするな。今後、俺の後を意味もなくつけ回すようならば、次は容赦しないぞ。俺も……それに、黒影もな」

紅の言葉と共に、足下の影が揺れて広がつた。それがただの影でないところに気づき、魁は仕方なくその場に踏みとどまつた。

「やれやれ、嫌われたもんだねえ……。まあ、別に俺は、どっちでもいいけどさ。俺は俺のやり方で、自分の目的を果たさせてもううからね」

「勝手にしろ。俺は、端から貴様などに興味はない……」

それだけ言つと、紅は音もなく踵を返し、さつさと扉の前を後にした。その後ろを、慌てて照瑠や亜衣たちも追いかける。後に残された魁と総司郎、それに凍呼の三人は、そんな紅や照瑠の後姿を、

何も言わずに見つめていた。

「セヒ……。ヒヒヒで、総ひやん」

紅たちの姿が完全に見えなくなつたヒヒヒで、魁は大きく腕を伸ばし、改めて総司郎に尋ねた。

「あの、赤い皿をした少年……総ひやんは、どう思つた?」

「セヒス……。率直に言つて、よくわからんないつす」

「わからない?」

「はい……。あいつの影に憑いているやつ。あれ、只者じゃないつすよ。それこそ、この前の幽霊屋敷の除霊で戦つた蛇なんか、比べ物にならないくら」……

「だろ? それは、俺も感じていた」

「けど、特に邪悪な感じもしなかつたつす。真つ暗で冷たいのに……何か、変な感じでした」

「なるほどね。まあ、総ちゃんが言つんだつたら間違いはないでしょ。どつちにしても、こいつは少々、厄介なことになりそうだけど

……

足下に転がつた式神のなれの果てを拾い上げ、珍しく魁は難しい顔をして言つた。

いくら単体での力が弱いとはいえ、それでも魁の使役する式神は、

それなりの力を持っている。そんな式神を、いつも容易く捕えて破壊する。これだけのことを行うには、かなりの靈能力が必要とされる。

あれは、恐らくは外法を使う一族の一人だろう。大方、例のプロデューサー変死事件を嗅ぎつけて、さつそく調査に現れたか。だとすれば、とんだ商売敵が現れたものだ。

本当は、自分のペースでじっくり調査をしたかった。しかし、こうなつてしまつては、最早のんびりしているわけにもいかなくなつた。

あの少年が何者であれ、一いちらも西岡の変死を放つておくつもりはさらさらない。それに、後からやつて来た人間に手柄を取られてしまは、最悪の場合、今後の仕事の進退にも関わつてしまつ。

丸められた式神をポケットにねじ込み、魁もまた静かに後ろを向いた。そのまま踵を返し、今しがた歩いてきた廊下を戻つてゆく。後にはスタジオに続く巨大な扉だけが残されて、静寂の中、ひたすらに封印を守つていた。

照瑠が雪乃の暮らしているマンションに着いたとき、既に時刻は夜の八時を回っていた。

オートロックによつて管理された入口をくぐり、照瑠と亞衣、それにまゆの三人は、雪乃に案内される形でマンションの中に入つてゆく。

普段、このマンションで過ぐしている雪乃にとつては慣れたものなのだろうが、それでも照瑠は、いつしか尻込みしてしまつている自分がいるのに気がついた。

閑静な田舎町に住む自分は、当然のことながら、こんな凄いマンションの中に入ったことはない。高級ということにはいささか物足りなさもあるが、オートロックのマンションなど、照瑠の住んでいる火乃澤町では、駅前くらいにしか見受けられない。

また、それ以上に、照瑠は雪乃がこんなマンションで独り暮らしがしているということに、改めて感心せざるを得なかつた。気が弱く、引っ込み思案で大人しい雪乃だが、なかなかどうして芯は強い。

事務所の金で貸し与えてもらつてゐるのだろうが、なんにしても、独り暮らしができるといつのは立派なことだ。こんな都会の真ん中で、親と離れて暮らすことを考へると、照瑠自身、寂しさに耐えかねてホームシックにならないとも限らないといつのこと。

エレベーターを使って五階まで上がり、照瑠たちは五〇七と書かれた扉の前で立ち止まつた。雪乃が持つてゐる鍵で扉を開けると、

そこには落ちついた雰囲気の玄関が広がっていた。

「着いたわよ。みんな、遠慮なく上がつて」

そう、雪乃に言われても、どうとなく遠慮をしてしまつ。それは照瑠だけでなく、まゆもまた同じだった。雪乃と違い、そこまで名の売れているわけでもない彼女にとつては、こんなマンションを事務所から貸してもらえるなど、夢のまた夢である。

「なんか……凄いところに着ちゃったわね……」

「うん……。汚なことひに、髪をつけないと……」

同い年の少女の自宅に招かれているだけだと、なんとかセレブの暮らす一室を覗かせてもらつていてるような申し訳なさが湧いてきた。これが、俗に言うカルチャーショックといつものか。

田の前に広がっているのは、神社の跡継ぎである自分とは無縁の世界。「お邪魔します……」と言いながら、照瑠は馬鹿丁寧に靴を揃え、そつと部屋の中に足を踏み入れる。もつとも、そんな彼女たちの考えを知つてか知らずか、約一名だけ、まったく畏まらずにしゃがまわっている者もいたが。

「わあおー。これが、ゆつきーが東京で暮らしているマンションなんだね！なんか、すつじい『コーディアス』じゃん！」

声の主は嶋本亜衣だ。照瑠やまゆとは違ひ、亜衣は脱いだ靴をその辺に放り出すと、そのまま部屋の奥に走つて行つた。なんとか、高一にもなつて節操がない。身長もそつだが、頭の中身まで近くの小学生と何ら変わりない。

雪乃の案内も待たず、亜衣はすかすかと無遠慮に部屋の奥へと進んで行く。その、あまりに大胆な行動に、周りの誰もが目を丸くしてそのまま固まっている。親しき仲にも礼儀ありといつ言葉を知らないのか、こいつどきの亜衣は、とにかく厚顔無恥なので困りものだ。

「ちょっと、亜衣！ そんなに勝手に入つたら、雪乃だつて迷惑するでしょ……！」

「むう、相変わらず照瑠は固いなあ！ アイドルの住んでるマンションに泊まるなんて、一生に一度、あるかないかつて経験なんだよ！」

駄目だ。照瑠の制止も、亜衣はまるで聞いていない。そのまま更に部屋の奥に入り込むと、亜衣は目敏く書棚にあつた一冊の本に目をつけて、それを豪快に引っ張り出した。

「あつ！ そ、それは……」

亜衣が抜き出した本がなんなのか。気がついた雪乃が慌てて駆け寄るが、もう遅い。本の表紙を見た亜衣はにやりと笑い、雪乃が止めるのも構わずにページを大きく開いて中を見た。

夏の砂浜と、青い海。本の中身は文字ではなく、どこかの浜辺で撮つたと思われる写真だつた。その写真の中央では、白いワンピースに麦わら帽子を被つた少女がこちらを向いて微笑んでいる。妙にカメラを意識した田線で、しかし見る者に癒しを与える爽やかな笑顔。他でもない、雪乃本人を撮つたものだ。

「へえ……。ゆつきー、写真集なんて出してたんだ。歌の方ばっか

り気にしてたから、全然気がつかなかつたよ

「う、うん……。でも、亜衣ちゃんが見ても、あまり面白いものじやないと思つよ。だから……もつ、しまつてくれないかな……」

「なんで？ 別に、私が見たつて減るもんじやないじやん。それに、まさかエロ写真集つてわけでもないだろ？」

隣で恥ずかしそうに俯いている雪乃を他所に、亜衣は慣れた手つきでペラペラとページをめくつてゆく。写真是様々なアングルから撮影されており、ページをめくつてゆくだけで、まるでちょっとしたスライドショーを見ている気分にさせられる。

砂浜を背に、こちらに手をふつている雪乃。岩場の影で体育座りをして、少しばかり照れ笑いをしながら丸くなつている雪乃。そんな写真の数々が、流れるように亜衣の目の前を通り過ぎてゆく。そんなというか、アイドルの写真集としては、随分と爽やかだ。ともすれば際どいポーズを惜しげもなく晒し、それによつて話題を作つとするグラビアアイドル達のものとは赴きが違つ。

幼い頃の雪乃を知る亜衣にとつて、これはある意味では実に自然な流れだと思つた。亜衣の知る限り、雪乃は決して目立ちたがりな人間ではない。今ではステージの上で大歓声に囲まれて歌を歌えるまでに成長したが、本質的に大人しい少女であることは変わりない。

柔らかい物腰と、およそアイドルらしくない地味な性格。そんな雪乃にとつては、この程度の写真であつても、やはり見られるのが恥ずかしいということだろうか。

そんなに恥ずかしがるならば、最初から写真集など出さなければ

よいのではないか。そう、亜衣が思つたとき、ページをめくる彼女の手がぱたりと止まつた。

「えつ……。」「、」「れ……」

今まで流すようにして見ていた亜衣の目が、目の前に現れた写真に釘付けとなる。夏の砂浜を背景にした、先ほどと同じような一枚の写真。だが、背景は同じでも、そこに映し出されている雪乃の姿は、今までのそれとは大きく異なつていた。

そこにいたのは、他でもない水着姿の雪乃だつた。水着は身体の前面を覆つようなタイプの物で、決して露出度が高いわけではない。また、そこまでいやらしいポーズを取らされているわけでもなく、浜辺で遊ぶ、年相応の少女を映したものになつてゐる。

水着撮影とはいゝ、雪乃の持つ本来のイメージを損ねないよう、最大限に配慮がなされたであろう一枚。だが、問題なのは水着そのものではなく、水着によつて際立たれた、彼女のスタイルそのものだつた。

「嘘……。ゆつきーつて、脱いだらすぐかつたんだ……」

呆然とした表情で、亜衣がとんでもないことを言つてのけた。別に、ヌード写真ではないにも関わらず、亜衣にそれだけの台詞を言わせてしまつ。それほどまでに、雪乃のスタイルは同年代の少女から見ても羨ましくなるものだつた。

「うわっ、本當だ！ 雪乃つて、意外と着痩せするタイプなのね……」

「……」

こつ之間に部屋に上がったのか、亜衣の後ろからまゆが写真を覗きこんで呟いた。まゆは雪乃よりも一つ年上であったが、年齢と体型は必ずしも比例しないところによれば、田の前にいる亜衣を見ていれば明らかである。

手足もウエストも細く、それでいて痩せすぎといつわけではない。実にしなやかな肢体を持ちながら、出るべき部分はしっかりと出ている。水着姿を売り物にするアイドルの中には、作り物めいた容姿を持つ者も存在するが、雪乃に限って自分の身体に手を加えているようなことはないだろう。

ステージ衣装であればいざ知らず、普段の雪乃は割とゆったりとした服を好んで着ている印象がある。それこそ、あえて身体のラインを隠してしまえるような、柔らかい服装をしていることが多かった。そんな服に隠されて、今まででは彼女のスタイルがどのようなものなのか、周囲もまったく意識してはいなかつたのだ。

「もう……。だから、見ないでって言ったのに……。」

数秒の間、食い入るようにして写真を覗きこんでいた亜衣とまゆ。そんな一人に向かって、雪乃は少しばかり泣きそうな顔になつて言った。もう、これ以上は我慢できない。そう叫ばんばかりに、彼女の顔は真っ赤に染まつてしまつていた。

やはり、根が引っ込み思案な雪乃にとって、水着の撮影などは少々辛いものがあつたのか。しかし、それではなぜ、彼女はこんな写真集を自分の部屋に置いておいたのだろう。仕事で断れなかつたとはいえ、そんなに恥ずかしいのであれば、最初から置いておかなけばよかつたのに。

「ねえ、ゆっきー。そんなに恥ずかしいんだつたら、なんでこんな写真集、わざわざ部屋に置いておいたのさ。それに、そもそも何で、水着撮影なんて引き受けちゃったの？」

「それは……お仕事だつたから、やつぱり断れなくて……。それに、折角撮つてもらつて、本にまでしてもらつたんだし……」

「でも、人に見られるのが嫌だつたら、そんな写真集なんて捨てちやえ、いいじやん。だいたい、私たちに見られても恥ずかしいようなもの、ファンの男どもに見られるのは平氣なの？」

「うん……。ファンの人は、顔も知らない誰かだから、まだ我慢できるけど……。代わりに、知つている人に見られちゃうのは、やつぱり何か恥ずかしくて……」

別に、やましいことなど何もないのに、既に雪乃是耳の先まで赤くしていた。

赤の他人に見られるのは構わないが、顔見知りに見られるのは恥ずかしい。そんなものなのか、と亜衣は思う。

自分だつたら、やはり見ず知らずの男連中に水着姿の写真を見られ、あれこれと妄想される方が気持ち悪い。この写真集を作つた側は、別に水着メインで写真を撮つたわけではないだろう。が、手にした者が何を考えるかなど、完全に相手の自由である。

もつとも、雪乃とは違つて未だ小学生のような亜衣の体型では、誰も見向きもしないことだろう。考え方によつては一部の人間に需要がありそうだが、それはそれで、やはり亜衣にとつても気持ちが悪い。

「はいはい。お約束のセクハラはそこまでよ、亜衣。私たちは別に、雪乃の家に遊びに来たわけじゃないんでしょ」

なにやら気まずい空気になつたのを察してか、照瑠が亜衣の頭の上から手を伸ばし、写真集を取り上げた。本を閉じる際、照瑠の目にも一瞬だけ、雪乃の水着姿が目にに入った。

（へえ……。まあ、確かに亜衣の言つ通り、ちょっと羨ましくなつちやうかな……）

心の中で呟きながら、照瑠は何も気にしていないような素振りをしつつ、写真集を書棚に納めた。

照瑠自身、周りからモテルのような体型だと言われることはあるが、それでも雪乃が羨ましい。自慢ではないが、身体のバランスは、確かに自分でも良い方だと自覚はしている。が、それでも写真にあつた雪乃のように、男女問わず魅了するようなものはない。自分は単にスレンダーなだけで、胸だけならば確実に雪乃に負けてしまつ。

気にしないようにとは思つても、照瑠はいつの間にか自分の胸元に手を添えているのに気がついた。そのことを周りに気取られないようにしつつ、照瑠は近くにあつたクッショוןに腰かける。他の者たちも、そんな照瑠につられたのか、次々にベッドやクッショוןの上に腰を降ろし始めた。

「えつと……。とりあえず、その辺でゆづくつして。四人もいると、なんか狭いかもしねりいけど……」

まだ、少しばかり恥ずかしさが抜けないのだろうか。雪乃の声が、

いつもより小さい。色々な意味で気まずくなってしまったのか、照瑠も巫衣も無言のまま頷いただけだ。

「ねえ、ところでも……」

場の空気の流れを変えるためか、唐突にまゆが切り出した。彼女は別に雪乃の家に泊まる必要などなかつたが、気づけば成り行きから同行する羽目になつていた。

「あの、犬崎紅つて人、いつたいどんな人なの？ 私は初めて会つたから、よく知らないんだけど……。雪乃は、あの人と知り合いなの？」

「えつ……。まあ、確かに、知り合いは知り合いなんんですけど……。でも、そんなに詳しくは知らないです。以前、まゆさんみたいに変な事件に巻き込まれたとき、犬崎君に助けてはもらいましたけど……」

…

最後の方は、少しだけ言葉を濁して答える形になつた。

そう言えば、まゆと初めて出会つたときも、雪乃はこのような言い方をしていた。恐らく、本当に思い出したくないくらい、嫌な事件に巻き込まれたのだろう。

雪乃が嘘を吐くような人間ではないことは、今までの流れからしてまゆにもわかる。彼女とのつき合いは浅かつたが、それでも雪乃が紅を心の底から信用していることくらいなら、まゆも十分に理解できた。

もつとも、単にそれだけの理由で、紅に対する不信感が完全に拭

いされたわけではない。まゆの中では、未だにあの犬崎紅という少年に対し、なんだか妙な違和感のようなものが残つていて仕方がない。

別に、彼の力を信用していないわけではない。雪乃や亜衣、それに照瑠が、嘘を言つていないといふこともわかつてゐる。ただ、あの初対面での無愛想な印象と、燃えるように赤い一つの瞳。およそ人間離れした容姿と無遠慮な態度が、まゆにとつて紅を近づき難い人間にしてしまつていた。

「まあまあ。ゆつきーも犬崎君とは去年の暮れに会つただけだし。こには一つ、私が説明してあげましょー」

ようやく、自分の出番が来た。そう言わんばかりの口調で、亜衣が身を乗り出してきた。

「犬崎君はね、この都市伝説マニアの亜衣ちゃんをも唸らせる、最強の靈能力者なんだよ。自分の影に犬神なんてものを飼つてるし、他にも幽霊をやつつける刀とか、凄い武器をたくさん持つてるんだ！ それを使って、悪霊でも妖怪でも鬼でも悪魔でも、バツサバツサと斬り捨てちゃうくらい強いんだよー！」

「へ、へえ……。なんか、ちょっと普通じゃ信じられないような話だけど……」

「まあね。でも犬崎君の力は、正真正銘の本物だよ。この私が言つんだから、絶対間違いなしつてねー！」

自分のことではないのに、腰に手を当てて亜衣は胸を張つた。もつとも、そんな説明の仕方では、返つて紅の信用を落としているこ

とで、本人はまるで気がついていない。

「Jのままでは、紅に対して妙な誤解を抱かれたまま終わってしまふ。そう思つた照瑠は、すかさず亜衣の頭を小突いて、その行動をたしなめた。

「痛つ！ もう、なにすんのさ、照瑠……」

「なに、じゃないわよ。本物のお化けや幽霊を見たこともない人に、そんな説明したって胡散臭いだけじょ？」

「もう、失礼な。私はただ、本当のことを言つただけじゃんか！！」

「いや……。むしろ、かなりあなたの主觀が入り混じつた、誇張入りまくりの説明だったと思うけど……」

あくまで自分が正しいと譲らない亜衣に、照瑠は少々呆れた顔をして呟いた。オカルトや都市伝説に関する亜衣の知識が凄いのは認めるが、ときにこうして話を盛るのは考え方のだ。巷に溢れる都市伝説の多くは、きっと亜衣のような人間が、こうして嘘と誇張を織り交ぜて話をした結果、生まれてしまうものではないかと思う。

「どうあえず、訂正の意味も込めて、私の方から説明をせてもうるわよ。えつと……篠原まゆさん、でしたよね」

「ええ、そうよ。雪乃とは比べ物にならないけど、一応はテレビに出る仕事をやつてるわ」

「九条照瑠です。改めて、よろしく」

まゆの方に向き直り、照瑠は軽く会釈した。そう言えば、東京に来てから色々と慌ただしく、とともに自己紹介さえしていなかつたのを思い出した。

「えつと……。それじゃあ、犬崎君について、私の方から誤解のないように説明させてもらいますね。亜衣の言つてることば、半分はホラ話程度に思つてくれても構いませんから」

ホラ話と言われて亜衣がすかさず不機嫌そうな顔になつたが、照瑠は無視して話を続けた。ここでも亜衣に構つていては、話がいつまで経つても先に進まない。

「亜衣の言つていたことですけど、とりあえず、半分は本当ですよ。ただ、ヒーロー番組の主人公みたいなイメージとは、ちょっと違いますけど」

「確かにそうよね。」
「ちや悪いけど……」
「あの人、随分と無遠慮で無愛想な感じだつたじゃない。なんか、こつちの方が気が引けちゃつてさ」

「」
「めんなさい。犬崎君、人と話すときは、いつもあんな感じなんです。学校にいるときも寝てばっかりだし……なんていうか、不器用なんですよね」

「不器用、か……。そう言われれば、そんな感じもしないではないけど……。でも、それだけで、あんなに刺々しい感じになれるものなのかな？」

カフェで話をしていたときの姿を思い出しながら、まゆが照瑠に尋ねた。照瑠と違い、まゆは紅のことを殆ど知らない。そのため、

単に不器用なだけだと言われても、どうしても納得がいかなかつた。

「まあ、まゆさんの『いつ』とも、確かにわかる氣はしますけどね…」

…」

少しばかりの間を置いて、照瑠が続けた。照瑠自身、初めて紅に出会つたときは、嫌悪感の方が大きかつた。尊大で、ぶっきらぼうで、口も悪い。亞衣とは別の意味で一般的な常識に欠け、人との関わりを極度に避ける。おまけに、こちらが相談事を持ちかけても、報酬の話をちらつかせて断るうとする素振りさえ見せる。

正直なところ、照瑠から見ても、紅の態度には色々と問題があるとは思つた。こと、初対面の相手に対する横柄な態度には、なんとかしてもらいたいとも思つてしまつ。

だが、それでも照瑠は知つてゐる。紅が、本当は誰よりも、人の命を大切に思つてゐるということを。闇の中に蠢く向こう側の世界の住人たちと戦つとき、その優しさと強さの片鱗を垣間見せるということを。

「まゆさんが、犬崎君のことをどう思つてゐるかは、なんとなくわかります。でも、あれでも犬崎君、優しさといつもあるんですよ」

「優しいといつ？あの、幽霊みたいな男が？」

「はい。さつきも言いましたけど、犬崎君は、単に不器用なだけですか。そりや、私から見ても、ちょっと改めて欲しいと思う部分はありますけど……。それでも、あれはあれで、色々と考えているんだと思います」

紅が他人に冷たい素振りを見せる理由。それは一重に、自分の立場をわきまえてのことではないかと照瑠は思っていた。

向こう側の世界の住人たちと関わることは、その身に危険を伴うことが多い。何の力も持たない一般人が彼らの領域に踏み込んだ場合、その力に抗える保証は皆無に等しい。

それがわかつていてるからこそ、紅はあえて、人との関わりを必要最小限に抑えようとしているのではないか。自分に関わることで、他の人間が向こう側の世界に深く引きこまれてしまうこと。それを何よりも心配して、あのような態度でふるまっている。そう、思うのだ。

（でも……。それにしては、今日の犬崎君は変だつたな。なんだか随分と、苛々しているよつな……）

そこまで考えて、照瑠は唐突に今日の紅の様子を思い出した。東京に来るまでもそつたが、あの陰陽師 亜衣の話では、御鶴木魁とか言ったか に出会ったときは、いつになく苛立ちを隠せない様子で対峙していた。なんというか、意味もなく敵対心をむき出しにして、周囲に当たり散らしている。そんな風にも受け取れた。

紅の口が悪いのは、今に始まつたことではない。しかし、同時に彼は、決して無意味に当たり散らすよつなことはしない人間だ。

では、今日の紅のあの態度。あれは、いつたい何なのか。あの陰陽師が、今回の事件の重要な鍵を握っているのか。それとも、何かまったく別の理由があるのか。それは、照瑠にもわからなかつた。

結局、自分は紅のことを知っているようで、その実、何も知らないに等しいのだ。彼と会って、そろそろ一年近くが経とつしていたが、性格以外は何もわかつてゐることがない。

心の中に、なにやら寂しさにも似た感情を覚え、照瑠は自分でも意識しない内に自分の手を胸元に添えていた。それに気づいて周りを見ると、他の三人の視線が自分に向かられておりハツとした。

「ねえ、照瑠ちゃん。急に黙り込んだりして……どうしたの？」

「え？ あ、『ごめんな、雪乃。ちょっと、考え方してただけだから』

「考え方？ それって、犬崎君についてのこと？」

「うん、まあね。あいつ、今回は妙に乗り気で、いきなり東京に行きたいなんて言い出すし……。思い返してみたら、なんだかちょっと、いつもと違つなつて思つたのよ」

「ふうん……。ところで、その犬崎君なんだけ……今、なにやつてるの？」

「さあね。なんだか、独りで考えたいことがあるとか言って、どこかをほつつき歩いてるわよ。明日になつたら連絡するとか言ってたし……それまでは、雪乃の家で女子会でもしながら、気長に待つ他ないんじやない？」

両肩をすくめ、照瑠が雪乃に答えた。紅が今、どこで何をしているのか。それは照瑠だけでなく、この場にいる全員が知らなかつた。

テレビ局を出た後、紅は照瑠たちに別れを告げて、独りで夜の街に出て行つた。泊まる場所は、カフェで高槻に言つていたように、漫画喫茶でもはしじするつもつとのことだった。

だが、それにしても、紅は何を考えているのだろう。彼のことだから、夜の街を一人で歩いていたとしても、不思議と心配はないと思われる。問題なのは、彼が行き先さえ告げずに自分の前から消えたこと。自分の考えも話さずに、妙に追い詰められたような表情をしていたことである。

自分にとって、犬崎紅とはなんなのだろう。ふと、そんな疑問が照瑠の中に浮かんできた。

紅が火乃澤町にやつてきてから、自分もまた妙な事件に巻き込まれることが多くなつた。今までは靈的な存在などとは無縁の生活を送つていたが、その価値観は、彼と出会つてからの数カ月で、物の見事に覆された。

もつとも、それで紅を恨んでいるかというと、それは違つと照瑠は思った。時に妙な事件に遭遇することはあっても、彼が照瑠を救つてくれていたのは紛れもない事実。そして、そんな紅のことが、なぜか気になつていて、自分がいるのもわかつていた。

結局、自分は紅に、何を望んでいるのだろう。そして、自分にしつて、犬崎紅という存在はどのような意味を持っているのか。

喉元まで出がかつた言葉を飲み込んで、照瑠はそれを心の奥にしまいこんだ。本当は、答えなど既に出ているのかもしない。しかし、簡単な言葉で片付けてしまえるほど、自分の紅に対する気持ちを安っぽいものにしたくはなかつた。

夜の東京に吹く風は、東北のそれとはまるで違っていた。季節外の黒いコートに身を包んだまま、犬崎紅は、ネオンの輝く街中を独り歩いていた。

空気が重い。今の自分の気持ちがそう感じさせるのかもしないが、それだけが原因ではないだろう。夜でも眠らないこの街の空気は、火乃澤町に比べても随分と淀んでいる。

それは、絶え間なく通り過ぎる自動車の排気ガスによるもののか。それとも、通りに投げ捨てられた煙草の吸殻から、かつては赤い光と共に放たれていた紫煙によるものなのか。

その、どちらも正解であり、どちらも間違いであると紅は思った。田舎に比べて都会の空気が清んでいないことなど、当然のことながら知っている。問題なのは、この街の中に漂う空気が、実際に様々な欲望に満ち溢れているということだった。

心病みし者が向こう側の世界に触れるとき、病みは闇となり現実を侵蝕する。

外法使いとして生きる紅にとっては、既にお馴染となつた言葉だ。人の荒んだ心、歪んだ欲望、狂気に走るしか他になかった、やり場のない悲しみや苦しみ。そういう感情を抱えた者が、闇の力を持

つた忌むべき神靈に觸わったとき、心の闇は現実の世界に、具体的な恐怖の形をとつて現れる。危険なのは向こう側の世界の住人そのものではなく、それを呼び寄せ、闇を現世に開放してしまつ、人間の心の弱さそのものなのだ。

では、そんな闇を心に抱えた人間が、果たしてこの大都會にはどれだけ存在しているのだろう。そんな疑問が、ふと頭をよぎる。

魔都、東京。初めて訪れたこの国の首都を、紅はいつしか自分の中で、そう呼んでいた。

金や名譽、権力などを求め、それを手にするために手段を選ばない者がいる一方で、生まれながらにして様々な不幸を抱え、この都會のど真ん中で、常に泣きながら苦しい人生を送らねばならない者も存在する。その数は、紅の知る田舎の村や街の比ではないだろう。人が多く集まるが故に、そこには多くの喜びや楽しみと同様く、無数の悲しみや痛み、苦しみもまた集まつてくる。

これだけ多くの闇が集うのであれば、向こう側の世界の住人たちは、さぞ獲物に苦労しないことだろう。昔から土地に巢食つていた魑魅魍魎の類は、都市部の発展と共に姿を消して久しい。が、人を魔道に誘う者は、何も古来より存在する神靈だけとは限らない。

人が向こう側の世界に触れるとき。それは別に、禁忌を犯して神の怒りに触れたときだけを指すのではない。人が、その恨みや妬み、悲しみの感情を内に溜めこみ、それを大いなる負の力として一度に開放する。即ち、呪いという忌まわしき行為に手を染めたときこそが、最も恐ろしい闇を呼ぶ可能性がある。

呪いと祟り。この一つは、似ているようであつたく異なるものだ。

祟りはあくまで人間の身勝手な振る舞いに神が怒り、半ば制裁のよ
うな形で降りかかる物。それに対し、呪いは人が人に仕掛ける、恐
るべき怨念を込めた靈的な攻撃なのだ。

刃物を持つて人を刺すか、それとも呪詛によつて呪い殺すか。違
つてゐるのは方法だけで、人を傷つけ、場合によつては殺してしま
う行為という点では相違がない。そして、心の病んだ者を言葉巧み
に誘惑し、そういういた行為に手を染めるように仕向ける者を、紅は
一人だけ知つてゐる。

闇の死揮者コンダクターって名前、聞いたことある？

昨年の夏、知り合いの退魔具師たいまぐしである鳴澤皐月の口から出た言葉
だ。この世界には、呪いの道具を作つて心の病んだ人間に手渡し、
現世に闇を噴出させようとする者がいる。自分は決して手を出さず、
あくまで道具を渡すだけの傍観者に徹していることから、裏で事件
を操る黒幕的な意味合いを込め、そう呼ばれている。

あのときは、紅も単なる噂話としてしか考えていなかつた。しかし、今となつては紅もまた、いつしか死揮者の存在を強く信じる者
の一人になつていた。

実際、本当に闇の死揮者なる者が存在するのか。それは、紅にも
断言できない。ただ、今年の二月に起きた 鏡さま事件 以来、紅
が本格的に死揮者の存在を意識し始めたのは確かだ。昨年の夏より
立て続けに起きた様々な事件。その殆どが呪いの儀式に起因するも
のだったことを考へると、死揮者の話を単なる都市伝説として片付
けるわけにもいかなかつた。

人気のない路地裏へ続く角を曲がつたところで、紅は道端に転が

つていた空き缶を無造作に蹴り飛ばした。乾いた金属音と共に、空き缶はビルの壁に激しくぶつかり路地の向こう側へと弾けて行く。それを見ながら拳を握り、紅はそれを、歯噛みしながらコンクリートの壁に叩きつけた。

拳の先から、じんわりと痛みが伝わって来た。自分でも珍しく思つてしまつほど、今の紅は湧きあがる苛立ちを抑えきれていなかつた。

先ほどから感じている重苦しい空氣。それは、この東京の街を抜ける、淀んだ風のせいだけではない。増してや、そこに住んでいる、穢れた欲望を持つた住人たちのせいでもない。

自分の苛立ちの原因。それは、自分自身が一番良く知つている。焦りにも似た感情に支配され、自分でも周りが見えなくなつていて。そのことが、何よりも許せず、また歯がゆくも思えた。

長谷川雪乃からの依頼として受けた、今回の事件。これが果たして何らかの靈的な存在によるものなのか、紅も確証は持てていない。それにも関わらず、呪いの可能性があるというだけで、わざわざ東京まで足を運んだ。その理由が、あの闇の死揮者ないとすれば、それは嘘になる。

呪いの疑いがある事件に関われば、もしかすると死揮者の足取りをつかめるかもしれない。今までは後手に回るだけだったが、足取りさえつかめれば先手も打てる。敵の正体が判明すれば、こちらから攻撃を仕掛けることも可能となる。そんな感情に支配され、気づけばさしたる確証もなく、東京のど真ん中まで足を運んでいる自分がいる。

もしかすると、今回の事件は単なる事故なのかもしない。仮に何らかの呪いだつたとしても、その裏に死揮者の存在があるかどうか、その証拠もない。

客観的に考えれば考えるほど、今の自分が小さく思えて仕方がなかつた。相手は存在するかどうかさえ定かではない、都市伝説のような存在だ。その上、存在していたらいで、その正体も目的も不明。神出鬼没に現れる謎の相手を、いつたいどうやって捕まえればいい。

呪いに関する事件を解決し続ければ、いつかは死揮者に近づける。その考えが、八方塞がりの現実から逃げているだけだと、紅も薄々は感づいていた。ただ、それ以外に現状で自分のできることがなく、そのことが、一層の苛立ちと焦りを生んでいる源にもなつていたが。

「くそつ……。いつたい、何をやつているんだ、俺は……」

誰に聞かせるともなく呟いて、紅は再び人気のない路地裏を歩き出す。別に、当てなどあるわけでもない。外の空気を吸つて頭を冷やさねば、それこそ照瑠や亜衣に当たり散らしそうで嫌だつただけだ。

外法使いとして、赫の一族の末裔として、自分は今まで様々な相手と戦つてきた。が、こつまでして苛立ちと焦りに支配されたことは、後にも先にもまつたくなかつた。

自分のやつていることは、本当に正しいことなのか。己に対する贖罪と称して退魔師の仕事をしてはいるが、それにしても、一人の相手にこだわり過ぎているのではないか。そう思い、ビルとビルの合間から、ふと空に浮かぶ月を見上げたときだつた。

月明かりに照らされて細長く伸びた影が、急にざわついて紅に知らせた。夜の闇よりも深い黒に染まつた影が、辺りの様子を警戒するかのようにして揺れている。その形は既に人のものではなく、いつしか大きな犬の姿を思わせるものに変貌していた。

（誰だ……。誰が、俺を見ている……？）

自分の背後から感じる奇妙な視線。その存在に気づき、紅の赤い瞳が険しさを増した。

後ろから、誰かが自分の後をつけている。この路地裏に入つたときから軽い違和感を覚えてはいたが、もしかすると、かなり前から尾行されていたのかもしれない。

こんな夜更けに、いつたい誰が自分の後をついているのか。テレビ局で出会つた陰陽師かとも思ったが、直ぐにその考えは否定した。

背後の気配は、式神のような靈的な存在ではない。あれは間違いない、生きた人間のそれである。が、ここまで隙のない氣を感じたことは、当然のことながら紅にもない。

向こう側の世界の住人たちとはまた違う、戦い慣れしたプロの空気。殺し屋のような人間がいるとすれば、こんな氣を発するとでも言つのだろうか。百戦錬磨の戦闘のプロを窺わせる、幽靈とはまた違つた恐ろしさがある。

油断なく後ろを振り返りながら、紅はそつと背中の棒に手を伸ばした。梵字の書かれた白布に封印されし、貪欲な闇を宿した一振りの刀。闇薙の太刀の柄をしっかりと握り、紅は己の背後から迫る、

謎の気配と対峙した。

深夜のテレビ局には、昼とは違ひ閑散とした空気が流れていた。

喫煙所の一角にある椅子に腰かけて、高槻護は今しがた自販機から買ったコーヒーを飲み干し、ふつと大きな溜息をこぼした。

空腹の胃に、ブラックの缶コーヒーが染み渡る。煙草を吸わない高槻にとって、これは目覚まし代わりになる数少ない刺激の一つだ。

「やれやれ……。こんな時間になつたけど、結局は何もわからぬじまい……」

安物の腕時計を見ながら、高槻は誰に言つともなく呟いた。時刻は既に夜の十一時近くになつており、人の気配もまばらだった。

昼間は様々な番組の撮影で賑わうテレビ局も、夜になれば一転して静寂に包まれる空間となる。未だ、ビルに残つて仕事をしている者たちもいるが、半数以上の人間が、既に仕事を終えて帰宅している。

飲み終えたコーヒーの缶を傍らに置き、高槻は今日の出来事を振り返つてみた。

犬崎紅を局に案内し、封印されたスタジオの調査をさせてから数時間。高槻は自分なりに、今回の事件に関して調べてみた。

生放送の収録中に、プロデューサーが変死する。そして、関係者は貝のよつこ口を固く閉ざし、局側からも緘口令のようなものが敷かれている。公には目撃者の精神的な面を考慮した措置との話だが、確かにこれは、高槻も疑念を抱かざるを得ない。

テレビ局側が、じつも事件の全容を隠蔽しようとする理由は何か。心靈現象の有無に関係なく、もしかすると、何かともないことが裏で起きているのではないだろうか。だとすれば、それらの件に雪乃たちを巻き込ませないようにすることが、彼女のマネージャーを務める高槻の仕事だ。

もつとも、そう頭ではわかつていても、高槻にできることなど我々たるものでしかないのもまた現実だった。実際、紅と別れてから自分なりに調査を進めてはみたが、これといって進展はない。

やはり、自分だけでは限界がある。警察や探偵、じゃあるまいし、そつそつ簡単に事件の裏まで探れるはずもない。

今日は、そろそろ引き上げて、明日また紅に話をしてみよ。もし、幽靈のような存在が相手なのであれば、自分にできることなど限られている。そう思い、高槻が立ち上がりつとめたときだった。

「すいません。隣、いいですか」

いつの間にか、自分の横に一人の男が立っていた。年齢は自分と同じか、それよりも少し若いくらいだろうか。線の細い身体つきをしており、どこにでもいそうな平凡な顔をしている。このビルにいるということは局の関係者なのだろうが、芸能界に通じている人間とは違った空気を持っていた。

「なんだい、君は？ 僕はそろそろ帰らうと思つていたところだし、邪魔だつたら退くけど？」

「いや、そうじやないんです。ただ……少し、お話ができないかと思いまして……」

こきなり話を振られ、高槻はしばし困惑した様子で男の顔を見た。いつたい、彼は何者だ。なぜ、なんの目的があつて、自分に話など振つてくるのだろう。

「ああ、別に構わないよ。僕に断る理由はないからね」

何やら胡散臭いものも感じたが、それでも高槻は、とりあえず男の話を聞いてみることにした。男の目的は不明だつたが、とりあえず話を聞いてみないことには始まらない。

「俺、宮森つて言います。例の、生放送がぶち壊しになつた番組で、ADやつてました」

「生放送がぶち壊しつてことは、君は 奇跡空間//ラクルゾーン の制作に関わつっていたのかい？」

「ええ、まあ……。もつとも、ADの自分ができることなんて、ただの雑用に過ぎないものでしたけど……」

宮森と名乗つた男は、最後の方だけ言葉を濁して鼻の頭をかけていた。謙遜などではなく、彼の言つてることは事実なのだと高槻も思つた。実際、ADという役職は雑用係のよつなもので、何でも

「俺、今日になつて、あの番組で起きた事故のことを調べている人がいるつて聞いたんです。それで……いろいろと局の中を探しまわつて、とつとつあなたを見つけたんです」

「へえ、そんなんだ。局の側としては、あまり公にしたくないみたいなことがあつたから、僕もできるだけ慎重に動いていたつもりなんだけれどね。やっぱり、どつかでドジ踏んだかな？」

「いや、そんなことはないと存りますよ。それに、俺は別に、あなたのことを探めるつもりで探していたわけじゃないですしち……」

「だったら、いつたい何の用だい？ 番組関係者が僕に直接話をしに来るなんて、正直、口止め以外に考えられないんだけど……」

訝しげな視線を送りながら、高槻が富森に尋ねた。口止めでないのであれば、いつたい何の用だろつ。それも、番組のディレクターであればまだしも、ADが個人的に用事など、高槻にはまったく見当もつかない。

「あの……俺の関わつていた、例の番組のことなんですけど……」

徐に、富森が下を向いたまま話し出した。周囲の空気が急に重たくなつた感じがして、高槻は思わず身構えたまま、富森の顔から目を離すことができなかつた。

「あれ、もともとは、心霊物やオカルト物を中心とした番組じゃなかつたんですよ。日本に限らず、世界のあちこちで起きている感動的な奇跡。それこそ、奇跡の生還エピソードから、キリスト教の聖

人が起こした神秘まで、超常現象も含めた感動のHピソードを取材して放送する番組だつたんです」

「へえ、そうなのか。そいつは、僕も初耳だ」

富森の話に、高槻は本氣で驚いた様子を見せて言った。心霊番組だとばかり思つていが、ミラクルゾーンは、元々は随分とまともな番組だつたらしい。それこそ、富森の話を信じるならば、海外取材をさせてくれるくらい、製作費にも恵まれた環境にあつたのだろう。

初めは単に、感動的なエピソードを奇跡と称し、それを取材して世に伝えるだけの番組だつた。それが、何を間違つたのか、いつしかお化けや幽霊などをネタにした、オカルト番組へと変わつてしまつた。その理由がなんなのか、もしかすると、富森は知つているのかもしれない。

「最初、番組が放送され始めたときは、今とはディレクターが違つていたんです。室井さんじゃなくて……かみいゅい神居結衣つていう、女人がディレクターでした」

「女人でディレクターか……。きっと、随分と仕事のできる人だつたんだろうね」

「はい。この業界では、変な差別意識を持つてゐる輩も、少なからずいますからね。俺も、まだまだ未熟ですけど……それでも、男に生まれただけ、まだマシな扱いを受けてゐると思います」

途中、言葉を濁しつつも、富森は最後まで高槻に言つてのけた。その言葉の意味するものが何か、高槻もわからないわけではない。

職種や業界によつては、女性が露骨な差別を受ける職場もある。

テレビ業界が一概にそうだとは言えないが、中には旧態依然とした考えに縛られている者がいることも確かだ。アイドルのマネージャーを務めている高槻も、それは日々の仕事から、確かに感じたことだつた。

まだ幼い少女たちを一人の人間として見ることをせず、その美貌を用いた商売道具程度にしか考えない。アイドルは使い捨ての駒であり、プロダクションの思い通りにできる物である。そんな考えにとらわれた結果、最終的には己の身の破滅を招いた人物を、高槻も知らないわけではない。

かもがみゅうじ
鴨上 裕司。かつて、雪乃が所属していたプロダクションの社長であつた男だ。表向きは優しく思いやりのある男を演じつつ、裏では雪乃たちのことを、単なる消耗品としてしか考えていなかつた。そして、己の歪んだ欲望を満たすために禁じられた術に手を出して、最後は化け物に成り果てた上で、犬崎紅に退治された。

出演者と制作者では立場も異なるのだろうが、やはり、業界内部に差別的な感情を抱いている者がいるのは間違ひない。きっと、宮森の言う神居結衣という女性も、かなりの苦労をしながら仕事をしていたのだろう。それこそ、女性ならではの、高槻などにはわからない苦労があつたに違ひない。

「（）から先は、俺の単なる妄想みたいな話になります。だから、もし気を悪くしたら、適当に流してくれて構いません」

なにやら意味深な言葉を前置きに、再び宮森が話しだした。先ほどと同じように、視線は下に向かたまま、重く静かな口調で話していた。

「もう、一年ほど前の話ですけど……。神居さん、皿上で首を吊つて自殺したみたいなんです。仕事のストレスが原因つて」と、片付けられてしまつたみたいで……」

「自殺!? そいつはまた、穏やかな話じゃないな……」

「はい。俺も、後から番組の制作に関わったんで、詳しいことは知りません。ただ、それからディレクターが今の室井さんに変わつて、番組の方向性もガラリと変わつてしまつたんです」

「なるほどね。まあ、感動的な奇跡体験なんてものを探し出して、それを視聴者に訴えかけるのは、確かに女性の方が向いていたのかもしれないな。正直、僕みたいな男でも、毎週のように感動のHピソードを集めて編集するなんてこと、なかなかできそうにない」

「暗い面持ちの富森を励ますつもりで言つた高槻だったが、富森はそれには答えなかつた。だが、それでも少しあは気が晴れたのか、今まで下にばかり向けていた視線を、高槻の方へと向けてきた。

「ありがとうございます。ADの俺が言つのもなんですけど……。正直、今のミラクルゾーンのやり方つて、かなり納得できない部分もあるんですね。これは秘密んですけど……。やらせなんて日常茶飯事ですし、扱う内容も、なんていふか安っぽい物ばかりで……。亡くなつた神居さんが見たら、きっと怒るんじゃないかなって思うんです」

「亡くなつた神居さんが見たら、か……。確かに、君の言つ通りかもしれないな」

「はい。実際、ディレクターが神居さんから室井さんに変わったところで、番組の視聴率もどんどん落ちていましたしね。自分の作った番組が、変な形に歪められて……それで、怒らない人つていないと困つんですよ」

「だんだんと、富森の言葉に熱がこもってきた。先ほどまで沈んだ雰囲気が漂つっていたが、今の富森のそれはない」

「「」こと言つと、馬鹿らしくと思われるかもしだせんけど……。俺、今回の事件、起じるべくして起きたんじゃないかつて思うんです」

「起じるべくして起きた？ それ、どうこう」とだい？」

「プロデューサーの西岡さんが亡くなつたの、やつぱり俺も、事故だとは思えません。もし、この世に怨念みたいなものがあるなら、西岡さんが亡くなつたのは、神居さんの祟りみたいなもんじゃないかつて……。亡くなつた神居さんが怒つて、俺たちを含めた番組関係者を、一人ずつ殺そうとしているんじゃないかつて……。そう、思うんです」

「神居さんの祟り、か……。でも、現状では、まだ何とも言えないんだろう？ それに、今になって、その神居さんが君たちを祟つていうのも、なんだか急な話のような気がするけど……」

「確かに、そうかもしれませんね。ただ……今回は、ちょっと俺たちもやり過ぎたんだと思います。なにしろ、生放送で流す幽霊屋敷の映像を、大がかりな やらせ を仕込んで作りましたからね。そういった、今までの中でも随分と罰当りな演出をたくさんやつたから……神居さんも、堪忍袋の緒が切れたのかもしれません」

事件はあくまで、神居結衣の祟りによるものだ。富森の言葉から察するに、彼は完全にそう思いこんでしまってはいるようだった。

心霊番組で やらせ が行われることなど、別に珍しいことではない。視聴者の側も、その辺りは暗黙の了解として、番組を見ている部分がある。

だが、富森の話では、今回のミラクルゾーンの取材をする際に、随分と罰当りなことをしたようだつた。その結果、今までは状況を静観していた神居結衣の靈が、怒つて罰を下そうと動き出したと言えなくもない。

結局、プロデューサーの死の原因はなんなのか。それは高槻にもわからずじまいである。ただ、事件の裏に神居結衣の怨念が潜んでいるといふのであれば、彼女の祟りによる線も否定はできない。

自分でも、およそ馬鹿馬鹿しい考えであると高槻は思った。どうも、あの犬崎紅に関わつてから、お化けや幽靈といった類の存在を、疑うことさえ忘れてしまつっていたようだ。霊能力者でもないのに靈の話を信じ、果てはそういうた類の話に耳を傾けてしまう。一昔前の自分では、およそ考えられなかつたことだと高槻は思った。

「すいません。いきなり捕まえて、変なこと話しちゃつて。今日のことは、忘れてください」

先ほどから聞き役に徹していた高槻に、富森が思い出したようにして謝つた。いきなり妙な話をして、頭のおかしな人間と思われたら困る。そんな考えが見え隠れしているようだつた。

「いや、別に構わないよ。僕も信心深い方じゃないけど、君の言っている話が完全に嘘だとも思っていない。幸い、知り合いにそいつた話に詳しい人もいるし……ちょっと、話をしてみるよ」

「ほ、本当ですか！　ありがとうございます！　なんだつたら、俺の連絡先も教えておくんで……何かわかつたら、連絡してください！」

地獄に仏の姿を見た。そう言わんばかりの表情で、富森は高槻の手を握ってきた。その、あまりの豹変ぶりに、高槻は驚きを隠せない様子のまま、独り言葉を失っていた。

プロデューサーの変死事件は、果たして富森の言つよつて、神居結衣の祟りによるものなのか。その真偽まで高槻にはわからなかつたが、新たに解決の糸口となる可能性が開けたのは大きかつた。

ビルとビルの谷間。大都会の中心に、まるでそこだけ切り取られたかのようにして、その喫茶店は存在していた。

間接照明の多い店内は、昼間でもざっとなく薄暗い。増してや、これが夜ともなれば、少しばかり日が慣れないと足下をえ見るのに苦労する。

店の奥に置かれているのは、あれは古いレコードプレイヤーだろうか。昼間は昔風のジャズ喫茶として経営しているようだが、さすがに夜では音楽も流していない。ただ、店の中を行き交う店員の足音だけが、やけに鋭く響いている。

店の中でも特に奥の方に位置する席に、犬崎紅は一人の男と並んで座っていた。壁側の、洗面所の近くにありそうな薄暗い席。他人に話を聞かれる心配は、ほとんどないような場所だった。

男の年齢は、既に四十歳に差し掛かろうとしているといったところだろうか。初老というには程遠いが、それでも顔にはとことん、若者にはない皺が刻まれているのが見てとれる。

「さて……。とりあえず、何から話したものかな……」

グラスの中身を一口だけ飲んで、男が紅に言つた。氷とグラスがぶつかる音がして、水面が軽く揺れた。

「やうだな……。まずは、そっちの正体と目的を訊かせてもらひおつか

相手の姿を横目に、紅がぶつきりほつに答える。未だ相手と顔を合わせることさえしないで、赤い瞳から刺すような視線だけを向いている。

あの、路地裏で感じていた妙な殺氣。それは他でもない、この男のものだつた。尾行がばれて紅の前に姿を晒したときも、その隙の無さが顕在だつたことは記憶に新しい。

この男は、いつたい何者か。なぜ、自分の後をつけ、更にはこんな喫茶店まで案内したのか。その理由を聞くまでは、紅も油断はできなといつつていた。

「生憎だが、回りくどい自己紹介は苦手なんでな。こいつを見れば、俺がどんな人間だか、お前にも一目瞭然だろ?」

ステッジの内側に手を挿し入れて、男がなにやら手帳のよつなものを取り出した。カウンターの上を滑らせるよつにして、男はそれを紅の前に差し出す。

「これは……」

手帳を前にした紅の目が、一瞬だけ大きく開かれた。彼の目の前にあつたもの。それは他でもない、本物の警察手帳に他ならなかつた。

正面に葵の紋を備え付けられた、正真正銘の警察手帳。だが、單に警察の人間であるというだけならば、紅もそこまで驚きはしない。以前、火乃澤町で様々な怪事件を解決してきた際にも、紅は警察の人間と接触したことが何度かある。

問題なのは、男の差し出した警察手帳が、現行の警察官が用いるものとは異なっていたということだ。地方の警察署ではおろか、警視庁に務める警察官でさえ使わない、黒い旧式の警察手帳。それが意味するものがなんなのか、紅とてまったく知らないわけではなかつた。

「なるほど。あんたは公安の人間つてわけか……」

公安警察。警備警察の公安・外事部門を担当する団体で、極右や極左、果ては外国の諜報機関やテロ集団に対してまで捜査、情報収集を行うことがある。主に、国家の治安や体制を脅かす敵と戦う、極めて特殊な位置づけの警察官である。

要するに、日本におけるスパイのような組織ということだ。その活動の特殊性から一般の警察とは情報共有をせず、極秘に内偵などを行つたりすることが多い。故に、スパイという表現もあながち間違いではない。もつとも、そういうた諸々の行動の結果、地元警察や一部の人権擁護機関などと、深刻な対立をすることも少なくはないのだが。

そんな公安警察官が、いつたい自分に何の用だ。訝しげに思ひながらも、紅は手帳を男に突き返し、初めて彼の方へと顔を向けた。

改めて見ると、男の顔が随分と戦い慣れしているそれだということに気がついた。紅の知る限り、警察官にこのような顔をした人間の姿を見た例はない。しかし、自衛隊や機動隊ともまた違うようで、一種、独特な近寄りがたさを醸し出している。

傭兵。男の見た目を一言で言い表すならば、まさにその言葉が似

合っていた。向こう側の世界の住人を相手にし、時に人知を越えた怪物と戦つてきた紅でさえ、目の前の男を相手にして勝てる自信はない。少なくとも、純粹な肉弾戦においては、男の方が確実に上だろう。

いつたい、どれだけの修羅場を搔い潜れば、人間はこのような顔ができるようになるというのか。公安警察などキャリアのエリートがなるものだとばかり思っていたが、どうやら認識を改めねばならないようだ。

「それで……。いつたい、公安の人間が、俺に何の用だ？　俺は別に、国家の機密に関するような事件を起こした記憶はないんだがな」

できるだけ自分の感情を悟られないようにしつつ、紅は男に向かつて言い放つた。油断したら、その瞬間に相手のペースに飲まれる。そんな気がしたからだ。

「国家の機密か……。だが、お前にその気がなくとも、お前は既に国の機密に触れているとも言えるんだよ。それは、お前たちのような靈能力者の類が裏の世界、向こう側の世界での連中を相手に仕事を始めたときから、必然的にな……」

低く、押し殺すような声で、男は紅に言った。その言葉を聞いた紅の顔が、一瞬だけ震えて強張った。

向こう側の世界。靈だの神だのといった存在と関わる者たちの間で使われる、常世の総称もある言葉。それを知っているということは、この男もまた靈的な力を持つた人間なのか。だとすれば、自分に接触を試みて来たのは、やはりあのプロデューサー変死事件に関することだというのだろうか。

「俺も、長い話をするのは好きじゃない。だから、單刀直入に言おう」

男の目が、紅をじろりと睨む。返答次第では、相手の口を封じることも厭わない。口では語つていなが、全身から放つ氣迫のようなもので、男は紅に告げていた。

「今、お前が関わっているテレビ局の事件。その真相を、決して公にしないでもらいたい」

「いきなりな話だな。それに、公にするなどはどういう意味だ？」

「そのままの意味だ。お前が事件の真相を探るのは勝手だが、こちらにも事情というものがある。事件の裏に靈だの呪いだの祟りだの……そういう話があつたことを、世間一般に、大々的に広めて欲しくはない。それだけだ」

「どうも、何かを勘違いしているようだな。俺は別に、オカルト好きな三流雑誌の記者じゃない。靈感商法まがいの手段で金を稼ごうとしているやつを潰そうってんなら、他を当たるんだな」

グラスの中にある水を少しだけ口に含んだ後、紅は男から顔を背けた。

公安警察が動いている以上、今回の事件に関しては、何か物凄く大きな裏があるのではないかと思っていた。しかし、目の前の男は紅を逮捕するわけでもなく、捜査に協力をして欲しいと頼んできたわけでもない。こちらの仕事の邪魔をされるかとも思ったが、どうやらそれも違うようだった。

いつたい、この男の真の目的はなんなのだろう。さすがの紅も、今回ばかりは相手の思惑が読めずにいた。それは一重に、男の隙の無い態度からくる部分も大きい。

店内を再び静寂が支配し、店員が床を歩く足音だけが聞こえてくる。他にも数人の客がいるにはいたが、その誰もが紅たちには興味を示さず、自分がけの時間を過ごしている。

「ところで……お前は、公安四課についての噂を知っているか？」

「ま、まづい、と溜息をついて、男が唐突に切り出した。

「公安警察にも色々とあってな。一課は極左、二課は労働組合、三課は極右といった感じで、捜査の対象が決まっている」

「興味はないな。それは、俺が知る必要のある話なのか？」

「そりだな。ここまで、まあお前にも関係はないだろう。問題なのは、四課の詳細だ」

「詳細か……。だが、そんなことを、俺に話して問題はないのか？
公安警察つてのは、秘密裏に捜査をすることで有名だったと思うが？」

「問題ない。少なくとも、俺が今からお前に話すことは、傍からすれば、単なる都市伝説のような話に過ぎん」

紅の疑問にも何ら動搖を見せず、男ははつきりと言いつ切った。

通常、公安警察の捜査内容は、世間一般には極秘とされている。

それは民間人だけでなく、同じく犯罪を取り締まる立場の、警察官相手でも同様だ。警視庁内部でも公安部は特殊な位置づけにあり、現場で捜査する警察官とも情報を共有することは極めて稀だ。

そんな公安警察が、自分から仕事の詳細を明かす。ますます男の考えが読めなくなる紅だったが、今度は口を挟まずに黙つておいた。

「公安四課の仕事は、公には資料管理とされている。第一系が統計、第二系が資料整理という具合にな。だが、その他に、四課には隠されたもう一つの顔がある」

「隠された顔だと？」

「ああ、そうだ。公安四課第零系、通称火消しの零系。幽靈だの祟りだの……そういう類の話が絡んだ事件の後始末が、俺たちの主な仕事だ」

「なるほど、火消しか。ならば、例のプロデューサー変死事件にして情報規制をかけたのも、そちらの差し金と云ふことか？」

「察しがいいな。さすがは、その歳で退魔行を生業にしているだけはある」

愛想笑いさえも見せず、しかし相手のことを認めるような態度。男の言葉が本心から述べられたことくらいは、不器用な紅でも十分にわかる。

「それで……お前達は、なぜ俺に、例の事件を公にしないよう頼みに来た？　見たところ、随分と向こう側の世界について詳しいよう

だが……自分たちが主導になつて、事件を解決するつもりはないのか？」

「それが出来れば苦労はしない。現に、こちらも人員を配備した上で、独自に捜査を行つてゐる。あのテレビ局の中で、なにやら妙な連中が動き回つてゐると報告があつて、お前の後ろをつけることができたようなものだしな」

ポケットから煙草とライターを出し、男は素早くそれに火をつけて口に咥えた。自分の苛立ちを相手に悟らせないよう、わざと煙草に手を出したようだつた。

「俺たちの管轄は、残念なことに資料管理が主な仕事だ。一応、靈的な存在が絡んだと思われる事件に對しての捜査権も持つてゐるが、犯人逮捕も含め、最後は現実的なところで話をつけなくてはならない。俺たちの仕事はあくまで情報管理であつて、犯人逮捕は一般的の警察にでも任せておけばいい」

「情報管理か……。まあ、確かに、そちらの言つことも理解はできる」

自分の方に向かつて流れて來た煙草の煙を、紅はわざとらしく吹き飛ばした。それを見た男が、これまた無言で煙草の火を灰皿に押し付けて消した。喫煙はするが、嫌煙権を主張する相手に対し、無理強いはしない。煙草を一種のステータスとしか考えられない、一部の男たちとは違つていた。

公安四課。火消しの第零系。そして情報管理。

先ほど、男の口から語られた言葉を、紅はゆっくりと自分の頭の

中で反響してゆく。

男の話が正しければ、彼の仕事は警察内部における心霊事件の取締りということになる。ただし、捜査はあくまで現実的な路線で進め、本業はもっぱら心霊事件の後始末。即ち、紅を始めとした退魔行動を行う者たちが事件を解決した後に、その後処理をするということだ。

もつとも、この日本における全ての心霊事件が、紅のよつな退魔師によつて解決されているわけではない。中には不幸にも向こう側の世界の住人に弄ばれ、その魂を闇に食われてしまった者もいるだらう。

そんなとき、田の前の男は、果たしてどうしているのだろうか。答えは、先ほどの問答の中で、既に男がほのめかしていた。

資料管理と情報操作。それらの仕事を本業とする者が、わざわざ高名な退魔師を呼んで事件を解決するとは思えない。恐らくは、犠牲者が全て出揃つたところで、適当な理由をつけて迷宮入りにしてしまうのがオチなのだろう。もしくは、事件を捜査していった結果、その情報を秘匿とする必要が生じた場合にのみ、初めて行動を開始するといったところか。

（火消しの公安か……。確かに、この仕事をするようになつてから、そついた連中がいるという噂くらいは聞いていたな……）

警察が、己の意思で事件を迷宮入りにする。にわかには信じ難いことであるが、今の日本の現状を考えると仕方がない。そつ、紅には思えていた。

公安警察が情報管理をするのは、一重に靈の存在を國家が認めるわけにはいかないという理由からだろう。紅たちにとつては当たり前の心靈現象も、一般的の市民からすれば想像の世界でしか起こり得ないオカルトの產物だ。そんな話を大々的に認めてしまっては、国の威儀にも関わってしまう。

しかし、その一方で、警察が秘密裏に事件を解決するわけにもいかない。そもそも、警察組織は靈能力者の集まりではないため、幽靈や妖怪のような連中と戦うには力不足だ。

仮に、警察が専属の退魔師を募集すれば、それはそれで問題になる。公に人を集めることにもいがく、非公式に契約を結んだとしても、安定的に人員が補充できるわけではない。靈場と呼ばれるような場所を全て封鎖するわけにもいかないだろうし、国が率先して靈能力者を養成するわけにもいかない。

国家としては靈の存在を秘匿にしたいが、それと戦うための人材を集めたり、靈的な存在から必要以上に一般市民を遠ざけたりすることは、返つて己に対する疑念を増幅させるだけになってしまふ。心靈事件に関わった人間を拘束、管理しても、あまりにやり過ぎれば、これもまた逆効果だ。

認めたくないが故に隠す。しかし、現実は受け入れなければならないし、その一方で、自分たちの力だけでは事件を解決できない。だから、後ろめたいとわかつていながらも、情報操作という形で、靈能力者が事件を解決した際の後始末をする以外に道がない。

結局、最良な方法は、靈的な存在が実在するという証拠を隠滅してしまうということなのだろう。証拠さえ消えてしまえば、後は関係者が何を言おうと、單なる夢物語で済ませられる。巷に氾濫して

いる下らない怪談や都市伝説、作り物の心霊ビデオと同じように、ちょっと怖いお伽話程度に思われて、人々の記憶の中で風化していく。

正に、國家という巨大な組織が抱えるジレンマだと紅は思った。そういう意味では、自分のように全てを認めて生きている人間の方が、まだ少しだけ気が楽なのかもしれない。

以前、自分も幾度か靈的な存在と大っぴらに戦つたことがあったが、それらの事件が警察内部で大々的に扱われたという話は聞いたことがない。知り合いの警察官、火乃澤署の工藤辺りが上手い具合に報告書をまとめた結果なのかもしれないが、それ以外にも、見えない力が働いていた可能性もある。自分の知らない場所で、上に提出された記録の中から、特に怪奇で説明不能な現象を連想させる内容を、意図して削つて保管させていた可能性は十分に考えられる。

「そちらの言いたいことは、俺にもわかった。だが、心配は無用だ。俺は別に、今回の事件を解決して、自分の名前を売ろうなんて考えてはいけない。ただ、依頼を受けたからには最後まで仕事をさせてもらうし、場合によつては激しい戦いになることも已むを得ない」

「それは、こちらも承知している。俺としても、お前が必要以上に靈的な存在を人目に触れさせることをしなければ、何も問題視はないさ。むしろ、呪いだの幽霊だのと言つた話を先に片付けてくれた方が、こちらも手間が省けるからな」

「本当に、そう思つてゐるのか？ さつきから聞いていたが、そちらも向こう側の世界の話には、かなり詳しいようだが……。あんた達の仲間に、俺のような能力を持つたやつはないのか？」

「残念ながら、該当する者は一部の者しかいない。しかも、運悪く別件で出払つていて、今は東京にいない」

男の視線が、火の消えた煙草の転がつている灰皿に向かつて落ちた。

「先ほども言つたが、俺たちは元々、心霊事件の隠蔽と資料の管理が主な仕事だ。場合によつては霊能力者に仕事を依頼することもあるが、それだけ多くはない。互いに不干渉でありながら、利害の一致によつては共闘する。それだけの関係さ」

「利害の一一致、か……。だとしたら、当面は対立する必要もなさそうだな。ならば、そちらはそちらで、思つよつに捜査を進めればいい」

「悪いが、そつとせてもうう。ただ……最後に、一つだけ教えて欲しい

今までとは打つて変わつて、男が急に下手に出た。自分から他人に物を頼むよつには見えなかつたので、これには紅も面食らつた。

「今回の事件、霊能力者として、お前はどう考へていい? やはり、呪いや祟りの線が濃厚なのか?」

「まだ、はつきりしたことは言えない。ただ、あのテレビ局に、何か妙な物がいるといつことはなさそうだ。例の廃屋の映像は……こちらも、俺が見た限りでは、特に危険なものは映つていなかつた。目に見えない幽霊の類は映り込んでいたが、既に霊害封じのようないものを施された後だつた」

「なるほど。そちらもまだ、事件の真相には迫っていないというわけか……」

「残念ながら、今のところはな。期待に添えなくて悪かったな」

「いや、構わん。何の能力もないこちらとしては、行動が後手になるのが常だからな。今回の件、例のプロデューサーの変死事件を隠蔽するだけで、正直精一杯だった部分もある。田舎の小さな街で起きた事件ならいざ知らず、まさか、生放送の現場でこんなことが起きるとは……」

それ以上は何も語らず、男は再び押し黙つた。もつとも、彼の言わんとしていることがわかるだけに、紅もあえて追及はしなかつた。

公安四課、第零系の仕事は、心霊事件の存在が公になるのを防ぐこと。彼らの立場からすれば、プロデューサーの西岡が変死した事件は、是が非でも事故死という扱いにせねばならなかつたのだろう。

仮に、あの事件が生放送ではなく、収録された映像を流した際に起きたとしたら、ここまで問題は大きくならなかつたはずだ。本放送の際にカットすることもできるし、西岡の死を単なる事故死として片付けても騒ぎにはならない。単に、ネット上で噂される都市伝説の類として、多くの情報の下に埋没してゆくだけだ。

そもそも、奇跡空間ミラクルゾーンのような番組の存在を容認しているのも、必要悪という考えがあつてのものである。視聴者も、心霊番組で放送されることが全て真実とは思っていないため、ああいつた番組がやらせで怖い話を盛り上げてくれるとは、返つて都合がいい。

嘘を隠すための場所は、一つの真実の狭間である。ならば、その反対に、真実を隠す場所は「一つの嘘の狭間」ということになる。

作り物の心霊話や心霊映像が適度に流通している間は、本物の心霊事件が起つても、さしたるパニックを起さないで済む。「あの手の話は、どれもよくできた作り物に過ぎない」という印象を一般人に与え続けることで、世間一般に靈の存在を深く認めさせずに済むのだ。

だが、今回ばかりは、そんな番組の存在そのものが裏目に出た。なにしろ、生放送の本番中に、プロデューサーが関係者の目の前で変死したのだ。テレビ局側に圧力をかけて緘口令を強いても、当然のことながら、情報は漏れる。

篠原まゆのような関係者が、事件の扱いに疑念を持つこともあるだろう。また、御鶴木魁のような、表の世界にいながら本物の力を持つた存在が、妙なやる気を出して積極的に首を突っ込んで来るかもしれない。

心霊事件の存在を認めたくない者たちからすれば、今回の事件は、まさに冷水を浴びせられたようなものだつたに違いない。今までには不干渉の立場を保つっていた公安が、ここに来て急に紅と接触したことも気にかかる。それだけ、公安の側も追い詰められているということなのだろうか。

「とりあえず、今日は互いにここまでしか話せないようだな。勘定は俺の方で支払つておくから……次に何かあったときは、こちひらに連絡して欲しい」

男がスッと席を立ち、紅の前に一枚の名刺を差し出した。それを

受け取った紅は、名刺に書かれた文字を見て、一瞬だけ怪訝そうな顔をした。

警視庁公安部第四課 死・靈管理室所屬 香取雄作かとうひでさく

男の手渡した、名刺に書かれていた言葉である。その、およそ公安部警察にあるまじき部署の名前に、紅は苦笑を堪えることができなかつた。

「なるほど。資料と死靈をかけているわけか。あんた達の上の人間も、少しばら落のわかるやつがいるらしいな」

「まあ、そういうことだ。もつとも、俺はその名前も、言い得て妙だと思つてゐるがな」

「確かに、一理あるな。しかし……本当に、構わないのか？ 公安警察つてやつは、もつと疑り深い連中だと思つていたが……」

「普通はな。だが、何度も言つてゐるように、俺たちの仕事は心靈事件の火消しだ。そのためには、今は手段を選んでいる場合ではない。一刻も早く事件を解決しなければ、騒ぎが大きくなる一方だ」

「ならば、俺以外の靈能力者に依頼をすればいい。警察官の中にはいなくても、お抱えの靈能力者ぐらいはいるだらう？」

「残念ながら、それも難しいな。不干渉の立場をとり続けて来た俺たちにとつては、靈能力者の類と頻繁に会つ」とも問題だ。それこそ、相手の顔が世間に売れているようならば、尚更なんでな」

最後の方は、少し言葉を濁すような感じになった。それが、香取たちの抱えるジレンマの一つであるところに、紅も直ぐに気がついた。

表向き、心霊事件の存在そのものを否定しているはずの警察が、白昼堂々と霊能力者に会つ。それも、下つ端の捜査員ならいざ知らず、それなりの地位がある者が。

そんなことをすれば、それは即ち、警察が心霊事件の存在を認めていると言つているようなものだ。心霊事件を一刻も早く解決したいのは山々だが、それでも霊能力者との接触は、必要最低限に絞らねばならない。それに、秘密主義を貫き通すためには、信頼できる霊能力者がないければ意味がない。

信じるが故に情報を隠し、しかし、信じるが故に表向きは存在を否定している者達と会合する。そのようなジレンマを抱えている人間が、あえて自分と接触を試みた。その事実が、相手の窮状をそのまま表しているようで、紅も香取には何も言えなかつた。

このまま、香取の話を全て信じるわけにはいかない。状況は向こうも同じなのだろうが、今は互いに手持ちのカードを見せながら、相手の顔色を探つてゐるような状況だ。それでも、互いに反目したまま事件の捜査に当たるよりは、個々に動きつつも情報を交換し合う必要もあるだろう。

利害の一一致。先ほど、香取が言つていた言葉が頭をよぎる。

田の前の相手は敵ではない。が、別に味方というわけでもない。互いに職務として果たさねばならぬことがあり、その優先順位を保

ちつつ、相手の力を利用し合うような関係だ。その関係が崩れたとき、香取は紅の敵として、容赦なく目の前に立ち塞がることになるのかもしない。

できれば、そんな状況は招きたくない。そう思いながら、紅は香取から受け取った名刺を懐にしまった。無論、紅としても、ただで相手の要求を飲んだつもりはない。

火消しの零系が心霊事件の隠蔽を行っているのであれば、その中に闇の死揮者が絡んだ事件もあるかもしれない。ならば、闇雲に呪いの話を追いかけるよりも、香取のような人間と接触し、情報を得た方が話は早い。

もつとも、向こう側の目的が心霊事件に関する資料の管理である以上、そう簡単に情報は引き出せないこともわかつていた。ただ、このまま霧の中を彷徨うように死揮者を探すよりは、香取のような男とのパイプも、これからは大切にしてゆかねばならないと感じていた。

喫茶店の壁際に置かれた大時計が、夜の十時の鐘を告げた。そろそろ、店自体も閉店する。そう急ぐ必要はなかつたが、会計を済ませる香取を横に、紅は一足先に店の外へと出て行つた。

九条照瑠^ルが目を覚ましたのは、時計の針が朝の九時を回つたところだった。

眠たい目を擦りながら、照瑠は大きな伸びをして辺りを見回す。朝の陽射しが射し込む部屋の中には所狭しと布団や毛布が散らかって、ソファーやクッションまで寝床代わりに使われている。

（「う……。昨日はちょっと、夜更かしが過ぎたかもね……）

腰まで届きそうなほどに長い髪を手ぐしで搔き分けながら、照瑠はもそもそと毛布の中から這い出た。

周りを見ると、他の人間は未だまどろみの中にいるようだつた。ベッドの上では雪乃が軽い寝息を立てており、そのまま隣に敷かれた布団の中では、亜衣が大の字になつて広がつている。

篠原まゆは、ソファーの上で丸くなつている。彼女は実家に帰ることもできたのだが、なにしろ夜も遅かつた。それに、独りでいるのは不安とのことで、なんだかんだで雪乃の家に泊まつていた。

まゆの年齢は、照瑠たちよりも一つ上だ。しかし、いつも見て見ると、先輩としての威厳のようなものは、あまりない。両手で毛布をつかみ、小動物のように丸まつてている様を見ると、自分の高校の同級生として見ても違和感がない。

周りにいる友人達を起こさないように気をつけながら、照瑠はそつと枕元に置いておいた携帯電話へと手を伸ばした。

着信、メール、共になし。見慣れた壁紙だけが表示され、照瑠はそがっくりと肩を落とす。

結局、昨日の晩から今朝にかけて、紅からは何の連絡もなかつた。考えがまとまらなかつたのかもしれないが、それにしても、少しば

かり冷たいと思つてしまつ。今、どこに泊まつていて、何をしているのか。その程度なら、教えてくれてもいいはずなのに。

「なんか……信用されてないのかな、私……」

ふつと、そんな言葉が口から零れた。

別に、紅が不器用なのは、今に始まつたことではない。便りがないのは無事な証拠。紅の場合、それを地で行つてているような節があるのは否めない。

ただ、それでも、やはりどこか寂しく思つてしまつのは気のせいか。

自分の力を過信しているわけではないが、照瑠自身、随分と癒し手としては力をつけてきた。父である穂高の話によれば、照瑠の靈能力者としての成長は、極めて早く優れたものだといつ。親馬鹿を抜きにしても、それは遠からず当たつていると照瑠は思つた。

普通、何らかの靈的な力を身につける場合、数年から数十年に渡つて、厳しい修業を積まねばならないという話の方がが多い。確かに自分は優れた才能を持つて生まれて来たのかもしれないが、一年も経たない内に、癒し手としての基本的な力を習得しつつあるというのは異常だ。

自分の両手を広げてみながら、照瑠は自らの中に流れている血の力を、改めて恐ろしく感じてしまった。

今は亡き、母と祖母の一人の癒し手。その一人とて、こつまで早く力をつけたという話は聞いたことがない。今の自分は生前の一人

には及ばないのだろうが、それでも、一人が生きていたなら、今の照瑠を見てなんと言つただろうか。

生まれ持つて授かつた、天性の才能。その力を解放してゆくことは、それは即ち、自分が犬崎紅のような存在に近づいてゆくということを意味している。彼のような外法を使う力は持たないが、強い癒しの力を持つた霊能力者として、自分は確實に浮世から離れた存在になりつつある。

初めは、自分から望んだこと。人を癒すための力を手に入れ、向こう側の世界の住人とも関われる力を持てば、それで多くの人を助けることができる。紅の世話になりっぱなしということもないだろうし、今までは救えなかつたような人でさえ、自分の力で助けることができ。そう、思つていた。

だが、実際に力がついてくると、照瑠は自信と同時に少しばかりの不安を覚えていることに気がついた。

そもそも、靈だの呪いだの祟りだのと言つた話は、普通の人間からすれば、眉唾ものの話なのだ。そんな連中に通じる力を持ち、また自分自身がそういうた類の存在を強く信じることで、今までの日常が壊れてしまいそうで怖かつた。

癒し手として、自分が真の力に目覚めたとき、自分は本当に今までの日常を失わずに済むのだろうか。紅のように、自分の生き方や在り方に疑問を持たず、自分の存在を強く保ち続けることができるのだろうか。

およそ、馬鹿馬鹿しい、下らない不安だと照瑠は思つた。照瑠の知る限り、友人達は、他人を偏見の眼差しで見て嫌悪するような人

間ではない。嶋本亜衣などはその典型だし、他の友人達も、なんだかんだで変わり者が多い。

（結局……私は犬崎君に、一緒にいて欲しかつただけなのかもね……）

今の自分が、紅に対して求めていること。それが彼に対する甘えだと気づき、照瑠は自分の気持ちを堪え、ぐっと中に飲み込んだ。自分の日常が少しづつ非日常に侵蝕されてゆく不安。それを、常に非日常の中に生きている人間と一緒にいることで、自分は少しでも和らげようとしていた。紅と一緒にいることで、そうした不安から逃げ出して、知らない間に彼の存在に依存しようとしている自分がいた。

人として、それに、何よりも紅の友人として、照瑠は今の自分の気持ちが恥ずかしく思えて仕方がなかつた。

確かに、紅から連絡を貰えなかつたのは不安だし、彼の安否も気にかかる。それに、単なる依存心だけでなく、彼に対しては、もつと複雑な感情を抱いているのも事実である。

しかし、それでも自分が紅に対し、一方的に甘えてよいという理由にはならないはずだ。彼は彼で、色々なものを抱えて生きているであろうに、一瞬でも付抜けた考えに身を寄せようとしたことが後ろめたい。

（しつかりしる、九条照瑠！ 全ては、自分が望んだことじゃない！）

携帯電話を閉じ、照瑠は自分の頬を軽く叩いて気合を入れ直した。少しばかり痺れた頬に、朝の冷たい空気が沁みる。

「さて……。それじゃあ、そろそろ盥を起さないといけないわね。いくら日曜日でも、そういうまでも寝ていられるほど、私達も暇じゃないし……」

未だ足下で口を広げて夢を見ている巫衣の顔を覗きこみ、照瑠は誰に聞かせるともなく呟いた。

犬崎紅が、自分のことをどう思つていいか。それは、今は考えないことにしよう。紅が何を考えていようと、自分自身が己を強く持たなければ、それが紅の迷惑へと繋がってしまう。

自分の力で、困っている人間を助けること。向こう側の世界の住人と戦う紅のために、少しでも力になれるようにすること。それを叶えるために、自分は巫女の修業を申し出で、ここまで力をつけて来たのではなかつたか。

初心、忘れるべからず。ありきたりの言葉だが、照瑠の頭の中に、ふとそんな言葉が浮かんできた。使い方を少しばかり誤つてはいるような気もしたが、今の照瑠にとって、それはほんの些細な問題にしかならなかつた。

葵璃凍呼が宮森良太から連絡を受けたのは、日も少し昇り、昼に近付いた時刻だった。

富森のことは、凍呼も仕事の関係でよく知っている。例の、奇跡空間ミラクルゾーン の撮影スタッフの一人で、ADとして様々な雑用をこなしていたからだ。休憩中に話すことも珍しくなく、気さくで話し易い人間という印象を抱いていた。

「いや、ごめんね、凍呼ちゃん。なんか、急に呼び出しちゃって…」

くたびれたワイシャツを少しばかりズボンからはみ出せながら、富森が頭をかいて現れた。

「大丈夫ですよ。私も、今日はそこまで忙しいスケジュールやりませんから」

「やうかい。そう言つてくれると、俺も助かるよ」

そう言いながら、富森は、はみ出たシャツを乱暴にズボンの中にねじ込んだ。その様子を、凍呼は少しばかり苦笑しながら見つめている。

凍呼が富森に呼び出された理由。それは他でもない、ディレクターの室井に関することだった。

あの日、例のプロデューサー変死事件が起きてから、室井とは連絡が取れていなかった。それは凍呼だけでなく富森も同じようで、彼もまた、あれから室井の顔さえ見ていなかつた。

プロデューサーの西岡が亡くなつてしまつた以上、番組スタッフに指示を出せるのは室井しかいない。ディレクターとは、即ち番組

制作における現場監督のようなもの。室井の指示がない間は、宮森たちは自分の好き勝手に動くわけにはいかないのだ。

今後、番組の行く末がどうなるのか。せめて、それだけでも聞いておきたい。継続するにしろ、打ち切りになるにしろ、そろそろ次の話をしてくれなければ困ってしまう。

「それにしても……室井さん、大丈夫なんでしょうか……」

「室井の血筋であるマンションに向かいながら、凍呼はぼつりと呟いた。

今後、自分の仕事がどうなるのか。凍呼にしてみても、それは気になるところである。だが、それだけであれば、別に自分が出向く必要などない。

そもそも、心霊番組のレギュラーなど、凍呼は好きでやっているわけでもない。この程度の要件であれば、彼女の事務所のマネージャーが、室井と話をすれば済む話だ。

今回、凍呼が宮森の呼び出しに応じた理由。それは一重に、室井の身を案じてのものだつた。もつとも、室井に対して何か特別な感情があるわけではなく、どちらかと言えば、自分の中にある妙な不安を払拭したいという気持ちが強かつた。

西岡の変死の真相は、あの御鶴木魁でさえわかつてはいない。局内には緘口令のよつなものが敷かれているようだし、マネージャーに頼んだところで、真相は教えてもらえないに違いない。こうなると、後はディレクターの室井から、知っている限りの話を聞く他になくなってしまう。

テレビ局や事務所は、凍呼を不^安させないと配慮をしたつもりなのかもしれない。が、それはそれで不安を煽る。既に、心靈事件の当事者となつて^{いる}凍呼にとつては、己の田で見て、己の耳で聞かなければ、西岡の死について納得のゆく答えを出せなかつた。

「しつかしなあ……。この大変なとき^に、室井さん、なにやつてんだ
だひつ」

「わづ、ぼやかないでトセ^こよ。室井さんだつて、色々大変なんだ
と思います」

「でもや。せめて、連絡くら^こくれたつていいじゃないか。あんな
事件があつて、俺たちだつて不安になつてゐつて言つのに……この
数日間、音信普通つてのは、わづがに酷^こいと思つたど?」

「そうですね。でも、室井さん、あの日も風邪ひいていたみたいで
すし……。無理を言つてもしかたないんじやないですか?」

収録の前日、室井と携帯電話で話をしたときのことを、凍呼は思
い出していた。

電話越しの室井は、露骨に凍呼の体調を心配する素振りを見せて
いた。もつとも、本心から心配しているというよりは、どちらかと
言えば妙な下心がありそうな口調だつた印象が強い。

室井が女好きなこと。それは、凍子も今までの付き合いから知つ
ている。今回の訪問も、室井がディレクターという立場でなければ、
宮森が同伴してくれなければ、特に好き好んで行きたいとは思えな

かつた。しかしにも事情があるとはいえ、さすがに一人で大人の男の暮らしているマンションを訪問するのは怖い。

ただ、それにも増して印象に残っているのが、電話越しに聞こえてきた湿った咳だ。室井は風邪だといつてはいたが、あんな切れの悪い咳は、凍子もあまり耳にしたことはない。少なくとも、自分が風邪をひいたときに比べても、室井の体調が芳しくない」とくらくなは想像がついた。

待ち合わせの場所から数分ほど歩いたところで、凍呼と富森は室井の住んでいるマンションに到着した。

室井の住んでるのはオートロック式のマンションであり、暗証番号を入力して自動ドアを解錠するタイプのものだ。その他に、カードキーなどは必要ないようだが、番号を知らねば解錠できないうことに変わりはない。

「あれ……？ 富森さん、室井さんのマンションの暗証番号、知ってるんですかあ？」

手慣れた様子で暗証番号を入力した富森を見て、凍呼が怪訝そうな顔をしながら尋ねた。

「うん、まあね。前に、ちょっと仕事の関係で、何度か尋ねたことがあるから」

「へえ……。富森さんも、大変なんですね」

「それでもないよ。仕事とは言つても、半分は飲み会みたいなもんだったしね。後は、俺の持つてるエロエロ貸して欲しいなんて、

個人的な要求の方がメインだったこともあるし……」

「なつ……！ あ、最っ低……」

自分の前で躊躇いもなく下ネタを語る富森に、凍呼は赤面しながら言葉を切った。

別に、富森が最低なわけではない。男のたしなみとして、エロビデオの一本くらい、家に置いてあっても普通のこと。そのくらいは、凍呼として理解していくことだ。

問題なのは、仕事にかこつけてADを呼び出し、公然とエロDVを借り受ける室井の態度である。職場の上司という立場を利用して、わざわざそんな下らないことで富森を呼び出していたのだ。半分は仕事の話もしていたのだろうが、それでも凍呼は室井に対する嫌悪感を拭いきれない。そして、行き場のない彼女の感情は、どうしても目の前にいる富森の方に向けられてしまう。

なんだか妙に気まずい空気になつて、二人は無言のままエレベーターに乗り込んだ。別に、自分は何も恥ずかしいことなどしていないのに、凍呼は自分の顔が赤くなつたままなのを、どうしても抑えきれないでいた。

エレベーターのランプが点滅し、四階に到着したことを示す。ドアが重たい音を立てて開き、二人は流れるようにして外に出た。

「うわちだよ、凍呼ちゃん。迷わないよつこ、気をつけて

富森の案内で、凍呼は長く伸びたマンションの廊下を歩いて行った。この歳で迷子になるとは思つていなかつたが、しばらく歩いて

いふと、富森の言わんとしていることがなんとなくわかった。

室井の住んでいるマンションは、扉の造りや廊下の造りが極めて似通っている。外付けの階段の場所も含め、どうにも似ている場所が多くて困る。別に、迷うというほどでもなかつたが、知っている者が一緒でなければ、室井の住んでいる部屋を見つけ出すのは難しそうだった。

灰色のコンクリートで覆われた廊下を歩き、二人は建物の東側に出る。突き当たりから数えて三番目の部屋の前で、富森は足を止めてインター ホンを押した。

「室井さん。俺です。ADの、富森です」

返事がない。ちょうど、昼食時だったことも相俟つて、入れ違いに外出されてしまったのだろうか。

「室井さん。いるんだつたら、返事くらいしてくださいよ。あれから連絡なくて、俺達も困ってるんですけど……」

最後の方は、少しばかり乱暴な口調になつて声を荒げた。そんなに叫んだら、室井だけでなく他の住人にも聞こえてしまうのではないか。そう思った凍呼だったが、やはり返事は何もなかつた。

「おかしいなあ……。室井さん、昼飯でも食いに出来かけちゃったのか?」

訝しげな顔をして、富森は何気なく扉の取手に手をかける。室井が留守ならば、絶対に開くはずはない。が、果たして、富森の予想は外れ、ドアは静かに開け放たれた。

「えつ……？ ドアが……開いてるの……？」

怪訝そうな顔をして、凍呼は扉と富森を交互に見つめた。大方、鍵がかかっているとばかり思っていたのだろう。これには富森も驚いた様子で、しばし言葉を失つて固まつていた。

「ねえ、富森さん。室井さんって、家の鍵を閉めないような人なんですか？」

「んつ……！？ ああ、まあね。マンションがオートロックだからつてのもあるけど……自分が部屋にいるときは、鍵を閉めないことが多い人だよ。さすがに、外出するときは鍵を閉めるみたいだけど……」

「だったら、室井さんは、まだ部屋の中にいるってことですよね？ なんで、返事がなかつたんだろう……」

不安そうに俯いて、凍呼は自分の足下に目を向けた。

富森の話を信じるならば、室井は普段から不用心な人間だつたと言える。当然、鍵がかかっていないうことは、室井に限つては不自然なことではない。

では、そんな室井が、凍呼や富森の再三の呼び出しに答えなかつたのは何故だろ？ 携帯電話も繋がらないし、果てはインターфонの呼び出しにも出ない。普通に考えれば外出していると思いがちだが、室井の部屋の鍵は開いていた。

こつた、これはどういふことか。まさか、室井の風邪は思つた

より深刻で、電話やインター ホンにも出られないくらい酷いのではないか。

だとすれば、これは一人にとつても一大事である。室井に倒れられたら仕事にならないというのもあるが、自力で立てないくらい酷い風邪なら、放つておけば大事に至る場合もある。

「ねえ、富森さん」

「ああ、わかつてゐる。こいつは、許可を気にしている場合じゃないな」

今まで言わずともわかる。そう、頷いて凍呼に答え、富森は部屋の扉を勢いよく開け放つた。

扉が開くと、そこには狭苦しい玄関が広がっていた。無造作に転がった靴が目に入り、奥へと続くキッチンの床には、「」を詰めた袋があちこちに転がっている。

一瞬、部屋に入るのが躊躇われたが、富森が中へと踏み入ったことで、凍呼も意を決して彼に続いた。瞬間、なにやら餓えた臭いが鼻をついたが、口で息をして我慢した。

そろそろと、どこか遠慮がちになりながらも、富森と凍呼は部屋の奥へと進んで行つた。リビングに入ると、これまたあちこちに色々な物が散乱しており、室井が自堕落な生活を送つていたことが容易に想像できる。

部屋の隅に転がつてゐる本の中に女性の裸を見つけ、凍呼は思わず顔を背けてキツチンへ戻つた。「ミ屋敷と呼ぶのは大袈裟だが、

それでも少々汚すさる。それに、戸口本や戸口ビデオの類を堂々と部屋に転がしている時点で、室井の私生活がいかに節操のないものなのか、嫌でもわかつて仕方がない。

いつたい、自分はここで何をしているのか。ふと、そんな虚しさが湧いてきたとき、凍呼は田の前に白塗りの扉があるのに気がついた。

（あれ、この扉……）

田の前の扉は完全に閉じてはおりず、半開きのよつたな状態になつていた。奥の部屋がリビングならば、ここは恐らく寝室か何かだろうか。

くすんだ山吹色の取手を握り、凍呼は扉をそつと開ける。もしかすると、室井は身体の具合が悪く、この部屋の中で寝ているのではないか。そう思つて扉を開いた瞬間、なにせらむつとする、酷く生臭い臭いが溢れて来た。

「うう……。な、なによ、これ……」

流しの下と言つても物足りない。腐つた卵とこつのも違つ。なにやら、物凄く濃厚で、それでいて胸やけを引き起しそうな酷い悪臭。ちょうど、浜辺に打ち上げられて死んだ魚が、真昼の陽射しにやられて腐つたような臭いだ。

「どうしたんだい、凍呼ちゃん？」

扉の前で動けなくなつてゐる凍呼に気づいたのだろう。富森が、リビングから出て凍呼の開けた扉の前に立つた。

瞬間、扉の隙間から漏れた酷い匂いが鼻をつき、富森もまたハンカチで鼻を抑えて後退する。いつたい、この臭いは何だろ。いかに室井が自堕落な生活を送っていたとはいえ、この臭いはあまりにも酷過ぎる。

「あの……。富森さん……」

「わかつてゐよ、言わなくとも。ここ、室井さんの寝室だからな。中で、何かあつたのかもしれない……」

それ以上は、富森も何も言わなかつた。寝室の中から漏れてくる悪臭の正体が何なのか。それは、富森だけでなく、凍呼もまた薄々感づいている。ただ、それを認めてしまうのが酷く恐ろしくて、どうしても口に出せないでいた。

ハンカチで鼻先を抑えたまま、富森が凍呼に変わつて扉を開ける。途端に、今まで以上の物凄い生臭さが一人を襲い、富森と凍呼はしばし部屋の中に入るのを躊躇つた。

「いつたい、この部屋で何が起きた。この部屋の奥に、何が待つているといふのか。

壁伝いに探るようにして、富森は部屋の中に足を踏み入れた。凍呼も後ろに続く。富森の背中に隠れるようにして、時折、その顔を覗かせながら、いつになく怯えた様子で部屋の中に入る。

寝室として使われている部屋は、これまた酷く散らかっていた。脱ぎ捨てられた下着が転がり、他にもいくつか衣服が散乱しているのが見てとれる。が、今の富森と凍呼にとつては、そんな物は取る

に足りない些細な物でしかなくなっていた。

「い、嫌ああああつ……」

富森の後ろから、凍呼の甲高い悲鳴が聞こえてきた。富森自身、その悲鳴を聞きながら、まったく動けずに部屋の中に立ち尽くしていた。

「そ、そんな……。室井さん……」

そこにいたのは、室井だつた。いや、かつては室井と呼ばれていた、一人の男の成れの果てと言つた方が正しいか。

ベッドの上の死体は仰向けに横たわり、苦しそうに胸元を抑えていた。口は大きく開かれており、その頭部の半分程が既にない。ベッドの上に置かれた枕を中心に、部屋の壁、床、そしてシーツの上にまで、ありとあらゆる場所に血が飛び散つてゐる。それだけでなく、赤黒い血や肉の塊に混ざつて、砕け散つた脳漿までもが室井の顔の周囲に散らばつっていた。

「あ……ああ……」

掠れた声と共に、何かの倒れる音がした。慌てて富森が振り返ると、そこには白目を向き、完全に失神している凍呼の姿があつた。

「と、凍呼ちゃん!-?」

倒れた凍呼に駆け寄つて、富森は彼女を抱きかかえて名前を呼んだ。しかし、あまりに壮絶な室井の死に様を目の当たりにしてしまつたからだろうか。いくら呼べども、叫べども、凍呼は一向に目を

覚まそうとはしなかった。

その腕の中に凍呼の細く、しかし柔らかい身体を抱えたまま、富森は改めて室井の方へと顔を向けた。が、直ぐに凍呼の方へと向こう直り、彼女を抱えたまま急いで部屋を後にした。

先ほどから漂っていた酷い臭いは、きっと室井の遺体が発してしたものだらう。室井と連絡が取れなくなつたのは数日前。恐らくは、その際に、既に室井はこの世を去つていた可能性もある。

死亡したのが早くとも金曜の夜だつたとして、そこまで酷く腐敗しているわけではないはずだ。もっとも、あんな死に様では、部屋を開けた際に漂ってきた生臭さにも頷ける。飛び散つた肉と血の臭いが部屋に充満し、それが悪臭の原因になつてゐたということは、想像に難くない。

その臭気に吐き氣を覚えながらも、富森はなんとか凍呼を部屋の外へと運び出した。本当は、今直ぐにでも部屋の外に出て新鮮な空気を吸い込みたい。そんな衝動にかられたものの、なんとか氣を取り直して携帯電話を取り出した。

そのまま凍呼を放つておくわけにはいかないし、それは亡くなつた室井に対しても同じだ。動ける人間が自分しかいない以上、まずは警察に、次には消防にも連絡を取る必要がある。

額の汗を拭い、富森はぎこちない手つきで携帯電話のボタンを押した。警察に電話をすることなど初めてだつたが、何故か妙に高揚した気分になつていた。

照瑠が高槻からの呼び出しを受けたのは、その日の昼を過ぎた辺りのことだった。

雪乃の家で、紅からの連絡を待つていた際、照瑠は雪乃の携帯電話を通して高槻から連絡を受けた。なんでも、今度は 奇跡空間ミラクルゾーン の作成に関わっていたディレクターが、プロデューサー 同様に変死したことだった。

同じ芸能界に関わる人間とはいえ、いつたい高槻は、どこからそんな情報を仕入れてきたのだろう。一瞬、怪訝に思った照瑠だったが、紅に取り次いで欲しいという高槻の話を受けて、直ぐにそんな考えは吹き飛んだ。

昨日の夜、照瑠たちの前から姿を消した後、紅とは一度も連絡が取れていない。向こうから連絡をくれるのを待つてはいたが、昼を過ぎても何の音沙汰もない。

このまま紅を信じて待つていようか。そう思つていた照瑠だったが、さすがにそんなことは言つていられなかつた。

高槻の話を信じるならば、例の番組の関係者が、既に亡くなつているということになる。当然、事件との関連性を疑うのが普通であり、それは紅に伝えておかねばならないことでもある。

放つておけば、事件はますます迷宮入りするばかりだ。警察内部にまで顔見知りのいる火乃澤町とは違い、ここは大都会のど真ん中。味方になつてくれる人間も少なく、協力者も数えるほどしかいない。

変死の真相が呪いにしろ祟りにしろ、完全に敵地である」とに変わりはないのだ。

一端、電話を切る形で、照瑠は高槻との話を終えた。そして、畠衣と交互に電話をする形で、何度も紅の携帯電話に連絡をすることになったのである。

結局、紅が捕まつたのは、それから三十分ほどしてからのことだつた。五分おきくらいに、何回もしつこく電話をしたからだろうか。照瑠の方から再度の電話をかける前に、紅の方から連絡があつた。

「九条か……。こう、何度も連絡をよこすとは……何か、急ぎの用事でもできたのか?」

電話の向こうの第一声が、これだつた。いつにも増して不機嫌そな様子だつたが、照瑠はあえてそれを無視した。今は、とにかく高槻から言われたことを紅に伝えなければならない。その上で、紅と改めて合流し、高槻の話を聞く必要がある。

ディレクターの変死を端的に伝え、照瑠は紅との話を終えた。初めは適当に話を聞いていた紅も、新たな犠牲者が出たということ、最後はやけに慎重になつてゐるようだつた。

「さて、と……。それじゃあ、私はちょっと出かけるね。犬崎君とは連絡が取れたけど……あいつに全部押し付けて、私だけ遊んでいるつてわけにもいかないし」

部屋の隅に置いておいた鞄を拾い、照瑠はそう言つて立ち上がりた。その後ろから雪乃や畠衣がついてきたが、照瑠は直ぐに振り返り、彼女達を制するようにして右手を突き出した。

「ごめん。悪いけど……今回、私一人で行かせてくれない？ なんだか、ちょっと嫌な予感がするから」

「むう、友達がいがないですね……。折角ここまで一緒に来たのに、今さら抜け駆けですか、照瑠どの？」

同行を拒否されて、亜衣があからさまに不満そうな顔をした。

「本当にごめんね、亜衣。だけど、さすがに今回は、私達も迂闊に動けないわよ。高槻さんの話を聞く限り、人が一人亡くなっているみたいだし……。それに、あまり大人数で行つても、雪乃やまゆさんの立場だつてあるだろうし……」

最後の方は、少しばかり言葉を濁す形になつた。

自分や亜衣とは違い、雪乃やまゆは芸能界の人間だ。そんな人間が、奇怪な変死事件を追いかけて動き回つているということが、三流週刊誌の編集者にでも知られたらどうなるか。その先は、照瑠でなくとも簡単に予想がつく。

変死事件と絡め、あることないことを書き立てられた挙句、場合によつては芸能人としての生命線を断ち切られるかもしれない。決して大袈裟な話ではなく、それは十分に考えられることだ。

火の無いところに煙は立たぬというが、それはあくまで一般人を相手にした場合の話。火の無いところに、あえて煙を立てるのを仕事にしている連中がいることくらい、業界内部の話に疎い照瑠でもなんとなく想像はできる。

それに、照瑠はなによりも、高槻に余計な心配をさせるのが嫌だつた。

変死したディレクターの謎を追うところとは、それは即ち事件の核心に近づくということだ。確かに、事件を解決するためには必要なことなのだろうが、核心に近づけば、それだけ危険も増す。紅と自分がいる限り、そう簡単に雪乃の身に何かが起こるとは思えなかつたが、高槻はあの通りの男だ。雪乃の身を察し、余計な気苦労を変に背負い込まれるのも申し訳ない。

なんだかんだで、自分は結局世話やきなのだと照瑠は思った。火乃澤を離れ、わざわざ東京にまで出てきても、観光をそっちのけで他人の心配ばかりしている。それが他人を癒すことを生業とする、癒し手の性だと言われれば、それまでな気もするが。

「それじゃあ、私はもう行くね。これ以上、犬崎君を待たせると、どんな文句言われるかわからないし」

「しようがないですね……。でも、本当に一人で大丈夫なの？ やっぱり、せめてもう一人くらい一緒に行つた方が、なんとなく安全な気もするけど……」

名残惜しそうに、亜衣が探るような視線を照瑠に向けてくる。話の流れで、このまま自分も一緒に連れて行つてもらえないだろうか。そんな淡い期待を抱いているのが見え見えだ。

亜衣が照瑠と一緒に行きたい理由。それは一重に、好奇心から来るものだろう。勿論、友人として照瑠のことを心配しているのもあるだろうが、半分は興味本位ということで間違いない。

「そのまま亜衣を連れていけば、きっと面倒になる。かといって、ここで強引に振り切つて出掛けたとしても、下手をすればこちらを尾行しかねない。紅とは別の意味で感覚のずれでいる亜衣のこと。その程度のことであれば、絶対にする。

果たして、この流れをどう切り抜けるか。そんな照瑠に救いの手を差し伸べたのは、意外なことに、まゆだった。

「仕方ない。それじゃあ、私が一緒に行つてあげるわ。一応、この中では最年長つてことだし……別に、構わないわよね？」

明らかに同意を求める視線を照瑠に向け、まゆは早くも玄関に出て靴を履いていた。断ろうにも断れない。そんな空気を、あえて自分で作りだしていくようだった。

「えつ……。で、でも……まゆさん、本当に大丈夫なんですか？」

「大丈夫って、何が？」

「だつて、まゆさんだって雪乃と同じ、テレビに出ている人なんでしょう？ それが、呪いだの祟りだのが絡んでいそうな心霊事件を追いかけているなんてことが知られたら、やっぱりまずいんじゃ……」

「ああ、なんだ、そんなこと。だつたら、無用な心配つてところかな。私、雪乃と違つて、そんなに顔が売れているわけじゃないからさ。スタジオ用のメイクをしているわけでもないし、普段着で歩いていれば気づかれないでしょ」

自分と雪乃是別格だ。だから、照瑠と一緒に歩いても大丈夫。そ

れが、まゆの告げた理由だった。

確かに、彼女の言つてることも一理あると照瑠は思つ。しかし、本当に平氣なのだろうか。本人から保証されても未だ不安な照瑠だったが、まゆは気にすることもなく、照瑠の手を引いて外に出た。

「それじゃ、ちょっと行つてくるからね。一人とも、とりあえず留守番よろしく……」

これから凄惨な事件の現場に向かうと、まるで買い物にでも出かけるような言い方だった。その、あまりに場違いなまゆの行動に、照瑠はしばし首を傾げながら雪乃の部屋を後にした。

廊下を曲がり、エレベーターの扉の前に立つ。ボタンを押して呼び出され、エレベーターは直ぐに一人の前にやつってきた。

開かれた扉の向こうには誰もいない。日曜日だが、外出する者は少ないのでだろうか。それとも、日曜日だからこそ、住民たちはそれぞれの部屋で、ゆっくりと余暇を過ごしていることだろうか。無機的な個室に入ったところで、まゆが壁にもたれかかったまま溜息をついた。なんだか、随分と氣を張つた。そんな風にも受け取れる様子だった。

「はあ……。とりあえず、なんとか抜けられたわね。雪乃が一緒に来るつて言いださなくつて、本当に助かっただわ」

「ええ、まあ……。でも、それにしても、今日はいつたいどうしたんですか？ 急に、私と一緒に犬崎君や高槻さんに会いに行くなんて言い出して……」

先ほど、雪乃の部屋を出る際に見せたまゆの態度。それがどうこ
も気になつて、照瑠は思わずまゆに尋ねていた。

「ああ、それね。一応、私だつて当事者だし、そもそもの依頼人み
たいなものじやない。だから、いつまでも年下のあなた達に甘えて
られないかなつて……そう思つただけよ」

「そうだつたんですか。なんか、返つて氣を使わせたみたいで
ません」

「別に、九条さんが気にすることはないわよ。真相を知りたいつ
ていうのは、私だつて同じだからさ。確かに、ちょっと怖いのもある
けど……」まゆは、お互い様つてやつてしまふ

親指を立てて、まゆがにやりと笑つて見せた。強がつていいのか、
それとも本心からなのか。それを照瑠が確かめようとしたとき、エ
レベーターの扉が重たい音を立てて開かれた。

駅前の大通りを抜け、閑静な住宅街に入った直ぐの場所に、その
マンションは建つていた。

連絡用の携帯電話を片手に、照瑠とまゆは互いに顔を見合せながら歩いてゆく。二人一緒に行動しているとはいえ、土地勘の無い場所を歩くのは、なぜかどうしても気後れする。

電柱の横を曲がったところで、照瑠は見慣れた白金色の髪を見つけた。黒い「コード」と、その色とは対照的な白い肌。そして、燃えるような赤い瞳が、こちらを横目で睨んでいた。

「遅いぞ、九条。既に、高槻さんも到着しているんだからな。少しは時間というやつを、気にして動いたらどうなんだ？」

出会ったそのやう、いきなりの憎まれ口。その横柄な態度に、早くもまゆが辟易したような顔をしている。が、照瑠にとつては、これも普段の日常の一コマ。すかさず紅の前に歩み寄ると、彼を正面から見据えて言い返した。

「悪かったわね、犬崎君。でも、女の子の身だしなみってのは、時間がかかるものなのよ。いいかげん、そのくらいのことは理解してもいいんじゃない？」

「興味はない。人が死んだ現場に出掛けるのに身だしなみを気にするなど、俺には理解できない感情だ」

「その言葉、そっくりそのまま返すわよ。昨日の夜、連絡も無しにほつつき歩いていた人に、常識なんて語つて欲しくないんだけど」

昨晚、連絡一つよこさずに、散々心配をかけたこと。それを引き合いで出した照瑠だったが、紅にはあまり響いていないようだった。

「とにかく、今は時間が惜しい。既に警察の連中も来ているみたいだ。高槻さんとほ、現場で合流しよう」

そう言つが早いか、紅は照瑠とまゆを置いて、さつさと先に歩き出した。相変わらずの愛想のなさだが、これはもう仕方ない。喉ま

で出かかった言葉を飲み込んで、照瑠とまゆも、その後を追つ。

現場に到着すると、既にそこは警察の人間でごった返していた。マンションの入口には黄色いテープが張られ、住民たちが何やら聞きこみを受けていた。そこから少し離れた場所で、高槻が現場の様子を遠巻きに窺っていた。

「待たせたな。とりあえず、現場の状況はどうなつていいんだ？」

出会いがしらに、紅は高槻にいきなり質問をぶつけにいった。こうこうときは、まずは挨拶からするものではないか。つい、そんな言葉を口に出しそうになつた照瑠だったが、現場の片隅に丸まつている者の姿を見て、出て来た言葉を飲み込んでしまつた。

（あれは……？）

そこにいたのは、照瑠よりも一回り小柄な一人の少女だった。何やら相當に恐ろしいものを見たらしく、両手で口元を隠すようにして震えている。

隣にいるのは、あれは彼女の付添いの男だろうか。震える少女に代わり、現場に駆け付けた警察官の質問に答えていた。

いつたい、あれは誰だろ？。警察官と一緒にいることからして、事件の関係者なのだろうか。そつ、照瑠が考えていた矢先に、彼女の隣にいたまゆが、スタスタと歩きだして少女に近づいて行つた。

「ねえ……。あなた、大丈夫？」

少女の側に寄るなり、まゆは腰を屈め、目の前で震える彼女に話

しかけた。その言葉に、少女の顔が一瞬だけ上を向く。いきなり声をかけられたのが不思議だつたのか、怪訝そうな様子でまゆの顔を覗きこんでいる。

「あの……。あなたは？」

「篠原まゆよ。あなたと同じ事務所について……。ほら、例の番組の代行を引き受けた」

「えつ……ー？ そ、それじゃあ、あなたが私の代わりに、ミラクルゾーンに出演してくれた……」

「やうじうじ」と。まあ、あなたと違つて私は売れてないからね。顔を覚えてもらつていなくて、仕方ないと思つけど……。改めてよろしくね、葵璃凍呼さん」

自嘲気味に笑い、まゆは凍呼の横に並ぶようにして腰を降ろした。そして、優しくその肩に手を回すと、そのまま諭すようにして話を続けた。

「とりあえず、今は場所を移さない？ こんなところで丸まついても、警察の人の邪魔になるだろ？ し……。後のことば、あそこにいる富森さんが、なんとかやってくれるわよ」

まゆの視線が、一瞬だけ富森に向けられる。凍呼に代わり、警察の質問を受けていた男だ。番組に出演したのは一度きりだったが、打ち合わせの段階で、まゆも富森の顔は知っていた。

富森の方は、未だ警察からあれこれと訊かれている。本当は、彼にも事情を尋ねたかつたが、今はさすがに無理そうだ。そうなると、

後の話は富森ではなく、ここにいる凍呼に尋ねる他にない。

とかく、まずは凍呼を落ちつかせ、それから話を訊くしかないだろう。まゆは凍呼に立ち上がるよう促すと、そのまま彼女を連れて照瑠たちのいる場所へと戻った。どうやら紅も高槻との話を終えたらしく、戻ってきたまゆに三人の視線が向けられた。

「お前は……確かに篠原まゆとか言つたか？ いきなり現場に踏み込んで関係者を引っ張つてくるなんて、随分と大胆なことをするものだな」

赤い瞳を向けるや否や、紅のぶつきらぼうな台詞が口から飛び出す。照瑠の手前、露骨に嫌な顔はできなかつたが、それでもまゆは、やはり紅の出すこの雰囲気とは、どうしても相容れないものがあると感じてしまった。

「ま、仕方ないでしょ。別に、警察の捜査を邪魔しに行つたわけでもないし……。ただ、事務所の後輩に、ちょっと助け船を出してあげただけよ」

「事務所の後輩？ そう言えども、その女……昨日のテレビ局でも会つたな。確か、あの陰陽師と一緒にいたやつじやなかつたか？」

「ええ、そうよ。彼女、ミラクルゾーンのレギュラーだからね。私が例の事故のあつた生放送に出演したのは、あくまで彼女の代理つてことだし」

「そうこうとか。なら、話は早い。お前……あの、マンションの中で何を見た？」

紅の瞳が、まゆの隣にいた凍呼に向けられた。あくまで自然に接したつもりだつたが、それでも今の凍呼には、いさか刺激が強過ぎたのだろうか。幽霊のような紅の外観も相俟つて、彼女は一言、短い悲鳴を上げただけだつた。

「ちょっと、犬崎君！ いきなりそんな訊き方つてないんじやない！？」

後ろから、照瑠が紅の背中を小突いて言つた。話の腰を折られてむつとする紅だつたが、照瑠はそれに取り合わなかつた。

「なぜ止める、九条？ 僕はこの女に、ただ目の前で起きたことを尋ねただけだぞ」

「だから、そういう言い方がまずいんだつてば！ 彼女、怯えているじゃない。もつと、こいつ……優しく思いやりのある訊き方つてものができないの！？」

「残念ながら、僕はそういった類の感情を持ち合せていないんだな。お前の期待には答えられそうにない」

ざつくりと、斬り捨てるような言い方だつた。もつとも、その半分が嘘であることを、照瑠は当に気づいているが。

犬崎紅は、不器用なだけだ。今の言葉とて、彼の本心などではない。ただ、自分をさらけ出すことを良しとしない部分もあるため、時にこいつた誤解や衝突を招いてしまうことがある。

まったく、相変わらず世話の焼ける男だと照瑠は思つた。紅は頭も切れるのだが、たつた一人では警察や探偵の真似ごとなど決して

できない。確かに、事件を解決する際に見せる彼の才能は素晴らしいものがあるが、こうも聞き込みが下手糞では先が思いやられる。

探偵は、あくまで事件を解決する最終兵器。本当に必要な情報は、大概は助手が集めて来ることが多い。以前、どこかで見た探偵物のテレビ番組を思い出し、照瑠は自分と紅の関係に、彼らの姿を重ねていた。

「ねえ、あなた……。もしかして、まゆさんの知り合いの人？」

紅とは違つ柔らかい口調で、照瑠が凍呼に尋ねた。まだ、少しだけ緊張しているようだったが、それでも同年代の少女に話しかけられて安心したのだろうか。今度は悲鳴を上げることもなく、凍呼は照瑠に自分の見て来たものを語りだした。

金曜日から連絡の取れなくなつたディレクターに会おうと、AD の富森と一緒にマンションを訪ねたこと。そのマンションで、無残にも頭部を粉碎された、室井の死体を見つけたこと。死体を見て氣を失い、気がつけば富森に介抱されていたこと。

全てを話しあつたとき、凍呼は掠れた声で泣いていた。あの、室井の寝室で見てしまつたものが頭に蘇り、自分の感情を抑えきれなくなつてゐるようだつた。

「なるほどねえ……。まあ、確かに、そんな物を見たら氣絶の一つや二つだつてするわよね」

凍呼の前で、照瑠が大きく首を振つて頷いた。そして、目元を赤くしながら泣き腫らしている凍呼の頭に手を乗せると、すつと息を吸い込んで、意識を彼女の心に集中させた。

「この歳の少女にしては小柄な凍呼と違い、照瑠は随分と背が高い。170? を越える身長は、それこそ知らない者が見れば、雑誌のモデルやバレーボール部のエースと見紛う程だ。

「あ、あの……」

自分よりも一回りも背丈の高い少女に、いきなり頭に手を乗せられる。意味がわからないという表情で、凍呼は照瑠の顔を、覗き込むようにして見上げている。

どれくらい、そうしていただろうか。時間にして、物の数分の出来事だったのかもしれない。

気がつくと、凍呼はいつしか泣き止んで、呼吸も随分と落ちついたようだった。ほつと溜息をつき、照瑠は満足そうに凍呼の頭から手を離す。隣にいた紅も、横目でその様子を窺いながら、自嘲気味な笑みを浮かべていた。

「やるな、九条。さすがは九条神社の跡取りと言つたところか？以前に比べ、随分と力を増したようだな」

「まあね。犬崎君ほどじゃないけど、これでもちゃんと、修業だけは続けてたから」

「そいつは頼もしいな。お前のよくな芸当、俺には到底真似できません。こういった面倒事の際は、今度からお前が先に話を聞け」

「それはどうも。でも、犬崎君も、少しは人と話すときの作法つてものを、勉強した方がいい気がするけどね」

多少の皮肉を込めたつもりで、照瑠は紅に言つてやつた。嫌味といつよりは、自分の中にあつた驚きの気持ちを隠そつといつ方が強かつた。

あの紅が、よりもよつて他人を認め、讃めるよつな発言をする。なんとも珍しいこともあるものだ。そんなことを思ひながら、照瑠は再び凍呼に話しかけていた。

「少しは落ち着いた？ なんか、とんでもない目に遭つちやつたわね

「えつ……。は、はい……」

いつたい、自分に何が起つたのか。肝心の凍呼は、わけがわからぬという顔をして突つ立つてゐる。まあ、何の靈感もない凍呼にしてみれば、照瑠が癒しの氣を送り、彼女の気持ちを鎮めたことなど知る由もないのだが。

とりあえず、この場はなんとか落ちついたか。そういうしてゐる内に、照瑠や紅たちの下に、先ほどまで警察の質問に答えていた富森がやってきた。富森は紅たちの中に高槻の姿を見つけると、何やら慌てた様子で小走りに駆け寄つてきた。

「あつ、高槻さん！ 来てくれたんですね！…」

「富森君か。君から連絡を受けたときは、いつも自分の耳を疑つたよ」

「すいません。なんか、変なことで呼び出しちやつて……」

富森が、申し訳なさそうに頭をかいていた。どうやら今回の件は、富森が高槻に連絡をよこして話が伝わったようだ。と、いうことは、富森と高槻は、顔見知りの関係ということだらうか。

「それで……何か、僕たちに協力できそつな」とはあるのかい？
さつき、随分と警察に色々訊かれていたようだけど？」

「ええ、まあ……。俺と、そこにある凍呼ちゃんが、室井さんの遺体の第一発見者でしたからね……」

「それじゃ、君たちが警察に疑われているつてことなのかい？」

「いや、それはないと私は思います。ただ……室井さんの死に方が死に方なんで、色々と詮索されるのは仕方ないですけどね……」

富森の眼が、一瞬だけ高槻から逸らされた。高槻は室井の死に様子を目の当たりにしたわけではなかつたが、それでも先ほどの凍呼の様子と、今の富森の口調からはつきりとわかる。ディレクターの室井が、通常では考えられない様な、酷い死に方をしていたということは。

「それよりも、高槻さん。実は……俺、さつきヤバいもん見ちゃつたんですよ」

急に小声になつて、富森は高槻だけに囁くようにして言った。照瑠や紅も耳を澄ませたが、富森が出来る限り他人に話を聞かれてたくないと思っているのは明白だつた。

「俺、高槻さんに、神居さんの話しましたよね。例の、奇跡空間

ミラクルゾーン を、以前に担当していたディレクターの……」

「 そう言えば、そんな話も聞いたね。で、その神居さんが、どうして言つんだい？」

「 はい。実は、警察の……あれ、鑑識官って言つんですか？ そんな人が袋に入れて持つて来た物の中に、血まみれになつた文物の指輪があつたんです。」

「 女物の指輪？ でも、そんなもの、警察の人がわざわざ見せてくれるものかな？」

鑑識官が、現場で上がつた証拠を一般人に見せる。そんなことは考えにくいと首を傾げた高槻だったが、目の前の宮森は、至つて真面目な顔だった。

「 たぶん、半分は偶然みたいなもんだと思います。本當は、俺に質問して来た刑事さんの方に見せるつもりだったんだろうと……」

「 なるほどね。それで、その指輪は誰の物だったんだい？ まさか

……」

「 その、まさかですよ。神居結衣さんの話、覚えてますよね？ 発見された指輪、その神居さんがつけていた物でした。それも、発見された場所が、またおかしくて……」

「 発見された場所？」

「 そうです。指輪のあつた場所、どこだつたと思います？ 警察の人の話だと……室井さんの砕け散つた頭の中から見つかつたってこ

とでした

「なつ……。あ、頭の中つて……。どうして、そんな場所に指輪なんか……」

「それは、こつちが聞きたいくらいですよ。お陰で、俺も警察の人から長々と話を訊かれることになつたし……正直、何がなんだか、さっぱりわからないです」

一瞬、場の空気が凍りついた。

神居結衣のことは、当然のことながら高槻しかその存在を教えてもらつてはいない。しかし、今までの話の流れから、その人物が故人であることは容易に想像できる。宮森の言つていた 生前 という言葉を信じるならば、既に神居結衣という女性は、この世に存在してはいない。

そんな人間の指輪が、碎け散つた室井の頭部から発見された。これはいよいよ、話が怪奇な方向に傾いてきた。照瑠も紅も、そんな宮森の話を聞いて、ただならぬ事態が起きていることだけは理解していた。

（しかし……。それにしても、まさか人間の頭の中から指輪が出来るなんて……そんなことが、本当に起こり得るのか？）

話を全て聞き終えて、高槻は改めて腕を組み考えた。

今回の事件は、先代ディレクターの神居結衣による祟りである。

以前、富森と初めて会ったときのことが、高槻の頭の中で再生される。だが、その一方で、一抹の疑念も捨てきれてはない。

自分の番組が穢され、低俗な物に変わつてゆくことに怒りを覚え、どうとう番組関係者に死の制裁を加え始めた女性ディレクターの怨霊。確かに幽霊が犯人の事件としては、整合性の取れている話もある。

しかし、仮に本当に神居結衣の靈が今の番組の在り方を嘆いているとして、いきなり祟りなどという行動に出るだろうか。世界中から奇跡の感動エピソードを集め、高視聴率を記録するような番組を作っていた女性が、そんな身勝手な理由から、人殺しに走るだろうか。

生前の神居結衣がどんな女性であったのか。それは高槻も知らないが、さぞ聰明な女性であつたことは想像できる。そんな彼女のイメージと、人間の頭を碎いて殺すという残酷な手口。それが、どうにも結びつかない。

「神居さんの祟り、か……。僕には正直、何が真実なのかわからないな。犬崎君、君は今の話を聞いて、どう思う?」

「そう、いきなり言われても困る。今の俺たちには情報が少な過ぎだ。その、神居結衣というのがどんな女だったかということと含め、きちんと話を聞かせてもらわないとな」

「ああ、そうだったね。それじゃあ、それは僕の方からしておこう。できれば富森君にも同行してもらえると嬉しいんだけど……大丈夫

かい？

高槻の顔が、富森に向けられる。本当は、彼の口から話をしてもらつのが一番いい。そう思つた高槻だが、富森は首を縦には振らなかつた。

「すいません。俺、これから凍呼ちゃんを送つていかなくちゃならないんで……。あんな事件の現場に面会させちゃつたことだし……事務所の方から変な難癖つけられても、彼女が可哀想ですから」

「確かに、それもあるな……。だつたら、僕は僕で、残る女の子たちを送つてゆくことにするよ。犬崎君と話をするのは、その後になるけど……それで、構わないかな？」

「問題ない。俺の方でも少しばかり、調べたいことがあるんでな。しばらくは、一人で行動させてもらつが……そこには、一人を送つたら、改めて連絡をよこせ」

赤い瞳が、睨むようにして高槻を見てきた。苛立つてているというよりも、何やら色々と考え込んでいる。そんな風にも受け取れる様子だつた。

現世の常識しか知らない高槻にとって、靈だの呪いだの祟りだのといった、常世の常識はまるでない。紅が何を考えているのか、そんなことは、今の高槻では知る由もない。

今回の事件が、本当に神居結衣の怨霊によるものなのか。もし、そうだとすれば、これから先も番組関係者が殺され続けるのではないか。それこそ、目の前にいる富森は元より、果ては凍呼やまゆの命でさえ危険が迫つているのではないか。

室井の変死のことを考えると、事態は決して楽観視できるものではないと高槻は思っていた。しかし、自分にできることが限られている以上、ここから先は、全てを紅に委ねて見守る以外に方法が見つからなかつた。

扉を開けると、むつとした血の臭いが鼻をついた。

思わずハンカチで口元を抑えたものの、香取雄作は気を取り直し、改めて部屋の中へと入つて行つた。

仕事柄、凄惨な殺人事件の現場に出くわすことも少なくはないが、やはり、血の臭いというものは慣れるものではない。臭気にやられて嘔吐するような醜態を見せることはないものの、この臭いを好んで嗅ぎたいとまでは、さすがに思うは至らない。

部屋の奥に入ると、そこでは未だに現場検証が続けられているようだつた。血飛沫の飛び散つた現場の部屋では、鑑識の男と担当刑事が、なにやら色々と話をしている。今回の変死事件が、あまりに奇妙で説明がつかない。そんなことを互いに愚痴つてゐるようだつた。

固く、やけに周りに響く足音を立てながら、香取はつかつかと一人の男の側へと歩いて行つた。途中、その足音に気づいたのだろう。鑑識の方がこちらを向き、刑事の袖をつづいて促した。

「あん？ なんだ、お前は？」

明らかに不機嫌そうな顔をして、担当刑事が香取に睨みを利かせてきた。見るからに柄の悪い、悪人面をした男だ。何も知らない者が街中で出会つたら、刑事ではなく暴力団の一昧と思われるかもしない。

「公安第四課、警視正の香取雄作だ。これより本件は、警視庁公安部の管轄に入る。よつて、そちらには捜査の担当から外れてもうつことになるが……異論はないだろうな？」

懐から旧式の警察手帳を取り出し、香取も自分の身分を明かして男に言った。相手の気迫に負けず、至つて冷静な口調で言つたつもりだつたが、香取の階級を聞いても男は引き下がらなかつた。

「公安だあ？ 」Jつちはそんな話、上からは何も聞いてねえぞ！？

「当然だ。公安部の仕事は秘密裏に行われるのが常だからな。こちらの事情を説明する義理は、初めからない」

「ああ、そうかい。だがな、こつちだつて、身体張つて仕事してんだ。公安だかなんだか知らねえが、後からやつてきて、勝手に人の手柄を横取りしようつてのかい？」

男の凄むような声が、部屋の中に響き渡る。手を伸ばせば届く距離にいるといふのに、こつまでして大きな声で話さねばならない理由はなんなのか。そう思つてしまつほどに、担当刑事の男は荒れた声を香取にぶつけて來た。

仕事上、仕方のないこととはいえ、この手の輩の扱いは本当に困

る。目の前の男は、恐らくは現場からの叩き上げ。香取のようなキヤリア組のことを、殊更嫌悪しているタイプの人間だ。それが、公安のような秘密組織に属するものであれば、尙更執拗に突つかかって来る可能性もある。

先ほど、こちらの階級を聞いても尻込みしなかつたことからして、階級を盾に男を黙らせることは不可能だろう。目の上の人間に立てついても、始末書の数枚を仕上げて提出すればよい。そんな風にしか考えていない、短絡的な相手かもしれない

折角現場に到着したのに、これでは捜査が進まない。なんとか男を現場から追い出したいと香取が考えた時、目の前の男のポケットから、携帯電話の呼び出し音が鳴り響いた。

「あんだあ？　この、クソ忙しいときには……」

周りにいる全ての人間に聞こえるように悪態を吐きながら、男はしぶしぶ携帯電話を取り出して耳に当てた。しばらくは、男は実に不満そうな顔で電話の向こう側の声に耳を傾けていたが、やがて、用件も済んだのか、電話を無造作に折り畳んでポケットにねじ込んだ。

「おい、ついてたな、あんた。俺は署長に呼ばれて、これから署に戻ることになった。ついでに、現場の指揮も、あんたら公安に任せろって命令だ」

「そいつは助かるな。賢明な判断に、感謝しそう」

「へつ、良く言つぜ。後からのこの来て、その上で根回しするなんぞ、随分と汚ねえ仕事がお得意のようだな、公安さんはよーー！」

喉の奥で不快な音を鳴らし、男は痰唾を香取の足下に吐き捨てた。現場がマンションの一室であることなど、まったく気にしていないようだった。

ドスドスと、まるで地鳴りのような足音を立てて、男は部屋を出て行った。後に残された鑑識官に、香取は場所を外すようにだけ指示を出す。まだ、現場の検証さえしていないというのに、なんだか随分と興醒めしてしまった。

軽い溜息を吐いた後、香取は田の前に転がっている変死体に改めて目をやつた。報告にはあつたものの、こうして見ると、その余りの酷い死に様に異様なものを感じざるを得ない。

肉体の酷く損傷した遺体はこれまでにも数多く見てきたが、その臭気と同じく、やはり慣れるものではない。仕事柄、顔にまで露骨な嫌悪感を露わにすることこそないものの、死んだ人間を田の当たりにするというのは、決して気分の良いものではない。

遺体は頭部を激しく損傷しているが、逆にそれ以外の外傷は見当たらなかつた。いったい、何をどうすれば、ここまで激しく人間を破壊できるのか。最も有力なのは爆発物の類を用いたという線だが、これは今回の事件には当てはまらないような気がした。

「やれやれ。到着早々、変なに絡まれて災難でしたね」

突然、後ろから声がした。聞き覚えのある声に、香取はゆっくりと振り返る。見ると、そこには眼鏡をかけた細身の青年が、腕組みをしたまま壁にもたれかかっていた。

「氷川か……。相変わらず、人の背後を取ることが趣味のようだな

「そいつはひとつも。まあ、俺たちの中で香取さんの背後を取れるのは、この俺くらいの者ですけどね

「下らない前置きは不要だ。それよりも……この現場を管轄している警察署に根回しをしたのは、お前か？」

「ええ、そうですよ。香取さんと違つて、そういう仕事は俺向きなんだね。面倒事が起きた前に、わざわざ済ませておきました」

指先で眼鏡の位置を少しだけ上げて、氷川と呼ばれた男がにやりと笑つた。

氷川英治。香取と同じく、彼もまた公安四課に所属する死靈管理室のメンバーである。巧みに己の気配を消して相手の背後を取ることを得意とし、同時に情報戦のエキスパートという側面も持つ。同じ死靈管理室の中でも、香取がもつとも信頼している部下の一人だつた。

香取が現代を生きる傭兵に例えられるならば、氷川は正真正銘のスパイと言うに相応しい男だつた。それこそ、ハリウッドのスパイ映画にでも登場しそうな、絵に描いたような工作員のイメージが強い。映画のような常識外れのアクションはできないだろうが、その頭脳はときに、死靈管理室の大的なる助けとなる。

スッと伸びた背をまったく曲げず、氷川は室井の変死体に近づいた。香取同様に、その顔に嫌惡の色は現れていない。不快な臭気は感じているだろうが、精神状態のコントロールという点でも、氷川は香取より上だつた。

脳漿をぶちまけ、その頭部の上半分を失っている無残な死体。腰を屈めて覗きこむと、氷川は首だけを香取の方へと少し向け、遺体と交互に見比べながら口を開いた。

「つたぐ、こりやまた酷い死に様ですね。やつぱり今回も、例のテレビ局で起きた事件と同じ手口ってことですか？」

「ああ。断言はできないが、死んだのが例の番組を作成していたディレクターだからな。死亡の原因は未だ不明だが、恐らく死因が同じことは間違いない」

「そうですか。まあ、その死因がわからないんじや、さすがにこれ以上は俺もお手上げですけどね。現場から、火薬の類でも発見されりや、直ぐにでも捜査権を通常の警察に返せますけど……」

「残念ながら、それは無理そうだな。ショットガンで頭を碎いたのも違う。こいつは明らかに、内部から頭を粉碎されている」

「へえ……そいつは興味深い。まさか、犯人は中国秘伝の暗殺拳の使い手だった、なんてことにはなりませんよね？」

「ふつ……。こりやなんでも、それはないと想いたいがな」

両手の人差し指と中指を立てて冗談を言つ氷川に、香取も思わず苦笑して答えた。

もし、氷川の言つように、相手が人間だったのであればどれほど楽か。例え漫画の世界から飛び出してきた暗殺拳の使い手であつても、相手が人間であれば、まだ勝機はある。

だが、目の前に転がる室井の遺体は、その死の原因が明らかに向こう側の世界の力によるものだと物語っていた。その力の正体は、果たして呪いか祟りか、それとも香取の知らぬ超能力の類なのか。靈感のような力を持ち合わせていない香取にとって、そこまではわからない。

やはり、これ以上は自分たちでは限界か。後は鑑識の人間たちに現場を任せ、監察医の検死解剖結果を聞く他にない。無論、こちらで子飼いにしている、信頼できる法医学者に依頼をしなければ駄目だろうが。

そこまで考えたとき、今度は香取の携帯が唐突に鳴り始めた。取り出して画面に映し出された文字を確認すると、香取は一言、「少し頼む……」とだけ残して部屋を出た。

血の臭いが充満している部屋の中とは違い、外の空気は爽やかだつた。下から吹き上げるような風がマンションの廊下を抜け、香取の服の裾を揺らした。

「俺だ。こちらは今、現場で取り込み中なんだが……用件は何だ?」

開口一番に、香取は自分の名前も名乗らず尋ねた。相手が誰であろうと、香取は電話越しに自分の名を名乗ることをしない。自分に電話をかけてくる人間は、即ちこちらの正体を知っている人間である。それがわかっているからこそ、あえて面倒な社交辞令など避けて通る。

「こちらの要件など、そっちもわかっているだろう? あんた達、警察の人間が封鎖していて、俺はそちらに入れない

電話越しに聞こえて来たのは、まだ若い少年の声だった。声の主が先日の夜に出会った外法使い、犬崎紅であることは、電話に出たときから知っていた。

あんたは言つたな。俺たちは、利害の一致から協力する必要があると

「ああ、そうだ。そちらが連絡をくれたことは、俺も感謝させてもらう。お陰で、地元の警察が色々と動く前に、つまく騒ぎが広がるのを止められた」

「そいつは結構なことだつたな。だつたら、代わりに一つだけ教えて欲しい。そのマンションで死んでいる男の状態なんだが……例の、頭が砕け散ったプロデューサーと、死因は同じと見て間違いないのか？」

「司法解剖に出していいから、まだなんとも言えん。ただ、男の死因が銃機や爆発物によるものでないことは確かだ。部屋には弾痕も、火薬を使用した形跡もない。俺も今しがた現場に到着したばかりだが……他に、不審な点は見当たらなかつた」

「そつか……。こちらも、何かわかつたら、また連絡をさせてもらう。その代わり、重要だと思った情報は、隨時提供してもらわないと困るがな

「配慮させてもらおう。もつとも、お前の行動次第では、こちらも協力を打ち切らせてもらつぞ」

構わない。そうなつたら、そうなつたで……」こちらも勝手にやら

せても、うつ

電話が切れた。自分も他人のことは言えないが、香取は電話越しに話した紅に対し、随分と愛想のない人間だと感じていた。

紅の口調には、あの年頃の少年が持つていそうな明るさや快活さはない。外法使いとして、闇の中に巢食う向こう側の世界の住人たちを、常に相手にしているからだろうか。こちらの感情を見せない喋り方に臆することもなく、向こうもまた、端的に自分の言いたいことだけを述べてきた。

この関係は、事件が解決するまでの一次的なものに過ぎない。本来、自分たちは、紅のような人間が関わった事件の後始末をするのが主な仕事だ。それまでは、互いに腹の探り合いのような会話を続けながら、それぞれが事件の真相に迫つて行く他にないのだろう。

まったくもつて、不便な立場であると香取は思った。この仕事を続けて長いが、単に心霊事件の痕跡を隠すだけでなく、ときに自分たちが前面に立つて、事件の解決に努めねばならないときもある。その際に、紅のような人間が部下として常駐できないのは、やはり問題があると感じていた。

自分たちは、真実を突き止め、それを隠すことが仕事である。そのためには、迂闊に人前で真実を晒すような行動はできず、それ故に霊能力者との接触も、極力避けるように言われている。

だが、それならば、何の霊能力も持たない捜査員が、本当に呪いや祟りのような力と対峙せねばならなくなつた際はどうするのか。この辺り、上の人間はもしかすると、自分たちを使い捨ての駒としてしか考えていないのかもしれない。

ふつ、と白嘲気味な溜息を吐きながら、香取は携帯電話をしまつて現場であるマンションの一室に戻つて行つた。

「こんなことは、考えていても仕方がない。公安四課第零系の仕事を請け負つたときから、自分の生き方というものは決まつていて。眞実を突き止め、それが表沙汰になつた際の混乱を防ぐことで、この国の秩序を守ること。それが、死靈管理室とも呼ばれる、自分たちの部署の職務なのだ。

現場に戻ると、未だ消えぬ血と肉の臭いが再び鼻先に漂つてきた。濃厚な死臭に一瞬だけ顔をしかめたものの、香取は直ぐに平静を保ち、部屋の奥へと消えて行つた。

加瀬順平が室井の死を知つたのは、その日の夕方になつたときのことだった。

生放送の本番中に、プロデューサーの西岡が変死してから早数日。いつたい、何が起きているのかもわからないまま、今度はディレクターが死亡した。しかも、彼に連絡をよこしてきた富森の話によると、室井の遺体はスタジオで西岡が死んだときの状況を思わせるようなものだったといつ。

富森が、なぜこんなときに室井のマンションを訪れたのか。そんなことは、今の順平にとってはどうでも良いことだった。

室井との連絡が金曜日から途絶えていたことは、順平とて知らな
いわけではない。本番中は風邪をひいていた様子もあり、恐らくは
見舞いにでも行ったのだろう。そして、そこで頭部の砕け散った室
井の遺体を発見し、慌てて警察に電話をしたということだ。

いつたい、自分たちの周りで何が起つてているのか。あれこれと
考へてはみるもの、順平にはどうにも説明できそうにない。

本当にあつた呪いの館。そんなタイトルを番組に冠し、やらせ映
像を撮影したことがよくなかつたのだろうか。あの、撮影現場とな
つた廃屋に入つた際に、全員が強力な呪いのようなものを受けてしまつたのではないだろうか。

だが、仮にそれが本当だとしても、それらの靈的な障害は、全て
御鶴木魁によつて祓われたはずだ。自分は現場に同行しなかつたが、
彼と一緒に再び屋敷を訪れた室井は、その目の前で魁の力の片鱗を
目の当たりにしたという。心靈現象には懷疑的な室井だったが、そ
んな彼の口から語られた話だけに、返つて信憑性が高いと言えた。

もつとも、その室井自身が、今では物言わぬ肉の塊になつてしま
つた。わざわざ番組子飼いの陰陽師に除靈までしてもらつたとい
うのに、これではさぞ室井もやりきれない気持ちでいっぱいだろう。

（除靈は失敗だつたのか……。いや、そんなはずは……そんなはず
はない！…）

いつの間にか、順平は自分の震える身体を抱きかかえるよつじ
て、独り毛布にくるまつていた。

魁の除靈が失敗だつた可能性。それは、確かに考えられなくもな

い。が、もしも除霊が失敗だつたならば、その後もスタッフの間で怪奇現象が続いていたはずだ。

御鶴木魁の話によれば、あの屋敷でカメラを回していた順平は、目に見えない様々な霊を映像に収めていたという。その結果、それらの靈的な波動を受けて、身体に変調をきたしたとのことだつた。そんな身体の不調も、魁が除霊を行つた後にはすっかり消えていたのだが。

では、そんな除霊が済んだ後に、西岡と室井が亡くなつた理由はなんだ。それも、頭部が砕け散つて死亡するなどという、どう考へても不可解な死に方で。

やはり、あの屋敷の祟りは終わつていなかつたのか。魁の除霊をくぐり抜け、番組スタッフの誰も気がつかないところで、息を殺して潜んでいた大悪霊。そんなものが、今になつて動き出したのではないか。

考えても考えても、どうどうめぐりをしてしまう。呪いなどあるはずはない。祟りなど、この世に存在しない。そう、わりきつてしまえば、どれだけ楽だろう。

いや、本当は、順平にもわかつているのだ。今回の一連の事件がある一人の人物の怨念によつて引き起こされているということを。幽霊屋敷の祟りとは関係なく、もっと何か別の存在によつて、恐ろしい連續殺人が行われているということを。

そう、殺人だ。今回の事件は、ある人物の怨霊が、ミラクルゾーンのスタッフを地獄へ引きずり込もうとして行つた殺人なのだ。

幽霊が人を殺すことを、果たして殺人と言つてよいのか。その言葉の是非は、今の順平には関係なかつた。ただ、次は自分の番なのではないかと思うと、それだけで気が狂いそつだつた。

西岡は、生放送の本番中に、スタッフの目の前で変死した。室井に至つては、自室に籠つていた状態で、原因不明の死を遂げた。これは即ち、こちらを狙つている怨霊の力からは、どこにいても逃げられないということを示している。

「い、嫌だ……。俺は死にたくない……。死にたくない……」

頭から毛布を被り、その端をしっかりと両手で抑え、順平は一人部屋の中で震えていた。気がつくと、窓の外が既に暗い。食事を摂ることも忘れて引き籠つていた結果、知らずに夜を迎えていたようだつた。

突然、部屋の中に軽快な電子音が流れだした。一瞬、肩を震わせる順平だつたが、それが自分の携帯電話から発せられる音だと知り、恐る恐る手に取つた。

「は、はい……」

震える声で、順平は相手に返事をした。電話番号は非通知で、誰がかけているのかはわからなかつた。

加瀬君だね……。久しぶり……

電話の向こう側から、何やら奇妙な声がした。機械によつて、声色が変えられているのだろうか。これでは相手が男なのか女なのか、まったく判断できない。

「だ、誰だ……！？」

「酷いなあ……。忘れ……とは言わせ……いよ

雑音が酷い。ザリザリと、なにやら鏃で削るような音が混じり、声がよく聞こえない。

「おい、お前は誰だ！ 誰なんだ！？」

「ふふふ……。あなた……ても……私……忘れ……いよ

「わ、忘れないって……。ま、まさか！？」

「思い……した……？ そつ……。あなた……考え……通り……

声が、不敵に笑つて言つた。ノイズに混じつて聞きとりにくい部分もあつたが、順平には、既に電話の相手が誰なのか、当に見当はついていた。

心臓の鼓動が、普段よりも激しくなつてゐるのが自分にもわかる。携帯を握る手がじつと汗ばみ、自分の意思とは無関係に震えている。

電話越しに、相手が声を殺して笑つてゐるのがわかつた。

嫌だ。これ以上は聞きたくない。相手の名前を聞いてしまえば、それだけで自分の精神は決壊を迎えてしまう。

私は……かみ……い……。あなた……ち……された……神居結衣

よ……

そこまで聞いたとき、電話が順平の手からするつと抜け落ちた。

嘘だ。そんなこと、あるはずがない。神居結衣は、前任のティレクターは、半年以上前に死んでいるはずだ。

「は……ははは……」

乾いた声が、喉の奥から漏れた。やはり、今までの一連の事件は、神居結衣の怨念によるものだったのだ。認めたくない。怨念など、この世にあるはずがない。彼女の怨念の存在を認めてしまえば、それは即ち、自分が死の運命から逃げられないことを認めてしまつことに等しい。

「俺は……俺は認めないぞ……。怨念なんて……幽霊に復讐されるなんて……絶対に認めないぞ……！」

自分に言い聞かせるようにして、順平は独り、部屋の中で叫び声を上げていた。その瞳に、既にまともな人間の輝きはない。どんよりと光りを失つて、正常な判断ができなくなつていてることは明白だつた。

顔を震わせ、ひきつらせながら、順平は先ほどの電話について考える。あの電話の声は、本当に神居結衣のものだったのか。機械によつて変声されたような声では、男なのか女なのか、よくわからない。

そうだ。あれは、神居結衣の怨靈などではない。あれは、神居結衣の怨靈を語る、何者かの仕業なのだ。そんな人物に、順平は一人

だけ心当たりがある。あいつならば、変声機を使って声を変える」とも、造作なくやつてのけるはずだ。

「あいつだ……。あのとき、俺達と一緒に仕事をした、あいつが犯人だ……」

「くくなつた西岡と室井、それに自分に共通する秘密を抱える者。その相手の顔を思い浮かべ、順平はにやりと笑つて立ち上がつた。

「待つてろよお、古澤あ……。俺は、絶対に殺されねえ……。お前みたいな裏切り者に、殺されてなんかやるもんかよお……」

ふりふりと、まるで何かに取り憑かれたようにして、順平は台所の方に向かって歩いて行つた。焦点の合わない目で、時折、同僚の古澤正昭の名を呟きながら、乾いた笑い声を上げていた。

都会の外れ、住宅街の中に佇む小さなアパートの一室で、古澤正昭は自分の携帯電話を重苦しい面持ちで見つめていた。

正昭に奇妙な電話がかかって来たのは、今から一時間ほど前のことだ。ノイズが酷く聞きとり難かつたが、声の主は、正昭の知る女性の名前を騙っていた。

神居結衣。半年ほど前に亡くなつた、以前に 奇跡空間ミラクルゾーン のディレクターを務めていた女性だ。彼女が亡くなつてから、番組のディレクターは室井が引き継ぐ形となり、自分たちはそのままスタッフとして残留した。

そんな彼女から、今になつて電話をもらひ。常識では、およそ考えられない話である。普通に考えて、誰かが彼女の名前を騙つている。そう思わなければ、正直なところやつていられない。

だが、そんな考えとは別に、正昭は自分に電話をかけてきた声の主が、本物の神居結衣ではないかという疑念も捨てきれないでいた。

数日前、西岡が亡くなるきっかけとなつてしまつた、あの生放送。あれで使う予定の幽霊屋敷の映像を撮影しに行つた後、正昭は奇妙な女の靈に悩まされることになつた。天井から、ロープで首を吊つた黒髪の女が現れて、じつとこちらを見つめてくるのだ。そんな悪夢を見た翌日、番組のレギュラーの一人である陰陽師、御鶴木魁の靈視を受けたことは記憶に新しい。

魁の靈視によれば、女の靈は幽霊屋敷の中で自殺した自縛靈との

ことだつた。魁は室井と共に再び屋敷へと向かい、そこで様々な幽靈を除靈し、惡夢は完全に終わつたかに思われていた。

自分の夢に現れた、あの首吊り自殺をした女。あれが神居結衣であつた可能性は、ほぼゼロだ。なぜなら、あの女の幽靈は、正昭が知る生前の神居結衣とは似ても似つかないものだつたのだから。

除靈は成功した。首吊り女の靈はいなくなり、自分は惡夢から解放された。そう信じていた矢先に、プロデューサーとディレクターが相次いで変死。果ては、亡くなつた女の名前を騙る、謎の電話までかかつてくる。

これはもう、間違いないだらう。自分たちは、神居結衣の靈に祟られている。なぜ、今になつて彼女の靈が行動に出たのか、それは正昭にもわからない。ただ、このまま放つておけば、いずれは自分も西岡や室井のよう、無残な変死体になる可能性は否定できない。

「しかし……。仮にこれが祟りだつたとして……いつたい、俺たちに何ができるよ……」

ふつ、と力なく息を吐いて、正昭は携帯電話を机の上に置いた。

自分には、幽靈と戦う力など何もない。御鶴木魁のような陰陽師に頼るという手もあるが、今から連絡をしたところで、この夜更けに果たして彼が来てくれるだらうか。

駄目もとで、警察にでも相談しようか。一瞬、そんな考えも頭をよぎつたが、正昭は直ぐに首を振つて、今しがた浮かんできた考えを否定した。

警察なんかに話をしても、頭がおかしくなったと思われるだけだ。それに、もしも警察に話をしてしまえば、それは自分たちが過去に行ってきた所業でも、白黒の下に晒すことになってしまふかもしれない。自分と西岡、それに室井や順平たちの中に秘められた、思まわしき過去の大罪を。

やはり、警察に話をするのは駄目だ。いいは一つ、今晚をなんとか無事に乗り切つて、明日の朝一番で魁に連絡をしよう。

そう、正昭が思ったとき、唐突にインター ホンの音が鳴り響いた。一瞬、肩をすくめ、恐る恐る後ろを振り返る。インター ホンの音は止むことなく、ひっきりなしに鳴つている。

まさか、神居結衣の靈が、自分を直接殺しに来たのか。そんなことはないと思いつつも、気づけば正昭の右手には、愛用のゴルフクラブが握られていた。

こんなものが、幽靈相手に役に立つのか。はつきり言つて保証はないが、気休め程度にはなるだろつ。

ゴルフクラブを片手に、正昭はそつと玄関の扉に足を忍ばせた。しかし、覗き窓から外の様子を窺うと、果たしてそこに立つていたのは、正昭の考えていたような女の幽靈などではなかつた。

「加瀬……」

扉の向ひに同僚の姿を見て、正昭は思わず呟いた。

覗き窓から見えたのは、カメラマンの加瀬順平だった。こんな夜中に、いったい何のようだらう。少々訝しく思ったものの、正昭は

扉のチヨーンロックを外し、順平を部屋の中に招き入れた。

「おこ、どうしたんだよ。こんな夜中に……いきなり、連絡もなく来るなんじや」

玄関の扉が閉まるとき同時に、正昭は順平に向かつて問い質した。まさか、彼も自分と同じよ、神居結衣からの電話をもらつたのではないか。そう思ったからだ。

「へへ……。どうした、だつて？　お前だつて、わかつてんだろ？　俺が、わざわざいんな夜更けに、お前のところまでやつてきた理由を……」

「な、なんだよ、それ。そんなこと、急に言われたつて、わかるわけ……」

「とほけんじやねえよ！　今日、俺のところに神居結衣の名を騙つて電話をしやがったのは、お前だつて。いや、お前に違ひねえんだ！」

こきいなり怒鳴りつけられて、正昭は何が何だかわからなかつた。自分が神居結衣の名を騙り、順平に電話をかけた。そんなこと、当然のことながら思い当たる節はない。

そもそも、神居結衣からの電話をもらつたのは、じつは同じなのだ。それなのに、何を勘違いして、順平はそんなことを言つただろ。慌てて説明しようとする正昭だったが、順平の口が、それを許さなかつた。

「俺にはわかつてんだよ。あの電話越しの声が、お前だつたつてこ
とぐらいはな。あの時の秘密を握つていいのは、もつ俺とお前しか
いねえ。だつたら、お前が俺を殺しちまえば、もう誰も秘密を喋る
可能性のあるやつはいなくなる……。そつ黙つて、西岡さんや室井
さんも殺したんじやねえのか？」

「ちよ、ちよっと待てよ……いつたい、何の話だ、加瀬！」

「何の話だ？ てめえ……俺がまだ、お前の仕組んだトリックに、
気づいてないとでも思つたかあ？」

首を横に傾け、順平の身体がゆらりと揺れた。内気で温厚なカメ
ラマン。そんな印象は、既に順平の中から消えていた。

「俺のとこにかかってきた電話の声……あれ、変えたのお前だろ？
音響やつてるお前なら、自分の声をかえて電話するなんて、簡単
だろうからなあ……」

「電話の声ー？ それじゃあ、やつぱりお前も、あの電話を……」

なんということだ。神居結衣からの電話をもつたのは、自分だ
けではなかつたのだ。あの声の主は順平のところにも電話をかけ、
しかも順平は、その犯人が正昭ではないかと疑つてゐる。

「お前が俺を殺そつてんなら、俺だつて考えがあるんだよ……。
どんな手を使つたか知らねえが、西岡さんや室井さんみたいな殺さ
れ方するのは、まつひら！」めんだからなあ……」

「お、落ちつけ、加瀬！ あの電話をかけたのは、俺じやない！
誰か、俺たちを陥れようとしている人間か、あるいは神居結衣の靈

そのものが……

「黙れよ！ だったら、その手に握ってる獲物はなんだ！ そいつで俺の頭をかち割らうって…… そう思つてたんじゃねえのか！？」

順平に言われ、正昭ははハツとした面持ちで、自分の右手に握られたゴルフクラブに目を向けた。その瞬間、冷たく鋭い何かが腹に突き刺さり、正昭の身体に恐ろしいまでの激痛が走った。

「あつ…… がああああつー！」

ゴルフクラブを取り落とし、身体をくの字に曲げて、正昭はその場にへたり込んだ。腹が熱い。生温かい感触が両手に伝わり、目の前の床に赤いものが広がつてゆくのが見える。

「死ねよ、古澤！ 俺は絶対に死なねえ！ 俺は絶対に殺されねえ！ 俺は…… 俺は生き残るんだあー！」

焦點の合わない目で、順平は手にした包丁を何度も正昭の背中に降り降ろした。その度に、赤い鮮血が辺りに迸り、順平の身体を徐々に染めてゆく。

やがて、目の前に倒れている正昭が完全に動かなくなつたところで、順平はがつくりと腰を折ると、実に満足そうな表情になつて笑つていた。光りを失い、灰色に淀んだ瞳で天井の一点を見つめ、その口からは乾いた笑い声が漏れている。

自分はもう、誰かに殺されることなどない。神居結衣の靈を騙る者は死に、自分は助かった。そう、助かったのだ。

「は……はは……。俺は勝つた……勝つたんだ……」

これから先、正昭を殺したことで、自分がどうなってしまうのか。そんなことは、今の順平にとつてはどうでもよかつた。ただ、目の前で冷たくなつている元同僚だった物を横目に、自分が死の連鎖から逃げられたと思い、ひたすらに笑い続けていた。

月曜日になると、街は急にいつもの顔を取り戻す。祝日の、親子連れや恋人たちからなる人混みとはまた違う、ビジネスマン達が行き交うそれに姿を変えるからだ。

都会の真ん中では、その傾向は特に強い。祝日の人混みの中にある顔の多くが楽しげな笑顔であるのに対し、平日のそれは、実に無機的で機械的なものに変わってしまう。お得意の取引先に見せる営業スマイルは持ち合わせていても、自分自身が、仕事の最中に本気で笑うことなど考えられない。そんなビジネスマン達の生き様が、如実に反映されている。

窓辺から、時折聞こえる車の走行音。それに、どこか遠くから断続的に響いてくる、工事現場の作業音。それらの音を聞きながら、犬崎紅は険しい表情を崩さないままに、部屋の中をぐるぐると回つ

紅が今いるのは、雪乃のマネージャーである高槻のマンションである。休日が終わり、月曜日になつていたが、紅は照瑠や亜衣と共に、火乃澤町に帰るという選択をしなかつた。二人は紅の出席日数のことを気にしていたが、そんなことは、今の紅には些細なことで

しかなかつたのだから。

呪いの館の潜入映像を生放送で流し、プロデューサーの変死によつて放送中止となつた番組、ミラクルゾーン。そのカメラマンを務めていた加瀬順平が、同僚の音響スタッフ、古澤正昭を殺害した。そのことを紅が知つたのは、今日になつてからのことである。

事件をニュースで聞いたとき、紅は直ぐに、事態が最悪の方向に向かつていることを理解した。プロデューサーの変死に始まる一連の騒動。その関係者が、とうとう呪いや祟りとは関係なく、自ら手を下すという形で人を殺したのだ。

順平が正昭を殺した理由。それは、紅にもわからない。呪いの中には人間の精神を錯乱させ、正常な判断力を喪失させるものもある。そういう類の呪詛を受けて、順平が発狂してしまつた可能性。これも、まったくないと言えば嘘になる。

だが、それ以上に紅が心配していたのが、呪いの伝染とも言える自己暗示だった。

呪いや祟りは伝染する。呪詛の話に詳しい者にとつては、これは別に不思議なことでもなんでもない。ただ、病気のように感染するわけではなく、ましてや靈的な何かによつて伝染するわけでもない。

呪いの伝染。それは、強烈な自己暗示により、呪いに関わつた者達が自ら破滅の道を選択してしまつことである。自分は呪われている。自分は祟られている。そう、勝手に思い込むことで、一種の強迫観念のようなものに取り憑かれ、最後は自ら命を経つたり精神崩壊を起こして奇行に走つたりするようになる。

今回の事件の発端は、心霊番組の生放送中にプロデューサーが変死したことだ。田舎の村で起きた変死事件であればいざ知らず、全国ネットで放送されるようなテレビ番組の関係者が、収録中に変死した。しかも、その後を追うようにしてディレクターまでもが変死し、果てはカメラマンが同僚を刺殺するといつ凶行に出た。

ここまで異常な事態が頻発していれば、人々の間に呪いが伝播するるのは時間の問題だ。ここに来て、公安の香取が気にしていたことが、改めて現実味を帯びて来た。

公安四課第零系。別名、死霊管理室。彼らの仕事は心霊事件の隠蔽だが、それは何も、国家が幽霊の存在を認めたくないというだけではない。

靈的な存在の有無に関係なく、オカルトな事件の類によつて、社会に無用な混乱が起きることを防ぐこと。それこそが、彼らが結成された本来の目的ではないだろうか。呪いの伝染によるパニックが懸念される今、紅にはそつとしか思えなかつた。

「それにしても……」

部屋の中を歩き回る足を止め、紅は口元を隠すよつこじて手をやつた。

今回の事件は、色々とわからないことが多い多過ぎる。昨日、室井のアパートを訪れた際に、ADの富森が口にしていた神居結衣という女。高槻から改めて話を聞かされたが、彼女がかつてミラクルゾーンの制作に関わっていたことと、既にこの世を去っていること以外には、これと書いて曰ぼしい情報も得られなかつた。

今回の事件は、果たして本当に、その神居結衣という女の祟りなのか。高槻の話では、宮森は彼女の靈が復讐を始めたのではないかと、本氣で勘織っている様子だったという。現に、死亡した室井の頭部から神居結衣の指輪が発見されたことからも、彼女が事件に何か関わっているのは間違いない。

だが、それにしても、やはり今回の事件は色々と腑に落ちない点が多過ぎる。神居結衣の指輪にしても、なぜ今になつて、室井の頭部から発見されたのだろう。室井の死因が西岡の死因と同じならば、西岡が亡くなつた際にも、彼の身体の中から神居結衣の遺品が発見されてもおかしくはない。混乱の中、それどころではなかつたのかかもしれないが、二人の死に方は似ている部分と異なる部分を併せ持つてゐる。

また、それ以前に、そもそも神居結衣の遺品が被害者の体内から発見されたという事実。これが、紅にはどうにも理解し難いことだつた。

普通、死んで悪靈になつた存在が人を祟るのであれば、対象者の身体に憑依するのが手つ取り早い。その上で、体内から魂を削り殺し、徐々に衰弱死させてゆくのが普通のやり方だ。今回の事件のように、いきなり頭をふつ飛ばして殺害するなど、そんな殺し方のできる靈などそういうない。

仮に、生前の神居結衣が一種の超能力的な力を持つていたとしても、それでは対象を殺すのに時間がかかり過ぎてゐる。

自分の駆る犬神、黒影も、呪殺に用いようと思えばいくらでも用いることは可能だ。その気になれば、憑依対象の内臓を体内から破壊してしまうような酷い靈傷を与えたり、魂そのものを焼き尽くし、

肉体には一切の傷をつけずに殺したりすることもできる。

だが、それに比べて、神居結衣の怨念はどうだろう。確かに、二人の人間の頭を吹き飛ばしたのが彼女の力なのであれば、その力は下級の神にも匹敵する恐るべきものだ。しかし、それにしては、あまりに場所を選ばずに、無節操に殺戮を繰り返しているようにしか思えない。わざわざ立つ人前で、第一の犠牲者である西岡を殺した理由がわからない。

それに、室井の体内から発見された指輪。しつこいようだが、あれがいつたい室井の死と何の関係があるのか。今まで自分が見たり聞いたりした、呪いや祟りの話を全て合わせて考えたが、紅にはやはり納得のゆく答えが見つからなかつた。

「くそつ……！」の不自然なまどまりのなさは、いつたい何なんだ！！

苛立ちを隠しきれず、紅は側にあつた本棚に向かつて無造作に拳を叩きつけた。ゴツ、という鈍い音がして、本棚が揺れて拳に痛みが走る。自分でも思つた以上に強い力で叩いてしまつたのだろう。思わず手を引つ込めると、なにやら本棚の直ぐ下の方に、一冊の本が転がつているのが目付いた。

先ほど、本棚を叩いたとき、その衝撃で落としてしまつたのだろうか。何気なく手をとつてみると、どうやらアイドルの写真集のようだつた。

「これは……長谷川の写真か」

本の中身を開き、紅は適当に読み流すようにしてページをめくつ

た。アイドルの写真集などに興味はなかつたが、写真そのものは、よく撮れていると思う。アイドルの写真集など、水着や際どい場面ばかりを収めたものだと思っていたが、この写真集は、そこまでいやらしい印象を与えるものではない。

そういうえば、自分も故郷の村にいたときに、主に野山の生き物を中心においていたことがある。もともと、今ではその写真やカメラを紅が与えてやつた少女も、既にこの世に生きてはいない。彼女の死は、自分が闇の世界の住人と本格的に戦う決意をさせたものであり、今もなお自分の心を縛りつけている。

気がつくと、紅は両手を閉じたまま、本を片手に回想に浸つていた。が、部屋の扉が開く音がしたために、直ぐにそれは終わりを告げた。

「やあ、犬崎君。ちょうど、お茶が入ったんだ。少し、休憩したらどうだい？」

扉の向こう側から、ティーカップを乗せた盆を持った高槻が姿を見せた。いつもは雪乃と一緒にテレビ局へ出かけているが、今日の仕事は家でもできる事務的なものばかりだから。そう言って、紅と一緒に事件の謎を追うことに協力してくれていたのだ。

ちなみに、肝心の雪乃は、今日は体調不良ということで休みを貰っている。まあ、これも方便のようなものなのだが、少しでも自由に動きたいのだから仕方がない。春先で、特番の収録などが立て続かないことで、なんとか休みを取れたのは幸いだった。

「おや……？ それ、雪乃の写真集じゃないか。犬崎君も、そういうのに興味があつたのかい？」

紅が手にしている本を見て、高槻が意外そうな顔をした。同じ高校男子でも、紅はアイドルに夢中になるような人間ではない。そう思っている部分があつたからだ。

「いや、別に興味があつたわけじゃない。ただ、さつき本棚から落としてしまつてな。ちょっと気になつたんで、少し中身を見てみただけだ」

「なんだ、そつだつたのか。僕はてつくり、君が雪乃のファンの人として、彼女を応援する気になつてくれたのかと思つたのに」

「期待させて悪かつたな。だが、心配するな。俺は長谷川達の曲を進んで買うようなことはしないが、何か変な事件が周りで起きたら、その解決には全力を尽くさせてもらひ。それが俺にできる、あいつらに對しての最良の関わり方だからな」

「そつか……。でも、そつ言つてくれると、僕も嬉しいよ。熱狂的なファン……つていうのは少し違うんだろうけど、純粹にありがたいことは確かだしね」

相変わらず、愛想のない少年だ。そつ思つた高槻だつたが、あえて口には出せなかつた。

紅の言葉が、照れ隠しから来るものなのか、それとも単に不器用なだけなのか。そのどちらかは、高槻にもわからない。ただ、紅が雪乃に何かあつた際、力を貸してくれるということだけは確かである。今回のような事件があつたときには、何の力も持たない高槻にとって、この申し出は素直に嬉しかつた。

「それにしても……」

再び写真集をめぐりながら、紅が何の気なしに口を開いた。

「意外と、よく撮れている写真だな。こうして見ると、スライドショーを見ているような気になせられる」

口元送りの映像を見るようにして、紅はパラパラとページをめくる。最後の方は夜の場面になつており、花火を背景に縁側に佇む浴衣姿の雪乃が映っていた。

「これは……？」

突然、紅がページをめぐることを止め、本の中から白い紙きれを取り出した。どうやら口元送りのレシートのようで、日付は随分と前のものになっていた。

「こんな物が間に挟まっていたんだが……これは、あんたが挟んだのか？」

例の如く、ぶつきらぼうな口調で紅が言つた。レシートを受け取つた高槻は、しばらくそれを眺めていたが、やがて急に何かを思い出したようにして手を叩いた。

「あつ、思い出したよ。これ、僕がしおり代わりに使つたレシートだ。こんなとこに挟んだまま、忘れて本を片付けていたんだな……」

「しおり代わり？」

「そうだよ。昔から、僕はその辺にある物をしおりに使ってしまう癖があつてね。いつのことかは詳しく思い出せないけど……たぶん、雪乃の写真集を眺めていたときに、仕事の電話か何かが入ったんだと思う。それで、適当にその辺にあつたレシートを挟んで、本を閉じたまま本棚に戻してしまつたんだ」

「なるほど。仕事に追われて、しおりを挟んだ事実を忘れてしまつたというわけか。まあ、よくある話だな」

「まつたくだよ。人間の記憶なんて、曖昧なものだからね。こうやつて間に挟んだまま忘れてしまうと、意外と自分でもわからなくなつてしまつものなんだな。」

テーブルに紅茶の入つたカップを並べながら、高槻はすこしばかり苦笑しながら語つていた。それを見た紅も、軽く笑つて本を閉じた。

このまま考えていても、今はどうぞ巡りで話にならない。時間が無尽蔵にあるわけではないが、ここは一つ、高槻の勧めに乗つておき、休息を取ることも大事だろ？。

ページを閉じた写真集を田の前の本棚に戻そと、紅はそつと手を伸ばす。だが、写真集が本棚の所定の位置に戻ろうとしたその時、赤い一つの瞳の奥に、何かに閃いたような輝きが宿つた。

突然、本を引き抜いて、紅は再びページを開いた。先ほどと同じように、いや、それよりも更に早く、何度も写真集のページをめくつてゆく。

「ちょ、ちょっと犬崎君！？ いつたい、どうしたって言うんだ！」

？」

紅茶を並べる手を止めて、高槻も紅に尋ねた。が、紅はそんな高槻の言葉など完全に無視し、ひたすらに本のページをめくっているだけだ。

様々な角度から撮影された、実に多彩な長谷川雪乃の「写真たち」。ページを素早くめぐることで、一種のスライドショーを見ているような感覚に陥つてくる。白いワンピース姿で砂浜を駆けまわる姿から、数枚の水着写真を経て、最後は浴衣で夕涼みをする姿まで。夏の日の一日の様子が、誰かの走馬灯でも覗いているかのように現れては消えて行く。

やがて、全てのページを閲覧し終え、紅はそつと「写真集を閉じた。そして、田の前で呆気に取られている高槻を他所に、確信めいた様子で頷いた。

「なるほど……。写真……間に挟む……その手があつたか……」

「な、なんだい、急に。写真がどうとか、間に挟むとか……。それ、今回のことにして、何か関係があるのかい？」

「ああ、大ありだ。プロデューサーの変死した原因……。そいつが何なのか、少しつかめた気がする」

「ええっ！ ほ、本当かい！？」

「嘘を吐いてどうする。だが、それでもまだ、こいつは俺の想像に過ぎない。俺の考えをはつきりさせるためにも、今はもう少しだけ証拠が必要だ」

閉じた本を落ちついた様子で本棚に戻し、紅は赤い瞳だけを高槻に向けた。あまりに急なことで、高槻の方は紅の話についていけていないようだった。

出された紅茶を無視し、紅は携帯電話を取り出すと、そのアドレス帳から嶋本亜衣の番号を探しだす。恩リバ、今は授業中のはずだが、事態が事態なだけに急を要する。

数秒の間、耳元でコール音を聞かれた後、電話の向こうから聞き覚えのある声がした。忘れようにも忘れられない、やたら甲高くテンションの高い声。知っている者からすれば、召乗らなくとも相手が誰なのか直ぐにわかる。

「じゅもー！ 亜衣ちゃんでーすー！」

「嶋本か。今は授業中だと思つたが……話をしても、問題ないか？」

「うん、平氣だよ。こっちも今、授業が終わつたところだしね

「だったら、話は早い。俺は今、高槻さんのマンションにいるんだが……そこへ、一つ送つてもらいたいものがある」

「送つてもらいたい物？ それ、何なのを

「お前が録画していた、例の心霊番組のビデオだ。速達で、着払いにしてくつても構わない。できれば明日までに、東京に着くよう手配しろ」

「明日までえ！ そんな、無茶苦茶なあー！」

「文句を言つた。プロデューサー変死事件の謎を解く鍵は、そのビデオにある。事態が最悪な方向に流れている以上、そちらに戻つてビデオを確認していいる暇はないんだ！」

いつになく焦つた口調で、紅は電話の向こうにいる亜衣に向かつて叫んでいた。できることなら、今この場で亜衣の録画したビデオを確認したい。そう言わんばかりの空氣を漂わせていた。

「むう、仕方ないですね。それじゃあ、悪いけどそつちの住所を教えてくれない？ 後、本当に着払いで送りますから、その辺は恨みつ子なしですぞ

「問題ない。では、今から住所を言つ。一度しか言わないから、ぼんやりして聞き逃したりするんじゃないぞ」

最後まで念を押す形で言い、紅は亜衣に高槻の家の住所を告げた。送り先を言い終えた後、紅は無造作に電話を切り、それをポケットの中に押し込んだ。

これで、第一の準備は整つた。後は映像を確認するだけだが、それだけでは事件を解決に導けない。自分の予想が正しいと信じるならば、もう少しの下準備が必要となる。

「高槻さん。悪いが、車を出してくれないか？」

「一トかけにあつた黒い外套を身にまとい、紅は外出の準備を整える。折角、紅茶を入れたのに。そんな抗議の声が聞こえてきそうだったが、今は一刻の時間も惜しかった。

「犬崎君。今度はいつたい、どこに行くつもりなんだ？」

「わからない。だが、探さねばならない相手がいる。そいつに会えば、今回の事件が呪いなのか祟りなのか、全てがはっきりするはずだ」

「探さなければならぬ人かい？ それ、いつたい誰なんだ？」

早くも玄関に向かつて歩き出した紅を、高槻が慌てて止めた。紅が振り返り、血の様に赤い瞳で見据えてくると同時に、その口がゆっくりと開かれる。

「神居結衣だ……。あんたが言つていた……例の番組で以前にディレクターをやつていた女だよ」

昼下がりという時刻は、時に言い様のない氣だるさを運んで来ることがある。

自分の自宅を兼ねる事務所の一室で、御鶴木魁はいつもの通り、至福の一時を楽しんでいた。海外から取り寄せた高級な紅茶と、行きつけの洋菓子屋で買ったケーキを食べるのが彼の日課だ。

陰陽師などという仕事をしているが、緑茶に和菓子など古臭いと魁は思っていた。自分のやりたいことを、やりたいようにやつて生きて。太く短い人生を楽しむというのが、彼の性分である。

唯一、気になることと言えば、甘い物の食べ過ぎによる生活習慣病である。もともと、そんなことを気にする必要もなく、魁の身体は至つて健康そのものだった。生まれつき、なぜか太らない体质の人間がいると言われているが、もしかすると、彼自身もそういう者の仲間なのかもしれなかつた。

「ふう……。しかし、どうも大変なことになつてきたみたいだねえ」

紅茶を飲む手を休め、魁が傍らに置いてあつた新聞を片手にして言つた。彼の前には、弟子の「削總司郎が座つてゐる。魁と同じく紅茶を楽しんでいるようだつたが、こちらはともすれば遠慮がちに、様子を窺つようにして飲んでゐる。

「先生……。いつたい、何があつたんつすか?」

サングラスの奥に、二つの暗い闇を佇ませ、總司郎は魁に尋ねた。世界を見るための光りを失つた彼にとつては、外界の情報は感覚的な物を通してしか得られない。テレビのような音が出るものならば話は早いが、新聞に書いてある内容は、当然のことながら読むことができない。

「総ちゃん、俺たちが追つてる今の事件なんだけど……どうやら、ディレクターの室井さんも亡くなつたみたいだね。昨日、血のマシンションで亡くなつてゐるのを、仕事仲間が見つけたつてさ」

「ほ、本当つすか!? それじゃあ、まさか室井さんも……」

「ああ、そうだよ。新聞には変死としか書いていないけど、プロデューサーの西岡さんと同じ死に方だった可能性は十分にあるね。しかも、今回はそれだけじゃなくて、もう一つ悪いニュースがある」

「もう一つ……ですか？ まさか、他の番組スタッフの人も、軒並み変な死に方したってんじゃ……」

「その、まさかに近い事態だよ。どうやら、俺たちがまつたりしている間に、事件はマズイ方向に動き出したみたいだね」

新聞を置き、魁は珍しく難しい顔になつていた。普段の飄々とした表情からは想像もできない、瞳の奥で光る鋭い眼光。視力を失った総司郎でさえ、今の魁を包む空氣から、彼が本気になつてゐるのを容易にうかがい知ることができる。

御鶴木魁が本気になるとき。それは即ち、彼が自分のプライドをかけて、己の敵と認めた者と戦うことを決意したときだ。いつもは冗談のような態度ばかり取つてゐるが、本気になつた魁の恐ろしさは、何よりも総司郎自身がよく知つてゐる。

彼がここまで本気になることなど、奇跡空間ミラクルゾーンの撮影で心靈スポットに赴いたときでさえなかつた。それは、あの幽靈屋敷の探索のときでさえ例外でない。あの時も、魁はその力の半分程度しか見せぬまま、巨大な蛇の靈を軽くいなして見せたのだから。

「この、新聞記事に書いてあるんだけど。なんでも、カメラマンの加瀬さんが、音響スタッフの古澤さんを刺殺したってさ。加瀬さんは、ほとんど錯乱に近い状態にあるみたいだから、警察でも田下取り調べ中つてところかな」

「なつ……そ、そんな！ それじゃあ、俺たちが幽靈屋敷の幽靈を除靈したのって、なんの役にも立たなかつたってことつすか！？」

「残念だけど、やうやくここになるね。まつたく……今回の事件の黒幕とやら、随分とこひかを馬鹿にしたことをしてくれるじゃないか……」

トロを噛んだまま、魁は口元を覆い隠すよつこして両手を組んだ。

自分の関わった心霊番組で、立て続けに三人の死者が出る。しかも、幽霊屋敷に巢食う自縛霊を除霊して、安心していた矢先の隙を突く様にして。

プライドの高い魁にとって、これは放ってはおけない問題だった。今回の件、あの幽霊屋敷の幽霊どもとは、恐らく何の関係もない。屋敷に巢食っていた幽霊たちは、しがない浮遊霊も含め、完璧に除霊を終えたはずだ。

だが、噂とくものは、じあらの意思など関係無しに囁かれるものである。テレビ局側が緘口令のようなものを布いているのといえば、ここまで騒ぎが大きくなつたのだ。被害者の全員が心霊番組の撮影スタッフであり、しかも魁自身が除霊に関わった人間であるとすれば、予期せぬ風評被害まで起こりかねない。

じつなつたら、もう手段を選んではいられない。向こうがその気ならば。じちらにも考えがある。現代を生きる陰陽師の力を舐めたこと。事件の黒幕が何者なのかは知らないが、そのことを、身をもつてわからせてやる。

「出掛けよ、総ちゃん……」

顔の前で組んでいた手を両膝に置き、魁はスッと立ち上がった。

行く当てなど決まってはいなかつたが、ここでいつまでもお茶を飲んでいるわけにもいかない。まずは情報を集め、事件の裏に潜む何者かをいぶり出す。こちらの力を見せつけてやるのは、その後でも十分だ。

久々に、本氣で仕事にからねばならないこと。目の前の魁の様子から、それは総司郎もわかつていた。テーブルの上に慌てて食器を置くと、総司郎もまた出掛ける仕度を整える。田で物を見ることはできなかつたが、感覚を頼りに動くことは、勝手を知る部屋の中では楽だつた。

「それじゃ、行こうか、総ぢやん。でも……その前に、どうやらお客さんが来たようだ」

スーツの襟を直したところで、魁がふと窓辺に向かつて呟いた。その言葉に、総司郎もまた窓の方へと顔を向ける。そこには誰の姿も見えなかつたが、予期せぬ客への来訪を、一人はしっかりと気づいていた。

「いいかげん、出てきなよ。さつきから、俺たちのことを見張つていたんだろう?」

懐から退魔の呪文が刻まれた鉄扇を取り出し、魁がそれを窓に向けた。すると、窓からなにやら黒い影のような物が染みだして、それは瞬く間に流動的な球体の姿を形作る。

「先生……。こいつは……」

総司郎が、腕をまくつて身構えた。その腕に刻まれた梵字の刺青が、彼の感情に呼応して赤く光つた。

「ああ、間違いない。こいつは、あの少年が使っていた犬神だね。どうやら、俺の式神を捕まえたときこ、俺の臭いも記憶していたらしく」

「犬神つか……。確か、四国の方には、そんな神靈を使う連中がいるって話を聞いたことがあります。外法を使って人を守る連中もいるみたいんですけど……中には、呪いの代行をするような連中もいるつて噂つす」

「詳しいね、総ちゃん。でも、安心してくれて構わないよ。どうやら今日は、こいつも俺と戦いに来たつてわけじゃなさそうだからね」
鉄扇を閉じ、それを懷にしまい直すと、魁はそっと手を伸ばして黒い球体に触れた。一瞬、球体の表面がぞろりと歪んだように思われたが、直ぐに元通りの形となり、ゆらゆらと部屋の中で揺れていった。

「先生……。そいつ、何て言つてるんつすか？」

黒い球体と靈的な交感を続ける魁の横で、総司郎が不安そうに見つめている。もつとも、彼の場合は既に瞳を失っているため、見つめるところは正しくない。靈的な力、魂の有無を感じ取る第六感。それを最大まで用いて意識を拡張し、周りの空気を感じ取っているに過ぎない。

一方、そんな総司郎の不安を他所に、魁は実に楽しそうな笑みを浮かべていた。やがて、その指を引き抜いたところで、魁は顔だけを総司郎の方へと向ける。そこには先ほどのような怒りや苛立ちはなく、いつもの魁の見せる余裕に満ちた笑顔があった。

「なるほど、こいつは面白い。あの少年、じつやう今回事件のト
リックに気がついたみたいだね」

「ほ、本当ですか！？」

「彼が自分の犬神を使って、わざわざメッセージを運ばせたくら
だ。恐らく、信憑性は高いだろうね。それに、何やら俺にも手伝
つて欲しいことがあるみたいだし……。今回の黒幕、こいつで探そう
と思ってたけど……このまま彼の話に乗って、美味しいところだけ
いただくのも悪くないね」

同意を求めるような視線が、総司郎に向けられた。相手の魂の搖
らぎから、いち早くそれを察した総司郎は、無言のまま魁に頷いて
答えた。

翌日は、生憎の雨だった。

スタジオでの収録を終え、篠原まゆは局内にある会議室の一つへ
と向かっていた。もつとも、これから番組の打ち合わせというわけ
ではなく、雪乃を通して犬崎紅に呼び出されたからだったが。

紅の話では、例の連續変死事件について、今から話したいことが
あるということだった。急な話だとは思ったが、まゆも当事者の一
人ではある。事件の行末が気にならないと言えば、それは嘘になっ
てしまう。

「すいません。遅くなりました……」

遠慮がちに会議室の扉を開ける。つい、敬語になつてしまつのは、仕事の空気が未だ身体から抜けていなければ。それと、紅に対する遠慮のような気持ちも、少しだけ含まれている。

「遅かつたな。まあ、これで今回の関係者が、一部を除いて頭を揃えたわけだ」

横を見ると、部屋の隅の壁にもたれかかるようにして、紅が腕組みをしたまま立っていた。その赤い瞳でにらまれると、思わず委縮してしまいそうになる。照瑠から、紅は本当は優しい人間だと聞かされてはいたが、やはり苦手意識というものは、そう簡単に抜けるものではない。

「とりあえず、適当な場所に座れ。話は全て、それからだ」

腕も指も一切動かさず、紅は目だけでまゆに訴えた。愛想のない言われ方をするのは腹が立つたが、ここで口論をして仕方がない。言われるままに椅子に腰かけ、まゆは辺りの様子を見回した。

部屋の中には、自分も含めて全部で九人。事件当日に知り合った雪乃と、そのマネージャーの高槻。自分に代行を頼んで来た少女、凍呼もいる。

陰陽師の御鶴木魁と、その弟子の弓削総司郎の姿もあった。彼らもまた、この事件には少なからず関係がある。紅と初めて出会った日の夜、テレビ局のスタジオで互いに険悪な雰囲気になっていたのは、記憶に新しい。

一方、紅の側に座っている男は、まゆも初めて見る顔だった。年齢は、三十代後半といったところだろうか。紅や総司郎とはまた違う、なんだか近寄りがたい雰囲気を全身から放っている。不良やチノピラ、それにヤクザなどが持っているものとは、まったく異質で強烈なものだ。

いつたい、あの男は何者なのだろう。男の正体が気になつたまゆだつたが、残念ながら、それを本人に問うほどの勇気はなかつた。男と目線が合いそうになつたところで、まゆは思わず顔を背け、残る一人に目をやつた。

最後の一人はADの宮森だ。番組スタッフの三人が死亡し、一人は殺人罪で塀の中。そんな混沌とした状況に置いて、一番下つ端の人間だけが生き延びる。なんというか、随分と皮肉な話もあつたものだとまゆは思った。

「さて……。とりあえず、何から話したものかといつとこりだが……」

…

壁から身体を離し、紅が頭を搔きながら背を伸ばした。その場にいる全員の視線が、一斉に紅に向けられる。

「まず、最初に言つておこう。今回の事件の全貌だが……」といつは、決して祟りなんかの類じやない。幽霊屋敷の靈びもの仕業でも、神居結衣とかいう女の靈の仕業でもな

一瞬、部屋の中にいた何人かの目が丸くなつた。雪乃とまゆ、それに凍呼の三人は、思わず顔を合わせて固まつてしまつた。

魁と、それに先ほどの名前を知らない男だけは、随分と落ち着き払った様子で話を聞いている。もしかすると、ここに来る前に紅の方から、ひとしきりの説明を受けていたのかもしれない。

「そもそも今回の事件は、生放送の本番中にプロデューサーが変死したことが発端だ。しかも、聞くところによれば、いきなり眼球が膨らんで、頭が吹っ飛ぶという凄まじい死に方だつたようだな」

「そいつは俺も知っているよ。なにしろ、番組の収録中に目の前で見たんだからね。君たちも、あのときは一緒にスタジオにいたけど……あれ、やつぱり見ていたんだろ？」

ADの富森が、魁とまゆの方を交互に見て尋ねた。魁は何も言わなかつたが、まゆは軽く首を縦に振つて返事をした。

「」の話を聞いたとき、俺は妙に引っ掛かる物を感じていた。人間の頭を吹っ飛ばすような力を持つ者など、そういうにでもいるんじゃない。それが、幽霊であつても、人間であつても同じことだ。呪いにしろ、祟りにしろ……たかだか一人の人間の怨念で、ここまで激しく人を破壊することなど不可能なんだ」

「怨念の力で頭を吹っ飛ばせないって……。だつたら、君はプロデューサー達の死因が、祟りなんかじゃないって言うのかい？」

高槻が、意外そうな顔で紅を見た。心霊現象に対しても肯定的になつていたものの、高槻は所詮素人である。紅の言つ、向こう側の世界のルールなど、その殆どが未知の世界の話だった。

「そこだ。俺が最も疑問に思つたのは、あんたの口から祟りの話が出てときた。確か……神居結衣とかいう女の靈が、番組関係者に復

警して回っている。そんな予想を立てていなかつたか？

「そりや、確かにそんな話もしたけど……。でも、別の僕だつて、自分で勝手に予想を立てたわけじゃない。そこにいる、A Dの宮森君。彼から話を聞いて、そう思つたんだ」

「そうか……。まあ、そんなことは、今はもうどうでもいい。仮に、この話が本当だつたとして、そうなると生前の神居結衣は、とんでもない力を持つた超能力者ということになる。だが、そんな話はどこにもなかつたし、そもそも犯人は神居結衣の怨靈なんかじやなかつた」

「怨靈じやない！？ それじやあ、今回の事件の犯人つてやつは、いつたい……」

それ以上は、高槻も言葉を発することができなかつた。

今回の事件の犯人。それは神居結衣の怨靈などではないという。では、合わせて二人もの人間を変死に追いやつた、真の黒幕とは何者なのだろう。そんな強大な力を持つた相手とは、いつたいどんな存在なのだろう。

昨日、紅に言われるままに、街中をあれこれと引っ張り回された記憶が蘇つた。雪乃の写真集を見て何かを閃いた後、紅は高槻に車を出させ、今回の事件に関係した者の家の何件かを尋ねてまわつた。その際、何やら探つている様子だつたが、何をしているのかまでは告げてくれなかつた。

あれはきっと、今回の事件の証拠になるものを探していたのだろう。もつとも、それはなにも、目に見える物証のようなものではな

いのかもしない。幽霊が足跡や指紋を残すなどという話は聞いたことがないため、紅にしかわからない、何か靈的な痕跡のようなものを探つていたのかもしかなかった。

「今回の事件の全貌。それを知るために、まず先に見てもらいたいものがある。昨日、俺が嶋本に頼んで送らせた、例の番組を録画したものだ」

部屋の隅の台にあつたりモコンを取り、紅がテレビの電源を入れた。チャンネルを合わせて操作すると、画面が数日前に放送された、奇跡空間ミラクルゾーン のものに切り変わった。

「これが、問題の番組だ。スタジオの映像には問題ないんだが……重要なのは、この後だ」

リモコンの早送りボタンが押され、映像が流れるように去つて行く。スタジオの場面は全て飛ばし、やがて画面は、番組の目玉とも言える記録映像のシーンになつた。あの、凍呼が主役の廃屋探索レポート。本当にあつた呪いの館 の名を冠したやらせ映像だ。

屋敷の扉を開け、画面の中の凍呼が恐る恐る中に入つて行く。冒だというのに室内は薄暗く、カビと埃の臭いが画面越しにも漂つてきやうな雰囲気である。

廊下を抜け、凍呼が部屋に入ろうとしたところで、紅は唐突に映像を止めた。一時停止の指示を出し、画面の中の世界で時が止まつた。

「とりあえず、こいつを見て欲しい。番組の撮影班が訪れた時、こ¹は浮遊霊や自縛霊の巣窟だった。俺や、その陰陽師なら、普通

の人間には見えないものが映っているのもわかつただろう。それに、靈感を持つていらない人間であつても、よく見れば変な物が映つてゐるのに気がついたはずなんだがな……」

止まつた画面の一部を指差し、紅はそこを軽く指先で叩いた。まゆがじつと目を凝らして見ると、隣にいた凍呼が軽い悲鳴を上げて口元を抑えた。

そこにあつたのは、紛れもない人間の目玉だつた。暗い、部屋の隅の影になつた場所。およそ人間が隠れるスペースなどない部分に、実にはつきりと人の目玉が映つていた。

「確かにこの屋敷は、本物のお化け屋敷だつた。やらせで映像を撮影しても、これだけ色々な靈が映るんだからな。こんな場所に足を踏み入れて、靈を刺激するようなことをすれば……後で変なことが起きても、何ら不思議じやない」

悪戯に、靈を刺激するな。そう言わんばかりの口調で、紅は凍呼の方に目をやつた。別に、凍呼自身が好き好んで屋敷に足を踏み入れたわけではなかつたが、屋敷の靈にしてみれば、そんなことはどうでもいい。中途半端な気持ちで靈の巣窟に土足で上がつたという点では、凍呼にもまつたく非がないわけではない。

「この映像を撮影した後、スタッフの一部は怪奇現象に悩まされたらしいな。残念ながら、再現映像を流す前に番組が中断されてしまつたみたいだが……家に帰つたお前達が、何がしかの恐怖体験をしたこと。これは、間違いないな？」

念を押すようにして、紅が凍呼に問う。いきなり話を振られ、凍呼はしばし緊張した面持ちで、その場に固まつて動けなかつた。

「は、はい……。あの……確かに、変なことは起きました……。夜中に金縛りに遭つて……それから、全身にも蛇に絞められたような痕が残つて……」

震える声で、凍呼が胸元を抱えるようにしたまま紅に語つた。できれば、あのときの記憶はわざと忘れない。そんな風に思われる言い方だった。

「でも……最後は、その蛇のお化けも、御鶴木先生が退治してくれたみたいなんです。だから、もう、お化けに怯える必要もないって……そり、思つてたのに……」

金縛りの記憶と、全身に靈傷を残された記憶。そして、室井の遺体を田の当たりにしたときの記憶。色々な物が頭の中で蘇り、凍呼は今にも泣き出しそうになつていた。

自分は別に、好きで心靈番組のレギュラーをやつてているわけではない。お化けとか、幽霊とか、妖怪とか……そういう類の物が出る話は、実のところ大の苦手だ。話を聞くだけなら耐えられるが、いくらなんでも、自分が当事者になつてしまつてはやつてられない。もう、いい加減に終わりにして欲しい。そんな凍呼の、心の叫びが聞こえてきそうだった。

さすがに、これ以上は凍呼に話をさせのも無理だらう。仕方なく、紅は再び画面に顔を向け、先ほどの解説の続きを始めた。

「さて……。その陰陽師が、この屋敷に巣食つ靈を退治したこと。それは、俺も薄々感づいていた。普通、これだけの靈が映り込んだ

映像を直に見たら、大なり小なり何らかの影響がある。靈の持つて
いる負の波動を受けて、気分を悪くする人間だつているかもしけな
い

「負の波動、か……。でも、その映像の幽靈たちは、御鶴木先生が
退治したのよね？ だつたら、今回の事件には、その映像は何も関
係がないんじやない？」

「ああ、お前の言つ通りだ、篠原。實際、俺も最初の方は、映像に
関してはそこまで注意を払つていなかつた。ただ、もしかすると編
集の際にカットされた部分に、何かまだ祓い損ねたものがいたんじ
やないかとは疑つていたが……」

「えつ、違つの？ だつたら、その映像と今回の事件の関係性つて、
いつたい何なのよ！？」

「そう慌てるな。物事には、説明するための順序がある。まずは手
始めに……」この映像に隠された本当の惡意を、俺がお前達に見せて
やる

リモコンを画面に向け、紅の瞳がスッと細くなつた。その場にい
る全員の視線が、否応なしに画面に集中する。

「見ていろよ……。こいつが今回の諸惡の根源……一人の人間を変
死に追い込んだ、忌まわしき 呪い の正体だ！！」

そう、紅が叫ぶのと、彼が映像のコマ送りを始めたのが同時だつ
た。先ほどの、早送りの映像とはまた違う、ストップモーションの
繰り返し。ビデオではなく、スライドショーか何かを見せられてい
るような、実に遅々としたコマ送り作業。

いつたい、これは何の意味があるのでない。紅は何を考えて、こんな奇妙なことを始めたのだろう。

そう、まゆが訝しく思ったとき、彼女の視線は画面の中に映し出されたものに釘付けとなつた。

「ちよつ……な、なによ、これ……」

それ以上は、何も言葉が出なかつた。まゆだけでなく、その場にいた殆どの人間が、画面の中に映し出された物を見て絶句していた。

そこには、幽霊屋敷の探索映像の一コマなどではない。未だかつて誰も見たことのない、實に奇妙で不可解な映像。暗闇に包まれた、どこかの高台のような場所にある、三本の足を持つた奇怪な鳥居が映し出されていた。

時間の止まつたような静寂の中で、全員の視線が一点に集まつていた。

本当にあつた呪いの館と称して作られた、廃墟となつた屋敷の探索映像。やらせを抜きにしても、確かにそこには無数の靈が存在していた。制作者の意図とは別に、本物の心靈映像として、様々な靈が映り込んでいた。

だが、それらのことを抜きにしても、今、目の前の画面に映し出されている映像は、あまりに奇妙だった。

暗い、決して開けない夜を思わせる空間の中に立つ、奇怪な三本脚の鳥居。ちょうど、真上から見ると△角形の形になるように、三本の柱の上部が繋がつていて、三方向、どこから見ても鳥居の姿となるような、そんな不可思議な作りになつていて、

三柱鳥居と呼ばれるこの鳥居は、実はそこまで珍しいものではない。確かに、まゆや凍呼のような人間からすれば奇異に映つたかもしれないが、少しでも民俗学や神社などの話に詳しい者にとっては、それなりに名の知られているものである。

問題なのは、この鳥居が日本各地に点在する三柱の鳥居の、どれにも当てはまらないということだつた。作られた目的さえ不明な三柱鳥居だが、目の前の画面に映つていて、それは、どこに立てられたもののかさえ定かではない。背景には鬱蒼とした森のような物が映つているだけで、神社の境内の中にあるもののかさえわからない。

そして、この映像を見て、御鶴木魁のような人間までもが我が目を疑つた理由。それは、この鳥居から放たれる、恐ろしいまでの悪意に他ならなかつた。

靈的な負の波動。呪いのオーラ。呼び方は様々だが、それが意味しているところは一つ。触れた者に災いを成し、闇の世界に引きずり込む。最終的には死という形で、関わった人間に破滅を呼ぶ。

いつたい、この鳥居は何なのか。なぜ、こんな物が、例の廃墟探索映像の中に入っていたのだろう。そして、そもそもこの鳥居は、どこの誰が何の目的を持って立てた物なのだろう。

あまりにもわからないことが多過ぎて、その場にいる誰もが次の言葉を出せなかつた。ただ、静寂の中で時だけが流れ、不気味な沈黙が辺りを支配していた。

「さて……。そろそろ、本題に入らせてもらいたいんだが……構わないか？」

水を打つたように静まり返つた部屋の中に、紅の声だけが響いた。その声につられるようにして、何人かの人間が顔を上げた。

「こいつの正体が何なのか、正直なところ、俺にもわかつてはいな。ただ……この鳥居の画像から放たれる、凄まじいまでの悪意。それが、番組のプロデューサーとディレクター……一人の人間の命を奪つたのは間違いない」

「え！？ ちょ、ちょっと待つてよ……。だったら、そんなものを直に見ちゃつて、私たちは大丈夫なわけ！？」

田の前の鳥居の画像が、西岡と室井の二人を殺した。それを知つたまゆが、慌てて抗議の声を上げる。「一人の死の原因があの映像ならば、そんな物を直接凝視して、果たして本当に大丈夫なのだろうか。

「心配するな、篠原。確かに、普通の心靈映像なら、こいつは危険極まりない代物だ。靈害封じの類を施さない限り、まともに直視すれば、祟りを受けることは間違いない。あくまで、普通の心靈映像だつたらな……」

「普通の？ つてことは、それ、何かの細工でもしてあるってわけ？」

「鋭いな。お前の考えている通り、こいつには悪意の矛先を特定の人間に向ける細工が施してある。いつたい、何をどうやったのかは、俺にも不明だが……とにかく、本来であれば無差別に撒き散らされるはずの負の波動を、どこか一点に集約するようにして放つている」

「どこか一点に集約？ ま、まさか、それって……？」

頭の中で、様々な物が一つに繋がつて行く感覚がまゆを襲つた。紅の話を信じるのであれば、西岡と室井の一人の命を奪つたのは、この鳥居の映像だ。そして、本来であれば無差別に撒き散らされる呪いのようなもの。それを一点に集約して放つているとすれば、話は見えてくる。

「こ」の映像を細工したやつは、最初からターゲットをプロデューサーとディレクターの一人に絞つていた。だから、その二人だけに靈傷が現れるように、負の波動の矛先を特定の人間に對して集約し、

凝縮させたんだ。他の者が見ても影響を受けず、かつ決して怪しまれないよう……あくまで、コマとコマの間に挟むようにして、誰にも気づかずに対象を殺せるようにな

「へえ、こいつは面白いね。君の犬神を通して話には聞いていたけど……要は、幽靈屋敷の映像の間に呪いの映像を紛れ込ませて、誰にも知られずに西岡さんたちを呪つた……。そういうことかい？」

「そうだ。この仕掛けを企んだやつは、最初からわかつて廃墟探検の映像を選んだんだろうな。何の変哲もない映像に紛れ込ませれば、いくら対象を指定したとはいえ、俺たちのような人間に気づかれるかもしれない。だが、幽靈だらけの屋敷の映像に紛れ込ませれば、それは上手い具合に隠れ蓑になる

木を隠すには森の中。そして、呪いを隠すには幽靈の中。そう言わんばかりの口調で、紅は言い切った。

この映像に罠を仕掛けた者は、実に巧妙な手口で一人の人間を殺した。恐らくは、幽靈屋敷の幽靈たちが、御鶴木魁によつて除靈されることが、そこまで読んで、仕掛けを施すに至つたのだろう。

幽靈屋敷の幽靈たちが放置されていれば、それは隠れ蓑となつて真実を隠す。その一方で、幽靈が退治されてしまえば、おのずと映像に對して疑いを持つ者がいなくなる。もとより、除靈の済んだ映像という認識を周りに与えることで、一人の人間が亡くなつた原因が、別のところにあるのではないかと錯覚させることも可能だ。

どちらにせよ、廃屋探索の映像が、一人の人間を殺したわけではないと思われる。そうなれば、この罠を仕組んだ者のたくらみは、決して明るみに出ることはない。

「呪いを廃屋探索の映像に隠した、か……。なかなか面白い推理だね。でも……だったら、何で西岡さんと室井さんは、あんな唐突に死んだりしたんだい？ 仮に、君の言っている話が本当だったとして……そんなに強力な力を持つた映像なら、試写の際に亡くなつていてもおかしくないじゃないか」

解が紅に、挑戦的な目を向けて来る。興味半分、しかしそもすれば、話の主導権を他人に握られているのが、あまり面白くないといつた気持ち半分といつたところか。

「確かに、そつちの言ひ方にも一理ある……」

珍しく、紅も魁に同意した。この場に照瑠がいたならば、普段の彼との違いに言葉を失つたことだらう。もつとも、紅としても今は事を荒立てる気はなく、あくまで説明の方を重視しているだけだったが。

「しかし、考えても見る。いくら凝縮された負の波動を受けたからといって、たつたの一瞬……三十分の一秒に満たない時間しか目にしないんだぞ。潜在意識の中には刷り込まれるだらうが、一瞬の映像が与える影響は微々たるものだ。だから、当然のことながら死ぬまでに時間がかかるし、何度も見なければ即死もしない」

「なるほど。それじゃあ、番組の放送中に西岡さんが亡くなつたのは、試写に加えて本番でも映像を見たからってことか」

「そういうことだ。室井とかいうディレクターが、プロデューサーよりも遅れてなくなつたのは……まあ、個人差みたいなものだらう。靈的な攻撃に対する耐性みたいなものは、個々人によって異なるから

な

紅が、横目でちらりと雪乃の方を見た。彼の言わんとしていることが何なのか。それを知つて、雪乃も軽く頷いて答えた。

以前、紅が初めて雪乃と関わった事件で、彼は雪乃のことを耐靈体質であると言つていた。要するに、靈的な感性が極めて鈍く、故に靈の攻撃に対しても強いといつ体質のことである。

心靈スポットなどに行つてもまつたく靈を感じない代わりに、呪いや祟りといった靈的な攻撃にも強い。長期間、ツ攻撃を受け続ければその限りではないが、昨年の暮れの事件では、その体質が雪乃の命を繋ぐ鍵となつた。

雪乃が耐靈体質ならば、恐らく西岡は、その反対だつたのだろう。室井に比べても靈的な攻撃に対する耐性が低く、それ故に、本番で映像を見終えた際、その身体に蓄積していた負の波動による影響が加速度的に高まつたのだ。

刹那の魔。

そんな言葉が、紅の頭をふとよみがつた。

誰にも気取られなじよつ、瞬きするよりも短い時間の中に、恐るべき呪いを忍び込ませて相手を殺す。巧妙に真実を欺き、あらゆる者の目を巧みに誤魔化し、人知れず目的を遂行する悪魔の罠。

こんな恐ろしく、かつ巧妙な罠を仕掛けた者は、いつたい誰なの

だろう。その答えは、紅の中では既に予想がついていた。

「今回の事件の真相……。それは、呪いの館の幽霊どもの祟りでもなければ、ましてや神居結衣なんていう女の祟りでもない。全ては西岡と室井……二人の男の死を望む人間が、巧妙に仕組んだ罠だ！」

赤い瞳が、その場にいた全員に向けられる。罠を仕掛けた犯人は、ここにいる人間の中にいる。そう、紅の瞳が語つている。

「そろそろ、黒幕の正体を暴いてやつてもいいだろうな。廃屋探索の映像に仕掛けを施して、プロデューサーとディレクターを殺した人物……。それは他でもない、貴様のことだ！！」

紅の指が、部屋の隅に座っている男の顔に向けられた。その動きに合わせ、全員の視線が一斉に男の方へと向けられる。

彼の指差した方向で、青い顔をして唇を震わせている一人の男。それは他でもない、ADの宮森良太だった。

「そ、そんな……！ 宮森さんが……あの人気が、今回の事件の黒幕だつたって言うんですかあ！？」

突然、凍呼が叫んで立ち上がった。今まで信頼して来た人間が、唐突に全員の前で犯人呼ばわりされる。その現実が、どうしても信

じられないようだつた。

「ふう……。残念だけど、そいつは事実だよ、トーノちゃん。俺も、そこの外法使いから大まかな話は聞いていたけど……まさか、本当にここまで話を繋げて、呪いの正体を暴くとは思わなかつた。揚足を取つて、俺が代わりに主役になつてやるうかと思つたけど、どうやらお呼びでなかつたようだね」

「真実つて……。それじゃあ、御鶴木先生は、最初から今の話を知つていたんですか！？」

「ああ、そうだよ。昨日、こいつの犬神が、わざわざ俺のところまで来てメッセージを伝えてくれたからね。それに乗つて動いたお陰で、ある女人の幽霊を、あちこち探し回ることになつちやつたけど……」

飄々とした口調で、魁が両手を広げて喋つていた。もう、これ以上のお茶番はお終いにしたい。さつさと犯人を捕まえて、家に帰つて休みたい。そんな空気を醸し出している。

「今回の事件、そもそも神居結衣の名前を最初に出したのは、貴様だつたようだな。確かに、最初は高槻さんに、神居結衣の祟りである可能性をほのめかしたはずだ」

上から見下ろすような目線で、紅は富森を睨みつけた。もつとも、別に弁解するでもなく、富森はただ、紅の話を聞いているだけだつたが。

「俺のような霊能力者が現れたことで、貴様は相当に焦つたんだろうな。予定外の登場人物は、シナリオを大きく狂わせる可能性があ

る。だから、貴様はあえて神居結衣という女の存在を出すことで、捜査の目を廃墟探索の映像から離れさせようとした。何が何でも、今回の事件を神居結衣のせいにしたい。そう思わせるために、色々と自分から動き回ったんだ」

「ぐつ……

富森の口から、舌打ちのような低い声が漏れた。固く歯を食いしばり、両肩を震わせて、なんとか屈辱に耐えている。傍から見ても、富森が紅の言葉に対し、何か思うことがあるのは明白だった。

「決定的だったのは、室井とかいうディレクターの頭から発見された、神居結衣のものとされる指輪だ。あれだって、お前がそこにいる女……葵璃とか言ったか？ 警察が現場に来るまでに、彼女の隙をついて細工することはいくらでも可能だ。素人を怖がらせるだけなら問題なかつたが……俺たちのような、本物の力を持った人間には、返つて妙な疑念を植え付けただけだったようだがな」

「反論の余地はない。確かに、状況証拠だけしか揃っていないとはいっても、現状で映像に細工できるのは富森しかいない。雑用のような仕事を全て請け負っていた富森ならば、ドサクサに紛れて映像の入ったデータを回収。それに細工を施すことなど、造作もないことだろう。昔のように全てをテープに録画していた時代ならいざ知らず、今ではコンピュータの力を少し借りれば、かなり容易に映像の編集作業だってできてしまう。

番組制作スタッフの内、二人は変死で一人は殺害。残り一人は壊の中で、未だに軽い混乱状態にある。消去法で考えて言つた場合でも、やはり富森しか残らない。事件が神居結衣の怨念によるものではなく、人為的に仕組まれたものだと考えた場合、富森以外に犯行

に及べる人間はいないのだ。

もう、さすがに年貢の納め時か。そう思ったのかは定かではないが、富森の口から軽い溜息と共に笑いが漏れた。

「はは……。そうさ……そうだよ……。全ては俺が仕組んだこと……。俺が、やつたことなんだ……」

普段の明るく、それでいてどこか間の抜けたような空気は、完全に失われていた。やつれた頬と、ひきつった笑顔。未だ誰にも見せたことのないような病んだ表情で、富森は静かに語りだした。

富森良太が神居結衣と初めて出会ったのは、陽射しのまぶしい夏の日のことだった。

当時、まだ大学生でしかなかった彼らは、試験の帰りに研究室で顔を合わせて知り合いとなつた。富森は、大学では主に映像に関する科目を専攻しており、結衣とは同じ研究室で共同制作に携わっていた。

「あら、今日も遅くまで頑張ってるわね。でも、あまり無理して身体を壊したら駄目だぞ、富森君」

まだ、研究室を訪れて日が浅かつた富森にとって、結衣は憧れの先輩の一人だつた。その飾らない、男勝りな風貌とは反対に、結衣は後輩に対する気遣いも忘れない女性だ。そして、そんな彼女に富

森自身が惹かれてゆくのに、そつ時間はからなかつた。

仕事もできて、気遣いも上手い。才色兼備のような理想の女性。当然、先輩たちからは、「止めておけ」と釘を刺された。現に、当時の結衣には浮ついた噂の一つもなく、難攻不落の城として、学生の間では有名だつた。

このまま待つっていても、時間が解決してくれるはずもない。気持ちを伝えるにしても、なんとかして結衣に、相応しい男として認めてもらわねば意味がない。

以来、富森は一心不乱に彼女の共同制作に協力し、その手腕を少しずつ認めてもらえるようにもなつていた。

この調子で行けば、もしかすると自分の想いを受け入れてくれるかもしれない。そう思つていた富森だつたが、時間というものは残酷である。

先輩である結衣は、当然のことながら、卒業時に大学側へ提出する制作物を完成させた時点で、研究室を去つてしまつた。富森も彼女の手伝いはしていたものの、結局最後まで想いを告げるには至らなかつた。

学生時代の恋心など、所詮は儂いものなのか。なにやら踏ん切りのつかない思いではあつたものの、こうなつては仕方がない。彼女のことを早く忘れるためにも、富森は自分自身の卒業制作に没頭することにした。彼女が去り、学年が上がつた今、次は自分が卒業のための制作物を作る番だつた。

本当は、想い人を忘れるために作つていただけの、逃避のような

製作行為。しかし、例えどのような物であれ、人の想いが込められたものは、時に他人を魅了する力を發揮するのだろうか。

富森の作った卒業制作物は、その出来栄えを研究室の教授も認めてくれるほどだった。なんというか、一つの大仕事をやりきった感じがして、富森は正に感無量という心持だった。

それから程なくして、富森は今のテレビ番組作成会社に就職が決まった。もつとも、いかに大学で優秀な成績を残したからといって、現場の仕事はそこまで楽ではない。加えて、昨今の就職難も相俟つて、富森はADから下積みをせざるを得なかつた。

映像の世界、制作の世界で、自分はもっと大きな仕事がしたい。そう思つても、やはり現実はなかなか上手くはいかないものだ。

職人気質の古株社員たちからは、富森のような人間は、現場の空氣も知らないゆとりの御坊ちゃまとしか見てもらえない。その程度ならまだわかるが、テレビ番組作成とはいえ、腐つても企業。会社組織の負の側面である、上司の嫌がらせなども日常茶飯事だつた。

どう考へても一人では運べないような荷物を、ひたすら運搬させられるだけの日もあつた。自分で温めていた、いつか出世したら使つてやろうと思っていた企画書の案を、休日の際にデスクの中を漁られる形で盗まれたこともある。しかも、その後に上司がそつくりそのまま自分の企画に盗用しており、なんとも言えぬやるせなさを抱いたものだ。

自分はいつたい、ここで何をしているのか。こんなことが、本当に自分のやりたいことだったのか。何度も心が折れそうになつたが、そんなとき、彼のことを支えてくれた人が一人だけいた。

「あら、相変わらず遅くまで頑張つてるわね。学生時代から、ずっと変わらないわね、富森君」

あの日、卒業を境に会えなくなつていた、結衣の言葉だつた。彼女もまた富森と同じ道に進んでおり、なんの偶然か、同じ会社に勤めていた。

もつとも、富森とて、別に狙つて彼女の就職先に応募をしたわけではない。たまたま就職した先に、彼女がいたというだけだ。それに、昔は単なる先輩と後輩の関係だつたが、今では上司と部下の関係もある。以前のように、気さくに自分から声をかけることなど、なかなかどうして難しい。

しかし、それでも富森が、この再会に何らかの運命を感じていたのは間違いない。今度こそ、今度こそ自分は想いを告げるんだ。そう思つて、ひたすらに仕事を頑張つた。

当時、彼が入社して間もなく、結衣はディレクターの職に就いていた。大学を卒業したての、しかも女性とあつては、これは異例の出世である。そんな彼女に追いつくのは、いかに富森が歯を食いしばつて頑張らうとも、なかなか難しいことだった。

自分だつて、同期の中では優秀とされている人間の一人なんだ。だから、頑張つて結果が出せないはずがない。今はしがないADでも、いつかは必ず……。

そんな想いを胸に秘めつつも、富森は結衣が、いつたいどのよくな番組を作つているのか気になつた。彼女が制作に関わっていたのは、奇跡空間ミラクルゾーンと呼ばれるバラエティ番組。一見

して怪奇番組と見紛うよつたタイトルだつたが、その中身を見たとき、宮森はそれが誤解と偏見であると知つた。

世界中を飛び回り、毎週、様々な奇跡と感動のHピソードを紹介する。しかも、決して安っぽいお涙ちょうだいストーリーばかりではなく、時に人として、深く考えさせられるような物語も多かつた。

自分の小ささと、尊敬してきた結衣の大きさを、改めて感じさせられた瞬間だつた。今の自分では、逆立ちしても結衣には敵わない。もう、いいかげんに、学生時代の片想いを引きずるのは止めよう。そう、思ったこともある。

しかし、そんな宮森の気持ちを知つてか知らずか、結衣は職場でよく彼に絡んで来た。気がつけば、帰りに居酒屋で酒の友として誘われることも多く、恋人未満であるが友達以上であるような、奇妙な関係が続いていた。

このまま、こんな時間がずっと続けばいい。柄にもなく、そんな感傷的な気分に浸つてしまつたこともある。例え、今は恋人として側にいることができなくとも、自分は十分に幸せだ。こうして、自分のこと理解してくれる女性と、少しでも片を並べて話ができるのであれば。

このときは、そんな他愛もない毎日が、ずっと続くものだとばかり思つていた。

富森が結衣の訃報を聞いたのは、彼が今のはいに入つてから一年ほど経つたときのことだった。

彼女が亡くなつたといつ話を聞いたとき、富森は自分の耳が信じられなかつた。警察の発表では自殺といつことだつたが、そもそも結衣には自殺に至るような動機がない。仕事も順調に軌道に乗つており、こと彼女の担当する番組、奇跡空間ミラクルゾーンの視聴率は、うなぎ昇りだつたといつのに。

いつたい、彼女はどうして自殺などしてしまつたのか。なぜ、一言自分に相談してくれなかつたのか。こんな頼りない自分であっても、話をしてくれれば、何か力になれたかもしれないのに。

結局、自分は彼女にとつて、何の力にもなれないのか。虚しさだけが心を支配し、富森は自分の目の前が真つ暗になるのを感じていた。

おしまいだ、なにもかも。大袈裟と言われるかもしぬいが、結衣は自分にとつての生きる糧だつた。いつか、彼女に相応しい男になつて、彼女に自分の気持ちを伝えたい。それだけを糧に、今まで頑張つてきたといつのに。

自分の信じていた物が音を立てて崩れて行くのを感じながら、富森は気がつくと橋の上にいた。

夕暮れ時、街外れの橋の上には、遠くからカラスの鳴く声だけが聞こえてくる。下を除けば、そこには列車の線路が見える。この上から、列車が走り込んで来た時に合わせて飛び下りれば、痛みを感じる暇もなく死ねるだろつ。

やうだ。どうせ生き甲斐を失つてしまつたんだから、これ以上は生きていても仕方がない。なぜ、結衣が自ら命を経つてしまつたのか。その理由はわからないが、彼女の気持ちだけは自分にもわかる。

死んで、楽になつてしまおう。弱い男だと笑われても構わない。情けない人間だと馬鹿にされてもいい。希望を失つたのにも関わらず、惰性でダラダラと生き続けるよりは、はるかにマシだ。

淀んだ闇をその瞳に宿したまま、富森は電車が下を通るのを待つた。やがて、風を切る微かな音と共に、橋の下に特急列車が近づいてきた。

「のまま落ちれば、全ては終わる。やう思い、富森は手すりに手をかけた。が、彼が飛び降りようとした、正にその瞬間、後ろから唐突に呼び止められ、思わず動きを止めた。

「やれやれ、自殺ですか……。夕暮れ時に、橋の上から飛び込み自殺なんて、あまり感心できませんよ？」

振り向くと、そこには知らない男がいた。今まで、誰も橋の上にいなかつたというのに、いつたどこから湧いて出てきたのか。いや、それ以前に、この男はいつたい何者で、なぜ自分に構うのだろうか。

「余計なお節介は止めてください……。どうせ、俺はもう生きる意味を失つたんです。だから……放つておいてくれませんか？」

「おやおや……。まだ若いのに、随分と悲観的な考え方を持っているようですね？」

「お節介は止めるって言つただろ？それに、若いって……あなたも、俺と年齢は、そつ変わらないように思えるけどな」

「これは失礼。ですが……僕は別に、ただの気まぐれであなたの自殺を止めようとしたわけではありません。今日はあなたに、少しばかり伝えておきたいことがあります……」

青年の顔が、にやりと笑う。この世の全てを知つてゐる。そんな人間が見せる、一種の余裕とも言えるような表情だ。

「あなたの尊敬していた女性……確かに、名前は神居結衣さんでしたか？ 彼女の自殺の原因を、僕は知つてゐるんですよ」

「なつ……ー？ ビうじてあんたが、神居さんの名前をーー！」

「それは、企業秘密というやつです。ただ……もし、あなたが真実を知りたいというのであれば。あなたがそれを知つて、新たに生きる希望を見出すというのであれば……僕はあなたに、僕の知る全てを教えましょー」

不敵な笑みを浮かべたまま、青年がゆっくりと宮森に近づいてきた。彼の手に握られているのは、一冊の古びた日記帳。目の前に差し出されたそれに目をやると、そこに宮森の良く知る筆跡で、結衣の名前が書かれていた。

「それから……俺は、その日記帳を読んで真実を知つたよ。彼女が

……神居さんが、なんで自殺なんかしてしまったのか。彼女をここまで追い込んだのは、いったい誰なのか……」

会議室の片隅で、富森良太は紅たちを前に静かに語っていた。その声は震え、かつての富森の面影はない。ただ、自分の感情を吐露することで精一杯な、小さく掠れた声だった。

「彼女の日記に書いてあったことを、俺は今でも忘れない。彼女が死んだ原因を作ったのは……否、彼女を殺したのは、あの会社でミラクルゾーンの制作に関わっていた連中だつたんだからな……」

富森の顔が上がり、その瞳が全員を睨むようにして見た。

神居結衣は、自殺ではなく殺された。しかも、その犯人はミラクルゾーンの制作スタッフ。あまりに衝撃的な事実に、その場にいた誰しもが言葉を発することができなかつた。

「あの当時……神居さんは、本当に頑張つていたんだ。ミラクルゾーンみたいな、一見して低俗な番組で、あそこまでの視聴率を叩き出す。それだけ彼女の才能は非凡で、仕事のできる女性だつたんだ……」

「確かに……。貴様の話を効く限りでは、神居結衣はやり手の人間だつたらしいな」

紅が、富森に同意した。もつとも、その日は常に正面に向けられ、首を縦に振ることはない。油断なく相手を見据えつつ、彼の懺悔に耳を傾けていた。

「でも……そんな神居さんのことが、プロデューサーの西岡は気に

入らなかつた。ディレクターの癖に、自分よりも後輩達から支持を受ける。女の癖に、自分よりも仕事ができる。そんな風にしか、神居さんのことを見ていなかつた……

富森の顔が、再び下に向けられた。その瞳は、いつしか涙で滲んでいる。尊敬していた人に対する。差別と偏見の眼差し。その、あまりに理不尽な扱いに、悲しさを覚えずにはいられないようだつた。

「だから、あいつは……西岡は、ミラクルゾーンのスタッフを抱き込んで、番組を完全に私物化することを考えたんだ！ カメラマンの加瀬と、音響の古澤……それに、子飼いの部下だった室井を抱き込んで、彼女の尊厳をズタズタに踏みにじつたんだ！！」

「尊厳を踏みにじる？ だが、いくらパワハラの酷い上司でも、下手をすれば逆に訴えられるんじやないか？ それこそ、貴様の話にある神居結衣なら、そのくらいの行動力はありそうなものだがな」

「ふふふ……。確かに、そうかも知れないさ。ただの、ちょっとした嫌がらせ程度なら……神居さんは、絶対にあんなクズどもに屈したりはしなかつたさ……」

富森が、肩を震わせながら呟いた。鳴いているのか、それとも笑つていいのか。恐らくは、その両方だろう。

「だけど、それは連中もわかつていた。だから、絶対に彼女が逆らえないようにするために、あいつらは手段を選ばない行動に出たんだ！」

「手段を選ばない行動だと？」

「そりゃー！ あいつら、彼女に全員で乱暴して、その様子を記録しやがったんだ！ その上で、西岡の野郎……あの下衆は、神居さんに言い寄ったんだよ！ 僕の女になれば、今よりいい思いをさせてやる。番組をよこせば、この映像も他所には流さないってなーー！」

最後の方は、怒りに任せてまくし立てているような感じだった。一瞬、部屋の中の空気が破れるような感じがして、さすがの紅も、それ以上は言葉を失っていた。

謎の青年が、富森良太に渡した神居結衣の日記。そこに書かれていた、西岡達による非道な行いの真実。衝撃に次ぐ衝撃の連続で、頭を追いつかせるのが精一杯だ。

たかだか仕事の主導権を握るために、犯罪と知りながら手段を選ばぬ行動に出る。およそ、紅には理解し難い心情だったが、目の前の富森が嘘を言つてこるよりは思えなかつた。

「このことを知つたとき、俺でさえ自分の目を疑つたさ。でも、現実つてやつは残酷なんだ。彼女の日記は確かに本物だつたし、彼女が自殺したのも本当のことだ。そして……彼女が亡くなつた後、西岡と室井が番組を私物化して、その手柄を全て横取りしやがつたのもなーー！」

「なるほど……。それが貴様が、今回の復讐計画を思いついたきっかけ

「ああ、そうだよ。もっとも、事実を知つても、そう簡単に計画を実行するわけにもいかなかつたけどな。ただ……運命の神様つてやつは、やつぱりいるんだな。あいつら、下つ端のパシリが欲しかつたから、よりもよつて、俺を番組のスタッフに選びやがつたんだ。

まったくもつて、間抜けな連中だよ

今は亡き西岡と室井に対し、富森が軽蔑するよつに鼻で笑つた。同じ死者であつても、結衣に対するよつな追悼の念などない。ただ、復讐を遂げたといつ満足感だけが、今の彼の中を満たしていた。

「あいつらの下で仕事をするよつになつてから、俺は機会を窺つた。すると、あいつがまた、俺の前に現れたんだ」

「あいつ？」

「俺に、神居さんの日記を渡してくれた男だよ。あいつは俺に、今回の一回の復讐計画を持ちかけて來た。やらせ映像の中に、邪神の祟りを歪ませた、特殊な映像を紛れ込ませる。そうすることによつて、特定の人間にだけ祟りが起るよつになつて、一種の呪いみたいな効果を發揮する。そう言つて、俺に必要な物を全て渡してくれた」

「なるほどな。だが、お前がそつまでして、犯行を神居結衣のものと認めさせたかった理由はなんだ？ やはり、彼女のされたことを、連中に忘れさせないためか？」

「ああ、それもあるね。俺は何度か家に行つたから、そのときに隙をついて中を物色させもらつたりしたけど……西岡と室井の家には、神居さんを脅迫するのに使つた映像ディスクなんかは見当たらなかつた。だから、この一人にはさつさと死んでもらつて、残る二人を脅かすことにしたんだ。その上で、映像の入つたディスクを回収して、連中を始末するつもりだつた

「だが、それはカメラマンの加瀬を暴走させ、古澤を殺害させるこ至つた。そういうことか……」

「その通りだよ。最後の最後で、予定が狂つて少しだけ焦つたけどね。でも、俺はこれでも満足だよ。連中の内、三人は死亡で一人は壙の中。もう、あいつらが神居さんの……結衣の映像を外部に流すような心配もない。俺の復讐も、ここで終わつたんだ……」

ほつと最後の溜息を吐いて、富森が力なく頃垂れた。

気が弱く、いつも肝心なところで自分に自信が持てず、好きな女に想いを告げることさえできなかつた富森。そんな彼にとつて、結衣のような存在は、正に生きるための糧だつた。彼女が支えてくれたからこそ、今の自分がある。そう、富森は信じていた。

今回の復讐を決意したのも、そんな富森の想いがさせたことだ。確かに、証拠として謎の男から預かつた日記帳を警察に渡せば、西岡たちに捜査の手が回つたかもしない。が、それは即ち、結衣が乱暴された際の光景が収められた映像が、表の世界に出回る危険を意味している。

捨て鉢になつた西岡たちが映像をネットにでも流してしまえば、もう富森に止める手立てはない。それ以前に、彼らがしらを切り通せば、そこで警察の追及も終わる。むしろ、結衣の日記を持つていたことで、こちらに変な疑いが掛からないとも言い切れない。

死して尚、想い人が映像の中で辱められる。富森にはそれが、どうしても許せなかつた。どんな手を使つてもいい。最悪、自分が警察に捕まることになつてもいい。なんとかして、あの四人に復讐してやる。そう思つて、今まで生き長らえてきた。

その復讐も、今日で終わる。全ての真実が明るみに出された今、

自分に言い逃れをする術はない。もつとも、果たして呪いによる殺人が、法的にどのような処罰を受けるのかは、富森自身もわかつてはいないのだが。

「やれやれ……。これで、説明は終わりかい？ なんか、ちょっと待ちくたびれちゃったんだよねえ……」

部屋に籠る陰鬱な空気を払うようにして、魁が大きく伸びをした。そして、待つっていたかのように懐に手を伸ばすと、その中から一枚の紙人形を取り出した。

「ねえ、富森君。君の言つていた神居さんつて人なんだけどさあ……。別に、復讐とか望んでなんかいなかつたと思うんだよね。君が勝手に思い込んでいいだけださ」

魁が苦笑しながら紙人形を机に置く。人形はそのままスースと動き、富森の前まで来ると音もなく止まった。

「俺、そこの外法使いから連絡受けて、総ちゃんと一緒に神居結衣つて女の幽霊を探したつてわけ。本当に彼女が人を呪い殺しているのかどうか、それを確かめるために……とりあえず、今回の事件の関係者の家に、ありつたけの式神を放つて搜索させたんだ」

「さ、探したつて……。それじゃあ、結衣の魂は、まだ……」

「ああ、そうだよ。彼女の魂は、まだ現世に留まっていた。しかも、彼女を見つけた場所が、どこだったと思う？」

自分の手柄を見せびらかすようにして、魁はあえて勿体をつけるような話し方をする。先程まで、紅に主導権を握っていたことに

対する憂さ晴らしだろうか。こんな時でさえ、あくまで自分のペースでしか物事を考えないのが、彼らしいと言えば彼らしい。

突然、ボツという音がして、宮森の前に置かれた紙人形に火がついた。一瞬、それに驚いて、宮森が立ち上がり後ろに下がる。

紙人形は、紫色の炎を上げて燃えていた。その炎から出た煙は、徐々に固まつて人の姿を形作る。うつすらと白く、それでいて生前の面影を残した、女性の姿へと変わつてゆく。

「あ……ああ……」

全員の目が、人形から出た煙に集中していた。紅と総司郎は、既にこういつた状況に慣れているからだろうか。別段驚きはしなかつたが、それでも静かに事の行く末を見守つていた。

「か、神居……さん……」

そこにいたのは、紛れもない神居結衣だつた。もつとも、生前に宮森に見せていた、気丈な瞳はそこにはない。ただ、目の前で全てを吐露した男に対して、憐みとも取れる視線を向けていた。

「彼女の靈がいた場所。それ、他でもない君の家だつたんだよねえ。靈感の鈍い君にはわからなかつたみたいだけど……彼女、ずっと君を見守つていたみたいだね。復讐なんかに手を染めて、何もかもを失つてゆく。そんな君の姿を、ずっと憐れんでいたんだよ」

「そ、そんな……。だつたら、どうして神居さんは、俺に何も言ってくれなかつたんだ！　いや、俺なんかじゃなくたつていい！　あなた達みたいな、靈感の強い人間に言えば、眞実だつて告げられた

のに……」

「残念だけど、そいつは無理な相談だ。人間、死んで幽霊になつたところで、そう簡単に超能力が使えるわけじゃないんだから。特に、彼女みたいに自分よりも他人を心配する人つてやつは、怨念なんかにも成り難い。だから、必然的に力も弱く、現世に訴える方法も限られてしまうつてわけ」

死んだ者が、幽霊となつて目の前に現れる。それだけならば、よくある怪談話として、あちこちで囁かれているものだ。

問題なのは、その幽霊が、果たしてどこまでの力を持つているかということだろう。死んだ人間の誰しもが、人知を超えた超能力を持つているわけではない。そもそも靈とは人間の残留思念のような側面も持つ。そのため、本来であれば酷く不安定で、弱々しい存在なのだ。

「俺だつて、式神を君の家に送つて隅々まで調べさせなかつたら、彼女の靈の存在なんて気づきもしなかつたさ。無論、彼女の口から、君の所業を聞くこともね。だから、俺は彼女の靈を紙人形の中に宿らせて、こうしてここまで運んできてやつたつてわけ」

飄々とした口調で、魁はさらりと言つてのけた。本人にしてみれば、ただ、自分の思うことを言つたまでのことで。しかし、それでも富森にとつては、彼の心を碎くのに十分過ぎる言葉だった。

「は……はは……。神居さん……ずっと、俺の側にいてくれたんつすね……。俺なんかのために、死んでからもずっと、あの世にも行かないで……俺のこと、見守ってくれてたんつすね……」

「そういうことさ。これで、君にもわかつただろう？呪いってやつは、割に合わない。復讐なんてもんに力を入れても、それは意味がないってね」

魁が指を鳴らし、その音と共に煙が消える。後に残されたのは、焼けて失われた紙人形の残骸のみ。依代よりしろとして使っていた人形を失つたということは、神居結衣の靈は、もうここにはいないのだろうか。

「ふう……。どうやら、これで事件は解決のようだ。それでは、後は全て、じゅうに任せてもらおうか？」

今まで、部屋の隅で沈黙を保っていた男が唐突に口を開いた。あの、全身からただならぬ氣を発していた、厳つい風貌の男だ。

警視庁公安部第四課、第零系担当、香取雄作。彼もまた、紅によつてこの部屋に呼ばれた人間の一人だった。お互いに情報を交換し合つという約束があるため、彼にも真実を知る権利はある。

その結果、事件が闇に葬られたとしても、それはあくまで紅の預かり知らぬこと。ただ、最初から富森を問答無用で連行されてしまつては、後味の悪い結果になる。そう思い、彼には魁と違い、最後まで真実を伝えてはいなかつたが。

「待て。その前に、一つだけ教えてもらいたい」

男が富森に近づいたところで、紅がそれを制した。富森には、まだ聞きたいことがある。今回の事件の真の黒幕は、富森だけというわけではない。

「貴様に神居結衣の日記を渡した男……。その男について、詳しく述べて欲しい。名前や……あるいは、風貌だけでもいい。何か、手掛かりになるようなものはないか?」

「名前か……。今となつては、本当の名前かどうか怪しいけど……一応、俺に名乗つた名前ならある」

「本当か!? そいつの名は、いつに何と言つ……?」

「まあ、やう慌てないでくれよ……。俺が聞いた、やつ……名前は

……」

そこまで言つて、富森は急に咳込んで言葉に詰まつた。勢い余つて、つい舌を噛んでしまつたのか。やう思つた紅だったが、状況は少しだけ違つていた。

「あつ……かつ……はつ……」

だんだん咳が酷くなり、富森の顔が見る見る青ざめてゆく。胸を抑え、喉に手を伸ばし、呼吸さえままならない状態なのが素人目にもわかる。

「み、富森さん!—」

突然の変調に、凍呼が慌てて駆け寄つた。その肩をつかみ、香取が富森に近づけようとする凍呼を押さえる。

「待て! 様子が変だぞ!—」

香取の声に、その場にいる全員が一斉に立ち上がつた。富森は、

既に頭を抱えて部屋の隅にうずくまり、ガタガタと小刻みに震えている。時折、湿った咳を吐き出しながら、明らかに不自然な動きで揺れている。

「う、嘘……。これって……」

「元を押さえ、まゆが下がりながら言つた。彼女の脳裏に、数日前の生放送で目にした光景が蘇る。あのときも、亡くなつた西岡と室井が、湿つた咳をしてはいなかつたか。だとすれば、この後、宮森に起つることは、まゆでなくとも容易に想像がつく。

「あつ……があああつ……」

突然、奇声を発して宮森が身体を大きく仰け反らせた。その顔を見た高槻と、残る三人の少女たちの顔が、瞬く間に驚愕の色に染められた。

野球ボールのように大きく膨らみ、その頭部からはみ出した眼球。既に顔面の半分を覆うほどにまで肥大化したそれは、鮮血をほとばしらせながら、徐々に宮森の顔面を崩壊に導いてゆく。見難く膨らみ、原型を留めぬまでに変形した頭は、既に人の物ではない。

バンッ！！

次の瞬間、風船の破裂するような音がして、宮森の頭が粉々に砕け散つた。赤黒い肉片が辺りに撒き散らされ、まゆは思わず吐き気を催してその場にへたり込む。

隣で何かの倒れる音がした。見ると、そこには惨劇を目の当たりにした凍呼が、白目を向いて気絶していた。

長谷川雪乃是、その顔を高槻の胸にうずめて震えている。その高槻も、あまりの出来事に、何をしてよいのかわからない。雪乃のことを受け止めることも忘れ、ただ茫然と立ち尽くしている。

「せ、先生……。これ、いつたい何なんすか!? なんで、いきなり、こんなこと……」

魁の横では、総司郎も信じられないといった様子で固まっていた。さすがの彼も、いきなりこのような展開になるとは思つていなかつたのだろう。視力を失い、靈的な感覚からしか物事を見ることができなくなっていたのは、不幸中の幸いか。もつとも、それでも人の死を肌で感じるというのは、決して気持ちのよいものではなかつたが。

「なるほど……。どうやら今回の黒幕は、かなり頭の切れるやつらしいね」

珍しく、魁も複雑な顔をして、宮森であつたものの遺体を見つめていた。それは紅も同様で、震える拳を握り締め、怒りに顔をゆがませるのが精一杯だつた。

今回の事件に用いられたのは、邪神の祟りを歪めたもの。呪いであれば呪い返しで宮森が死ぬ危険性があつたが、祟りであれば、宮森本人に危険はない。事件のカラクリを暴いたところで、宮森が代わりに死ぬという可能性はなかつたはずだ。

では、それにも関わらず、宮森が亡くなつてしまつた理由は何か。

答えは簡単だ。彼は謎の青年の正体を隠すため、口封じとして殺されたのだ。そう考えて、間違いはない。

恐らく、この仕掛けを青年に教わった際に、身体に何か細工のようものをされたに違いない。西岡や室井に与えた負の波動による障害が、そのまま富森の身体にも現れるよう、何らかの靈的なスイッチのような物を植え付けられていたのだ。

スイッチが発動する条件は、富森が男の素性を語ろうとするんだろう。これにより、富森は嫌でも男の正体を告げられなくなり、その足取りは完全に消える。最初から最後まで、あらゆる面で、完璧に仕組まれた話だった。

絶望の淵に立たされた人間に言い寄り、言葉巧みにその人間を闇の道へと誘つて、用済みになれば何の未練もなく使い捨てる。嘘と真実を巧妙に絡み合わせ、自分の正体が決して他に知られないよう、闇の狭間を暗躍する恐るべき呪殺師。

闇の死揮者。コンダクターその存在の影を、紅は今回の事件の裏に感じざるを得なかつた。毎回、あと一歩のところまで追い詰めながら、最後は尻尾さえつからせずに逃走する。そして、今回も例の如く、死揮者の情報は何も得られないまま終わってしまった。

結局、自分は踊らされていただけだ。いや、自分だけでなく、富森も、魁も、そして香取でさえも、全員が死揮者に踊らされていた。彼の操る闇の旋律に沿う形で、破滅のステップを踏まされていた。

悔しさと怒り。その二つが、なんとも言えないやるせなさとして襲ってきた。果たして自分は、本当に闇の死揮者を追い詰めて、彼と対峙することができるのか。

あか赫の一族の末裔として、彼と決着を

つけることができるのか。

最後の惨劇の場となつた会議室で、紅は無言のまま、自分の爪をひたすらに掌に突き立てていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1919x/>

猶闇師～刹那の魔～

2011年11月27日22時48分発行